兵庫県文化財調査報告　第 497 冊

神戸市北区

日下部遺跡２

－新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 30（2018）年 1 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

神戸市北区

日下部遺跡２

－新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 30（2018）年 1 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

遺跡の立地（北東方面を望む）

北地区・中央地区北半部全景（上が北）

中央地区南半部（上が北）

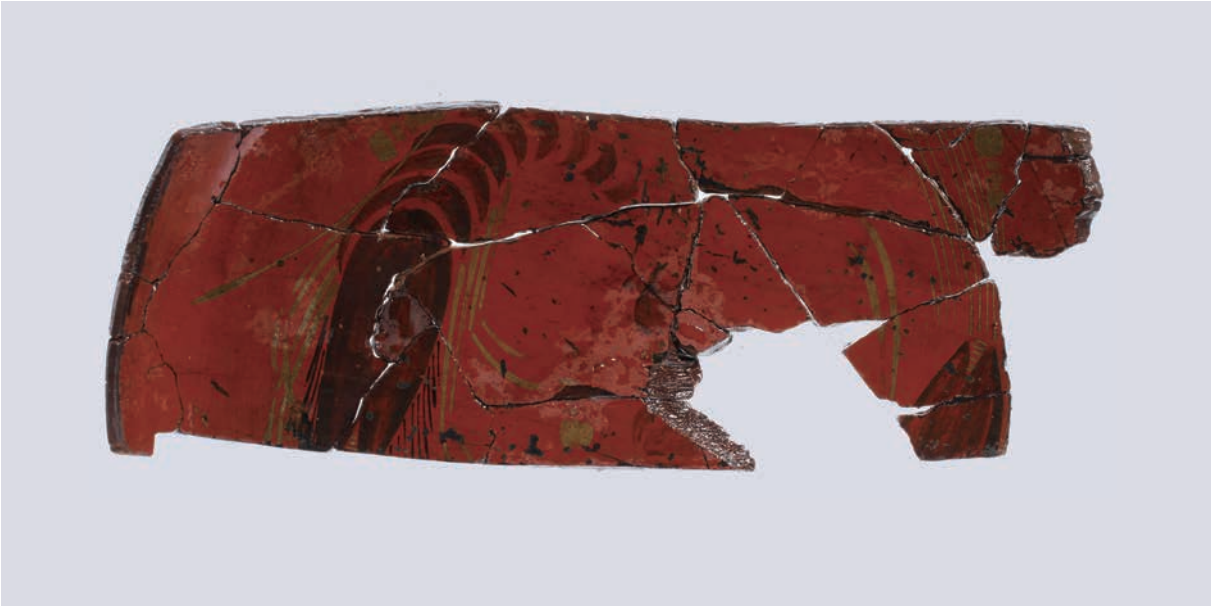
下段南地区（上が北）

上段南地区（上が北）

西地区経塚集石SX01（南から）

上段北地区SK224土器出土状況（北から）

SK224 出土土器



下段北地区 SK608 出土漆器大皿　W65

北地区 SK510 出土漆器大皿　W67

北地区 SK621 出土漆器椀　W79

(下)中央地区包含層
出土木製品　W114

(上)北地区 SR415
出土漆器椀　W10・W11

北地区 SR415 出土木製品　W16

北地区 SE419 出土木製品　W69

北地区 SE419 出土木製品　W68

北地区 SK608 出土木製品　W66

北地区 SR415 出土木製品　W31

例　言

1　本書は、兵庫県神戸市北区有野町二郎に所在する日下（くさかべ）部遺跡の発掘調査報告書である。日下部遺跡の発掘調査については、すでに「兵庫県教育委員会 2001.3『神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う日下部遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 215 冊」として刊行されている。本書で報告する地点は、前記報告地点とは離れ、間に「二郎宮ノ前遺跡」を挟んでいるが、神戸市教育委員会との協議の上、同じく日下部遺跡として調査を実施し、「日下部遺跡2」として報告する。

2　本調査は、新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴うもので、西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3　本書は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部の岸本一宏、西口圭介、村上泰樹、大本朋弥、別府洋二及び、兵庫県立考古博物館の山本誠が執筆し、一般社団法人文化財科学研究センターに出土木製品の樹種同定をお願いし、第6章に掲載した。編集は別府が池田悦子の協力を得て実施した。

4　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

5　本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

6　発掘調査・報告書作成にあたっては、
西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所
神戸市教育委員会
金原美奈子（文化財科学研究センター）
岡田章一　松井良祐（以上、兵庫県立考古博物館）
株式会社藤原組　松浦興業　株式会社ジオテクノ関西　河南測量設計
森井光治　伊藤三千人　滑浦武志　西本寿子　西山はるみ　中祖晴海
以上の方々（敬称略、順不同）のご教示、ご協力を得た。

遺跡の位置

目　次

巻頭カラー写真図版１	遺跡の立地	北地区・中央地区北半部全景
巻頭カラー写真図版２	中央地区南半部	下段南地区
巻頭カラー写真図版３	上段南地区	西地区経塚集石 SX01
巻頭カラー写真図版４	上段北地区 SK224 土器出土状況	SK224 出土土器
巻頭カラー写真図版５	出土木製品１	
巻頭カラー写真図版６	出土木製品２	

本文目次

第１章　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1（別府洋二）
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
第２章　調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7（西口圭介）
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　各調査の経過と整理作業
第３章　遺構
　第１節　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11（別府、大本朋弥）
　第２節　下段の遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12（別府）
　第３節　上段の遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19（岸本一宏、西口、別府）
第４章　遺物
　第１節　土器
　　１．下段出土土器　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35（別府）
　　２．上段出土土器　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42（岸本、西口、別府）
　第２節　木製品　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54（別府）
　第３節　金属製品　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65（別府）
　第４節　石製品　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67（別府・山本　誠）
第５章　西地区（日下部経塚）の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69（村上泰樹）
第６章　日下部遺跡における樹種同定・・・・・・・・・・・・・・73（文化財科学研究センター）
第７章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87（別府）

挿図目次

第１図　周辺の遺跡・・・・・・・・・・ 6
第２図　縄文土器 ・・・・・・・・・・ 11
第３図　調査区周辺の露頭・・・・・・・ 72
第４図　日下部遺跡の木材Ⅰ ・・・・・ 80
第５図　日下部遺跡の木材Ⅱ・・・・・・ 81
第６図　日下部遺跡の木材Ⅲ ・・・・・ 82
第７図　日下部遺跡の木材Ⅳ・・・・・・ 83
第８図　日下部遺跡の木材Ⅴ ・・・・・ 84
第９図　日下部遺跡の木材Ⅵ・・・・・・ 85
第10図　日下部遺跡の木材Ⅶ ・・・・・ 86

表目次

第１表　周辺の遺跡・・・・・・・・　5
第２表　日下部遺跡における樹種同定結果　・・・　79
第３表　日下部遺跡出土土器一覧・・　92
第４表　日下部遺跡出土木製品一覧　・・・・・・　99
第５表　日下部遺跡・日下部経塚出土金属製品一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第６表　日下部遺跡出土石器・石製品一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102

図版目次

図版 1　調査地点位置図
図版 2　調査区全体図
図版 3　下段北地区遺構配置図
図版 4　下段中央地区遺構配置図
図版 5　下段南地区遺構配置図
図版 6　下段 SR400 土層断面図
図版 7　SR400 断面位置図と土層注記
図版 8　SR415・SE416 土層図
図版 9　下段 SE417 他
図版 10　下段中央地区柱穴列
図版 11　上段北地区遺構配置図
図版 12　上段中央地区遺構配置図
図版 13　上段北地区南側壁土層断面図
図版 14　上段北地区 SR218
図版 15　上段北地区掘立柱建物跡平面図
図版 16　上段北地区掘立柱建物跡断面図
図版 17　上段北地区 SK224
図版 18　SK224
図版 19　上段北地区 SK323・329・SD337 他
図版 20　上段北地区 SD363・SK220・SD310 他
図版 21　上段北地区 SE368
図版 22　上段北地区 SE219・362
図版 23　上段中央地区 SK819・834・862 土層図
図版 24　上段中央地区 SK01・02 他
図版 25　上段中央地区 SK13・25 他
図版 26　上段中央地区 SK78・70 他
図版 27　上段中央地区 SK43
図版 28　上段中央地区 SK64・65・SD174
図版 29　上段南地区遺構配置図
図版 30　SX1007・SK72・71
図版 31　上段南地区・南西地区　大歳神社旧境内
図版 32　SX1007・南地区土層注記
図版 33　上段南地区南半部遺構配置図　SX1001・1004 他
図版 34　SF1053・SK1035 他
図版 35　SX1041
図版 36　SX1040
図版 37　下段 SR400 出土土器
図版 38　下段 SR400・415 他出土土器
図版 39　下段 SE416・SK465 他出土土器
図版 40　下段 SK908・575 他出土土器
図版 41　下段 SK435・736 出土土器
図版 42　下段包含層出土土器
図版 43　上段北地区 SR218・SD363 他出土土器
図版 44　上段北地区 SK224 出土土器
図版 45　上段北地区 SD273 他出土土器
図版 46　上段北地区包含層、中央地区 SK834 他出土土器
図版 47　上段中央地区 SK01 他出土土器
図版 48　上段中央地区 SK78・70 他出土土器
図版 49　上段南地区 SX1007 出土土器
図版 50　上段南地区 SX1001 他出土土器
図版 51　南地区 SX1037 他、南西地区出土土器
図版 52　南地区包含層他出土土器
図版 53　SR400 出土木製品
図版 54　SR415 出土木製品 1
図版 55　SR415 出土木製品 2
図版 56　SR415 出土木製品 3
図版 57　SE416 出土木製品
図版 58　SK501 出土木製品 1
図版 59　SK501 出土木製品 2
図版 60　SK501 出土木製品 3
図版 61　SK608・510 出土木製品
図版 62　SE419・601 他出土木製品

図版 63　SK575・621・736 出土木製品 1
図版 64　SK736 出土木製品 2
図版 65　SK888・包含層出土木製品
図版 66　包含層他出土木製品
図版 67　出土金属製品 1
図版 68　出土金属製品 2
図版 69　出土石製品 1
図版 70　出土石製品 2
図版 71　出土石製品 3
図版 72　西地区全体図
図版 73　西地区 SX01
図版 74　西地区 SX01 遺物出土状況
図版 75　西地区 SX01 銅銭出土状況
図版 76　西地区 SX01 下層
図版 77　西地区 SX02・テラス 1・2
図版 78　西地区出土遺物

写真図版目次

写真図版 1　遺跡遠景
写真図版 2　遺跡遠景
写真図版 3　調査区全景
写真図版 4　調査区全景
写真図版 5　調査区全景
写真図版 6　調査区全景
写真図版 7　調査区全景
写真図版 8　調査区全景
写真図版 9　下段の遺構　流路・溝
写真図版 10　下段の遺構　流路・溝
写真図版 11　下段南地区の遺構　流路・溝
写真図版 12　下段の遺構　溝
写真図版 13　下段北地区の遺構　流路・溝
写真図版 14　下段北地区の遺構　流路・溝
写真図版 15　下段北地区の遺構　石組水溜
写真図版 16　下段北地区の遺構　石組水溜・土坑
写真図版 17　下段北地区の遺構　石組水溜
写真図版 18　下段の遺構　石組土坑
写真図版 19　下段北地区の遺構　埋桶他
写真図版 20　下段の遺構　埋桶他
写真図版 21　下段北地区の遺構　埋甕他
写真図版 22　下段中央地区の遺構　柱穴列
写真図版 23　上段の遺構
写真図版 24　上段北地区の遺構
写真図版 25　上段北地区の遺構
写真図版 26　上段北地区の遺構
写真図版 27　上段北地区の遺構
写真図版 28　上段北地区の遺構
写真図版 29　上段北地区の遺構
写真図版 30　上段北地区の遺構
写真図版 31　上段北地区の遺構
写真図版 32　上段北地区の遺構
写真図版 33　上段中央地区の遺構
写真図版 34　上段中央地区の遺構
写真図版 35　上段中央地区南半部の遺構
写真図版 36　上段中央地区の遺構
写真図版 37　上段中央地区南半部の遺構
写真図版 38　上段中央地区の遺構
写真図版 39　上段中央地区の遺構
写真図版 40　上段南地区全景
写真図版 41　南地区遠景
写真図版 42　南地区全景
写真図版 43　上段南地区の遺構
写真図版 44　上段南地区北半部の遺構
写真図版 45　上段南地区北半部の遺構
写真図版 46　上段南地区北半部の遺構
写真図版 47　上段南地区中央部の遺構
写真図版 48　上段南地区北半部の遺構
写真図版 49　上段南地区南半部の遺構
写真図版 50　上段南地区南半部の遺構
写真図版 51　上段南地区南半部の遺構
写真図版 52　南西地区全景
写真図版 53　南西地区の遺構
写真図版 54　南西地区の遺構

写真図版 55　出土土器 1　（縄文土器・SR400）
写真図版 56　出土土器 2　（SR400）
写真図版 57　出土土器 3　（SR400）
写真図版 58　出土土器 4　（SR400）
写真図版 59　出土土器 5　（SR400）
写真図版 60　出土土器 6　（SR400・415 他）
写真図版 61　出土土器 7　（SR415 他）
写真図版 62　出土土器 8　（SE416 他）
写真図版 63　出土土器 9　（SK608 他）
写真図版 64　出土土器 10　（SK621 他）
写真図版 65　出土土器 11　（SK575 他）
写真図版 66　出土土器 12　（SK435・736 他）
写真図版 67　出土土器 13　（下段包含層）
写真図版 68　出土土器 14　（SR218 他）
写真図版 69　出土土器 15　（SK220・224 他）
写真図版 70　出土土器 16　（SK224）
写真図版 71　出土土器 17　（SK224）
写真図版 72　出土土器 18　（SK224）
写真図版 73　出土土器 19　（SK224 他）
写真図版 74　出土土器 20　（SD273 他）
写真図版 75　出土土器 21　（SK834 他）
写真図版 76　出土土器 22　（上段中央地区包含層）
写真図版 77　出土土器 23　（SK01 他）
写真図版 78　出土土器 24　（SK70・78）
写真図版 79　出土土器 25　（SK43 他）
写真図版 80　出土土器 26　（SK43・64 他）
写真図版 81　出土土器 27　（SK71・SX1007）
写真図版 82　出土土器 28　（SX1007）
写真図版 83　出土土器 29　（SX1007・1001 他）
写真図版 84　出土土器 30　（SX1041 他）
写真図版 85　出土土器 31　（SX1010・1039）
写真図版 86　出土土器 32　（SX1037 他）
写真図版 87　出土土器 33　（上段南地区包含層）
写真図版 88　出土土器 34　（上段南地区包含層）
写真図版 89　出土土器 35　（上段南地区包含層）
写真図版 90　出土土器 36　（上段南地区包含層）
写真図版 91　出土木製品 1　（SR400・415）
写真図版 92　出土木製品 2　（SR415）
写真図版 93　出土木製品 3　（SR415）
写真図版 94　出土木製品 4　（SE416・SK501）
写真図版 95　出土木製品 5　（SK501）
写真図版 96　出土木製品 6　（SK501）
写真図版 97　出土木製品 7　（SK501・608）
写真図版 98　出土木製品 8　（SK608）
写真図版 99　出土木製品 9　（SK510）
写真図版100　出土木製品 10　（SE419・601・SK464・449・65）
写真図版101　出土木製品 11　（SK575・621・736）
写真図版102　出土木製品 12　（SK736）
写真図版103　出土木製品 13　（SK888・包含層）
写真図版104　出土木製品 14　（SK739・包含層）
写真図版105　出土金属製品 1（SK739・SR415 他）
写真図版106　出土金属製品 2・石製品 1（SE419・SR400 他）
写真図版107　出土石製品 2（SR415・SE416 他）
写真図版108　出土石製品 3（SR400・415 他）
写真図版109　西地区全景
写真図版110　西地区の遺構
写真図版111　西地区の遺構
写真図版112　西地区の遺構
写真図版113　西地区の遺構
写真図版114　西地区テラス 1・2
写真図版115　西地区出土遺物（SX01 他）

第１章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

日下部遺跡は、神戸市を南北に分ける六甲山系の北麓に位置しており、4.5㎞北は三田市、900ｍ東南は西宮市と接した、神戸市の北東端に存在する。六甲山の北斜面は比較的緩やかであり、武庫川の中流域に広がる三田盆地の南端部に当たる。日下部遺跡はその支流であり六甲山に源をもつ北流する有野川の西岸に拡がる。遺跡は有野川によって形成された小規模な段丘上から、丘陵裾及び小扇状地まで広がっており、丘陵の北端を回り込んで八多川流域にまで及んでおり、さらに八多川を北に超えた範囲を含んでおり、その中心は八多川と有野川の合流域に立地している。

日下部遺跡の現在の住所は、神戸市北区道場町日下部となる。今回の調査地点は、日下部遺跡としては南端に当たり、北区有野町二郎に所在し町を異とする。東を北流する有野川と西の丘陵に挟まれた南北に長い範囲である。西側の丘陵も東から北東方向に開く大小の谷地形が刻まれており、現在では溜池がつくられ用水として利用されている。調査範囲の南北は比較的大きな谷によって限られている。

調査地点の北西の丘陵中腹には布袋寺があり、谷地形の対岸となる。調査範囲内の南地区や南西地区は大歳神社の旧境内であった。ここは調査地点と同じ谷地形の北西岸であり、一部埋め立てて整地していることが今回の調査で判明している。

有野川は日下部遺跡の北部で西南から来る八多川と合流し、道場町道場で武庫川第2の支流である有馬川に注ぎ、さらに長尾川を合流し東へ向かって武庫川に注ぐ。武庫川は、三田盆地の南端を限る鏑射山から南東方向へ向かい、その下流を隔絶する急峻で狭小な武田尾の峡谷を抜けて宝塚、伊丹から尼崎へと南流し、大阪湾へと注ぐ。有野川、有馬川を遡れば温泉で有名な有馬へと結ばれている。

武庫川に注ぐ有野川・有馬川・八多川・長尾川などの支流は、神戸層群と呼ばれる新第三紀中新世の地層を侵食して、開析の進んだ奥深い谷を形成しており、平地は細長い丘陵と谷が交互に連なる様相を示している。神戸層群中にあったと思われる珪化木が調査中にも出土している。

遺跡の立地する有野川による谷は、幅が400m程の狭小な地形であるが、約10㎞の長さで南から北へと抜けている。この谷は、現在でも神戸電気鉄道三田線や県道神戸三田線が通り、かつては有馬軽便線（国鉄有馬線）も東縁部を通っており、重要な交通路として利用されている。六甲山を南北に越える交通路であり、有馬温泉に通じる交通路としての役割である。さらに日下部遺跡の北を走る生瀬を通るルートは、武庫川から長尾川に沿って遡り加古川に至る、裏山陽道とも言えるルートで、中世から重要な交通路であったことが知られている。この東西の道と有馬温泉の湯山に通じる湯之山道との四つ辻にあたる道場河原は、元禄年間には宿場駅として栄えていた。

調査地点は神戸電気鉄道の二郎駅から有野川を渡った西側に広がっている。太陽と緑の道と名付けられたハイキング道路が現場内を抜けており、山と川と田園が望める自然に恵まれた地域であった。

現在では、「二郎いちご」として名の通った特産品を生み出す反面、丘陵上はニュータウンが開発され、道路や駅の周辺には郊外型の店舗や住宅地などが増えつつある。牧歌的な景色を残しながら、錯綜する大型交通網に分断されている状況である。

第２節　歴史的環境

（１）周辺の遺跡（第１図）

既に指摘されているように、日下部遺跡は様々な時代、性格の遺跡の集合体である。今回報告する地点は日下部遺跡の中でも最も南に位置し、間には二郎宮ノ前遺跡を挟んでいる。

日下部遺跡①の既存の調査では、弥生時代後期後半～古墳時代前期の竪穴住居や方形周溝墓、古墳時代後期～7世紀の飛鳥時代頃の竪穴住居・掘立柱建物などが検出されており、同時期の集落が存在している。平安時代前半の遺物も出土しており、平安時代末～中世前半にかけては、広い範囲で掘立柱建物などが検出されている。出土遺物には石帯・墨書土器・風字硯・緑釉陶器・灰釉陶器など平安時代の優品が含まれ、中世後半の土器も出土しており、規模は縮小するが集落は存在している。

二郎宮ノ前遺跡②では、7世紀前半から9世紀頃の竪穴住居や掘立柱建物群が検出され、間をおいて12世紀末～15世紀前半にかけて屋敷群から居館への集約がたどれる掘立柱建物群が検出された。園地や堀を伴った居館は15世紀中頃に姿を消す。

下二郎遺跡③は有野川東岸に位置し、弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期・平安時代～中世にかけての集落の存在が推定されている。

日下部遺跡の西背後の丘陵上にも多くの遺跡が存在する。14世紀末～15世紀前半の火葬址が検出された**堂垣内遺跡**④が新名神高速道路関連事業に伴い調査されている。さらに北側の丘陵先端部周辺では、**小坂遺跡**⑤として「**小坂砦跡**」「**大橋山古墳群**」「**坂本山墳墓群**」の試掘調査が行われている。調査では縄文時代早期の神宮寺式～高山寺式の押型文土器が出土しており、近隣では最も古い遺物となる。

小坂遺跡⑤では古墳時代・奈良時代・平安時代・中世の遺物も出土している。**小坂砦跡**では堀切・竪堀・土塁・石塁等が見つかっている。**大橋山古墳群**は7基の4世紀後半から6世紀中頃までの木棺直葬或いは小型石室を主体部とする円墳・方墳が確認されている。その他、**坂本山墳墓群**として中近世の塚や墳墓も多数確認されている。

武庫川と有馬川に囲まれた沖積地に立地する**塩田遺跡**⑥は、弥生時代前期から中期後半にかけての拠点的な集落址として知られるが、中期～後期の遺跡は丘陵上に点在し、後期になって平野部の所々に展開するようになる。また、同遺跡では12・13世紀の塩田荘に関連した居館や墓も検出されている。

古墳時代の集落は日下部遺跡の他、**宅原遺跡**⑦、**八多中遺跡（中遺跡）**⑧、**平田遺跡**⑮などで検出されており、古墳では三角縁仏獣鏡が出土した前方後円墳である**塩田北山東古墳**や、4世紀末頃の木棺直葬墳である**北神NT内遺跡**⑨など前期古墳の時代から、在来の墓制の中に畿内中央の影響が既に色濃く見えている。6世紀中頃まで前方後円墳がつくられており、後期に入って多くの群集墳が造営される。有野川流域では**オキダ古墳群**⑩、**二郎古墳群**⑪、**二郎遺跡**⑫、**籠谷古墳**⑬が知られているが、多くの古墳群が下流の合流地付近や長尾川流域に集中する傾向がある。

日下部遺跡①からはこれまでに奈良時代から平安時代前期の遺物は出土しているが、その量は少なく、遺構に伴っていない。日下部遺跡北東の有野川東岸の**日下部北遺跡**⑭流路からは大量の奈良時代の土器が出土しており、近隣に同時代の遺跡が存在することが窺われる。

日下部遺跡から八多川に沿った位置にある**八多中遺跡（中遺跡）**⑧では、飛鳥時代・奈良時代後半～平安時代中期・平安時代末～鎌倉時代にかけての集落が見つかっている。その上流には12世紀末葉から13世紀前半に位置づけられる須恵器窯の**小名田窯跡**⑯とその工房址とされる**清水廻り遺跡**⑰が存在している。

その上流の**下小名田遺跡**⑱では、飛鳥・白鳳時代の建物や奈良時代後期～平安時代初頭の大溝、平安時代後期～中世前半までの大型の建物を含めた集落が検出され、石帯・銅印・墨書土器等が出土している。

さらに上流の**上小名田遺跡**⑳からは、平安時代中頃から鎌倉時代にかけての70坪を超える大型建物を含む49棟以上の掘立柱建物が検出され、緑釉陶器・灰釉陶器や石帯、木簡などが出土している。その上流にも同時代の集落と思われる**吉尾遺跡・附物遺跡**が存在している。

長尾川流域の**宅原遺跡**⑦では、大型の掘立柱建物・墨書土器（郷長・五十戸・評）・円面硯・亀形石硯・人形・斎串・木彫面等が出土し、有馬郡衙の有力な候補地とされている。宅原遺跡では9～10世紀まで掘立柱建物が建てられるが、10～11世紀には縮小する。12世紀末には再び掘立柱建物が見られ、14世紀頃まで存続している。16世紀に入っても小規模な園地が構築されており、17世紀～19世紀の遺構・遺物も確認されている。

中世後半には**松原城跡**⑲などが築かれ、**塩田中世墓、北神NT内遺跡**⑨などで集石墓や火葬墓が造られる。

（２）史料等からみた周辺

三田盆地周辺の現在の地名には、当該遺跡名にもなった「日下部」をはじめとして「八多（秦）」「貴志」など古代氏族名を想起させるものが多く、古墳時代から奈良時代にかけて三田盆地周辺における開発の背景を想像させている。日下部氏は仁徳天皇の皇子・皇女の御名代から起こった姓で、天平神護二（766）年には武庫大領日下部宿禰一族のことが見える。

日下部遺跡のある有野町周辺は、奈良時代には摂津国有馬郡に属し、有馬郡には春木、幡多、羽束、大神、忍壁の５郷があったとされている。中世に入ると、四天王寺領阿理野庄（有野庄）として永仁四（1296）年に記録が残る。有馬郡は14世紀末、分郡守護として赤松有馬氏が支配しており、郡内の下鴨社領や四天王寺領を一括で請け負っていたらしい。

今回の調査地点の大字名に残る「二郎（にろう）」の名の元となったのは、壇ノ浦で戦死した平教経の遺臣である平家の落人の子孫、宮崎弾正「二郎」広綱が室町時代末期の大永年間（1521～1532）になって、その昔に領有していたというこの地に入り、「二郎」の名を付けたとも、「ニラ」の生息地だったともいわれている。

二郎村の氏神である大歳神社は宮崎氏入部の際に有間神社を勧請したものと言われているが、調査地点（南地区・南西地区）にあった大歳神社社殿も元々の位置ではないと言われている。調査地点の北西にある現在の曹洞宗月亭山布袋寺は大永二（1522）年に自天霊性の開基とされ、同じく宮崎広綱縁の寺院である。宮崎家の墓は寺の南西にあると言われおり、五輪塔などが見られる。また、その屋敷も近くにあったが、江戸時代には後嗣が絶え、荒れ地に返ったとされている。宮崎家は二郎の地のみならず近隣の道場川原にある法性寺に元禄七（1694）年に「涅槃図画像」を寄進したとされている。

また、「摂津国有馬郡下二郎村大庄屋芝家文書」によると、慶長年間（1596～1614）に有馬郡中村馬場に移住し、豪農となった芝家は、元禄年間（1688～1703）から領主や三田藩などに金銀を貸し付け、苗字帯刀も許され、大庄屋も努めた。文化年間（1804～1817）には二郎、山口村に分家している。二郎芝家は三田藩の用達を努めており、本家同等の格を有している。近世、二郎の地に有力者が在住していたことは確かであろう。

また、同じ有馬郡では長尾町宅原の嶋屋五兵衛の伝承など、江戸時代にかけての豪農などの有力者が存在していたとする伝承や記録が残されている。さらに有馬郡の南西に接した八部郡山田荘の栗花落家、上谷上の板屋家などではその家に代々伝わった古文書が残されており、戦国時代に村落内の有力者であったその家が土地を買取して土豪となり、地侍となって被官した家や、庄屋となって有力農民のまま近世を迎えた家のことが知られている。中世から続く有力農民が近世･近代を超えて存続していた事例である。

日下部遺跡の北の独立丘陵に位置する松原城は、郡内に所領を持つ土豪で有馬氏の被官である松原氏が城主と伝えられている。松原氏は数代にわたって有馬氏に仕え、その中核を成す者とされている。

有馬氏は分郡守護として室町期以来、湯山をも含んだ有馬郡を支配している。戦国時代には数家に分かれ、分郡守護や将軍近習として活躍している。

有馬郡守護としては、西の三木城に寄り東播磨八郡の守護代となり勢力を増していた別所氏とは対立・確執が生まれる。三田城は荒木村重の甥によって支配され、城下町を造るにあたって道場川原の住人の移転を強いた。三木合戦の際には、荒木重堅の籠もる三田城や別所方の淡河氏の籠もる淡河城と対立して織田方に組しており、戦後には有馬家庶流が淡河城主となっている。天正七（1579）年には秀吉によって湯山の阿弥陀堂に対し、寺領を安堵しており、道場川原では戦乱で避難した地下人・町人の還住を命じている。

有馬氏はその後、秀吉の御咄衆として近仕し、関ヶ原合戦前夜には家康側近としてその立場を固めている。三田城主ののち、筑後久留米藩主として大名となっている。

有馬郡二郎村は幕府領、武蔵岩槻藩阿部政次（大坂城代）領、上飯野藩保科氏（大阪定番）領となり、日下部村は田安徳川家領となる。二郎村は上下に分かれていたらしく、寛政十（1799）年には上二郎には家18軒があったとされる。また、享保十二（1718）年村明細帳には日下部村には酒屋２，鍛冶１，桶屋１，木挽２，大工２などがあった。日下部は米どころであったが、江戸時代の大きな洪水の被害が報告されている。

近代になって有野・唐櫃・二郎が合併して有野村となっている。

【参考文献】

・神戸市教育委員会1987　「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」

・神戸市教育委員会1992　「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」

・神戸市教育委員会1996　「平成5年度神戸市埋蔵文化財年報」

・神戸市教育委員会1998　「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」

・神戸市教育委員会2008.3　「塩田北山東古墳」

・神戸市教育委員会2014　「唐崎城跡・尼崎学園古墳群第1次発掘調査報告書」

・新修神戸市史編集委員会1988.4「新修　神戸市史　歴史編Ⅰ　自然・考古」神戸市

・新修神戸市史編集委員会2010.3「新修　神戸市史　歴史編Ⅱ　古代・中世」神戸市

・淡神文化財協会1992　「下小名田遺跡その１」

・妙見山麓遺跡調査会1988.3　「宅原遺跡　宮之元地区の調査1986年」

・妙見山麓遺跡調査会2002　「宅原遺跡　豊浦地区の調査1987年」

・妙見山麓遺跡調査会2005　「下小名田遺跡」

・兵庫県教育委員会1998.3　「八多中遺跡・清水廻り遺跡」兵庫県埋蔵文化財調査報告第173冊
・兵庫県教育委員会2000.3　「三田城跡発掘調査報告書」兵庫県埋蔵文化財調査報告第194冊
・兵庫県教育委員会2000　「公園都市線（第2期）車両留置施設設置事業に伴う二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第220冊
・兵庫県教育委員会2001.3　「神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う日下部遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第215冊
・兵庫県教育委員会2014.3　「堂垣内遺跡・小坂遺跡」兵庫県埋蔵文化財調査報告第470冊
・兵庫県教育委員会2011.3　「兵庫県遺跡地図」

第1表　周辺の遺跡

①日下部遺跡	②二郎宮ノ前遺跡	③下二郎遺跡
④堂垣内遺跡	⑤小坂遺跡	⑥塩田遺跡
⑦宅原遺跡	⑧八多中遺跡（中遺跡）	⑨北神NT内遺跡
⑩オキダ古墳群	⑪二郎古墳群	⑫二郎遺跡
⑬籠谷古墳	⑭日下部北遺跡	⑮平田遺跡
⑯小名田窯跡	⑰清水廻り遺跡	⑱下小名田遺跡
⑲松原城跡	⑳上小名田遺跡	㉑二郎南古墳群
㉒丸沢遺跡	㉓宅原城跡	㉔東二郎遺跡

第1図　周辺の遺跡

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

今回の調査は、兵庫県土木部建設課より依頼を受け、平成10年度に神戸市北区神戸市JCT（仮称）～川西市の区間について兵庫県教育委員会が分布調査を行い、遺物の散布を認め、№18地点とした地点である。新名神高速道路建設（旧称　第二名神高速道路建設）箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴い調査を実施した。日下部遺跡は、周知の遺跡として、過去に神鉄道場南口周辺において調査が行われ、報告書も刊行されている。今回の調査地点は、新名神高速道路計画路線内にあたり、大きく南に離れた地点である。

分布調査では、№18地点に加え、有野川右岸の№17地点、№18地点の北西尾根端に位置する、備前焼水屋甕297を採取した№19地点が遺跡の候補として挙げられていた。

平成26年度より西日本高速道路株式会社関西支社兵庫工事事務所の依頼を受け兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財調査課（以下、埋蔵文化財調査課）が順次確認調査を実施したところ、№17地点（遺跡調査番号2014014）・№19地点（遺跡調査番号2014136）では遺構が認められず、№18地点（遺跡調査番号2014039・2014102）において遺構・遺物が認められ、当該地が本発掘調査の対象となった。

本発掘調査は平成26年7月8日付　関兵工第521号により開始した（遺跡調査番号2014116）。調査範囲は有野川左岸、布袋寺の開析谷を挟んだ南側から大歳神社境内までとし、地目は畑地・現屋敷地・大歳神社境内である。

当初、対象範囲の北端（旧Ａ・Ｂ区）より順次行う予定であったが、いちご温室の撤去など地元との協議を経て、大歳神社境内を含む南半（上段南地区南半部 - 調査実施時Ｃ・Ｄ区）のごく限られた範囲の調査を先行した。

残る調査範囲の内、畑地・現屋敷地（北地区・中央地区・上段南地区北半部・下段南地区）については平成27年３月９日付　関兵工第1775号により実施した（遺跡調査番号2015049）。

大歳神社については調査と並行して移転が行われ、拝殿・本殿下の確認調査・本発掘調査は埋蔵文化財調査課によってＥ区として実施している（平成27年2月9日付　関兵工第1586号　遺跡調査番号2014137）。

また、№18・19地点の中間地点にあたる東向き斜面の雑木林中に直径３ｍ前後の人為的集石を認め、分布調査（遺跡調査番号2014135）、確認調査（遺跡調査番号2014153）を実施した。本発掘調査は、引き続き平成27年２月９日付　関兵工第1586号により埋蔵文化財調査課が実施し（遺跡調査番号2015011）、経塚と判明した（日下部経塚　西地区 - 旧Ｆ区）。

以上の各地点の調査のほか、周辺において幾つか遺物を採取している。

1ヶ所は、大歳神社南側の尾根東斜面である。ここからは、伐木集積に伴うパイロットの掘削土から瓦器椀片が出土している。尾根上には平成21年度調査の堂垣内遺跡が存在しており、尾根上面が著しく削平されていることが判明している。尾根上に中世の前期に遡る遺構が存在していた可能性がある。

須恵器捏鉢296は堂垣内遺跡の約50ｍ南方、南東に張り出す支尾根端において伐木集積に伴うパイロットから採取されている。

当該地は、旧『太陽と緑の道』上の南向き緩斜面にあたる。周辺では人頭大の亜円礫も顔を出しており、立地から推して中世前期の火葬墓が存在していた可能性がある。この地点については遺物発見時には既に工事が開始されていたこともあり、更なる精査はかなわなかった。

第２節　各調査の経過と整理作業

〔分布調査〕

遺跡調査番号　980063

所在地　　神戸市北区・宝塚市・川西市・川辺郡猪名川町

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第2班　池田正男・吉識雅仁・西口圭介・池田征弘・松野健児・佐々木俊彦・戸田真美子

調査期間　　平成10年5月6日～5月13日

調査面積　　約1,300,000㎡

概　　要　　平成10年5月6日～5月13日に新名神高速道路路線内、施工対象範囲約1,300,000㎡について分布調査を行い、埋蔵文化財が包蔵される可能性が高い地点として№17～19が挙げられた。

遺跡調査番号　2014135

所在地　　神戸市北区有野町二郎

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部　埋蔵文化財調査課　　山本　誠

調査期間　　平成27年1月20日

調査面積　　600㎡

概　　要　　経塚状石積み地点周辺

〔確認調査〕

新名神№17地点

遺跡調査番号　2014014

所在地　　神戸市北区有野町二郎

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部　埋蔵文化財調査課　　山本　誠

調査期間　　平成26年5月1日

調査面積　　15㎡

新名神№18地点

遺跡調査番号　2014039

所在地　　神戸市北区有野町二郎

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部　埋蔵文化財調査課　　山本　誠

調査期間　　平成26年6月9日～11日

調査面積　　78㎡

日下部遺跡（大歳神社境内・参道部分）

遺跡調査番号　2014102

所在地　　神戸市北区有野町二郎

調査主体　　兵庫県教育委員会
調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部　埋蔵文化財調査課　　山本　誠
調査期間　　平成26年10月15日
調査面積　　22㎡

新名神№19地点

遺跡調査番号　2014039
所在地　　神戸市北区有野町二郎
調査主体　　兵庫県教育委員会
調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部　埋蔵文化財調査課　　山本　誠
調査期間　　平成27年2月9日
調査面積　　26㎡

新名神№19－2地点

遺跡調査番号　2014153
所在地　　神戸市北区有野町二郎
調査主体　　兵庫県教育委員会
調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部　埋蔵文化財調査課　　山本　誠
調査期間　　平成27年2月23日～3月24日
調査面積　　174㎡
概　　要　　経塚状石積み地点周辺

〔本発掘認調査〕

日下部遺跡　（上段南地区南半部　旧Ｃ・Ｄ区）

遺跡調査番号　2014116
所在地　　神戸市北区有野町二郎
調査主体　　兵庫県教育委員会
調査担当者　公益財団法人　兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部　調査第2課
　　西口圭介・鐵　英記
調査期間　　平成26年9月24日～平成27年2月20日
調査面積　　854㎡

日下部遺跡　（上段南地区南半部　旧Ｅ区）

遺跡調査番号　2014137
所在地　　神戸市北区有野町二郎
調査主体　　兵庫県教育委員会
調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部　埋蔵文化財調査課　　山本　誠
調査期間　　平成27年3月10日～平成27年3月17日
調査面積　　226㎡

日下部遺跡　（西地区　旧Ｆ区）

遺跡調査番号　2015011
所在地　　神戸市北区有野町二郎

調査主体　　兵庫県教育委員会
調査担当者　兵庫県立考古博物館　総務部　埋蔵文化財調査課　　村上泰樹
調査期間　　平成27年4月7日～平成27年5月1日
調査面積　　297㎡

日下部遺跡　（上下段北地区・南地区　旧Ａ・Ｂ区）
遺跡調査番号　2015049
所在地　　神戸市北区有野町二郎
調査主体　　兵庫県教育委員会
調査担当者　公益財団法人　兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部　調査第2課
　　別府洋二・岸本一宏・西口圭介・渡瀬健太・渡辺正子
調査期間　　平成27年5月20日～平成27年9月28日
調査面積　　4024㎡

〔整理作業〕

出土遺物の整理については、平成26年度・平成27年度（本発掘調査時）に一部の遺物洗浄を実施し、平成28年度に接合・補強・写真撮影・保存処理等、29年度に実測・製図・レイアウト等の作業を実施した。

調査担当者：村上泰樹・別府洋二・岸本一宏・西口圭介
整理保存課：菱田淳子・深江英憲・大本朋弥
　　大前篤子・桂　昭子・東郷加奈子・太田泉穂・児玉昌子・嶺岡美見・小野潤子・
　　佐々木愛・沼田眞奈美・荻野麻衣・今村直子・中井　翠
　　柏原美音・池田悦子・宮田麻子・藤中貴子・柏木明子・河合たみ

第３章　遺構

第１節　調査の概要

１．調査区の概容

前章で述べられたように、日下部遺跡の本発掘調査は用地の取得、本体工事の都合や遺跡範囲の広がり等の理由で調査区が分割された状況で調査を実施した。細分化された地区名は便宜的なものであり、報告書の制作に当たって、現況及び調査後の地形に合わせて区域分けを整理した。有野川に近い東側の部分を下段、そこから調査前の現状で約１ｍ上がった位置にあり、調査後も0.8mほどの段で上がった山側の範囲を上段として区域を分けた。下段の標高は調査前で、174.3～174.7m、調査後では173.3～174.3mとなり、上段では調査前では175.7～176.3m、調査後では175.0～175.9mを測る。

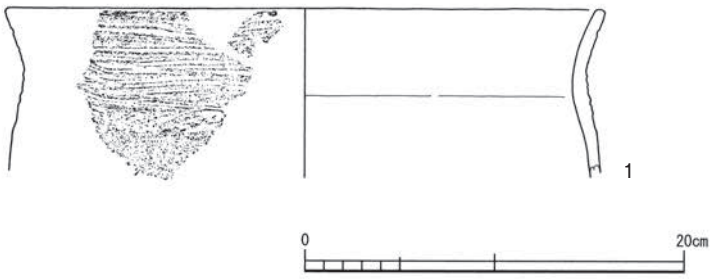
さらに上段で検出された東西方向の溝SD746を境にして北地区と中央地区を分け、石組の護岸を有する溝SD174を境界として中央地区と南地区を分けた。この東西方向の溝は下段までは続かないが、両者とも比較的古い段階から近世まで複数回にわたって溝を掘り直していることから、遺構のまとまりを区分できるものと考えた。下段では部分的に東西方向の溝が検出できたが、上段のものとはつながらない。下段で検出できた東西方向の溝は近世以降の屋敷境を示すものと考えられる。

上段の南地区の南西では大歳神社本殿があった地点の本発掘調査が2014年度末に行われており、南西地区と呼称する。また、その北西の丘陵斜面を平坦にして経塚が営まれており、西地区と呼称した。

調査の結果から見ると、上段の北地区や中央地区では中世前半の建物跡などの居住域が確認できたが、下段では流路SR400以外には顕著な同時代の遺構は広がらず、16世紀後半以降の屋敷地として利用されていたことが判明しており、上段と下段では広がる遺構の性格が大きく異なることがわかった。

遺跡が立地する地形は有野川の氾濫原から段丘、支流性の扇状地、丘陵斜面にわたっている。調査区外北側及び南側には北東や東に開く大きな谷地形が広がり、居住区域を限っている。遺構面と認定した土層はシルト質極細砂層であるが、調査区の南東部では亜円礫層が遺構面直下で現れている。また、西側の丘陵から派生する小谷が上段部では複数箇所確認できる。その一つが弥生時代終末期の土器が出土したSR218であり、縄文時代後期の土器（第２図１）が含まれていたSR81の落ち込みや、湧水が著しいSX1007の落ち込みもその地形上に位置する。今回、本発掘調査を実施した遺跡の範囲や遺構の配置はそのような地形的な制約に規制されているものと捉えられる。

１は平口縁の深鉢で、口頸部は二枚貝条痕、胴部はケズリ調整を施す。口縁端部は丸く収め、キザミはない。晩期中葉篠原式古段階に位置づけられる。



第２図　縄文土器

この縄文土器に関して、周辺の動向と地域における位置づけをすると、六甲山南麓および播磨地域では滋賀里Ⅰ～Ⅲa式の遺跡数が少なく、篠原式期になって遺跡数が大幅に増加する傾向がある。一方で、北摂地域では晩期前葉～中葉の遺跡がほとんど見つかっておらず、対中遺跡などで突帯文土器がわずかに出土しているにとどまっていた。今回出土した土器は当該地域での時期的な空白を埋めるものとして評価することができる。

以下に下段、上段の順に記述し、できるだけ遺構の種類別に北側から報告する。旧大歳神社境内にあたる南西地区は、南地区に含めて報告する。また、西地区については遺構の性格が異なることから、別に章立てを行い、第5章として掲載した。

SRは流路、SDは溝、SEは井戸、SKは土坑、SPは柱穴（一部Pと省略）、SFは建物基礎の性格をもつものと考えており、SXはいずれにも当てはまらないものや性格不明の遺構に附した。同じ構造の遺構でも溝内に構築されたものを水溜井戸としてSEとしたものもあるが、名称は基本的に調査時点のものを踏襲している。すべての遺構に通し番号を附しており、調査年次が異なる遺構にも重複がないようにした。但し、第5章の日下部経塚についてはSX01、SX02、テラス1、テラス2の呼称を用いた。

第２節　下段の遺構

1. 流路・溝

SR400（図版6・7、写真図版9～11）

SR400は下段の北端から南端に掛けて約100mの長さで検出された流路である。南端部では上段の裾を走っており、中央地区・北地区でも農道となっていた部分などでは流路西肩から続いて上段への斜面となる。このため上段から下段への落ち斜面も元々は自然流路によって形成された可能性が高い。SR400が完全に直線的ではなく、わずかに左右に振りながら走っていることも、本来自然流路であった可能性をしめすものである。

但し、このSR400は何回かの改修が土層断面でも観察され、水路として活用されていたものと考えられる。また薬研堀状の断面をもつこの流路の方向がわずかに変わる地点は地山に礫層が続く位置に当たることや、一部その礫層を切り込んで掘削されており、明らかに人為的な溝としての機能を付加されたものである。

現況で調査区の東を北流する用水路は、北側に広がる有野川左岸の平地への基幹水路としての機能をもっており、このSR400も取水部は確認できなかったが、おそらく同様に有野川から取水した用水路としての機能を有していたものであろう。埋土中には大小の礫が多く含まれており、ラミネーションが見られる部分が多い。底付近には滞留性の堆積物が観察される。

底付近の山側に石が並んでいる状況が南地区で確認できたが、これも近世以降に再利用された際のものと捉えている。また、中央地区でも大型の円形の土坑が切り込まれている周辺で巨石が並んだ状況が見られたが、重機掘削の際に取り除いており、性格は不明である。

流れは有野川と同様の南から北へと向かうものと思われるが、調査区内での底の比高差は0.2m程度である。深さは1mを越える部分もある。幅は一定ではないが、5m前後の規模を有する。南端部が2.3mと最も細くなり、中央地区北端の東へ突出して分岐する位置では6mを超える幅をもつ。その北側では一

旦幅を狭めるが、再び5mほどの幅を持つ。北端部は東西方向の水路SR415によって途切れるが、その北側にも続いている状況が確認できた。

北地区では一段浅くなって西側へ広がり、その部分に石組のSE938などが検出された。SR400埋没後の上面で遺構が検出されるのは、北地区が顕著である。遺構としては不明瞭ながら、北地区の上段からの裾が溝状にくぼみ、SR400に合流するのが、北地区南端から中央地区にかけての範囲で認められる。但し流れの方向から見て、北流するため、SR400が分岐した可能性がある。

中央地区北端の分岐は浅く、4mほど延び、その先は石組の護岸の残るSK608へ向かう。この枝溝からは18・28・48などの須恵器・白磁が出土したが、W2のような近世の木製品も含まれている。

埋土には須恵器の坏Aや坏Bなど古くに溯るものも含まれているが、糸切り底部の須恵器埦が多く出土しており、水路として使用を開始した時期を推定することができる。また、中世後半のベトナム製陶器（38・39）などを含んだ陶磁器、近世にまで下る陶磁器の出土は何回かの改修を経てこの水路が使われていたことを伺わせるものである。上層からは桶材や提灯の部品と思われる木製品（W1～9）、石臼S13なども出土している。

SD115・SD114・SD94・SD101（図版4～6、写真図版10・12）

中央地区南半ではSR400が埋没した後に掘削されたSD115やSD114が検出された。SD115は、SR400がほぼ平坦に埋没した後にSR400の東肩近くに掘削された幅0.5m、深さ0.25mほどの溝で、中央地区北半部ではSR400と重複した近世以降の溝によって失われたと思われる。SD114はSR400の東を並行して走る幅0.4m、深さ0.35mの溝で、SD115を切っているものと思われる。埋土中から須恵器埦58が出土しており、SR400出土の須恵器との時期差は認められない。

SR400が埋没した後の近世以降にも重複して溝が設けられていた。中央地区南半部のSD94はSR400の西を並行して走る石組溝で、南端部は石組をもつSE203に取り付いている。また、SD94の北端近くから東西に走る石組をもつ溝SD101が検出された。この溝は一部に石の蓋をもつもので、SR400上面を横切って作られている。この石組をもつ溝は、発掘調査直前まで存在していた家屋に沿うことから近代の排水溝かもしれない。SD94からは瀬戸美濃焼皿59や砥部焼甕破片101が出土している。

また中央地区でもSR400内から直方体を呈した巨大な石材が数個並んで出土したが、下層のSR400の調査を優先したため重機で除去した。その近辺では大型の円形の土坑などがSR400内に設けられており、近世の水溜などの機能が考えられるものである。水の湧く状態であったため、詳細な調査は実施し得なかったが、遺物の出土は非常に少なかった。

SR415（図版3・8、写真図版13・14）

下段でも東西方向の溝が検出された。これらの溝は上段には続かず下段に配された近世の屋敷を区画するものであろう。

北地区の北端部で検出された東西方向の大規模な溝である。この溝の西端には石組水溜のSE416が設けられている。SE416の西では不明瞭な溝状の落ち込みが断続的に見られ、石組をもった水溜土坑SE417等が構築されている。SR415は幅4.5m、深さ0.67mの規模を持ち、東側は調査区外へと続く。幅は東端が広く6.0m、深さは南側岸が高く0.92mの深さとなる。SR415とSR400の切り合う地点の際で陶器甕57がSR415北側斜面に傾くような状態で出土している（SK940）。出土土器の報告ではSR415出土のものとして取り扱っているが、単独の埋甕の可能性が高い。

SR415埋土上層からは53～56・310・311の土器や卸金M10、石製品（S6・9・17・18）、漆器や挽物など木製品（W10～31）が出土し、中層からは桜と思われる丸太材が数本並んだ状態で巨石とともに出

土しており、意図的に埋め戻したものかもしれない。おそらく複数の面が存在したものと考えられる。西側の谷からの湧水が著しく、地下水の通り道に構築された溜池や排水のための施設と思われる。下層からはほとんど遺物は出土しなかった。

SD622（図版3、写真図版12）

北地区の南東部で検出された石組をもつ溝で、幅1.0m、深さ0.2mの規模をもつ。調査区東端から6.3m続き一部に石列をもつ。同じく石組をもつSK608に取り付くようであるが、先後関係は不明である。

SD916（図版5、写真図版12）

南地区の礫ベースの面で検出できた幅0.8m、深さ0.1mの東西溝で、上面が削平されている。埋土は旧耕土と変わりない。半分に割れた石臼S15が出土した。上段で検出されたSD1003に続くものかもしれない。

上段を区切るSD916とSD105間の距離が約36m、SD105とSD622間の距離が約43m、下段を区切るSD622とSR415の中央との距離は約30mを測る。

2．井戸・土坑他

下段で検出された多くの遺構が近世以降のものである。土坑や水溜井戸（溜井）には平面形態が方形を呈するもの、円形を呈するもの、不定形のものがあり、それぞれ壁面に石を積み上げ、或いは並べたものがある。湧水点まで掘り下げ、石や木材で井側を組んだ通有の井戸は検出されていない。

石組をもつ方形土坑

平面形が方形を呈した石組をもつ土坑で、水路内や現在でも湧水が多い位置に設けられたもの（SE416・417・938や上段のSE368）で、水溜井戸の機能をもつものであろう。残存する石組は１～2段に積み上げており、一方が開口する「コ」字形を呈している。開口部が下流側のものが多い。他に方形の石組をもつ土坑には浅いもの（SE465）や、石組を有する池状の大型の土坑（SK608・上段のSX1041）がある。

SE416（図版3・8、写真図版15）

北地区のSR415西端部分で検出された。平面はやや歪んだ矩形を呈し、東端の石組は残存していない。内法規模は西端で南北約2.5m、残存部東端で南北約1.9mである。東西規模は北端で約2.3m、南端で約3.1m遺存していた。石組は１ないし２段が残存しており、その高さは約30㎝で、底は石組下よりもさらに約30㎝深く掘り込んでいる。ただし、もとの石組の高さは不明である。SR415の埋没後に構築されたことが判明しており、底はSR415と同一面であることから、SR415の埋没面を考慮すると、もとの石組はもう少し深く、60㎝程度であった可能性がある。

南側の石組内部に水平に置かれた石があり、石の北西側に接するように杭が存在するとともに、この石の南側には立った状態の石もあり、さらにその部分の石組の石は比較的大きなものを使用していることから、これらの石はステップとして置かれ、石がずれないように杭で止めていたものと判断される。

埋土はシルト～極細粒砂が大半で、青灰色～緑灰色～オリーブ黒色を呈することから、水が溜まっていたことを示すが、一部砂礫層が入ることから、部分的に崩れたようである。

SE416からは60～66・312・313の土器類、木製の横櫛や箸、曲物、鍋蓋（W32～42）や、石製品S8が

出土している。

先述のように、SE416はSR415が埋没したのちに掘削・構築されているが、SE416のすぐ東側にSR415の埋土土層観察用の畔を設けており、その断面には４条の石組の溝が確認されている。石組溝はSR415と同一方向のもので、SE416と重複する位置や高さのものがある。石組溝はいずれもSR415の埋没後に構築されたものであることから、それらの石組溝とSE416の構築順について述べておきたい。

図版８のSR415の埋土断面図をみると、石組溝がＡ～Ｄの４条存在している。溝幅は南端の溝Ａが約28㎝、溝Ｂが約67㎝、溝Ｃと北端の溝Ｄは溝幅約32㎝である。構築順としては、SR415が人工か自然のものかの判断は別として、SR415の埋没後に構築されているという点ではSE416と４条の石組溝は同じである。ただし、埋土中の溝については、石組溝の裏込め土を削って重複しているものがあり、この切り合い関係から、石組溝の構築順を判断できる。それによると、溝Ｂよりも溝Ａと溝Ｃが新しく、溝Ｃよりも溝Ｄの方が新しいことが判断できよう。次に、溝Ａと溝Ｃ・Ｄとの前後関係であるが、石組溝の規模は、溝Ｂ→溝Ｃ・Ｄの順に幅が狭くなっていると同時に、石組溝の底のレベルが高くなっているという点からすると、溝Ａの幅が約28㎝で溝Ｃ・Ｄの約32㎝よりもやや狭く、底のレベルが溝Ｄよりも12㎝高い点からすると、溝Ａは溝Ｄよりも新しいと判断できるであろう。したがって、SR415埋没後のSE416や溝Ａ～Ｄの構築順序は、SR415埋没→SE416構築→溝Ｂ構築→溝Ｃ構築→溝Ｄ構築→溝Ａ構築という順になろう。また、構築順を追うごとに石組溝の幅が狭くなり、石組溝の底のレベルも高くなるということは、流れる水量が徐々に減っていったことを示しているのであろう。

その後、水量はさらに減少したと思われ、発掘調査を実施した際には、溝部分は水田（いちご畑）と化しており、溝はさらに北側の水田畦畔北側で、水田面と同じ程度の高さになっていた。

なお、SE416内やSR415埋没後の石組溝を流れていた水の供給先は、水田や畑といった農業にかかわるものであったことは想像に難くないであろう。

SE417 （図版3・9、写真図版16）

北地区の上段から下段へ落ちた部分に構築された石組で、上段側はしっかりとした地山がなく抉られていた。小扇状地状を呈した谷地形の湧水点に設けられたものであろう。斜面裾の上流側にL字形に石を並べ、内部に大きめの石を配して南側は礫を敷いたように検出された。最大の内法で2.4×1.3mを測る。

SK465（図版3、写真図版16）

北地区のあまり湧水の見られない礫ベースの部分で検出された。南北2.14m、東西1.25mの長方形土坑内の三辺に石を並べている。深さは0.22mほどである。埋桶SK464に切られている。土坑埋土からは絵唐津焼皿67や唐津焼の埦68が出土している。

SE938（図版3、写真図版16）

北地区のSR400西沿いで検出された。この地点ではSR400の西岸が幅を2mほど広げて中段を形作っており、近世頃に掘り直されたものと思われる。但しこの拡幅部は北側では途中で途切れている。溝掘削中に検出されたため、掘方の規模は不明である。北側の開いた三方に石を並べて囲んでおり、内法は1.7×1.8mを測る。

SK608（図版3、写真図版17）

北地区の中央部で検出された最大で南北14.2m、東西約5.0mの平面形が長方形を呈する池状の土坑である。南端部は幅が大きくなるため別の遺構が切り合っていることも考えられるが、攪乱が著しく埋土の変化を検出できなかった。北東部は礫群によって埋没しており、意図的に埋められたものと思われ

る。礫を丁寧に除去すると、北東の肩の一部と西辺の一部に石を2段ほど積み上げた護岸をもつことがわかった。東辺では南半部でも小石が並べられた部分が確認されている。

土坑の北西部や東辺部では円形の土坑が切り込んでおり、埋土の変化は判断できなかった。SK608の北辺は２段になっており、北西隅に突出した部分に続く可能性があるが、この突出部分をSK510とした。

SK510は幅0.8m、深さ0.25mで北に2.0m延びている。埋土はSK608と類似しており、同一個体或いはセットと考えられる漆器大皿（W65・67）が出土したことから、同時期に埋められた可能性を想定している。

SK608からは中世に溯る土師器、17世紀の唐津焼、丹波焼（69～74）の他、海老の絵が描かれた漆器大皿、杓子、下駄などの木製品（W62～66）が出土している。木製品は礫で埋められた下層から出土したものが多い。SK510からは漆器大皿W67の他、墨書のある瓦器埦75が出土している。

SE203（図版4・9、写真図版18）

中央地区で検出された。南北2.5m、東西1.7m、深さ0.6mの楕円形土坑内に東及び北側を直線的に、南西側はやや湾曲して石を並べたものである。東壁の石列は延長すると北側に延びるSD94東壁と一致している。この石組土坑と石組溝は土坑に溜めた水を排水する溝か、溝の一部を土坑に作り直したものであろう。一本引き擂目の丹波焼擂鉢片が出土している。

石組をもつ円形土坑

平面形が円形を呈し、石を周辺に積み上げているもの（SK850・719-2・189・上段のSK72）があり、SK72のように桶の底板が残存し、水の湧くような場所に作られたものは水溜の性格を附しても良いだろう。但し石の積み上げ方が乱雑であるため、礫で埋め戻したものとの区別が付きにくい。

SK850（図版3、写真図版18）

北地区南端のSR400西肩で検出され、SR400を一部切って作られている。直径1.5m程度の土坑内に石を並べて直径0.8mの空間を確保している。おそらく桶を内部に納めたものであろう。出土した土器は掘方からは土師器・須恵器片とSR400由来のものであり、内部埋土からは赤土部のかかった丹波焼片が出土している。

SK719－1・719－2（図版4、写真図版18）

中央地区のSR400東肩部で検出されたが、この周辺ではSR400 に重複するように近世以降の大型の溝や土坑、石組が混在しており、的確には検出し得なかった。SK719－2もSR400に切られているように検出されたが、その北側の小型の石を並べたSK719－1やその前面の深い土坑、SK719の南にある土坑などが最終的に分別できたが、遺物の出土も見られなかった。SK719－2は20～40㎝程の石を土坑内の周囲に並べるものである。SK719－1は比較的小型のこぶし大の石を土坑内周囲に配している。土坑の大半を失っているため、方形の土坑の可能性もある。

埋桶

平面形が正円形のものの多くが埋桶と思われる。木製の桶の底板・樽板すべてが残るもの、底板のみが残るもの、箍の痕跡しか残らないもの、木質が残存しないものがある。肥桶としての機能が最も可能性が高いが、埋桶の周囲を比較的大きな石で固めるもの（SK850・SK189・SE72）は、水路近くにあることから流水を溜める溜井としての機能が考えられる。桶底板の直径が1m程度の大きさのものが最も

多いが、掘方の直径が2m大のものも存在する。直径約23㎝の小型の桶W97を埋めたSK888も検出されており、様々な機能が存在するものと考える。

埋桶の多くは下段北地区に集中しており、20基を超える。北端のSR415に近い範囲の円形の土坑は非常に浅く、桶の底板が残存していたものでも榑板は高さ10数㎝しか残存していなかった。浅い桶を埋めていたとは考えにくく、ある時期に盛り土がなされ、その上から掘り込まれたものが削平されたものと考える。

SK464（図版3、写真図版19）

直径が0.9～0.96mの底板が残存し、榑板が底板から12㎝程の高さしか残存していなかった。石組土坑であるSE465の一部を切って作られており、その性格を受け継いだ可能性がある。

SK419（図版3、写真図版19）

SR400とSR415の交点付近で検出されたSK419は、直径1.8mの円形の土坑内の南側に接するように、直径1.0mの桶底板が残存しており、深さは0.2m以下しか残っていなかった。桶の内部から木製杓子や竹篦、墨書のある木製容器蓋など（W68～72）や、火打金M11が出土した。

SK501（図版3・9、写真図版20）

北地区中央部で検出されたSK501は、東西1.8m、南北1.3mの楕円形の土坑を掘り、底板径1.2m程度の桶を埋め込んだものである。榑板は外されて桶の中に入れられ、周辺部は崩されていた。榑板と共に木製の鍋蓋や擂り粉木、下駄、箱（W43～61）が出土した。

SK503（図版3、写真図版20）

同じく北地区中央部で検出されたSK503は、直径が2m近い土坑内に桶を据えていたもので、最終的に礫を投入して埋められており、深さは0.5mを超える。内部埋土からは唐津焼皿82が出土している。

SK450（図版3、写真図版19）

同じく北地区中央部で検出されたSK450は、直径1.2m、深さ0.3mの円形土坑で、SK503と同様に内部に礫を投入して埋められている。SK450からは煙管の吸口M7や美濃焼天目茶埦315、須恵器捏鉢片が出土した。

SK449（図版3、写真図版19）

SK450を切り込んで作られているSK449は、直径1.3m、深さ0.4mほどの円形土坑の底に木製の桶底板（直径1.0m）が残存していた。丹波焼ひさご形壺85や木製の塗箸W75が出土した。18世紀後半か。

SK736（図版3、写真図版19）

北地区南端のSR400東肩上面に設けられた直径1.4mの円形土坑で、直径1.2mの桶底板が良好に残存していたが、側板は30㎝弱しか残存していなかった。大きく削平されたものと思われる。内部の埋土には礫が多く投入され意図的な埋め戻しが想定される。その中からは丹波焼甕91や土師器皿92、漆器椀、箸、竹篦、切匙、下駄などの木製品（W81～96）が出土している。

SK189（図版4、写真図版18）

中央地区南東隅で検出された直径1.3～1.4m、深さ0.55mの円形土坑で、東側の壁に沿って石が並んでいたが、埋桶を押さえる裏込め石と思われる。染付磁器碗86が出土している。

土坑

SK437（図版3、写真図版20）

SK437は北地区のSR400沿いに掘られた直径1.1m、深さ0.3mほどの平面形が不整円形の土坑で、桶の

痕跡は残存しない。内部には礫と共に割れた石臼S14を投入している。

SK621（図版3、写真図版21）

SK621は、北地区南東部のSD622の南で検出された、東西3.5m、南北2.5m以上の隅丸長方形の平面形をもつ土坑で、深さは0.24mを測る。埋土から土師器皿・炮烙（78～81）、曲物底板・漆器椀・下駄（W78～80）が出土した。

SK575（図版3、写真図版21）

SK575は北地区東端で検出された東西3.0m以上、南北2.2m、深さ0.4mの隅丸長方形の平面形をもつ土坑で、東側には小型の礫が配される。底には比較的太い杭列が東西に並び（P895・896）、柱根が残存していた。埋土から丹波焼擂鉢84や木製の把手W77が出土した。

SK601（図版3）

SK601は北地区北端のSR415に接するように掘られた南北2.1m、東西1.6m、深さ0.4mの楕円形の平面形をもつ土坑で、埋桶かもしれないが桶材は残存していなかった。埋土から漆器椀W73が出土した。

SK151・152（図版4・9、写真図版20）

中央地区東で検出された土坑で、SK151は直径1.7m、深さ0.4mの円形を呈しており、埋桶の痕跡かもしれない。

埋甕

下段からは3ヶ所、埋甕が検出された。上段では南地区SX1001も埋甕である。

SK940（図版3、写真図版14・21）

SR415の北西部の肩斜面で丹波焼甕57が傾いた状態で検出された。SR415に伴って設置されたもの、或いはSR415埋没後に設置された埋甕がSR415埋土やその肩を構成する砂層の軟弱性から傾いたものと思われる。SR415以北では遺構の密度は極端に低くなることから、屋敷の外と思われる。

SK435（図版3、写真図版21）

SR400東岸に沿った位置にあり、0.95×0.7mの楕円形の土坑に大谷焼大甕90が埋設してあった。すでに大きく破砕されており、接合できた破片も周辺に広がっていた。埋設掘方も非常に浅い。

SK739（図版4、写真図版21）

SK739は中央地区北端のSR400が分岐する位置で検出された。丹波焼甕88が口縁部を失い、底部を残した状態で割れて検出された。復元すると底径20㎝で50㎝以上の器高を有する丹波焼である。内部の中央には円筒形に黒く落ち込む堆積があり、柄杓などの有機質の容器が入れてあった可能性がある。内部からは、銅製の田螺形水滴M5や鬢盥89が出土した。

柱穴（図版10、写真図版22）

下段部では様々な大きさの柱穴状の小土坑を検出した。その中には柱根の木材を残すものも存在しており、建物や柵列などを構成するものと思われるが、建物等は復元できなかった。

その中で一部に柱根を残し、比較的大型の柱穴が一列に並ぶものが中央地区で確認できた。埋没したSR400を跨ぐように5基の柱穴（SP91・207・121・119）が東西に並んでいる。柱穴の大きさは直径0.6m内外、深さは0.3m程度で、礫を詰め込んでいる。柱間は1.8～2.0mを測る。P121から京焼系の施釉陶器埦片、SP119から丹波焼系の施釉陶器鉢片が出土しており、18世紀後半以降のものと思われる。

SP720（図版4）

SP720は中央地区のSR400東肩で検出された比較的小型の柱穴で、青磁碗87が出土した。SR400に伴うものかもしれない。

下段の中央地区東半部や南地区では亜円礫層が遺構検出面直下で現れており、もともと遺構を掘削しにくい立地であり、さらにすでに削平されて失われてしまった可能性が高い。

第３節　上段の遺構

１．北地区の遺構（図版11・13、写真図版23）

上段北地区の地形は、基本的には東に傾斜するが、詳細には北西部が高く南西部が低くなっており、北部および西部が水田造成により堆積土が削平されていた。その部分での遺構は耕土直下の地山に刻まれた部分のみ遺存し、遺物包含層は北地区の東半部および南半部で認められた。

上段北地区南端での土層関係は、西端では耕土直下が明黄褐色の地山となっており、地山上部は土壌化により変色している。そこから上段北地区中央部にかけては地山上に水田嵩上げ層（第４層）や旧耕土（第３層）の堆積が認められる。水田嵩上げ層は上段北地区中央部～東部にかけて厚くなっており（第２層）、この断面部分では溝（SD307）の埋土が下層に存在する。水田嵩上げ層の下に旧耕土（第７層）と第11層の遺物包含層が溝埋土上面に存在する。なお、東部の地山は礫を多く含んでいるが、上部が大きく削平されているためと思われる。

上段北地区で検出した主要な遺構は、北端で弥生時代後期末～古墳時代初頭の流路SR218、南東部で検出した掘立柱建物跡SB01とそれに付随すると思われる土坑SK224、近世の円形井戸SE219とSE362、近世～近代の方形石組井戸SE368がある。そのほか、中世～近世の溝・土坑・柱穴が主として上段北地区南半部で認められた。

１．流路

SR218（図版11・14、写真図版24）

上段北地区北東部で検出した幅約3.5～４ｍの流路で、長さ約12ｍ以上にわたって検出した。北東部は上部が削平されているため底が浅くなり深さ0.3ｍ、幅も約２ｍと狭くなっている。遺物がほとんど出土しなくなったため途中で調査を放棄した。南東側は造成による落差約1.4ｍの大きな段差となっており、そこで削られたため途切れている。東端での流路検出面からの深さは約0.6ｍである。なお、調査した範囲での北西端と南西端での底の高低差は約25㎝で、2.5％の傾斜をもって南東方向へ流れていたことは明らかである。

流路埋土は地山と色や質が似ていたため識別が困難であったことから、サブトレンチを設定して掘削したところ、底で砂礫の埋土を確認し、土器も出土したことから流路跡と断定できた。なお、付近での地山は2.5Y7/4 浅黄（乳黄灰）色のシルト質極細粒砂、流路埋土は乳灰色から灰色のシルトであった。流路底付近には砂礫層が薄く堆積しており、埋土中および底付近の砂礫層部分で比較的大きな破片が出土した。

出土位置を記録したものには、南東端の溝底に近い砂礫層直下から壺体部104、東部の溝底に近い埋土中から甕上半部107、底部の西側下端に近い部分の埋土（乳灰色シルト）から壺口縁部106、北西寄りの西側溝斜面から壺102、北西部の溝底に近い乳灰色シルトから台付鉢110と鉢上半部111、110・111の東側で溝埋土上層より壺または甕の体部などがある。また、乳灰色シルトの埋土中から壺上半部103や105・109の壺口縁部のほか、底部113・114・116が出土し、砂礫層から甕口縁部108、壺底部115が出土した。なお、壺底部112も乳灰色シルト出土と思われる。

これらの土器は113を除いて弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期で、流路内に投棄されたものと思われる。土器は流路の南西・北東側から投棄されたと想定されるが、南西側では当該時期の遺構は検出されていないことを考慮すると、北東側の丘陵尾根先端部分の微高地が集落跡の可能性がある。

なお、今回報告する調査区内では、当該時期の遺構は本流路に限られる。

２．掘立柱建物跡

SB01（図版11・15・16、写真図版25）

上段北地区南東部に存在する、南北５間、東西２間あるいは３間以上と判断される総柱建物跡で、南側に１～1.1ｍの間隔をおいて塀または柵が付設されている。東端柱列のさらに東側にも建物が続いていた可能性もあるが、柱穴を検出した面の高さから削平により40㎝程度掘り下げられているため確認できない。

棟方向はほぼ真北の座標北からＮ14°Ｗ方向で、柱芯距離で南北規模は9.74ｍ、桁間は1.76～2.08ｍであるが、大半は1.92～1.97ｍの範囲におさまることからほぼ均一である。東西規模は２間の場合6.07ｍで、梁間は2.96～3.4ｍで平均3.13ｍである。ただし、東側の梁間が平均3.04ｍ、西側は平均3.25ｍで、東側が狭くなっている。北西部にもう１間分があるが、梁間は1.74ｍ・2.0ｍと短い。この部分が南北全体に存在していたか、あるいはこの部分のみ張り出していたかどうかについては、南側が攪乱坑により破壊されているため判断できない。

建物跡の内部にはSK323・329などの土坑やいくつかの柱穴があるが、この建物跡に伴うものかどうかの判断はしがたい。ただし、北西側に約2.5ｍ離れて存在する土坑SK224は本建物と関わりの深い遺構であると判断している。また、南側に存在する溝SD307は建物跡と同じ方向であるが、規模が大きすぎる点と、上層で近世の遺物が出土していることから、建物に伴っていたとは考えにくい。同時に、北西部の溝SD274・250は、建物跡と重複するSD345・337と方向が同じであるが、建物跡の方向とは異なっていることから、地割の方向からみても本建物跡との関係は薄いと判断される。

掘立柱建物跡の検出面は東側および南側に傾斜しているが、東側は削平の段もありやや著しいが、南側への傾斜は僅かである。柱列の断面をみてみると、東西方向では柱穴底の高さが東側でやや深くなっている。このことは、建物が存在していた時点で東に少し傾斜した地形であったことが推察される。ただし、南北方向の断面ではその傾向は窺えない。

柱穴掘方の規模は、平面の直径18～32㎝の円形で、柱痕は径９～12㎝の円形である。太い柱痕には大きな掘方となっていることは当然であるが、掘方直径に対する柱痕直径の比率は0.5～0.83であるが、0.54～0.68が大部分を占め、平均は0.62で、柱の太さに対する掘方直径がほぼまとまっているようである。しかし、検出面からの掘方の深さについては12～42㎝で24～40㎝が多く、まとまりは認められない。

柱穴からは平安時代後期末の12世紀末～鎌倉時代初頭の13世紀前半の須恵器・土師器の破片が出土しているが、特にSP335では柱痕から13～14世紀代の須恵器鉢121が出土し、須恵器埦小片が柱穴上面、土師器細片が柱痕から出土している。これらとSK224の出土遺物が示す年代を合わせて考えれば、平安時代末の12世紀後半～鎌倉時代初期の13世紀前半の間に掘立柱建物跡SB01が機能していたと判断することができるであろう。

図示できなかった遺物が出土した柱穴は、SP334の柱痕から須恵器埦片、SP336の柱痕から土師器・須恵器の細片、SP285の柱痕から須恵器埦片、掘方から土師器細片、SP333の上面から須恵器埦片、掘方から須恵器片、SP332の掘方から須恵器甕片、SP328の柱痕から須恵器埦片、SP315の柱痕から土師器細片、掘方から土師器・須恵器の細片、SP321の柱痕・掘方から土師器・須恵器の小片、SP327の上面から土師器細片、柱痕から須恵器小片、SP316の柱痕から須恵器埦片、掘方から土師器・須恵器の小片、SP303の上面から土師器・須恵器小片、柱痕から須恵器細片、SP326の柱痕から土師器細片、SP324の掘方から土師器細片がそれぞれ出土しており、建物跡の時期と齟齬がない時期の遺物が出土している。

塀部分の柱穴のうち、SP300の柱痕からは土師器・須恵器の小片、塀柱穴の可能性があるSP306の柱痕から土師器細片が出土している。

また、西側張り出し部分にあたる柱穴のうち、SP349の柱痕から土師器・須恵器埦の破片、SP346の掘方から須恵器埦片、さらに西側に存在するSP284の上面から瓦器埦片、柱痕・掘方から土師器・須恵器片が出土しており、柱穴の時期は建物跡と同時期であると判断される。

なお、柱痕内には柱の根固めや礎板石と思われる礫を検出したものがある。

３．土坑

SK224（図版11・15・17・18、写真図版27～30）

掘立柱建物跡SB01の北西側に存在するSK224は、10～30㎝程度の亜円礫を中心とした石で壁を構築するとともに底も礫敷きとしていたと判断される石組土坑である。平面形は一辺1.8ｍ程度の隅丸方形に近いが、やや歪である。石組の壁は東側を除いた部分が遺存していたが、西側では２段、南側では一部分で最大４段、北側では１段のみである。遺存した石組の状態から南北内法1.1ｍで、東側の石組は遺存していなかったものの、内法が一辺1.1ｍの方形石組が想定でき、辺の方向は掘立柱建物跡と同一方向である。底に敷かれた亜円礫は10～25㎝の大きさで隙間がやや多く、上面の凹凸も認められることから、丁寧に敷いたものではない。

検出面から底の礫上面までの深さは最大45㎝で、底の礫上部には黒色（主観的には暗濃褐色）を呈しやや粘質で炭化物を多く含む極細粒砂～細粒砂（第５層）、その上部には赤褐色焼土混じりで灰白色を呈する粘土状の粗粒シルト～極細粒砂（第３層）、第３層上部には暗褐色（主観では灰褐色）の極細粒砂～細粒砂、最上層には黒褐色（主観では暗灰褐色）の極細粒砂～細粒砂が堆積しており、いずれの層にも礫と須恵器・土師器等が炭化物とともに含まれていたが、北半部に偏って検出された粘土状の第３層では、土層内および下面に多くの土器類が炭化物とともに含まれていた。

礫は壁体を構築していたものが崩落したと推定され、土器類は土坑廃絶時およびその後に廃棄されたもの、粘土状の土も同時に廃棄されたものと判断される。また、土器類は底の礫上からも検出された。それらの土器のうち、完形～ほぼ完形に復元できたものには須恵器埦が11個体、須恵器皿は３個体、土

師器皿が７個体あり、器種としては須恵器埦が最も多く、図示できたもの27点、次いで土師器皿17点である。その他の器種としては４個体分の土師器堝（土鍋）や須恵器鉢２個体分、ほぼ完形の瓦器埦１個体と破片２点がある。また、輸入陶磁器の青白磁と白磁の破片があり、土錘も１点出土した。SK224出土土器は生活に直接関わる器種であることが特徴である。また、土器類は主として北側に集中していることから、北から投棄されたものと判断される。

土坑掘方は平面隅丸方形で一辺1.9m、底はほぼ平らで検出面からの深さは50㎝であった。掘立柱建物跡の検出面から想定すると大きな削平が認められないことから、この土坑についても石組の高さは50㎝程度であったと推定できるであろう。

本土坑の機能については不明な部分が多く推定しがたいが、溜井戸のような水溜施設であった可能性がある。ただし根拠は薄く、周囲に近世以降の溜井戸が多く存在していたことが理由である。

SK280（図版11・15）

この土坑はSK224の南約1.4mに存在し、掘立柱建物跡のすぐ西に位置している。平面形は隅丸の矩形に近く、南北1.7mである。東側肩部は削平により消失しているが、1.5m程度であったと推定される。検出面からの深さは30㎝で、埋土は最下層が10YR5/2.7にぶい黄褐色で粘質のシルト質極細粒砂、その西部に10YR5.6/3にぶい黄橙色の極細粒砂、上層には7.5YR5.5/3にぶい褐色で粘質の粗粒シルト～極細粒砂、最上層には7.5YR3.6/1褐灰色で粘質の粗粒シルト～極細粒砂が堆積していた。埋土中から須恵器埦の破片と土師器の細片が出土した。掘立柱建物跡やSK224と同時期の可能性がある。

SK329（図版11・15・19、写真図版32）

掘立柱建物跡内に存在する土坑で、南北0.9m、東西1.1mの楕円形を呈する。底は皿形に近く、検出面からの深さは12㎝である。埋土は主観では暗灰褐色で、中世初期の埋土色を呈しており、図示できなかったが、埋土から土師器小片と須恵器埦片が多数出土している。

SK323（図版11・15・19、写真図版32）

本土坑も掘立柱建物跡内に存在し、径65㎝の円形を呈する。検出面からの深さは11㎝で、底は皿形に近い。埋土は主観では暗灰褐色と暗褐色で、中世初期の色調であり、埋土から土器片が出土した。

SK329とともに掘立柱建物跡内部に存在し、中世初期の可能性があるが、建物跡に伴うものかどうかは判断できない。遺物は須恵器埦119が出土している。図示した以外にも土師器・瓦器・須恵器の小片が出土している。

SK371（図版11）

上段北地区の南部中央に存在した大規模な攪乱坑により大半が破壊され、東側肩部にかろうじて残っていた土坑または溝である。長さ1.4m、最大幅25㎝で、検出面からの深さは10㎝であった。埋土から須恵器埦の細片が出土しているが、遺構の時期を確定することはできず、掘立柱建物跡との同時性も不明である。

SK352（図版11）

上段北地区の中央東端付近に位置する径45㎝ほどの円形土坑で、検出面からの深さは15㎝、底は平らである。埋土は上下２層に分かれ、その色調は上層が10YR4.5/2灰黄褐色、下層が10YR4/3にぶい黄褐色を呈していた。須恵器埦の小片が出土しているが、埋土の色調などから、近世のものと思われる。

SK220（図版11・20、写真図版32）

上段北地区の中央東部、SD273の南側に位置する。一辺1.55mの平面隅丸方形を呈するが、北辺は小規模な溝により切られているものの、南北も同規模と思われる。検出面からの深さは12㎝で、底は平ら

でほぼ水平である。埋土は３層に分かれており、最上層の第１層は砂層である。この砂層は後世に掘られた穴に砂が溜まったものと判断している。第２層の主観による色調は暗灰褐色で、通常、平安時代後半～中世前半の埋土はこの色調を呈している。第３層は西部にのみ堆積していたもので、周辺の地山が流入・堆積したものと思われる。

第２層には中世初期の土器と炭化物が含まれており、須恵器捏鉢118が出土している。また、須恵器埦片多数が出土している。また、近世染付片も出土しているが、第１層出土である。

なお、土坑の機能については、深さが浅く、埋土や出土遺物にも特徴的なものが認められず、不明であるが、中世初期の所産ととらえている。

SK342（図版11）

SK220の東隣に位置する平面矩形の土坑である。南北約1.4m、東西約1.1mで、南北方向に礫が４点並んでいた。埋土は主観では灰褐色系で中世頃の埋土色であるが、北端部では砂層に近い埋土で東西方向の小規模な溝に切られている。この小規模な溝は近世以降のものと思われる。本土坑を検出できた最高所からの深さは38㎝で、埋土から須恵器埦片多数と近世染付片が出土している。

SK353（図版11）

上段北地区中央部東端に位置し、SK352の南側に存在する。平面三角形に近い円形を呈し、径は約90㎝である。埋土は大きく２層に分かれ、上層の色調は2.5Y4.5/1黄灰色、下層もよく似た色調で、2.5Y5/1.4黄灰色である。埋土の色調から近世のものと思われ、丹波焼甕片と須恵器埦小片が出土している。また、下層には直径20㎝程度の亜円礫が１点含まれていた。検出面からの深さは35㎝で、底は丸くなっている。

SK237（図版11）

上段北地区の中央部西寄りに位置し、南北方向の溝SD274とSD250の間に存在する。平面形状は三角形に近く、径55㎝程度である。埋土は上下の２層に分かれ、上層の色調は10YR4.5/2灰黄褐色、下層は2.5Y6.4/4にぶい黄色で、上層には黄灰色のブロックを含む。また、検出面からの深さは12㎝程度であり、落込み角度が緩く、底面の形状がやや歪であることと埋土の状況から、攪乱坑の可能性がある。

図示できなかったが、埋土から弥生時代～古墳時代の可能性がある土師器片が出土している。

SK357（図版11、写真図版32）

上段北地区の南東部、建物跡SB01の東側に存在した南北に長い土坑で、南北長約1.4m、東西幅55㎝の規模である。検出面からの深さは17㎝で、底は丸い。北端には直径15～30㎝程度の亜円礫が４点入っていた。埋土は単一で、10YR6/1.2褐灰色の細粒砂混じり極細粒砂で、主観的には乳灰色を呈する。遺物は出土しなかったが、埋土の色調から、近世以降の所産と思われる。

４．溝

SD310・SD307（図版11・20、写真図版26）

上段北地区南端中央部、建物跡SB01の南西部に位置し、溝は建物跡の南西部を切っており、建物跡は柱穴も切られている。また、溝の北側は攪乱坑により破壊されているため、溝の北端位置は不明である。

溝は南東方向にのびた後、建物跡の南側で塀の柱列と平行方向に曲がり、さらに東方向に続いている。建物跡南側の溝はSD307と呼称したが、上段中央地区北半部の調査時に同一の溝と判明した。これ

は、北地区調査の際、両溝が調査区南端に存在していたうえに、上段中央地区北半部を掘削する前の段階であったため、SD310が直角に近く曲がることが予想・判断できずに、調査区南端の土層断面で確認した溝SD307とは別のものと判断したためである。なお、SD307の位置および方向は、調査前の水田の南端畦畔ラインと一致する。

SD310部分の検出面での溝幅は2.1m前後、検出面からの深さは0.7mで、底は丸みをおびている。埋土のうち、第１～３層は主として西側から流入しており、主観的な色調は灰褐色や褐灰色である。第５～７層は主観的には灰色や暗灰色で、第６層の砂層は最大20㎝の厚さで溝底に堆積していた。

SD307部分では、第７～11層の色調は主観的には茶褐色や褐灰色、灰褐色、褐色で表現できるもので、第12層の色調は主観的には灰色で表現できるものである。SD307の最大幅は西端部分にあり、1.3m程度、検出面からの深さは0.65mで、横断面の形状はSD310よりもＶ字形に近い。

溝底の高さはSD310部分で標高174.95m程度、SD307部分で標高174.91mとSD307部分が僅かに低く、水は東流していたと判断でき、溝底の標高がほぼ同じであった点も堆積土層の類似性とともに同一溝と判断した理由の一つである。

SD310の埋土からは飛鳥～奈良時代の須恵器坏細片、平安時代末頃の須恵器埦片のほか、土師器片が出土しており、SD307の埋土からは須恵器埦や土師器の小片のほか、丹波焼・施釉陶器・近世磁器の小片や朱泥の破片、燻し瓦の破片も出土している。近世以降の遺物は上層から出土していることから、SD307の第７・８層は近世に掘られていた溝と重複している可能性が高い。したがって、SD310・307は中世初期の溝と判断できると思われる。ただし、遺構の重複関係から、建物跡SB01とは同時には存在せず、建物跡廃絶後に掘削された溝と思われる。

SD309（図版11・19、写真図版26）

溝SD310の西側にある、南西方向から東西方向に曲がる「く」字形の溝で、北部では攪乱のために東側の肩は削平されていた。検出面での幅は75㎝、最大深は28㎝で北側に偏っていることから、削平される前の溝幅は1.1m程度であったと推定される。

埋土は３層に分かれており、最上層は主観的には黄灰色に近く、地山ブロックが多く混じることから、攪乱坑の埋土残存部分である可能性が高い。中層および下層は主観的には灰褐色で、中世初期頃の埋土と同色である。埋土の土層観察を行った部分では柱穴と重複しており、この溝が埋まった後に掘られた柱穴である。埋土の色調から中世初期の柱穴と思われる。

本溝埋土から近世陶器片が出土しているが、最上層出土のものであろう。本溝の時期は埋土の色調から中世初期あるいは古代後期の可能性がある。

SD345（図版11・15・19、写真図版26）

建物跡SB01の中央北部にある南北方向の溝である。建物跡内にのびているが、柱穴とは重複していない。幅約45㎝、長さ約6.3mの規模で、検出面からの深さは７㎝程度である。溝底は丸みをもち、底の標高では南端が北端より２㎝高いことから、水は南に流れる溝である。南端は途切れているものの、現状では、北端底の標高と南端肩部の標高が同じであることから、溝の南肩から水があふれるようになっている。埋土は主観的には暗灰褐色を呈し、北半部の埋土から平安時代末頃の須恵器埦・瓦器埦の破片が出土している。溝の時期は古代後期～中世初期の可能性がある。

SD337（図版11・15・19、写真図版26）

建物跡SB01の北部で、溝SD345の東隣で並行して存在する溝である。SD345と同様、建物跡内にのびているが、柱穴とは重複していない。幅約50㎝、長さ約2.2mの規模で、検出面からの深さは14㎝であ

る。底は丸みをもち、埋土はSD345と同一で、埋土には13世紀頃の土器片や炭化物を含んでいた。

SD746・SD861（図版11・15・20、写真図版26）

上段北地区の南端から中央地区北部にかけて、東西方向の溝が３条存在していたが、そのうちの南側に位置する溝がSD746とSD861で、約2.1ｍと幅広い溝SD861の埋土を切って、ほぼ中央にSD746が掘られていた。SD861は検出面からの深さ約40㎝で、底は緩いＵ字状を呈し、埋土の第３～６層がSD746に削られずに残っていた。埋土は主観的には灰褐色・褐灰色で、中世初頭頃の埋土の色に近い。ただし、SD861はSD307の南部を切っていることから、SD307が埋まってから掘られた溝である。SD861は斜面上部にあたる西側ではその幅を減じながら自然消滅し、東部ではSD307と重複している。

SD746はSD861が埋まった後に掘られた幅85㎝ほどの溝で、埋土中には亜角～亜円礫を多く含み、主観的な埋土の色調が灰色や灰黄色であり、埋土から近世磁器や燻し瓦片が出土していることから、近世以降の溝であることは確実で、礫が石組上に見える部分もあることから、水田に伴う暗渠の可能性が高い。

SD274・SD250（図版11）

上段北地区中央西部に存在した南北方向の細い溝で、両者の位置から一連の溝であろう。SD274の幅は30㎝、長さ約3.5ｍにわたって検出した。検出面からの深さは12㎝で、底は丸味がある。南端は途切れているが、溝底の標高は北部で175.76ｍ、南端付近で175.70ｍであることから、水は南流していたことがわかる。埋土は上層が10YR3/1.5黒褐色の極細粒砂混じり細粒砂、下層が10YR4/1.4褐灰色のシルト質極細粒砂～細粒砂で、主観によれば灰褐色系の色調であることから、中世の可能性が高い。埋土から近世と思われる土師器細片が出土しているが、北側に近世溝が存在していることが理由であろう。

SD250の北端はSK237の部分で途切れ、南端は大攪乱坑により削られており、検出できた長さは約6.5ｍである。北端での幅は約25㎝、南端では約45㎝である。検出面からの深さは北部で４㎝、南部では８㎝で、溝底の標高は12㎝の差をもって南部が深くなっている。埋土は上層が7.5YR4/1.4褐灰色のシルト質極細粒砂～細粒砂、下層が2.5Y5.4/2暗灰黄色のシルト質極細粒砂混じり細粒砂で、主観によれば灰褐色や褐灰色系の色調であることから、中世の可能性が高い。埋土から土鍋の小片が出土している。

SD273（図版11、写真図版26）

上段北地区中央部に位置する、東西方向でやや規模の大きな溝で、埋没後に石組井戸のSE368が構築されている。SD273の東端は水田構築のための造成により断ち切られ、溝の西端では北西側に分岐するが、西方へ続くものも含めて井戸SE219の部分で終息している。残存長は約15ｍで、東端付近での検出面幅は2.05ｍで深さ61㎝、西端付近では幅0.7ｍで検出面からの深さは12㎝である。溝底の標高は西端で175.7ｍ、東端で174.8ｍであるから、90㎝の差をもって６％の傾斜で水は東流する。溝の東端は調査区内ではその痕跡すら検出されなかったため、どこまで流れていたのかは不明である。

東端付近での埋土を観察すると、大きく２～３回に分かれて埋まっていったことが判断できた。埋没過程は、最初に2.5Y5.5/1.4黄灰色や10YR4.5/1.4褐灰色の極細粒砂や細粒砂で埋没したのち、幅1.4ｍの溝として掘削され、2.5Y5/1黄灰色・2.5Y5/4.5黄褐色・5Y5.5/1灰色・5Y4/1.5灰色の極細粒砂や細粒砂および砂礫層の堆積により埋まった後、幅0.65ｍの溝として機能していたようである。その溝の埋土は2.5Y4/1.2黄灰色や2.5Y4.5/1黄灰色の極細粒砂や細粒砂で、最後には10YR4/1.4褐灰色と2.5Y5/1.4黄灰色の細粒砂で完全に埋まっていた。埋土から一本引きの丹波焼擂鉢（181・182）、陶器埦183、土師器堝184が出土している。そのほか、硬質土師器の小片や15～16世紀の擂鉢片が出土している。

本溝が中世末～近世の所産とすると、その北西側に存在する井戸SE219も近世と考えられることか

ら、同時に存在していたとすれば、井戸からの水を流すための溝としての機能も有していたと推定できよう。

SD363（図版11・20、写真図版26）

上段北地区南東隅付近に位置する南北方向に直線的にのびる溝であるが、北端は水田構築のための段差により、南側は井戸SE362や溝SD307・746・861により削られ、確認できた長さは5.5mである。なお、この溝は南側のSX873につながる方向にのびており、同一溝の可能性もある。

検出面からの深さは15㎝、溝幅は75㎝前後で溝幅はほぼ均一である。北端と南端での溝底の標高での差は11㎝北側が低いことから、水は北流していたと判断できる。溝埋土は２層に分かれ、上層は暗灰褐色系で古代～中世初期の埋土色に近い。下層は主観的には黄灰色系で、地山が土壌化したような色を示していた。埋土から須恵器高坏117が出土しており、ほかに奈良時代の須恵器坏Ｂの破片や、丹波焼の鉢片、近世磁器片が出土している。さきにみた位置のみならず、出土遺物の内容からも、中央地区のSX873と一連の可能性がある。ただし、溝の時期を確定することは難しい。

SD356（図版11）

SD363の北西側に位置し、弧状を呈する溝で、検出面での幅40㎝、深さ11㎝で長さ約３ｍを検出した。溝底は丸く、南側は徐々に底が高くなり消滅している。北東端での溝底の標高は南端よりもやや低く、水は北流していたものと判断される。

埋土は上下２層に分かれ、上層は10YR6/2灰黄褐色の細粒砂混じり極細粒砂、下層は10YR4/2灰黄褐色の極細粒砂混じり細粒砂で、主観的には灰色が多く混じった褐色で、中世以降の埋土の色調を呈していた。南部の埋土中から土師器細片が出土しているのみで、この溝の時期を判断できるものではない。

５．井戸

SE219（図版11・22、写真図版31）

上段北地区の西端に近い中央北部に存在したやや規模の大きな井戸である。平面円形に近い井戸で、検出面での直径は3.7～3.9m、深さは約１ｍで、浅い擂鉢状を呈し、底は楕円形で長径約２ｍ、短径約1.5mの平坦な面となっていた。南東部分にのみ石積がみられ、60×40㎝程度のやや大きな楕円形の亜円礫を少しずつずらしながら井戸斜面に沿って傾斜をもって積み上げられ、隙間には直径10～20㎝程度の礫を詰めていた。石積の幅は2.2m程度、高さは約１ｍである。石積の下端では木杭が５本程度遺存しており、すべて積み上げた石の下端部分に接するような位置であることから、石積のずれ落ち防止のための杭と判断できる。なお、調査中も底に近い部分では湧水が認められた。

井戸廃絶後は主として南西方向の山側から土砂が流入し、埋土は大きく７層に分けられた。それらは大きく二つの単位に分けることができ、主観的な色調での乳灰色系の第１・２層と、黄褐色・黄灰色系の第５～７層に分割でき、後者はラミナが認められることから、水と一緒に地山まじりの土が堆積したもので、人為的に埋められた可能性もある。埋土から櫛描の丹波焼擂鉢片が出土しており、近世に機能していた可能性が高い。

なお、石組のある部分は溝SD273が途切れる位置と合致していることから、本井戸とこの溝とは密接な関係があると思われる。

SE368（図版11・21、写真図版31）

SD273の中央部に重複して存在した方形石組井戸で、SD273の埋没後に掘削・構築されていた。石組

の北辺は大半が崩落あるいは礫が抜き取られ、他の辺でも２～３段の石積が遺存していた程度であった。石組は垂直に積み上げられ、内法の規模は東西約２ｍ、南北約1.1ｍの長方形で、石積の高さは、もとの高さは窺い得ないものの、最も良好な西壁の部分で45㎝であった。石組に使用された礫は長さ30～60㎝、幅30～50㎝程度の亜円礫で、間隙には５～10㎝の亜円～亜角礫を詰めていた。掘方も平面長方形で、検出面での規模は東西約2.9ｍ、南北約2.0ｍ、底は平らに近く、東西約2.6ｍ、南北約1.35ｍの規模で、南側は検出面の高さが低かったが、北側検出面からの深さは約70㎝である。

埋土は下層に第５～７層の灰色砂層、その上部に黄灰色の粗粒シルトが10㎝前後の厚さで存在し、その上層の第３層はふたたび灰黄色の砂層が堆積しており、第３層が最終段階での井戸底であったと判断されよう。第３層から上には多量の亜角～亜円礫が石組内部に存在していたことから、人為的に礫で井戸を埋めたと判断できる。埋土から一本引きの丹波焼擂鉢口縁部187が出土しており、そのほか、東播系須恵器甕・丹波焼甕の破片や近代の磁器碗小片も出土していることから、近世～近代に構築されたものと思われる。

SE362（図版11・22、写真図版32）

上段北地区南東隅、SD363の南端で重複して溝より後に掘削された井戸で、円形土坑の中に桶を埋めたものである。完掘はできなかったが、北半を調査した結果、掘方は径約１ｍで、桶側面の板は腐朽してほとんど残っていなかったが、底板はほぼ完存しており、径約80㎝である。検出面から桶底までの深さは約40㎝である。底板が存在することなどから、溜井戸であったと考えられる。

桶内の埋土は３層に分かれ、桶底付近には亜角～亜円礫、その上部で丹波焼火入れ鉢186が出土し、ほかに奈良時代の須恵器広口壺185が出土している。近世～近代の井戸と思われる。

SE902（図版11、写真図版32）

上段北地区南東隅で中央地区北部北東端との重複部分に存在した径1.1ｍ程度の平面円形に近い井戸で、素掘りと思われる。遺物は出土しなかった。溝SD307・746・861と重複しているが、前後関係は不明である。

SE935（図版11）

井戸SE902の東側に存在し、SE902同様溝SD307・746・861と重複しているが、前後関係は不明である。径1.3ｍ程度の円形井戸で、掘方内に円形にとりまくような礫が認められたため石組であった可能性もある。検出面からの深さは20㎝程度であるが、元の深さは不明である。遺物は出土しなかった。

６．柱穴（図版11・15）

掘立柱建物跡SB01の内部に存在した柱穴のうち、SP354の柱痕からは須恵器埦片、SP319の柱痕から土師器小片、SP317の柱痕から須恵器小片、SP302の柱痕から土師器細片、北西側にあるSP282の柱痕から須恵器埦片、SP283の上面から須恵器埦片、柱痕から土師器・須恵器細片がそれぞれ出土している。

SB01周辺のうち、建物跡の南西側にあるSP313の柱痕上部から瓦器埦の底部120が出土しており、図示した以外にも柱痕・掘方から土師器片が出土している（写真図版32）。その北側にあるSP372の柱痕からも土師器小片が出土している。また、建物跡の東方にあるSP359の柱痕からは須恵器埦片が出土し、建物跡北側のSP343の柱痕・掘方から土師器・須恵器小片、さらに北側にあるSP339の柱痕から須恵器埦片が出土している。SK224の西側にあるSP289の柱痕からは土師器細片、SP287の柱痕からは土師器・須恵器の細片がそれぞれ出土し、北側のSP292の上面から須恵器埦片、柱痕から須恵器片が出土

している。

これら建物跡の周辺に存在している柱穴は、出土遺物を見る限り中世初頭の時期である可能性が高い。

また、さらに北側のSD273北肩に存在したSP370からも中世初頭の須恵器埦片が出土している。

上段北地区西部では、SD274・250の西側に存在した柱穴群のうち、南端に存在したSP279の柱痕からは須恵器埦の小片、北側のSP248の柱痕からは土師器細片、SP247の柱痕から土師器・須恵器の細片、SP233の柱痕からは須恵器鉢の破片、SP235の柱痕からは土師器甕細片、SP232の柱痕から須恵器小片がそれぞれ出土し、これらの柱穴も建物跡の時期と同じである可能性がある。

ただし、SE219の南側にあるSP269では、上面から硬質堝破片が出土しており、近世の可能性がある。

2. 中央地区北半部の遺構（図版12・23、写真図版33）

上段中央地区北半部では、奈良時代と思われる土坑や溝などが北東部に存在していたが、断片的であり、この時代の遺跡の性格は不明である。中世と思われる遺構には、土坑や柱穴が散在するが、建物跡の可能性がある柱列がある部分は削平されており、確認できなかった。ほかにも時期不明の土坑・溝・柱穴を検出したが、近世の遺物は出土しなかったことから、大半が中世のものとみている。

１．土坑等

SK834（図版12・23、写真図版33）

北東部に存在した東西4.2m程度で検出面からの深さ10cmの浅い土坑で、埋土から奈良時代の土師器甕198と内面に暗文が残る土師器坏Ａ199が出土している。図示した以外にも土師器坏片多数や須恵器坏口縁部片および陶器片が出土している。

SX873（図版12）

北東隅に存在した溝状遺構で、検出面からの深さ11cm程度を測る。埋土から奈良時代頃の須恵器坏Ｂの底部200が出土し、図示した以外に須恵器坏片や土師器の小片が出土しており、位置や出土土器から、北地区のSD363と一連の溝の可能性がある。

SK862（図版12・23）

東西3.3m、南北幅80cm程度、深さ８cm程度で、奈良時代頃の可能性がある土師器片が出土した。

SK819（図版12・23、写真図版33）

南北1.8m、東西80cm、深さ19cmの墓に近い規模の土坑で、平安時代末頃の須恵器や土師器片が出土した。

SK882（図版12）

1.2×1.0mの矩形土坑で、深さは９cm、時期不明の土師器小片が出土している。

SK796（図版12）

南北2.7m、東西２m以上、深さ13cmの方形に近い土坑で、時期不明の土師器小片が出土している。

２．溝

SD818（図版12）

南北2.8m、幅40㎝、深さ４㎝で、古墳時代の可能性がある土師器片が出土している。

SD877（図版12）

長さ3.6m、最大幅50㎝、深さ11㎝の不定形な溝で、奈良時代頃の可能性がある土師器片が出土している。

SD811（図版12）

幅30㎝程度、延長約９m、深さ５～16㎝で東側が深い。土師器細片が出土したが、時期は不明である。

３．柱穴（図版12）

本地区内の柱穴のうち、遺物が出土した柱穴を述べる。

SP904では柱痕から縄文土器と思われるような破片、SP824では柱痕および掘方から奈良時代と思われる土師器片、SP828では上面から中世初頭と思われる土師器片、SP830では柱痕から奈良時代または平安時代末と思われる土師器片、SP832では柱痕および掘方から中世初頭と思われる土師器片、SP843では柱痕から中世初頭と思われる須恵器埦片、SP857では柱痕から中世初頭と思われる土師器片、SP867では掘方から中世初頭と思われる須恵器埦片、SP871では埋土から中世初頭と思われる須恵器埦片、SP766では柱痕から土師器片、SP767では柱痕・掘方から土師器片、SP776では柱痕から須恵器片、SP805では掘方から土師器片、SP806では柱痕・掘方から土師器片、SP810では掘方から土師器片、SP839では柱痕から土師器片、SP869では柱痕から土師器片がそれぞれ出土した。

3. 中央地区南半部の遺構

SK01・02・06・10～14・25・26・28・33・38・39・68～70・76～78（図版12・24～26、写真図版35～37）

上段中央地区南半部では多くの土坑が検出され、ほぼ中央部の山側に集中している。この部分は西背後の丘陵から小さな谷が流れ出る位置に当たり、掘り込まれた土層は細砂質で柔らかい。この砂層から１の縄文土器が出土している。

土坑は浅いもの以外はほとんどが切り合っておらず、接するように掘られている。東西方向或いは南北方向に長軸を有する隅丸長方形の平面形をもったものが多く、隅丸方形、楕円形、小型円形のものが一部含まれている。長辺が0.7～1.3m程度の大きさを持ち、深さは0.2～0.3m程度のものが多い。

埋土中に礫を含んだもの（SK01・68・78）があるが、土坑底や壁面に並べて石室状に構成されたものはない。一長辺に偏して配したもの（SK13・76）があるが、ほとんどが崩れており、礫を投入して埋めている。

赤褐色の焼土で覆われたもの（SK02）や、埋土中に炭を含んだもの（SK77・78・28・33）が存在する。このうちSK77・78では炭はまばらに含まれているが、炭が比較的多く含まれるSK28・33は小型円形のものである。埋土中にベースブロックや耕土を含むものも少なくないが、堆積はレンズ状を呈している。壁面は真っ直ぐ立ち上がるものよりは緩やかに立ち上がるものが多い。

出土遺物はほとんどないが、SK01からは鉄釘M19、SK10からは軒平瓦212や19世紀に入る瀬戸磁器片

が出土している。SK11からは土人形209、SK12からは明青花の碗もしくは皿210と色絵の陶器埦211、SK14からは瓦質土器213、SK78からは18世紀末以降の丹波焼擂鉢（214・215）が出土している。また、SK68からは銅鈴M8が出土している。

少し南側に距離を置いてSK68･69やSK38・39が検出された。

SK68は2.25×2.0mの不整隅丸方形を呈した土坑で、0.3mの深さをもつ。埋土下層では、短辺の中央付近に礫が集中する。SK69は1.9×1.5mの楕円形の平面系をもち、深さは0.2mの土坑である。

SK38は1.4×2.0m以上の隅丸長方形の土坑で、0.5mの深さをもつ。SK39は2.2×2.1m、深さ0.23mの隅丸方形の土坑である。SK38 ・39の周辺は空閑地状となる。

これらの中央地区に集中する土坑群は近世後半以降のものであり、墓址の可能性は低いものと考えるが、その性格は不明である。出土遺物には16・17世紀代のものも見られるが、多くは18世紀後半以降のものである。

中央地区南半の東よりでは大型の土坑が検出された。

SK70（図版12・26、写真図版36）

下段部への段により東端が失われるが、南北3.8mの方形の平面形を有し、深さが0.5mを測るもので、多くの礫とともに染付磁器等（216～218）、近世瓦片や釘（M15・16）が出土した。

SK65（図版12・28、写真図版37）

方形の土坑が2基鍵形に配されたような平面形態をもつSK65は南北7.7m、東西5.3m、深さは0.9mの規模をもつ。埋土には腐植層が確認できる。鉄製鋤先片M20や木製板材W76、三田青磁皿222が出土している。近世以降のものである。

SK64（図版12・28、写真図版37）

集石土坑SK64はSK65に一部切られており、直径15㎝ほどの礫を充填している。これは近接したSK43に類似しているが両者の先後関係は不明である。皿状に0.3mの深さをもち、東西の大きさは5.8mを測る。平面形は不整な楕円形である。明青花碗220やコンニャク印判手染付磁器碗221が出土している。

SK43（図版12・27、写真図版38）

集石土坑SK43は、南側を走るSD174と平行に走る東西方向に長い土坑である。東西長10m、幅1.3m、深さ0.25mの溝状を呈しており、埋土中には直径が30㎝までの円礫が充填されている。礫は西半部がやや大きい傾向があるが、東半部でも一部大きなものが含まれる。土師器炮烙・丹波焼擂鉢、染付磁器皿など（223～227）が出土している。

SK58（図版12・27、写真図版38）

SK58はSK43上から切り込んでいる。東西方向に長軸をおく東西1.0m、南北0.55m、深さ0.1m弱の土坑で、埋土には炭粒や焼土塊が多く含まれ、中層に炭の薄層が挟まれていた。

SD174・59（図版12・28、写真図版39）

集石土坑SK43の長軸方向に平行して、ほぼ東西に走る溝を検出した。この位置も西の山から続く谷地形となっている。溝の東端は下段へ向かう落ちで失われている。SD174は幅0.8～1.2m、深さは0.3m程度で、北岸には石列が並べられており、現状では2段程度の石垣となる。これは溝の護岸であろう。この石列を除去すると、東半部の下層からSD59が検出された。位置関係からSD174はSD59を踏襲して設けられたものと考えられる。SD174からは完形の白磁小碗228が出土した。下層のSD59からは明青花碗229が出土した。この溝をもって中央地区と南地区との境界としている。

４．南地区及び南西地区の遺構

南地区の内、上段の南半部は旧の大歳神社境内となっており、そこに包括される南西地区は大歳神社境内の調査に含めて報告する。

大歳神社境内外の調査

上段南地区の内、北半は有野川に向かって形成された扇状地にあたり、有野川に流れ込む谷（もしくは旧河道）と中州の礫層の頭が出現している。調査前の現況はいちご畑（ビニールハウス）跡地である。ここからは谷部を埋め立てた跡SX1007や方形石組水溜遺構SX1040・1041、畠跡、埋桶遺構、埋甕遺構、不整形土坑群、また調査区北西隅からはピット群などが見つかった。

くぼ地埋め立遺構（SX1007）（図版29・30・32、写真図版44・45）

2014年度・2015年度の調査区を跨ぐ形で、東西幅13.5m・全長13.5m以上、深さ約70㎝の大きさで池状のくぼ地を検出した。2014年度に調査した南半部では、くぼ地の形は2段に落ちた不整な半円形を呈しているが、2015年度調査の北半部では不整な長方形を呈している。

元々は有野川に流れ込む谷（旧河道）であった所が徐々に埋まり、17世紀に入る頃には池状の凹みとなって残っていたと考えられる。しかし、SX1007南肩では人頭大の河原石が一部に敷かれおり、加えてくぼ地から東側へ幅約２ｍの溝（SD1003）が流れ出ている。また、北肩は区画溝と思われるSD174に並行して直線的になっており、くぼ地には人為的な改変が加えられている。

くぼ地は多量の土砂で埋められており、土砂の中から丹波焼擂鉢237～240や唐津焼皿244・245・247、明青花皿片248など16世紀後半から17世紀初頭の土器（233～240・243～245・247～249）が出土している。このことから、くぼ地は概ね17世紀前半代には埋め立てられたと推測できるが、最上層にあたるSX1007石敷き部分や北半部上層からは17世紀後半に下る丹波焼擂鉢241・242・甕246が出土している。くぼみは17世紀代を通じて解消されていったものと考えられる。

不整形土坑

SK71（図版29・30、写真図版45）

SX1007の上面や周辺からは、後述する埋桶・埋甕遺構群とともに隅丸長方形土坑SK71が検出されている。長辺約3.1m・短辺1.8m・深さ0.16mを測る、浅い皿状の土坑である。土坑底付近には炭・灰を多量に含み、土師器小皿232・寛永通寶M2や鉄釘M17が出土している。性格は不明である。

SK932（図版29・30、写真図版39）

SK932は上段南地区の北端で検出された土坑で、上段から下段にかけての斜面に位置する。長径2.85m、短径1.65mの歪な楕円形を呈しており、丹波焼甕231、鉄釘M18が出土した

埋甕・埋桶遺構群

SX1007・SD1003の東端を切り込んでSX1001・1004、その南隣よりSX1006を検出した。南北方向に一列に並んでおり、SX1001は丹波焼甕を、SX1004・1006は桶を埋め置いていた。これらは畠作に伴う水溜の可能性が高いが、SX1001・1006は人頭大の石が多数落ち込み、SX1001では刃物（包丁）を伴うことから、この２基については上部の石組が落ち込んだ土葬墓の可能性も残る。

SK75・72はSX1007の東肩を掘り込んで南北に並んで営まれている。このためSX1007の北東隅の本来の形状は不明である。SK72は底板材を土坑底に置き石積を巡らせた水溜遺構、SK75は埋桶遺構である。

SX1001（図版29・33、写真図版46）

長軸約1.7m・幅約1.3m・深さ約70cmの卵形の土坑に、腹径60cmの丹波焼甕を据えている。甕の上半は内部に崩れ落ち、更に人頭大の石が多数内部に落ち込んでいる。

遺物は、上部から鉄製品（包丁）M21、内部から18世紀代の肥前系染付磁器碗が出土した。SD1003と切り合い新しい。

SX1004（図版29・33、写真図版46）

長軸約1.8m・幅約1.4m・深さ約55cmの小判形の土坑に、径90cm前後の桶を据えている。SD1003と切り合い新しい。

SX1006（図版29・33、写真図版46）

長軸約1.3m・幅約1.１m・深さ約68cmの小判形の土坑掘方に、径80cm前後の桶SX1006を据えている。人頭大の石が多数内部に落ち込んでいる。

SK75（図版29・30、写真図版45）

SX1007の東端部で一旦浅くなった位置で検出された。径1m前後の掘方に桶を据えている。残存深度は浅い。桶の底板が良好に残存していた。

SK72（図版29・30、写真図版45）

SX1007の東端部で一旦浅くなった位置で検出された。埋桶SK75と並ぶように検出されたが、前後関係は不明である。長軸約1.3m・幅約1.1m・深さ約50cmの土坑に径20～30cmの亜円礫を3～4段積んでいる。土坑底には桶の底板を敷いており、溜井として利用したものであろう。燻し瓦230が出土している。

方形石組遺構

SX1040（図版29・36、写真図版47）

SX1041の南東に位置する水溜と考えられる石組土坑である。長軸約3.05m・短軸2.20mの不整な隅丸方形の掘方に内法長辺1.90m・短辺1.05m、深さ約40cmの方形石組を造っている。径30cm～50cmの石を横積みしており、２～３段の石積みを残している。

土坑内の上半は石材によって埋められており、下半には腐植質粘土が堆積する。粘土内より軟質施釉陶器（灯火具－ひょうそく）259が出土した。近世後半、19世紀代に機能していた水溜遺構と考えられる。

SX1041（図版29・35、写真図版47）

SX1040の北西に位置する水溜と考えられる方形石組土坑である。内法南北長6.8m・東西長6.1m以上、深さ約50cmの規模で検出した。西壁は調査区外にある。石組の各壁は主に径30cm～40cmの石材を２～３段に積んで構築している。土坑内は山土によって人為的に埋められており、直上に現耕土が被覆する。間に自然堆積土は認められなかった。埋土内より古代の須恵器片が出土している。

遺構の時期は不明であるが、埋積状況と19世紀代以降に積まれた大歳神社の北石垣と向きを同じくすることを勘案すると、近代に下る可能性がある。

土坑SK1039（図版29、写真図版47）

SX1040とSX1055の間に位置する全長5m・幅1.8m前後の瓢箪形の土坑である。東半に集石をもつ。

土坑内から土師器小皿262・肥前系染付磁器碗263が出土しており、18世紀代の遺構と考えられる。

畠跡（図版30、写真図版48）

北半部東端にて検出した。調査区壁際に変色部を検出しており、これらの灰褐色土は、耕作土壌の様相を呈している。層序から推して近世の畠と考えられ、近接する埋甕・埋桶遺構群とセットになるものととらえられる。

不整形土坑群（SX1013～SX1016）（図版29・33、写真図版48）

畠跡の下層から楕円形あるいは隅丸方形状の土坑が検出されている。これらは上半部を畠耕作によって撹拌され、崩されているため詳細は明らかではない。SX1013からは土師器小皿・丹波焼鉢・須恵器底部・古瀬戸四耳壺片が出土しており鎌倉時代に遡る遺構と捉えられる。規模は概ね全長１ｍ前後、幅80㎝前後、深さ10㎝前後である。

ピット群（図版29、写真図版43）

上段南地区北西端においてピット10基を検出した。1基は土層断面にかかり、SX1007の埋土を切っていることから17世紀以降の時期である。性格は不明である。

大歳神社境内の調査（図版31、写真図版49～54）

上段南地区及び南西地区の内、南半部は山裾の微高地上にあたり、前述したように旧大歳神社参道の一部と拝殿前面の広場、拝殿・本殿が対象地である。調査前、広場には空閑地と戦後に建てられた木造の社務所兼倉庫が存在していた。2014年度に参道と拝殿前の境内、2015年度に拝殿と本殿及びその背後部分の調査を行った。

拝殿前の境内からは、近世の大歳神社境内地を限る北側の石垣SX1055と、近世の社殿敷地（本殿・拝殿など神社建物が建つ境内内の敷地）と参道・鳥居部分との間を限る大きな段落ちを検出した。また、拝殿前の敷地上からは、旧社殿基礎の一部SF1053や風倒木跡SX1036・1037、ピット群などを検出した。

これに対し、拝殿・本殿及び背後部分の遺構は少なく、土坑SK2001～2004・P2001～2003及び尾根斜面をカットした境内の造成跡を検出した。SK2001・2003・2004では河原石を内部に配した状況が観察できたが、SK2002から出土した瓦が示すように、全て近世に属する遺構である。

検出した境内の規模は、東西約23.5m・南北21.5m以上を測り、更に参道部分が取りついている。境内は火災にあっており、後述するSF1053や火事片付けに伴う土坑からは炭や被熱した碍子、鉄釘などが出土している。また、境内の東側には鳥居と有野川側からの参道が伸びているが、取りつき部分以外は調査対象とはならなかった。境内と参道の間には約1.4mの高低差があり、現況では石段が取りついていた。この落差を埋め立てた盛土の底からは、磁器碗295が出土している。北側の石垣（SX1055）前面の盛土と共に、幕末以降に造成を行い、境内を拡張していったと考えられる。

建物基礎（SF1053）（図版29・31・34、写真図版49・50）

社殿敷地上より逆F字状に並べられた石列とその間隙を埋める石敷きを検出した。

石列は南北長9m以上、東西長2.5m以上の規模を持つ。長さ30～40㎝、幅20～30㎝、厚み15㎝程度の石材を一列に並べている。

SF1053は、その形状から建物の基礎であったと推測される。特に北半部は石敷きを伴っており、重量物に耐えられる土蔵などの性格をもった建物の存在が考えられる。この基礎は火災にあっており、出土した磁器碗と地元の方に記憶がないところをから推して、戦前もしくは戦後直ぐに焼失した可能性が高い。『有馬郡誌』には大歳神社に土蔵が存在した記載があり、対応する可能性がある。

風倒木跡（SX1036・1037）（図版29・31・34、写真図版50）

建物基礎の西側に南北長約4.5m・東西長約2.5m・幅約１mを測る、『く』の字状の土坑を検出した。土坑は薬研状に落ち窪み、大きく２ヶ所の窪みとなっている。SX1036部分は約１m、SX1037は約80㎝の深さを持つ。

土坑内からは、平安時代中期の須恵器壺底部、土師器坏片が出土している。

土坑の形状、地山ブロックを含んだ埋土の状況から、SX1036・1037は風倒木の跡と考えられ、樹木の根が平安時代中期の遺物を巻き込んだものと考えられる。

境内の北辺を区画する石垣（SX1055）（図版29・31、写真図版49）

東西延長約10.5mに亘って石垣を検出した。石垣は径30㎝前後の石を横積みしていた。基底部の１段から２段を残して崩落しているが、部分的に４段残存しており、更に社殿敷地上と石垣下との間に60mの落差があることから、当初は少なくとも4段の石積みを持った石垣と判断できる。SX1040と並行することから近世後半に築かれた可能性が高い。この石垣は境内の拡張によって埋没し、約４m北側に近代以降の新たな石垣が造られている。

社殿敷地の東辺を区画する段落ち（図版31、写真図版49）

建物基礎（SF1053）の前面（東側）において、社殿と参道・鳥居との間を限る大きな段落ちを検出した。南北方向の延長約15m、その比高差は約1.4mを測る。

社殿の敷地は東側へ張り出す微高地上に立地しており、参道・鳥居のある境内は谷地形（旧河道）にあたる。旧地形の高低差を利用して、石垣SX1055と共に方形の社殿敷地を造り出していたと考えられる。

段落ちの底からは19世紀代の遺物が出土しており、近世後期に敷地が整備された可能性が高い。また、19世紀から現代に至るまで、境内の拡張に伴い数次の盛り土が行われ、段差が解消されていったことが判明した。

ピット群（図版31）

上段南地区南東端と南西端に、径５～30㎝のピットを検出した。建物跡として復元はできない。

境内背後の造成

本殿背後に尾根斜面をカットした段落ちを検出した。標高178.5mから177.1mにかけて約20°の急傾斜にカットし、境内の平坦面を造りだしている。カット部分のうち、西側に向けて凸部となっている場所は本殿が張り出していた部分と考えられる。また、裾部には溝を巡らせていた可能性がある。

第4章　遺　物

第1節　土　器

1．下段出土土器

出土した遺物は、土器・木製品・石製品・金属製品に分けて掲載している。土器は上段と下段で遺構の性格・時期が異なることから、下段・上段の順に記載し、下段では屋敷地割を示すと思われる溝から、井戸、土坑、埋桶、埋甕と出土した遺構の種別毎に述べている。大歳神社旧境内にあたる南西地区出土の遺物は南地区のものに含めて報告する。

流路・溝

①　SR400（図版37・38、写真図版55～60）

下段を南北に貫いて走るSR400からは多くの遺物が出土したが、部分的には近世に入っても溝として使用され、また近世以降の土坑や水溜遺構によって切り込まれていた。このため新しい時期の遺物も含まれている。土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・陶器・磁器が出土した。

土師器

2～5は皿である。2・3は、平底に外反する口縁部を持つ。4・5は手づくねで作られ、ユビオサエを残した底部から内湾気味に立ち上がる口縁部が続く。

6はあまり肩の張らない体部から緩やかに屈曲して開く口縁部をもつ堝である。体部外面には横方向に平行なタタキを残し、内面は同心円状の当て具痕を残して横方向のハケによって仕上げる。口縁端部と外面はナデによって仕上げている。

7も堝口縁部である。横方向の平行タタキ目を外面に残し、ナデによって仕上げている。

黒色土器

8は黒色土器底部で埦と思われる。糸切り痕をもつ低い平高台から開く体部に至る。内面は黒く、暗文状のヘラミガキが一部見える。

瓦器

9は低い輪高台を貼り付けた埦の底部と思われ、内面には暗文が施されている。

須恵器

10は口縁端部を欠くが坏B蓋である。埋土下層から出土した。宝珠形の扁平なつまみから水平に開き、緩やかに下る。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデの後、一方向の仕上げナデを施す。

11は坏Aである。底部は回転ヘラ切り後、ナデを施す。

12・13は坏Bとするが、厚手である。回転ヘラ切りの底部に輪高台を貼り付け、強くナデる。内面には仕上げナデが見られる。坏A・B・同蓋は北地区から出土している。

14～30は埦である。回転糸切りの底部に丸く収めた口縁部を有するもので、底部内面には一方向の仕上げナデを施すものが多く、多方向のナデのものも見られる。口縁端部には重ね焼きの痕跡を残す。内湾気味に立ち上がるものと、直線的に開くものがあり、後者には器高の低いものも見られる。14・15のように平高台状に突出し、内面中央が窪むものも見られる。

29の外面下部には「ʊ」状の記号の墨書が描かれており、内面にも使用により摩滅した痕跡が見られ

る。30の底部外面にも「ト」状の墨書が見られる。

日下部遺跡の西、八多川流域では小名田窯跡が調査されており、埦・皿を中心とした須恵器を焼成しており、SR400出土須恵器埦に類似している。同窯跡は12世紀後半～13世紀前半に操業されたとする。

31は小皿である。やや瓦質様に焼成されている。糸切り底部から内湾気味に短く立ち上がる。

32～35は鉢である。32は内湾した体部から外反する口縁部をもつもので、片口が付く。内面には自然釉が付着する。神出古窯跡群森内編年の鉢Dにあたり、11世紀の古段階に相当する。

33・34は東播系須恵器捏鉢で、口縁部を上方に肥厚させ、端面が外側に傾斜するもので、33の内面は摩滅しており、よく使用されている。14世紀後半～15世紀前半にかけてのものである。34は底部屈曲部外面に高台が剥がれた痕跡が残る。口縁端部は四角く、上に少し摘み上げられる。12世紀後半～13世紀後半にかけてのもので、小名田窯跡と時期が重なる。

35は欠損するが、高台を有する片口捏鉢であるが、緻密で硬質な胎土・焼成は丹波焼に近い。直線的に広がる体部から上端部を少し摘み出した片尖りの口縁部に続く。内面は不定方向の仕上げナデを残すが、よく使用されている。

36・37は短く屈曲して広がる甕口縁部である。口縁端部は外側に面をもち、上面を窪ませている。37の肩部外面には平行タタキ目が残る。

陶器

38・39は、ベトナム製或いは中国南方産のものと思われる。38は無釉陶器壺である。底部を欠くが、細く直立気味に開く体部には轆轤目を残し、体部上半から緩やかな肩部には3条の沈線を巡らせる。直立する口縁部は一旦内湾気味に内側に曲げた後、外側に折り返すことで丸く肥厚させる。折り返し部分にも沈線を巡らせる。胎土はしっとりと層状をなし、外面は備前焼風に焼成されるが、内面は須恵質の焼締陶器長胴壺になる。大阪府堺環濠都市遺跡屋敷地の塼列建物（茶室遺構）では、切溜花生として用いられ、近隣では三田城跡で16世紀後葉～17世紀初頭頃のベトナム製陶器として報告されているものに類似する。

39は小判形の平面形をもつ器高の低い盤で、短く立ち上がって内傾する口縁部へ続く。口縁部の四隅を内側に窪ませて隅入角皿風とする。未調整の底面は上げ底気味となり、周囲を面取り状に粗く削って立ち上がりとする。短辺の側面に円形浮文を水平方向に貼り付ける。赤褐色の土部様の釉薬を掛けた後、白泥様の釉薬を掛けているため、底面の同心円状の溝に白く溜まる。近世以降の丹波焼の可能性もあるが、類例を見ないためベトナム製陶器とする。茶の湯における建水として用いられたものか。

40～42は丹波焼擂鉢である。直線的に開く体部の内面に篦一本引きの擂目を引く。40・41の口縁部は丸く作り、外面を１条浅く窪ませ、内面にも小段や窪みを作る。42の口縁部は横方向にヘラを当てて尖らせ気味に収める。端部に煤が付着している。16世紀後半～17世紀中頃にかけてのものである。

43はSR400西肩の攪乱から出土している。陶器皿で、底部を欠く。内面に段を有して開き、口縁部はさらに水平に開く。端部は丸く収め、上面が窪む溝縁口縁となる。灰白色釉を掛けるが、外面下半は露胎で、回転ケズリを施す。唐津焼溝縁皿である。

44は陶器皿で、低い高台から開き、やや内湾した後小さく屈曲して直線的に開く口縁部へと続く。白灰色の釉薬を掛け、内面外周に鉄釉で文様を描く。外面下半は露胎で、底面も含めて回転ヘラケズリが見られる。高台裏は使用のためかよく摩滅している。絵唐津折縁皿である。

45は低い高台から外反気味に開く皿で、全体に灰白色の釉薬が掛かる。口縁部は16弁の輪花に作る。軟質系のさっくりした胎土であることから美濃焼かと思われる。

46は低い高台から内湾して開く皿で、灰白色の釉薬を掛けており、高台裏中央のみ露胎でケズリがみられる。さっくりした胎土で、釉薬の貫入が目立つ。志野焼（御深井手）と思われる。

磁器

47・48は白磁碗で、玉縁の口縁部を有する。

49は最下層出土の青磁碗底部で、直立した高台を持ち、器壁は厚い。高台内側と底部内面は露胎である。外面にはわずかに蓮弁文の一部が見られる。

50は青花碗である。細く直立した高台を有し、高台畳付のみ釉薬を削り取って露胎とする。外面には草花文、内面には渦巻状に円弧を４重ね、周囲を草花文で囲む文様を描く。景徳鎮民窯か。淡河・萩原城遺跡から類例が出土している。

SR400からは他に、301～309の土師器、瓦質土器、須恵器、青磁、白磁、陶器が出土している。

② SR415（図版38、写真図版60・61）

SR415は下段北地区の北端を東西に横切る流路で、この流路以北では遺構・遺物が激減することから、この屋敷割の北限となる遺構である。山から染み出す湧水に近世になって掘削されたと思われる。

土師器

51・52は手づくねで作られた皿である。口径6.7cmの小型の51は口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として用いられている。復元口径8.9cmの52は口縁部外面にユビオサエを残しており、内面はナデによって仕上げる。

53は炮烙である。広く薄い底部から直角に立ち上がり、口縁部へ続く。全面ナデ・ヨコナデによって仕上げており、外面には煤が付着する。18世紀後半のものか。

陶器

54・55は丹波焼擂鉢である。54は底部を欠くが、直線的に広がる体部に四角く収めた口縁部が続く。内面の口縁部直下に段を巡らせ、9本単位の櫛描き擂目を引き、下半は摩滅している。外面は露胎のままであるが、内面には赤土部を施す。17世紀前半に属する。55は底部外縁に高台を貼り付け、直線的に広がる体部から屈曲して上方に延びる口縁部に続き、口縁部外面は２条の凹線状の窪みを巡らせ、端部上面も窪ませる。内面には6本単位の櫛描き擂目を引き、底面には同心円状に入れる。底面付近はよく磨り減っている。外面には赤土部を塗布している。底部外面の一部には砂が付着しており、高台裏は平滑に磨り減っている。18世紀後半頃のものか。

56は唐津焼埦で、低い削り出し高台から内湾して口縁部に至る。口縁端部は丸く収める。黄色系の釉薬を掛けており、下半部は露胎となる。17世紀代。

57は丹波焼甕である。SR415の北岸斜面から傾いた状態で出土したため、ここに掲載したが、単独の埋甕（SK940）と捉える方が良い。肩の張った器高の低い器形で、体部上半と口縁端部に凹線状の条線を巡らせ、肩の２ヵ所には５花の不遊環浮文を貼り付ける。外面には土部を掛けている。体部内面に墨書で円を描いている。17世紀中葉～後葉。

写真のみ掲載した310・311の陶器も出土している。

③ SD114（図版38、写真図版61）

SD114は南地区で検出された東西方向の溝である。58は須恵器埦で、内湾して立ち上がる体部から丸くヨコナデで収める口縁部へと続く。SR400出土の須恵器とほぼ同時期のものである。

④ SD94（図版38、写真図版61）

SD94は南地区でSR400埋没後に西肩に重複するように設けられた南北方向の溝で、一部に石組を伴

う。59は施釉陶器皿で、瀬戸美濃焼である。低い高台から外反して広がる口縁部へと続く。褐色の天目釉を浸け掛けし、外面下半は露胎である。内面には目跡が残る。

井戸・石組土坑・土坑

⑤　SE416（図版39、写真図版62）

SE416は先述のSR415の西端に設けられた方形の石組溜井である。土師器・陶器・磁器が出土した。

土師器

土師器皿が出土している。60は口径7.1cm、器高1.6cmを復元する手づくねの小皿である。61は口径10.2cm、器高1.9cmを復元する手づくねの皿で、底部を含めて３段にわたってユビオサエとナデを施す。口縁端部には煤が付着する。

陶器

丹波焼擂鉢が出土している。62はユビオサエを残して直線的に外に広がる体部から、外に面を持ち断面三角形状に広げる口縁部へと続く。内面には7本単位の櫛描きの擂目が施される。外面下半は二次焼成を受けたように黒くなる。

63・64は施釉陶器埦である。削り出し高台から丸く内湾する体部へと続く。63は黒色の天目釉を掛ける。64は白透明の釉薬を浸け掛けしている。64の高台中央には楕円形の印が押される。京焼系か。

磁器

65は染付磁器皿である。低い高台から丸く広がる体部を持つ。全面に施釉し、高台畳付は露胎で、砂が付着する。体部内面には２条の圏線内に線描きの文様を連ね、見込みには草花文を施す。

66は染付磁器碗である。直立する高台から内湾して立ち上がる体部へと続く。全面に釉を掛け、高台畳付は露胎で、砂が付着し、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎとし、砂が付着する。外面の高台横に２条、底部に1条の圏線を巡らせ、体部には雪輪草花文を描く。波佐見窯のくらわんか手である。

写真を掲載した312・313の染付磁器も出土している。

⑥　SK465（図版39、写真図版62）

SK465は北地区で検出された小型の方形石組土坑で、施釉陶器が出土した。

67は絵唐津皿である。低い高台から直線的に開き、一旦わずかに屈曲してさらに広がる口縁部へと続く。外面下半部をケズリで成形し、内面から外面上半部に緑灰色の釉薬を施釉する。口縁部内面に斜め放射状に2本の線を5組描き、見込みにも2本の平行線を偏った位置に描く。内面には焼成時の灰被りが見られる。17世紀前半に属する完形の折縁皿である。

68は低く太い高台を削り出し、内湾した体部へと続く天目埦である。内外に浅黄色の釉薬を浸け掛けし、底部外面は露胎である。17世紀前半の唐津焼である。

314の陶器盤も出土している。16世紀後半頃の備前焼或いは丹波焼と思われる。

⑦　SK608（図版39、写真図版63）

北地区で検出された石組を有する大型の方形土坑で、多くの土器や木製品が出土しているが、円形の土坑などが切り合っているため、遺物の一括性に乏しい。69～74の土師器・陶器が出土した。

土師器

69はやや硬質に焼成された堝で、なで肩の体部から外反して直立する口縁部に続き、端部は丸く肥厚させる。肩部外面には横方向に平行するタタキ目が残り、内面にも当て具状の円形の痕跡が残る。15世紀中頃に属するものである。

70は炮烙である。内湾する体部外面には斜め方向のタタキ目が残り、下半はヘラケズリを施して薄く作る。内面にはユビオサエが残る。煤が付着する。17世紀中葉～後半頃のものであろう。

71は口径33.5cmを復元する大型の羽釜である。直線的に立ち上がる口縁部は端部を内側に摘み出している。外面には凹線状の段を巡らせ、斜め上に湾曲する鍔を貼り付けている。内面には非常に細かいハケメ状の布ナデで仕上げている。内面に煤が付着する。15世紀代のものか。

陶器

72は丹波焼擂鉢で、小さな片口を有する。平底からユビオサエを残して直線的に広がる体部に続き、口縁部は内面に段を有する。5本単位の粗い櫛による擂目を施し、見込みには4回櫛を重ねる。内面は使用により著しく磨り減っており、底部外面も平滑になっている。土部を掛けている。17世紀前半～後葉のもの。

73は口径49.8cmを復元する大型の丹波焼盤で、板ナデを施した底部から大きく開いた体部へと続き、如意状に屈曲して口縁部は丸く収める。口縁部上面に沈線状の窪みを巡らせる。土部を掛けている。

74は唐津焼皿である。削り出した低い高台から大きく開く体部へと続き、少し下方に曲げて端部を作る。灰釉を掛けるが、底部外面は露胎で、高台畳付に砂が付着する。内面見込みにも重ね焼きの痕跡が残る。17世紀前半の溝縁皿。

⑧　SK510（図版39、写真図版63）

SK510は北地区SK608の北西に付随する土坑で、両土坑からは同じ作りの漆器大皿が出土した。

75は瓦器埦底部で、低い高台が付く。内面には暗文が見られ、外面高台内に墨書が書かれる。

⑨　SK404（図版39、写真図版63）

北地区のSR400埋没後に掘られた不整形の土坑で、土師器皿76が出土した。76は手づくねの小皿でやや上げ底の底部から斜めに広がる体部をもつ。写真を掲載した316の土師器も出土している。

⑩　SK578（図版39、写真図版64）

同じく北地区のSR400埋没後に掘削された土坑から瓦器埦77が出土している。77は低い扁平な高台を持ち、内湾気味に立ち上がる体部へと続く。

⑪　SK621（図版39、写真図版63・64）

北地区南東部で検出された楕円形の比較的大きな土坑で、土師器皿・炮烙が出土した。78・79は手づくねの小皿で、ナデによって仕上げる。

80・81は炮烙で、皿状に湾曲する底部からやや内湾気味に立ち上がる体部に続く。80では口縁部直下に強くナデを施し、端部は外側に少し肥厚させて丸く収めている。81では内側に肥厚させる。底部は不定方向にケズリのように板ナデを施している。

この他に318・319の軒瓦が出土している。

⑫　SK503（図版39、写真図版65）

北地区中央で検出された礫を投入した大型の円形土坑で、施釉陶器皿82が出土した。削り出した低く四角い高台から大きく開き、一旦屈曲して更に広がる体部へと続く。灰釉を掛け、底部外面は露胎である。内面見込みには砂目が残る。高台底面にも3ヶ所砂目積みの跡が残る。17世紀前半の唐津焼折縁皿である。

⑬　SK908（図版40、写真図版65）

中央地区の上段裾で検出された不整形の浅い土坑で、SR400の一部の可能性がある。瓦質土器の羽釜83が出土した。83は小型の羽釜口縁部で、内湾気味に直立する口縁部の外面に口縁端部直下から断面三

角形の鍔を貼り付け、ナデによって仕上げる。体部外面は横方向のヘラケズリ、口縁部内面には横方向のハケメを施す。鍔の下部に煤が付着する。

⑭　SK575（図版40、写真図版65）

北地区東端で検出された長方形の土坑で、陶器擂鉢84が出土した。84は丹波焼擂鉢で片口を持ち、ヘラ描きの擂目を引いている。平底から内湾して開く体部、断面三角形の口縁部へ続く。写真を掲載した321・322の備前焼甕破片も出土している。備前焼の出土は今回の調査では稀である。

⑭　SK449（図版40、写真図版65）

SK449は北地区中央で検出された埋桶である。施釉陶器85が出土した。85は丹波焼ひさご形壺で、外面に褐色の釉薬を掛け、黒色の釉薬で文様を描いている。17世紀後半～18世紀前半のものとされる。

⑮　SE189（図版40、写真図版65）

SE189は南地区東端で検出された円形の土坑で、86の磁器が出土した。86は染付磁器碗で、高台から丸く開いた後、わずかに開いて直線的に立ち上がる体部をもつ。高台畳付は露胎で、砂が付着する。外面には圏線上部に山水図が描かれ、口縁部直下にも圏線、高台には2条の圏線を巡らせる。高台内には「太明」を書く。

柱穴

⑯　SP720（図版40、写真図版65）

中央地区SR400東肩で検出された小型の柱穴で、青磁碗87が出土した。87は青磁碗底部で、削り出された高台から丸く広がる。厚い底部の外面は露胎で、見込みには草花文が彫られる。

埋甕

⑰　SK739（図版40、写真図版65）

中央地区北端部のSR400分岐部に設置された埋甕で、88の陶器が用いられていた。内部から89の磁器が出土した。88は丹波焼で、口縁部を欠くが、現存高51.1cm、最大径57.6cmの大甕である。ヘラ切り後ナデで仕上げた底部から指頭圧痕を残して粘土紐を積み上げており、継ぎ目には粘土を追加して成形している。内外を回転ナデで仕上げた後、赤土部を塗っており、内面にはハケを用いて塗った痕跡を残す。

89は磁器鬢盥（びんだらい）である。小判形の底部のみ残存しており、内外露胎であるが、体部外面には釉薬が見られる。内面の周縁を粗く引掻いて、体部との接合に備えている。底部外面には細かい布目が残る。一端には側面から底面に抜ける穿孔が見られる。墨書が書かれるが、判読できない。

⑱　SK435（図版41、写真図版66）

北地区中央で検出された埋甕である。90は比較的薄い底部からユビオサエを残して立ち上がり、肩部に最大径をもつ。屈曲した後、内湾して上方に立つ口縁部は外面に凹線状の段を連ね、四角く収める。18世紀後半頃の大谷焼と思われる。内面には一部タタキ様の痕跡を残してナデで仕上げ、外面は回転ナデで仕上げる。砂粒の多い胎土で硬質に焼成される。器高62.8㎝、口径48.2㎝を復元する。

埋桶

⑲　SK736（図版41、写真図版66）

北地区と中央地区にかけて、SR400埋没後に設けられた埋桶内部から陶器大甕91や土師器皿92が出土

した。91は丹波焼大甕で、底部を欠く。直線的に広がる体部から、内湾して肩部を作り、口縁部を水平に拡張する。肩部には連続して凹線状の条線を巡らせ、不遊環状の摘みを貼り付ける。口縁上面にも凹線状の窪みを巡らせる。内外にはハケを用いて赤土部を塗布している。92は手づくねの皿で、口径10.8cm、器高1.9cmを復元する。ユビオサエを残して底部と体部の２段に作り、口縁端部はナデによって仕上げる。口縁端部外面の一部に煤コゲがのこり、口縁端部を除く内面全体が薄く黒くなっている。

遺物包含層（図版42、写真図版66・67）

93～101は下段遺物包含層出土の土器である。

93は北地区遺構検出中に出土した須恵器坏である。糸切り底部から内湾気味に広がる体部は埦状を呈している。

94～98は施釉陶器である。94は唐津焼丸形皿で、碁笥底を呈する削り出し高台は露胎で、内湾して広がる体部には灰釉を掛けている。内面には焼成時に土器片が付着した痕跡が放射状に見られる。16世紀代か。

95は高台部を失うが、口縁部直下が括れる天目茶埦の形態を有する。器表面の釉薬が未焼成の状態で、未製品或いは生焼けのものかもしれない。

96は唐津焼溝縁皿である。削り出した三日月高台は露胎で、体部は大きく広がり、外反する口縁部は上方に摘み上げている。内面見込みには段が付き、砂目跡が残る。白色透明な釉薬を掛ける。17世紀前半頃か。

97はひさご形壺で、外面に褐色の釉を掛けている。内面は露胎のままである。18世紀後半の丹波焼か。

98は小判形の器形をもつ鬢盥で、黄褐色の釉を施し、底部側面のみ露胎である。

99は丹波焼盤或いは鉢で、貼り付け高台から内湾して広がる体部、丸く内側に肥厚させる口縁部へと続く。高台内側を除いた内外面に赤土部を塗布し、自然釉の灰被りが見られる。

100は唐津焼皿である。削り出した低い碁笥底から大きく開き、一旦屈曲して更に広がる口縁部へと続く。灰釉を掛け、底部外面は露胎である。内面見込みには胎土目が残る。16世紀末～17世紀初頭のものと思われる。

101は北地区の攪乱内やSK608・503、南地区SD94から破片が出土した甕である。倒卵形の体部は外面にユビオサエを残しており、肩部の外面には縦方向の平行タタキ、同内面には円形の当て具痕が残るが、全面をヨコナデで仕上げている。屈曲して広がる口縁部は丸く収める。全体に赤土部を施しており、外面上半部には灰被りが観察できる。復元口径58.6㎝、残存高75.8㎝の大甕で、内面下半部に白褐色の付着物が見られる。明治期の砥部焼との教示を得た。調査区内の整地の時期を示すものであろう。

写真のみ掲載した375は北地区の上段裾で採集された窯壁或いは炉壁片である。スサ状の凹みや砂粒を含んでいる。10.3×10.5×0.8㎝の大きさで、一面のみが残存しており、一側面に残存面に直行する溝状の凹みが走る。この溝状を呈する痕跡が鞴の羽口の挿入孔であるなら、上段北地区のSK224から出土した羽口小片や中央地区のP339から出土したスラッグの小破片等とともに鍛冶遺構が存在していた可能性が高い。

２．上段出土土器

（１）北地区

本地区では、弥生時代末～古墳時代初頭、飛鳥～奈良時代、平安時代末～鎌倉時代、室町時代、江戸時代の土器・陶器・磁器が出土している。以下、それらを遺構別に述べる。

① SR218（図版43、写真図版68）

壺・甕・高坏・鉢・底部を図示した。

壺

102～104は広口または直口の壺である。102は接合の結果、口径13.6㎝、器高28.9㎝に復元できた。体部最大径はほぼ中央にあり、22.7㎝を測る。底部は少し突出した平底で径4.3㎝である。体部外面には右上がりのタタキ目が残り、下半にはヘラミガキを施している。底面には木葉痕が残る。

103は少し外反する口縁部で、端部は丸く収める。径12.2㎝。体部上半部分の破片で、残存最大径は20.0㎝である。器表が摩滅しているため、調整は不明である。

104は体部の破片であるが、丸みが強く扁平に近い形状から壺と判断した。体部最大径は23.4㎝で、体部には水平方向のタタキ目が下から上に施されている。底部は尖底気味の丸底で、ヘラケズリを施す。体部内面は板ナデ調整で、103とは形態的に似るが、胎土色調が異なり、同一個体ではない。

105は短い口縁部の壺破片で、口径11.8㎝である。端部は丸く収める。

106はいわゆるチョコレート色を呈し、胎土に角閃石を多く含む複合口縁の壺で、口径は26.4㎝を測る。口縁端部には面をもち、径１㎝程度の竹管円形浮文をやや疎らに配しており、その間隔は1.8㎝である。屈曲部外面の稜線部分にはやや斜め方向の刻目を密に施している。頸部は径15.4㎝で直立しており、外面はタテハケ調整である。残存高は9.9㎝を測る。讃岐または生駒西麓の胎土である。

甕

107・108はともに甕で、体部から「く」字形に屈曲して少し外反する口縁部をもつ。107は復元口径12.6㎝で、丸みが強い体部には右上がりのタタキ目を残す。108は復元口径13.5㎝で、107と同様端部は丸く収める。

高坏

109は高坏と思われる口縁部片である。有稜のもので、端部は丸く収め、復元口径22.5㎝を測る。複合口縁の壺口縁部の可能性も残す。

110は埦形坏部の高坏または台付鉢である。坏部は復元口径10.7㎝、深さ4.6㎝で、端部はやや尖り気味に丸く収め、内面はミガキに近い調整である。脚部は透孔が認められず、全体的に外反気味ではなく、やや歪である。脚端径は15.6㎝で、丸く収めている。坏部との境付近にはタテハケを残している。

鉢

111はやや大型の鉢で、復元口径は27.5㎝である。体部から外反して口縁部となるが、屈曲度は小さい。内外面は摩滅のため調整不明である。

底部

112～116は壺・甕あるいは鉢の底部である。112は外面のヘラミガキと体部へ開く角度から壺と思われる。ほとんど突出しない平底で、復元底径5.1㎝である。内面はヘラケズリに近い。113は底径5.5㎝で、底面中央がやや窪んでいる。調整は不明であるが、形態的に古い時期の可能性がある。114は復元底径4.6㎝で外面には右上がりのタタキ目を残している。甕と思われる。115は復元底径3.2㎝の小さな平

底から横外上方に開く体部であることから、壺と思われる。116の復元底径は5.2cmで、内面には板ナデが認められる。小片である。

SR218出土土器は、113を除き、体部や底部および調整の特徴から弥生時代後期末～古墳時代初頭に位置付けられる。113は弥生時代中期の可能性が高い。

② SD363（図版43、写真図版69）

図示したのは117の須恵器高坏１点である。

高坏

北部で出土した坏部片で、復元口径は10.2cm、残存高は3.6cmである。短脚のものと思われ、飛鳥時代と判断している。この溝からは飛鳥～奈良時代の坏Ｂ片も出土しているが、ほかに丹波焼鉢や近世磁器の破片も出土しており、溝の時期を飛鳥～奈良時代と断定するには無理があろう。

③ SK220（図版43、写真図版69）

図示した118の須恵器鉢以外に埦の破片多数と近世染付が出土している。

鉢

東播系須恵器の鉢である。口縁端部は尖り気味で垂直に近い面を残すが、下方に少し拡張している。復元口径30.0cm、残存高6.2cmで、使用痕は明瞭ではない。端部に釉が残る。13世紀代と思われる。

④ SK323（図版43、写真図版69）

図示した119の須恵器埦のみ出土している。

埦

復元口径16.1cm、器高5.5cmを測る。口縁端部は少し膨らみ、丸く収める。回転糸切りの底部は突出しない。13世紀のものと思われる。

⑤ SP313（図版43、写真図版69）

図示した120の瓦器埦の他には、柱痕・掘方から土師器の小片・細片が出土したのみである。

瓦器埦

底部の破片である。高台の断面は台形を呈するが、体部外面のヘラミガキは不明である。内面には横あるいはジグザグのような暗文を施している。底径は4.8cmで、12～13世紀のものと思われる。

⑥ SP335（掘立柱建物跡）（図版43、写真図版69）

121の須恵器鉢以外には柱穴上面から須恵器埦小片、柱痕からは土師器細片が出土している。

鉢

東播系の鉢である。口縁部の形態がやや異なるのは、歪のためである。復元口径35.8cm、残存高11.5cmで、内面下半には使用による摩滅が認められる。口縁端部に釉が残る。13～14世紀代と思われる。

図示できなかった須恵器埦小片も同時期のものであろう。

⑦ SK224（図版44・45、写真図版69～73）

本遺構からは須恵器埦をはじめ、須恵器鉢、土師器・須恵器の皿、堝、瓦器埦、青白磁など非常に多くの土器が出土した。遺構の性格は不明であるが、生活にかかわる土器であることから、掘立柱建物に関連して廃棄されたものと判断できよう。

埦

122～148の27点を図示した。口径は16.6cm～15.1cmで128が最も大きく、133が最も小さいが、16.0cm前後が最も多い。器高は5.05cm～4.15cmで、125・128がもっとも高く、146が最も低く、4.7cm前後が最も多くなっている。径高指数は31.4～25.3で140が最も大きく146が最小である。いずれも回転糸切りの底部

から内湾しながら外上方にのびて丸い端部の口縁部となるもので、ロクロ目を残すものも多い。

122～127は底部が若干突出するもので、径高指数も比較的大きくなっており、深みのある体部の観がある。径高指数が31程度のものがやや多い。128～139はやや深みのあるもので、径高指数が29～30程度のものであるが、底部は突出していない。体部と底部の境は丸みのある128～136と稜をもつ137～139があるが、径高指数等では分けられない。140～146は体部が浅い観があるもので、径高指数が27～28代のものが多く、これらのうち最も大きいのは140で31.4、最も小さい146は25.3である。底部の形態もさまざまである。

これらの埦は形態的には12世紀末頃～13世紀初頭頃のものとみられ、20～30年の時期幅をもっているようである。この時期に埦を焼いた窯のうち、本遺跡に最も近いのは小名田窯跡で、本遺跡から直線距離で約1.4㎞と至近距離にある。また、小名田窯跡から出土した埦の形態と本遺構出土のものとは細部の形態においても類似しており、小名田窯から供給された可能性がある。

鉢

149・150のうち、150の口縁端部は上方に引きのばすのみで肥厚させていないことから、神出古窯跡群の鉢Ｂ１あるいはＢ３にあたり、149は口縁端部を拡張させるものの、その度合いは少なく、神出古窯跡群の鉢Ｂ２類にあたる。150は森田氏編年の第Ⅱ期第１段階に相当し、12世紀中葉～後半の時期が与えられている。149は第Ⅱ期第２段階にあたり、12世紀末葉～13世紀初頭に位置付けられており、埦との年代的齟齬はほとんどない。なお、小名田窯跡では同形態の鉢は認められない。

149は復元口径27.6㎝、器高10.7㎝で体部内面は左斜め上方向のナデで仕上げられ、内面下半はよく使用され、表面が摩滅気味になっている。150は復元口径32.6㎝を測る。149・150ともに口縁端面には重ね焼きの痕跡が残っている。

小皿

151～167は土師器、168～170は須恵器である。土師器小皿の口径は最も小さい157の7.45㎝から167の8.7㎝まであるが、151～153・157・158のように7.45㎝～7.8㎝のものと、154～156・159～167のような8.1㎝～8.7㎝のものの二種があるようである。器高は151の1.9㎝が最も高く、166の1.2㎝が最も低い。形態的には151～156のように口縁部が底部から屈折ぎみに外上方に立ち上がるものと、157～167のようにあまり顕著でないものの二種があるようにみえる。

すべて手づくねで、152・164では底部外面に掌の痕跡が残り、152・158・159のように平面形が楕円形を呈するものがある。165の胎土は角閃石を多く含んで灰褐色を呈し、他のものとは異なっている。

須恵器小皿はすべてロクロによる成形で、底部は回転糸切りである。口径は7.65㎝～8.35㎝とばらつきがあるが、器高は1.35㎝～1.45㎝とほぼ揃っている。168は底部がやや突出するが、復元口径は8.0㎝で169・170の中間の値であり、形態と口径とは関係なさそうである。169の底部外端は丸みをもち、170では稜をもっている。須恵器小皿は埦の底部と同じ形態で、小名田窯跡でも出土していることから、同時期と判断できよう。なお、170は焼成が悪く、瓦質となっている。

堝

171～174の４点は土師器の堝である。播磨・丹波・北摂地域でみられるもので、内面に同心円文の当て具を当てながら体部外面を平行タタキで成形するものである。171は口径25.6㎝、残存高14.9㎝である。口縁端部を屈曲させながら少し外側に拡張しており、体部上半も丸みをもつことから、埦などよりも時期的にやや新しい可能性がある。13世紀後半～14世紀であろうか。復元口径26.8㎝の173も171に似た形態であり、端部の拡張程度と体部の丸みに若干の差があるものの、171とほぼ同時期と思われる。

172は復元口径25.2cmの口縁端部をほとんど拡張せず、端面が凹面となっており、体部上半は直線的に下外方にのびていることから、時期的にやや古く、13世紀前半代の可能性が高い。174の口縁部も堝としたが、古墳時代後期前半の甕の可能性も残している。復元口径は20.6cmで、口縁端面は内傾する面となっている。

瓦器

175～177は瓦器埦である。175は図上ほぼ完形品で、復元口径13.9cm、器高約5.3cmを測り、高台径は推定6.0cmとやや大きい。体部は深みがあり、内面に暗文を横方向に密に施し、見込み部分は斜格子状に施しているようである。外面には認められないことから、13世紀以降に編年されるものである。口縁部外面には強めのヨコナデを施し、端部は丸く収め、内面には１条の沈線を引いている。外面は型づくりのため、ユビオサエ痕が密である。176・177はともに瓦器埦の底部で、輪高台径は4.75cm前後、その横断面は台形に近い。176の底部内面には平行、177では斜格子状に暗文を施している。ともに密ではないことから、13世紀以降の製作時期が与えられよう。

青白磁・白磁

178は青白磁小壺の小片、179は白磁碗Ⅲ類またはⅣ類の底部小片である。178は復元底径3.95cmで、体部下半外面に鎬蓮弁文が３段以上彫刻されている。底部付近外面は露胎となっている。179の外面は露胎で内面はいわゆる釉トビとなっており、須恵器埦等と同時期と思われる。

土錘

180は土師質の管状土錘で、長さ3.75cm、中央部の最大径は1.02cm、中央の孔径は0.25cmで、重量は3.1ｇである。本遺構から出土した土錘はこの１点のみである。

⑧　SD273（図版45、写真図版74）

本溝からは図示した丹波焼擂鉢・陶器埦・堝のほか、硬質土師器小片が出土している。特に丹波焼擂鉢の破片数が多い。

181は丹波焼擂鉢である。ヘラによる一本引きの擂目を施し、口縁端部は肥厚させずに内側に折り曲げたように上方にのばしたもので、復元口径は39.3cmを測る。15～16世紀に編年されるものであろう。182は復元底径13.2cmの擂鉢底部で、ヘラによる擂目をやや密に施しており、内面は使用によりかなり平滑になっている。181と同時期と思われる。183は釉を内外面に施した陶器埦で、口縁部を欠失する。底部は削り出し高台で露胎となっている。復元底径は4.4cm、残存高は4.9cmで、残存部上端での径は10.1cmである。近世中頃以降のものと思われる。184は土師器の堝で、残存高は7.15cm、復元口径は20.7cmを測る。鍔部分は退化して炮烙に近い形態となっている。外面はかなり摩滅しているが、体部には格子タタキを施しているようである。内面はヨコナデ調整で、16世紀後半～17世紀前半のものと思われる。

⑨　SE362（図版45、写真図版74）

本遺構からは図示した２点が出土している。

185は須恵器広口壺肩部の破片で、最大径は16.0cmを測る。奈良時代頃のものと思われるが、詳細不明である。重複する溝SD363から飛鳥～奈良時代の遺物が出土していることから、この溝に含まれていた土器が混入したものと思われる。

186は丹波焼の鉢で、火入れと呼ばれているものである。完形品で、口径9.8cm、器高5.5cm、底径8.0cmである。口縁部上端面には小さく丸い傷が多数認められる。18世紀前半ごろに編年できると思われる。

⑩　SE368（図版45、写真図版74）

187は丹波焼擂鉢の口縁部小片である。擂目はヘラによる一本引きで、口縁端部の形態が181に近いこ

とからほぼ同時期と考えてよいであろう。本遺構からは図示したもの以外に東播系須恵器甕や丹波焼甕の破片や近世末～近代の磁器碗の破片が出土している。

⑪　その他の遺構

図示していないが、その他の遺構から出土している土器について簡単に述べる。

掘立柱建物跡を構成する柱穴のうち、SP285掘方・SP315柱痕・SP324の掘方・SP326の柱痕・SP327の上面から土師器細片が出土し、SP285柱痕・SP303柱痕・SP316柱痕・SP327柱痕・SP328柱痕・SP332掘方・SP333の上面と掘方・SP334柱痕から須恵器小片が出土しており、埦については12世紀末～13世紀前半のものと思われる。また、SP284の柱痕と掘方・SP303上面・SP315掘方・SP316掘方・SP321の柱痕と掘方・SP336の柱痕から土師器・須恵器の細片が出土しており須恵器については掘立柱建物跡と同時期であろう。なお、SP284の上面からは瓦器埦小片が出土している。

掘立柱建物跡に関連する可能性がある柱穴では、SP300柱痕・SP306柱痕・SP346掘方・SP349柱痕からは須恵器埦や土師器の細片が出土している。また、掘立柱建物跡内部に存在する柱穴・土坑のうち、SP282柱痕・SP283の上面と柱痕・SP302柱痕・SP317柱痕・SP319柱痕からは須恵器埦や土師器の細片が出土し、SK329の埋土からは土師器小片と須恵器埦片が多数出土しており、掘立柱建物跡と同時期である。

溝のうち、SD310からは飛鳥～奈良時代と思われる須恵器坏と土師器のほか、中世初頭の須恵器埦片が出土し、SD337とSD345からも中世初頭の須恵器埦や瓦器埦・土師器の小片が出土している。SD250からは中世後半の土堝の小片、SD309から陶器片、SD274から土師器細片が出土し、ともに近世のものである。

土坑では、SK237から弥生～古墳時代の可能性がある土師器、SK280・352・371からは中世初頭の須恵器埦片、SK353からは丹波焼甕・須恵器埦小片、SE219では近世の丹波焼擂鉢、SK342からは須恵器埦片多数と近世染付が出土している。

その他柱穴のうち、中世初頭の須恵器細片等が出土したのは、SP232柱痕・SP233柱痕・SP279柱痕・SP292上面・SP339柱痕・SP343掘方・SP354柱痕・SP359柱痕・SP370埋土があり、SP269の上面からは近世土師器の細片が出土した。なお、時期不明の土師器や須恵器の細片が出土した柱穴には、SP235・247・248・287・289・372があり、いずれも柱痕からの出土である。

⑫　遺物包含層（図版46、写真図版73・74）

188～197の10点を図示した。土師器羽釜188は小片で、復元口径27.3㎝を測る。鍔上部から口縁部にかけて段を有する。15世紀代のものであろう。189・190は播磨地域で特徴的にみられる土師器堝（鍔釜）である。口縁部下に鍔状の段を有し、体部は平行タタキで成形している。189は復元口径20.6㎝で、硬質土師器に属する。190は小片のため口径は不明である。ともに14世紀後半～15世紀代のものであろう。

191・192は須恵器埦で、192は回転糸切りの高台部分が２㎜程度突出する。191の底面には太さ６㎜の縄のような圧痕が１条認められる。南西部の大規模な攪乱穴から出土したものである。192は復元口径15.0㎝、器高4.2㎝、径高指数は28で底部が突出して古いタイプのように見えるが、体部形状は埦形を呈さないことから、12世紀末～13世紀前葉に時期が与えられよう。小名田窯跡出土資料に同様のものが認められる。191も同時期と思われる。193の須恵器小皿は口径7.5㎝、器高1.25㎝で、SK224出土須恵器小皿に比べて小ぶりであるが、器壁がやや厚い観がある。回転糸切りの平高台底部から口縁部への境は丸みをもっている。SK224出土須恵器小皿と同時期と思われる。

194は明青花の磁器碗片で、復元口径は12.6cmを測る。粗雑なつくりで呉須の発色は不良、全体に貫入が認められる。文様は、外面口縁直下の幅広圏線に連続文様を加えているが、下部の花文様とつながる可能性もある。内面口縁部直下にも圏線を描き、底部付近には数本の直線文が認められる。漳州窯産の可能性がある。195は細蓮弁文の青磁碗で、器壁が厚く、内面に目跡が認められる。194・195の輸入磁器の時期は16世紀代であろう。196の碗と思われる青磁は径4.7cmの高台が低く、高台内は露胎で指先のような圧痕が６ヶ所認められる。龍泉窯系のもので、14～15世紀と思われる。

197は丹波焼擂鉢小片で、口縁端部は上方に引きのばされ、内面の擂目はヘラ描きで、15～16世紀代であろう。内面は使用により摩滅している。

（２）中央地区

本地区では、奈良時代、平安時代末～鎌倉時代、室町時代、江戸時代の土器・陶器・磁器・瓦が出土し、縄文時代の可能性がある土器も出土している。以下、それらを遺構別に述べる。

①　SK834（図版46、写真図版75）

甕・坏・鉢を図示した。図示していないが、ほかに坏を含む土師器片多数と須恵器坏口縁部片、陶器片が出土している。

甕

198は長胴の土師器甕である。復元口径28.2cmで口縁端部は器表が剝離している。体部外面はタテハケ、内面は縦方向のヘラケズリ調整である。体部最大径は上位にあり、23.2cmを測る。外面には部分的に煤が遺存している。口縁部の形態から奈良時代、平城宮Ⅲ頃のものと思われる。

坏

199は土師器坏Ａで、復元口径15.7cm、底部の大半を欠失するが、残存器高は2.9cmである。口縁部は屈曲して外上方に開き、口縁端部を内側に折り返して玉縁状に仕上げている。口縁部内面と底部内面には暗文が辛うじて遺存している。奈良時代、平城宮Ⅲ頃のものであろう。

②　SX873（図版46、写真図版75）

溝状の遺構で、北地区SD363とつながっていた可能性が高い。200の須恵器坏Ｂが出土している。復元高台径は11.2cmで、外側に踏ん張るように貼り付けている。底部外面にはヘラ切り痕が残る。内外面には自然釉の灰被りがあり、奈良時代、平城宮Ⅲ頃の可能性がある。

なお、図示していないが、ほかに奈良時代の須恵器坏や土師器小片が出土している。

③　その他の遺構

図示していないが、その他の遺構から出土している土器について簡単に述べる。

SD818からは古墳時代の可能性がある土師器小片、SK862・SD877やSP824の柱痕・掘方からは奈良時代の可能性がある土師器小片が出土している。中世初頭の須恵器や土師器の小片は、SK819やSP828上面・SP830の柱痕・SP832の柱痕と掘方・SP857の柱痕・SP867の掘方・SP871から出土している。また、近世以降の土器・陶器・磁器の小片は、SD307・746からやや多い量が出土している。

なお、SP904の柱痕からは縄文土器と思われる小片が出土している。

④　上段中央地区北半部遺物包含層（図版46、写真図版73・75・76）

201～206の須恵器・磁器・陶器・瓦の６点を図示した。

須恵器坏蓋201は中央に宝珠つまみが付く可能性が高い。復元口径14.8cmで断面はセピア色を呈する。飛鳥～奈良時代の飛鳥Ⅴ期、平城宮Ⅰ期と思われる。

202の青磁脚付鉢は復元口径21.7㎝、残存高7.4㎝で、口縁端部は外反して内側に折り曲げられていることから、蓋付きの可能性がある。施釉された脚は３方向に付いていたとみられ、２方向が遺存している。底面は蛇ノ目で凹形の低い高台となって、畳付部分は釉がかき取られ、褐色を呈し、砂が若干付着している。内面の彫刻文様は花弁のようであるが、正確なところは不明である。18世紀頃の肥前系であろう。

東播系須恵器鉢203の復元口径は27.7㎝で、口縁端部を肥厚させている。12世紀末～13世紀初頭と思われる。

204の陶器擂鉢は口縁端部を肥厚させ、上方に少し引きのばしたもので、端面には擬凹線状のものが認められる。内面の擂目は５本一単位の櫛引きのもので、底部にも施しているが、使用による摩滅でほとんど消えかかっている。復元口径35.4㎝、器高13.4㎝で内外面には褐色の土部が塗られている。丹波焼の悪い焼成のものとみられ、17世紀代の可能性がある。

205・206は燻し軒平瓦で、文様部分の区画はやや狭く、どちらも同じ唐草文様と思われるが、205は焼成が軟弱で文様の残りが悪く、206は文様の遺存部分が少ない。唐草文先端が丸く巻いており、17世紀代と思われるが、18世紀の可能性も残す。付近に存在した堂宇の屋根に上がっていたものであろう。中央地区の客土層から出土している。

上段中央地区の中央付近には小型の土坑が多く分布していた。

⑤　SK01（図版47、写真図版77）

集石土坑であるSK01からは施釉陶器甕207・208が出土した。207は寸胴な体部上端の外面に粘土を突帯状に貼り付けて蓋受け状の口縁部を作る。内外面に褐色の鉄釉を施し、突帯端部は露胎で、その下から柄杓掛けで黒色の釉薬を垂らしている。上げ底気味の底部にも釉が掛かるが砂が付着している。丹波焼。208は大きく外反する口縁部で、頸部内面は板ナデを施している。外面には型押しで格子状の文様を並べる。頸部内面以外には赤土部を塗布している。丹波焼。

写真を掲載した330・331の陶器壺や軒平瓦も出土している。

⑥　SK11（図版47、写真図版77）

209は土人形である。型押しにより作られ、船に乗る人物（恵比寿像）を表している。

⑦　SK12（図版47、写真図版77）

210・211はSK12から出土した。210は明青花碗或いは皿底部で、高台畳付以外は施釉している。内外に圏線と草花文を描く。211は施釉陶器鉢で、太く四角い高台を削り出し、内湾して立ち上がる体部から外反する口縁部へと続く。底部外面以外を白泥掛けの後、内面に呉須と鉄釉による文様や文字を描いている。

SK12からは332・333の瓦質土器片や塼も出土している。

⑧　SK10（図版47、写真図版77）

212はSK10出土の燻し瓦である。軒平部が残存しており平瓦は桟瓦である。桟の一隅を切り落とす。軒平部には均等唐草文が配される。凹面・凸面・側面とも周囲部は外周に沿った方向にナデ調整するが、凹面・凸面では横方向のナデを施している。但し凹面では斜め方向のナデも見られ、凸面には不調整の部分も見られる。

⑨　SK14（図版47、写真図版77）

213はSK14出土の瓦質の火舎香炉で、大きく外方に踏ん張った高台から内湾して立ち上がる体部へと

続く。口縁部の一部が大きく水平に開き、口縁部全体が波状を呈していたものと推定される。高台内面や口縁部外面にはケズリの痕跡が残り、外面はナデで仕上げ、内面は板ナデで仕上げている。体部内面の上端に煤が付着する。近世の線香立てと思われる。

⑩　SK78（図版48、写真図版78）

214は施釉陶器擂鉢で、口径20.1㎝、器高6.1㎝の小型のものである。低い高台部分は露胎で内側に目跡が付き、口縁部は上面を作り、片口が付く。内面には10本/1㎝の櫛描き擂目を入れ、見込み部には渦状に擂目を入れている。褐色の釉薬を掛けており、内面にも目跡が残る。18世紀末以降の丹波焼。

215も擂鉢で、片口を持つ。上げ底の底部からまっすぐ開き、２段の凹線を巡らせ、口縁端部は両側に拡張して上面を作り、2条の沈線を入れる。内面には細かい櫛描きの擂目を密に入れている。口縁端部から内面には赤土部を薄く塗布している。底部外面には砂が付着し、輪状の破片が融着している。内面には6ヶ所の目跡が残る。

⑪　SK70（図版48、写真図版78）

216～218はSK70から出土した。216は染付磁器徳利である。高台からららっきょう形の器形を経て、端反りの口縁部は端部を少し肥厚させている。内面体部以下と高台端部は露胎で、底部から体部外面には圏線で区切られた草花文を施している。

217は染付磁器碗である。細い高台から内湾する器形で、高台外面に圏線、高台内と外面に退化した雪輪草花文を描いたくらわんか茶碗である。

218は陶胎染付方形小鉢で、型作りである。白泥を掛け、高台畳付を削り、鉄絵・染付の草花文と口縁端部の縁取りを施し、透明釉を掛けている。

⑪　P32（図版48、写真図版80）

219は小柱穴状のP32から出土した瓦質の甕口縁部である。中世に属するものである。

⑫　SK64（図版48、写真図版79・80）

220・221は集石土坑SK64から出土した。220は染付磁器碗で、明青花である。細く直立する高台から直線的に開く体部へと続く。高台畳付は釉薬を削っている。外面には高台外面に2条、体部に1条の圏線を巡らせ、内面には2条の圏線下部に細かい草花文を描いている。

221は染付磁器碗で、細い高台から丸く内湾する体部へと続く。高台内には圏線と文字文を描き、外面には2種類のコンニャク印判花文を2段に交互に施している。

SK64からは写真を掲載した334～337の青磁や染付も出土している。

⑬　SK65（図版48、写真図版79）

222はSK64を切るSK65から出土した青磁皿である。型作りで、比較的太い高台は平面形が八角形を呈し、外形は輪花状を呈している。口縁部は体部から屈曲して水平に開く。内面には蔓状の草花文に囲まれた中央に書物の開かれた書見台の後ろに帽子を被った人物像を描いている。同様のモチーフをもつ型が三田青磁の三輪明神窯出土品や山見氏旧蔵の同窯関連資料に存在するが、いずれも口径25㎝を超える鉢となり、いすの背もたれや周辺におかれた品々が描かれるものである。三輪明神窯出土品のものは、外周の花文も類似しており、年代的にも非常に近いものと思われる。同型には「□木人形デ焼　欽古□　文政九年戌□」の刻書が残り、1826年の年号を示している。

⑭　SK43（図版48、写真図版79・80）

223～227は集石土坑SK43から出土した。223は上層から出土した土師器炮烙で、破片は周辺の包含層からも出土している。平らな底部から屈曲して直立する口縁部へと続く。19世紀前半以降である。

224・225は集石内や下から出土している無釉陶器擂鉢である。224はユビオサエを残してまっすぐ開く体部から方形に収めた口縁部に続く。内面にはヘラ描きの擂目が残るが良く使用されており磨り減っている。16世紀の丹波焼。225も丹波焼擂鉢で口縁部は丸く収めている。16世紀後半～17世紀初頭のもの。

226は青磁碗底部である。外面にわずかに蓮弁文が残る。

227は染付磁器皿で、削り出した高台のある底部は露胎で、やや内湾しながら広がる体部へと続く。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施され砂が付着する。薄い呉須で文様を描いている。SK43検出中に出土した。

⑯　SD174（図版48、写真図版79）

SD174とSD59は中央地区と南地区とを限る溝である。SD59が先に東西方向に掘削され、それに重複するように石列をもつSD174が東西方向に設けられている。SD174からは228の磁器小碗が出土した。白灰釉を全面に掛け、染付はない。

⑰　SD59（図版48、写真図版80）

229は染付磁器碗である。非常に薄い器壁で、緩やかに内湾しながら広がり、口縁部に至る。内面の口縁端部と体部下半部に2条の圏線を巡らせ、さらに下半から見込みにかけて「○」状の草花文様を縦６列以上に繰り返して並べる。16世紀末～17世紀初頭の明青花。

（３）南地区

①　SK72（図版48、写真図版79）

230はSX1007北東端に構築された周囲に石を並べた円形の土坑SK72から出土した瓦である。白灰色に焼成されており、欠損部があるため、桟瓦になるかはわからない。側面はヘラ切りのままで、一部に甘い面取りが施される。凹・凸面はナデによって仕上げているようだが、風化が著しい。

②　SK932（図版48、写真図版80）

231はSX1007東の上段から下段への斜面で検出されたSK932から出土した陶器甕口縁部である。屈曲して内傾した口縁部は外側にくびれを持ち、拡張した端部は窪んだ上面を有する。外面には土部が掛かり、一部に灰釉状のものも見られる。丹波焼。

③　SK71（図版49、写真図版81）

232はSX1007上層の北端で検出されたSK71から出土した土師器小皿で、丸みを帯びた底部から内湾気味に口縁部が立ち上がる。ユビオサエ整形を行い、内外面ともにナデ調整を行う。口縁部のみヨコナデ。口縁部内外面半分近くに煤が付着しており、灯明皿として使用されている。17世紀前半以降と考えられる。その他に寛永通寶の破片が出土している。

④　SX1007（図版49、写真図版81～83）

233～249は上段南地区北端のSX1007から出土した。SX1007は調査年度を違えて南半と北半に分けて調査し、不定形の池状の溜まりで湧水が著しく平面形や底の状態が不明瞭である。233は須恵器埦である。内湾して広がる体部から丸く収めた口縁部へと続く。中世に属する。

234は陶器甕で、屈曲した口縁部は蓋受け状の凹みが上面に設けられる。外面は自然釉のため荒れているが、内面には赤土部を塗布している。丹波焼。

235は須恵器甕口縁部である。短く屈曲した口縁部は外側に四角く面を持つ。肩部外面には斜め方向の平行タタキが残る。中世に属するものである。

236は陶器甕で、内傾した肩部には7条の条線を巡らせ、不遊環を貼り付ける。短く屈曲した口縁部は外側に面を作る。外面には灰白色の釉薬を塗り、内面にも薄くハケ塗りしている。丹波焼。

237～242は丹波焼擂鉢で、237～239はヘラ描きの擂目を持ち、240～242は櫛描きの擂目を引く。237は口縁端部の外側に沈線を巡らせている。内面にはヘラ描きの擂目を入れており、外面には赤土部を塗布する。16世紀後葉～17世紀中頃。

238は外面にユビオサエを残して広がり、底部外面は横方向のヘラケズリで成形される。口縁部は四角く収め、内面に小段を有する。内面の小段以下にヘラ描き擂目を引き、見込みにも放射状に引かれる。内面と外面口縁部直下まで赤土部を塗布している。239の底部も同様の成形だが使用痕が顕著である。

240は直線的に広がる体部から四角く収める口縁部へと続く。口縁部の内面には小段が付く。内面の櫛描き擂目は4本一単位で、疎らに引かれる。口縁部内面の小段から外面には赤土部が塗布される。17世紀後葉か。

241は口縁部を上方に拡張し、外面を作って凹線を巡らせるものである。6本一単位の櫛描き擂目を間を開けて引いている。17世紀末葉か。

242は底部外面を横方向にヘラケズリ後ナデによって調整し、引き上げ痕を残して開く体部から上方に大きく拡張させて外面を作る口縁部へと至る。口縁外面には2条の凹線を巡らせ、上面も窪ませる。内面には8本一単位のやや粗い櫛描き擂目を密に引き、見込みには同心円状に引いた中央に一方向の櫛描き擂目を引く。内面から口縁部上端まで薄く赤土部を塗る。17世紀後半～18世紀前半の丹波焼。

243は施釉陶器皿で、低い高台から緩やかに内湾して開く口縁部へと続く。高台畳付以外に緑釉を掛けている。高台内には釉薬が剥離した焼台の痕跡が残る。瀬戸・美濃窯。

244は施釉陶器皿或いは埦で、削り出した碁笥底は露胎で、高台の表裏に胎土目が残る。緑灰色の釉薬が掛かる唐津焼。

245は施釉陶器皿で、削り出された低い高台から底部外面は露胎で、内面に小段を付けて広がる口縁部から内面には施釉する。一部に剥がれた胎土目が残る。唐津焼折縁皿。

246は施釉陶器無頸壺で、口縁端部を内側に拡張して蓋受け状としている。外面は回転を利用したカキ目状に仕上げ、内面の口縁直下から底部外面まで土部を薄く塗り、口縁部から体部上半部に暗緑色の釉薬を重ね塗りしている。丹波焼か。

247は白磁皿である。細い高台から横方向に広がる体部へと続く。内面に砂目積み跡と思われる痕跡が残る。

248は染付磁器皿である。薄造りで、細い高台から開く体部へ続く。高台畳付以外は施釉し、高台外面に３条の圏線、高台内に圏線と宣徳年製を崩して描く。16世紀末の明青花か。

249は染付磁器碗で、三角形に削り出された高台の端部から内側は露胎で、緩やかに内湾する体部に続く。内面には2条の圏線内に草花文を描き、外面には圏線上部に文様を描いている。初期伊万里焼。

写真を掲載した338～344もこの遺構から出土している。

⑤　SX1001（図版50、写真図版83）

250は上段東端の埋甕SX1001に用いられた陶器甕である。薄い底部から粘土の継ぎ目を残して引き上げられた倒卵形の体部に続き、水平に拡張して上面を作る口縁部に至る。肩部には幅の異なる凹線状の条線を巡らせ、７花の不遊環を貼り付ける。底面以外はナデによって仕上げ、土部を塗布する。内面と外面下半はハケの痕跡を残して塗り斑が目立つ。17世紀中葉～後葉の丹波焼。251は甕内の埋土から出

土した染付磁器瓶である。内湾する体部を持ち、高台と底部下半部に圏線を巡らせ、文様を描く。内面は露胎である。写真を掲載した345も出土している。

⑥　SX1010（図版50、写真図版83）

252は土師器皿である。手づくねの灯明皿で、口縁部のほぼ全周に煤が付着する。

⑦　SX1013（図版50、写真図版84）

253～258は上段東端のSX1013から出土した。253・254は手づくねの土師器皿で、器壁は比較的厚い。255は土師器堝口縁部で、播丹型と呼ばれるものである。

256は須恵質の底部で、回転糸切りの大型の製品である。内面には不定方向の仕上げナデを施す。257は無釉陶器壺の把手である。帯状の粘土を横方向に貼り付けて耳としている。表面に4条の沈線を刻む。古瀬戸の可能性がある。258は陶器鉢で、ユビオサエを残して内湾気味に広がり、口縁端部は上方に摘み上げる。内外面に赤土部を塗布しており、擂目はないが丹波焼と思われる。

⑧　SX1040（図版50、写真図版84）

石組土坑SX1040からは軟質施釉陶器の灯火具ひょうそく259が出土した。中央に貫通しない軸孔のある底部から外傾する体部へ続き、内面に掌の痕跡を残した別作りの天井部には相対する２方が突出した円孔を穿ち、灯心の支えに備える。内部の底部中央は突出し、内面は強いユビナデを残す。全体に赤土部を掛け、上面の一部に透明釉を施している。

⑨　SX1041（図版50、写真図版84）

260・261は大型の方形石組土坑SX1041から出土した。260は須恵器の甕口縁部で、破片の出土ながら大型のものである。短く屈曲して丸く収めた口縁部に続く。261は染付磁器皿で、低い高台から内湾して開く体部へ続く。接合できないが、口縁端部は少し外側に屈曲させた破片から復元した。砂が付着した高台裏以外は施釉し、内面に草花文を描く。

写真を掲載した346・347の須恵器も出土している。

⑩　SX1039（図版50、写真図版85）

262～264はSX1039から出土した。262は土師器皿で、手づくねにより成形され、ナデにより仕上げている。口縁部内外の広い範囲に煤が付着する。263は染付磁器碗で、内湾する体部を持つ。外面高台部には2条の圏線を巡らせ、体部には二重網目文を３段に描く。264は燻し瓦質の塼と思われ、残存する一辺が41.0㎝、厚さ3.55㎝の大型のものである。相対する二方の側面は直角に切られ、横方向のナデで仕上げているが、残る一方の側面は斜めに切られている。表裏面は成形台の痕跡か平行する筋状の跡が残り、裏面は一部に一方向のナデが施される以外は調整していない。表面は筋状の跡に直交したナデや斜め方向のナデで調整され、周辺部は周囲に沿った方向にナデを施している。348・360も出土している。

⑪　SX1037（図版51、写真図版86）

265～267はSX1037から出土した。265・266は土師器皿で、やや肉厚の器形をもつ。266は静止糸切り痕を残す。267は須恵器壺で、上半部を失う。ヘラ切り底部に踏ん張った高台を貼り付ける。

⑫　SK1035（図版51、写真図版86）

268はSK1035集石上面から出土した。瓦質土器で、厚い寸胴な器形を持ち、四角い口縁部外面直下に鍔を貼り付け、一部を窪ませる。口縁部外面には「×」条の文様を連続して刻む。内面は粗い櫛様の道具を縦方向に引く。写真を掲載した359も出土している。

⑬　SF1053（図版51、写真図版86）

269・270は石敷遺構SF1053から出土した。269は土師器手づくね皿で、ユビオサエ・ナデが観察でき

る。270は須恵器埦で直線的に開き、口縁端部には灰が被る。

⑭　SX1043（図版51、写真図版86）

271は土師器手づくね皿で、外面にはユビオサエの痕跡を3段にわたって残し、ナデによって仕上げている。内面は口縁部以下をヨコナデ、底部をナデで仕上げている。口縁端部に1ヶ所煤の痕跡が残る。写真を掲載した356の皿も出土している。

⑮　南西地区（図版51、写真図版86・89）

272・273は南西地区出土の土器である。この地区から出土した遺物は非常に少ないことから、ここに掲載する。272はSK2002出土の燻し瓦で、左桟瓦である。273は古式土師器高坏で、脚部や口縁部を失った坏部の破片である。水平に開いた坏部から段を持って口縁部へと開くものである。

⑯　上段南地区遺物包含層（図版51・52、写真図版87～90）

274～278は大歳神社境内北側外包含層出土の土器である。274・275は土師器手づくね皿で、口縁部の広い範囲に煤が付着する灯明皿である。276は硬質土師器堝で、短く立ち上がった口縁部の外側を肥厚させている。播丹型である。277は施釉陶器埦である。削り出された高い高台から内湾する体部へと続く。内面と外面上部に黒褐色の釉薬を掛けている。瀬戸美濃焼の天目茶埦である。278は青磁碗口縁部で、オリーブ黄色の釉薬が掛かり、外面にはかなり便化した蓮弁文が描かれる。内面にも文様の痕跡が観察できる。279は燻し瓦質の塼と思われ、残存する一辺が23.3㎝、厚さ4.5㎝の大型のものである。残存する側面は直角に切られ、横方向のナデで仕上げており、表面側は面取りを施している。その内側には沈線を引いている。裏面は平行する筋状の跡が残り、一部にナデが施される以外は調整していない。表面はナデで調整され、周辺部は周囲に沿った方向にナデを施している。

280～295は大歳神社境内遺物包含層出土の土器である。280～288は土師器手づくね皿で、口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として用いられたものである。口径が7㎝以下の280・282や9㎝を超える281・284・287・288がある。また、口縁端部をヨコナデで立ち上がらせる282・283・287・288がある。

289は施釉陶器灯明受皿で、内側に突帯を巡らせ、口縁部の一部に弧状の切り欠きを設けるものである。突帯端部と外面口縁部直下以下は露胎であり、灰白色の釉薬を掛けている。290は陶胎染付、291～293は染付磁器の碗である。290は底部が露胎のもので、外面に文様を描く。291は二重網目文を3段に描く。292・293は高く細い高台から斜めに広がる体部を持つ広東碗である。293の見込みには3ヶ所の窯道具（ハリ）の痕跡が残る。

294は陶器甕で、倒卵形の体部に続き、外側に肥厚拡張して上面を作る口縁部に至る。肩部には幅の異なる凹線状の条線を多数巡らせ、不遊環を貼り付ける。内面から口縁部外側まで赤土部を塗布し、口縁部上面から外面にかけて灰釉を施している。18世紀末葉の丹波焼。295は陶器甕下半部である。薄い底部から内湾気味に引き上げられた体部で、底部外面には横方向の猫描きを施し、上半部は横方向の板ナデやヨコナデで仕上げている。内面はヨコナデによって仕上げられる。体部には赤土部が塗布され、底部外面にも斑に塗られている。丹波焼。

⑰　採集土器

296は日下部遺跡本発掘調査地点から南に離れた斜面で採集された須恵器の捏鉢で、やや外反気味の体部から、三角形に大きく肥厚させた口縁部に至る。内面はよく使用されており摩耗が著しい。

297は№19地点で採集された無釉陶器の底部である。胎土には砂粒は少ないが、大きな粒が含まれている。灰褐色に堅緻に焼成される。備前焼か。

【参考文献】

・森村健一2002.3「15～17世紀における東南アジア陶磁器からみた当時の日本文化史」
　　国立歴史民俗博物館研究報告第94集　吉岡康暢編　国立歴史民俗博物館

・九州近世陶磁学会2000.2「九州陶磁の編年」

・三田市教育委員会2005「三田焼の研究」三田市文化財調査報告第20冊　ふるさと三田第23集

・兵庫県教育委員会1974.3「小名田窯跡」兵庫県文化財調査報告第157冊

・兵庫県教育委員会2004.3「兵庫津遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第270冊

・兵庫県教育委員会2011.2「神出窯跡群Ⅲ」兵庫県文化財調査報告第407冊

・兵庫県教育委員会2012.2「神出窯跡群Ⅱ」兵庫県文化財調査報告第418冊

第２節　木製品

調査地点は有野川左岸に非常に近く、特に各地区の下段は湧水が多く、木製品が良好に遺存していた。木製品が出土した遺構には、流路や溝、井戸、土坑、埋桶・埋甕などがあるが、ほとんどが近世以降のものである。W76のみ上段SK65からの出土である。木製品に利用された樹種は第6章の文化財科学研究センター報告による。

１．溝・流路

①　SR400（図版53、写真図版91）

SR400は、下段を北地区から南地区まで貫いている流路で、南地区の一部では中世の掘削・埋没であったが、中央以北では近世以降の溝と重複している。出土木製品はすべて近世以降のものと思われる。W1～9はSR400出土のもので、W2はSR400が中央地区で一部枝分かれして浅くなる部分から出土している。W1・3・4は下層からの出土である。W6は南地区出土のものである。

W1・2及び写真のみ掲載のW110は、細く割り裂いた棒状の針葉樹の一端が焼け焦げているものである。松明などに用いられたものであろう。W2はアスナロ属を用いており、器物の廃棄に伴って焼却されたものかもしれない。

W3は針葉樹板目板材の下端を湾曲させて削っており、曲物あるいは桶の底板と思われる。

W4はヒノキの板目材を用いた桶の樽板材と思われる。長側面も斜めに削っている。小型で丁寧に作られたものである。表裏とも黒化しており、1面は柿渋などで塗装しているようである。もう1面は内容物の影響による変色か。

W5は二葉マツ板目材を円盤状に加工し、中央にも円孔を穿ったものである。直径11.3㎝、円孔径5.1㎝、厚さ0.45㎝を復元する。外周に沿った位置2ヶ所に菊花形の銅製座金具を通して細い鋲が打たれており、鋲の足は木材を貫いた後、外方向に半環状に曲げられ、再び木材に先端を埋めている。飾り鋲は

おそらく円周の4方向に打たれたものであろう。鋲の内側の位置には直径0.4cmほどの小型の円孔が2ヶ所づつ設けられていたようである。円盤の裏面には細かい成形痕が残されており、中央の円孔内面も含めてわずかに黒ずんでいることから、煤が付着したものと考えた。形態から提灯の上輪の蓋の可能性が考えられる。

W6はSR400の南地区から出土したアカガシ亜属の丸太材を輪切りにして、円盤状に切り落としたものである。一部には樹皮が残されている。切断面には平行に走る刃物の痕跡が残されており、直線的な鉈様の工具で細かく削られたものであろう。

W7はスギの板目材を横方向にわずかに湾曲させた板材で、内面に縦方向の帯状に削った痕跡が残る桶の榑板材である。上縁の外側は面取りを行い、内面の底板が落ち込む位置にも加工を加えている。

W8も桶の榑板材と思われるが、柾目材で、あまり湾曲していない。

W9はツガ属の板目材を幅6.3cm以上、厚さ0.7cmほどの板状に加工したもので、長辺の木口端近くにV字形の切れ込みを入れている。

② SR415（図版54～56、写真図版91～93）

W10～31は北地区北東端に東西方向に掘削されたSR415から出土した。

W10・11は広葉樹横木取りの木胎をもった漆器椀である。W10はケヤキを用いており、底部を欠いているが、口径9.8cmの椀を復元できた。内外面とも赤色系漆で仕上げているが、下には黒色が覗いている。口縁部の布着せは観察できず、また赤色系漆を塗布する際の刷毛の痕跡を内外に残しており、あまり丁寧な仕上げではない。W11はトチノキを用いており、輪高台から水平によく張った体部をもち、内湾して立ち上がり口縁部へ続く。口径10.8cmを復元し、残存器高4.5cmである。外面は高台内側まで黒色の漆を塗布し、内面は赤色系の漆に塗り分けられており、赤色系漆は黒色漆の上に塗られている。体部下半の器壁は比較的厚い。口縁部等の布着せは観察できなかった。

W12は節の多いトチノキの横木取りの挽物で、比較的厚く、円盤状を呈していることから直径30cm弱の丸盆状の形態が推定できる。周縁部を幅１cm程削り残しており、裏面にも同様の痕跡が残るが、どの程度立ち上がっていたかは不明である。立ち上がりの基部などのごく一部に黒色の膜面が残されており、漆器であったものと思われる。

W13～15は箸である。針葉樹を削って断面多角形状・円形にしているが、W13は両端をほとんど細く成形していないが、下端は丸くなっており、使用痕と思われる。W14はイヌシデ節を用いており、下端部もやや細く削っている。W15は基部を欠損しているものの、先端部の6cmほどの長さで細く成形しており、先端は尖っている。

W16はスギを用いた半円形の柾目板材で、2枚の板を目釘2ヶ所でつないで円盤状を成していたもので、直径23.4cmを復元する。一方には目釘が残存している。偏った位置に直径2.7cmの円孔を穿っており、液体等を注ぐ用途と推定されることから、樽の蓋板と思われる。器表面両面が黒色を呈しており、柿渋或いは黒色漆を塗布して、液漏れを防いでいる。器表面には長円形を呈した切削痕が観察できる。筅などの工具を用いたものか。側面や接合部の弦にも一部塗装液がはみ出ているが塗布はされていない。表裏面と弧状の側面には白褐色の繊維質の物質が部分的に付着している。同様のものは円孔内でも観察できる。黒色を呈した表裏面には反転してやや白っぽく転写された文字が観察できる。赤外線画像を撮影し、その画像を反転したところ文字であることがわかった。文字には「有之由候彼・・」「五月中」などと読める部分があるが、文意はたどれない。二重に重なっているような部分もあり、文字は円弧

の中心に向かっている傾向がある。おそらく液体等の漏れを防ぐために塗料を塗り、その後、習書や手紙などに用いた和紙の反古を全体に貼り付けて蓋として嵌め込んだものであろう。文字列は手紙などの完結したものではなく、習書・手習いの類いと思われる。

W17は曲物或いは小型の桶の底板である。アスナロ属の柾目材を用いており、直径12.9㎝の円形で厚さは0.7㎝とやや厚い。円弧をなす外周面の一部には削った痕跡を残している。裏面の外周囲には円弧に沿った罫描き線が引かれる。表面には墨書の可能性のあるやや黒ずんだ部分があるが、文字として読み取ることはできない。

W18は長円形を呈する曲物の底板で過半を失うが、長径45㎝を超えるものである。長側部及び上縁の縁に沿って直径0.3㎝の円孔が9ヶ所確認できる。1ヶ所木釘が残存している。スギの板目板を用いている。

W19はアスナロ属半柾目材を用いた板材で、両短辺端を一面から直角方向に切れ込みを入れて段を作り、別材との接合に備えており、箱状の組物の形態が復元できる。接合面及び両側面以外の表裏面は黒色を呈しており、柿渋或いは黒色漆を塗布したものと思われるが、丁寧に重ね塗りを施したものではない。全長は12.2㎝で、内寸は10.9㎝を測る。

W20はモミ属の板目の薄板材を方形に成形したもので、直交する２側辺を作り出す。角の部分を丸めていることから折敷の底板と考えた。裏面はやや黒ずみ、短辺に沿ってわずかに窪む当たりが観察できる。

W21はヒノキの経木様の薄板材で、半柾目材を用いて15㎝の長さに切りそろえられる。全容が不明であるが、W20よりさらに薄いことから屋根の柿葺き材などにも用いられたものであろうか。表面に浅く細い押圧状の痕跡が残る。W109も同様のものである。

W22は直径2.7㎝の太さの竹で、一端は節のすぐ下で切断し、もう一端はちょうどその直上の節の部分で切り落としている。下側の節も抜かれている。

W23はアスナロ属を縦木取りして円柱状に面取りした棒状の製品で、上端から1.3㎝の位置に小段をもつことから袋状或いは環状の器物へ差し込まれた柄と考えた。材質はあまり強くはないことから工具類の柄ではなかろう。但し、中央部に0.3㎝の円孔、さらに後部に方向の異なる一辺0.3㎝程のやや方形の孔が貫かれている。また、下半部は焼け焦げていた。再利用時の痕跡と思われる。

W24は桶の榑板と思われる。マキ属板目材を用い、横方向に湾曲しており、節も平滑に削られている。側面も削られている。長さ24.6㎝、幅6.7㎝、厚さ1.0㎝を測る。

W25～27は角材の小片である。部材を切り揃えた際の端材であろう。W25は針葉樹板目材を用いているが、側面はすべて折損している。W26は、6.4×7.3㎝の針葉樹柾目角柱を切断した端材で、側面には斜め方向に手斧様の工具で削って成形した痕跡が観察できるが、表裏面には並行して走る細かい擦痕が残されており、鋸の痕跡と思われる。W27は、針葉樹のミカン割材の3面をヤリガンナや刀子様の工具で成形したもので、1面は樹皮は残存しないが木表のまま残る。長さ13.4㎝の方柱状に成形するが、上半部の一部に押圧によって窪んだ痕跡が残ることから、紐をかけて木錘として用いたものかもしれない。

W28は直径6.3㎝程の木を切断した丸太材で、一端は欠損する。切断は5方向から3回程度、細かい刃こぼれのある刃物で切り込まれている。また枝の部分も切り落とされている。二葉マツ。

W29・30は丸太材を用いた杭の先端部である。地面に打ち込まれていたもので、先端はやや潰れている。W29はサクラの木と思われる黒色の樹皮が残り、4～5方向から1～3回程度、鋭いが0.1㎝程の刃こ

ぼれのある刃物を打ち込んで先端を尖らせている。

W30も同様の材を用い、顕著な刃こぼれのない刃物で、枝を落とし、先端を6方向から1～5回打ち込んで尖らせている。同様のサクラの丸太材が流路の同一層中に並んで出土している。

W31は二葉マツの73.4cmの残存長、直径23.7cm以上の丸太材を樹芯の部分を避けて縦に挽いた半円柱から、さらに板材を挽き出す段階の木材である。上面は直線的な刃をもつ、刃幅8.5cm以上の手斧様の工具によって縦方向に3列以上刃を当てて平らにされている。縦方向にさらに3回鋸を入れ、厚さ1.7～1.9cmの板材を4枚切り出しているが、基部の左端を切り残しているため、一繋がりとなっている。切り残した部分で見ると、鋸の刃の厚さは0.3cm程度で、斜め方向の擦痕を残している。下面は粗くささくれ立っており、鋸で挽いたままの状態で、隅部に切り残しの割れ面があることから、さらにもう1枚つながっていたものかもしれない。側面は上の1枚、中の2枚、下の1枚に分けて手斧で削られており、下の1枚は面と直角に成形している。

2．水溜・井戸

③　SE416（図版57、写真図版94）

W32～42はSE416から出土した。SE416はSR415の西端部に組まれた石組方形の溜井である。18世紀後半頃の土器類が出土している。

W32～35は曲物或いは小型桶の底板である。W32はスギ柾目板を用いた長径12.2cm、短径11.5cmの円盤で、周縁３ヶ所に釘孔が見られる曲物の底板である。

W33はアスナロ属柾目板材を用いており、側面の一方を削ったため、長径12.6cm、短径11.5cmの歪な円形で、厚さは0.45～0.9cmと偏っている。上側の周縁を面取りしている。表面の一部を帯状に削った痕跡が残る。釘孔は見られない。表面が部分的に黒ずむが墨書とは認識できない。

W34は目のよく詰まったアスナロ属の柾目材を用いた長径12.3cmの小判型を呈した器形で、厚さは0.9cmと分厚い。表面の一部を幅広い帯状に削った痕跡が見られ、外周に沿って罫描き線が残る。釘孔は見られない。

W35は曲物側板或いは側板にはめた箍の綴り部である。外面の樺綴じの外側に1本、内面に2本の縦方向の罫描き線が刻まれる。樺皮結合の1列外2段綴じである。

W36は直径約23cm、厚さ1.47cmの二葉マツ板目材の円盤で、中心を通る直線上に5ヶ所の穿孔をもつものである。穿孔の1ヶ所には木釘が残存している。円盤の一方の周縁角は丸くなっているが、面取りか使用によるものかは不明である。一方の面には穿孔を繋ぐように帯状に変色しており、細かく鋭い刃物傷が残る。裏面は器表面が荒れており、刃物傷が残存する。円盤の割れ方向に直交する釘孔列は割れた材を繋いで補強するためとも考えられるが、別の材を打ち付けて把手とした鍋蓋と考えた。但し一部の刃物傷が把手が当たっていた痕跡の部分にも見られることから、再利用時の傷かもしれない。SK501出土のW46・47と類似する。

W37は箸である。両端部を欠くが、わずかに面をもつものの丁寧に断面円形にしており、太さは上下で変化がない。

W38はイスノキを用いた白木の横櫛である。歯の一部を失うが、直線的な背部は全長残っており、長さ8.5cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測り、基部の残る歯は79本を数える。男物とされる直線的な背は、角の面取りを丁寧に行い、断面はほぼ丸くなる。歯先端部は使用によるものか摩滅している。

W39・40は長方形の板材であり、箱形組物の部材である。W39はアスナロ属板目材を用いており、長側辺は欠損している。短辺木口面に1ヶ所づつと、一方の長辺に寄った中央に表裏を貫通する釘孔を残しており、内2ヶ所に断面方形の木釘が残っている。表裏面には鋸挽きの痕跡と思われる平行した痕跡が残されている。長さ22.8cmの板材で、別部材と木釘で接合された箱形の製品となる。側板は外側に付き、底板は内側に入る形態である。

W40はスギ板目材を用いており、幅4.45cm、厚さ0.7cm、長さ21.6cm以上の板材で、短辺中央に表裏を貫く一辺0.2cmの方形の孔があり、その一方の長側面にも径0.35cmの孔が抉られている。器表面には細かい斜め方向の刃物傷が残されている。底板を下面に、直交する側板が内側に組み合わさる形態をもつ。

W41・42は杭である。W41は、クリを用いた直径の約１/4のミカン割材の先端を尖らせたものである。W42は樹皮を付けたままの丸太材を用いており、先端を7方向1～2回削って尖らせている。

３．埋桶・土坑

④　SK501（図版58～60、写真図版94～97）

W43～61はSK501から出土した。SK501はSR400とSR415に囲まれた範囲で、石組護岸をもつSK608の北に接するように検出された。本来、埋桶であったものに多くの木製品などが投棄されていた。

W43～45は桶の榑板と思われる横方向に湾曲した針葉樹板材である。W43ではほぼ全長が残っており、長さ33.6cm、上幅は6.2cm、下幅5.45cmである。下端から2～5cmの内面が凹み、また外面にも対応する位置が凹んでいる。内面の凹みは底板の位置を示し、外面の凹みは結桶を縛る箍の痕跡と思われる。この榑材は上縁から3cmの位置の側面に釘孔が認められ、榑板相互に綴じあわされていたらしい。

W44はスギを用いた幅8.4cm、厚さ1.1cmの横方向に湾曲した榑板様の板材の一端を4方から削って尖らせ、矢板状に加工したものである。結桶の緩んだ箍を締める楔かもしれない。W45はあまり湾曲していないが針葉樹板目材を用いた幅8.75cmの板材で、風化の状況が他の桶材と類似している。

W46・47はスギ板目材の円盤状の破片で、直径30.7cmを復元する。厚さは1.2cm。同一個体の可能性がある。W46の長側辺は割れており、もう一方の側面には2ヶ所の目釘孔が穿たれている。表面には3ヶ所の円孔が残されている。W47の長側面には3ヶ所と1ヶ所の直径0.4cm程の目釘孔が見られ、木釘も残存している。数枚の板を綴って円盤を作っていたものである。繊維方向に直交する中心を通る直線上に円孔が複数穿たれ、一部には木釘が残存している。また、貫通していない孔も存在する。1面では円孔列部分を帯状に残して幅約2.5cm程の削りを施している。把手が取り付けられてW36と同様に鍋などの蓋と思われる。両者とも一面に黒色の物質が付着しているが、表面が平滑ではない。沈殿付着物であるなら、別の製品の可能性を考慮しなければならない。釘孔は桶の底板の補強或いは底板に十字に打ち付けた足のようなものを想定することができよう。

W48はスギを用いた組物で、箱などの部材と思われる。長さ31.25cm、幅5.95cm、厚さ1.55cmに丁寧に成形された板目材で、一方の短辺を幅1.0cm、深さ0.5cmに一段削り落としている。この段は鋸で溝を挽いた後に削っており、溝が一部残存する。木口面に1ヶ所目釘孔が認められる。また、一方の長側面にも目釘孔が3ヶ所穿たれるが、全体に偏った位置にあり、幅0.8cmの長方形の孔や、側面にかけて上下に貫通するものがある。内面の中心に2本の細い罫描き線が軸方向に直交して引かれている。外面にのみ黒色の皮膜が付着するが、表面は平滑ではない。

W49は竹筒で、4ヶ所の節を含んだ長さ36cm弱の竹で、枝はすべて落としている。端部の一方は2回程

度刃を打ち込んで斜めに切り、もう一方は少し段が残るものの直交方向にきれいに切断されている。尖った側の節は抜けているが、他の節は残存している。節の残る部分の器壁には0.2～0.4cmの小円孔が4ヶ所と3ヶ所開いている。

W50は擂り粉木と思われる。直径4.4cmの樹皮を残した二葉マツの丸太材の細い側は、両面から直角に鋸で溝を入れて一段落として中心部を板状に残し、両側から円孔を穿って吊り手部を設けている。他端は丸く擦り減っており、擂り粉木としての使用が認められる。擂り粉木に用いられる木材には現在でもサンショウやシナノキ等があげられるが、マツ属複維管束亜属の二葉マツ（クロマツ・アカマツ）はあまり使われない。

W51～53は下駄である。W51・52は、別個に作製した台部と歯を組み合わせた差歯下駄で、構造下駄に分類される。台部裏面に設けられた二本の溝の中のほぞ孔に嵌め込まれた歯が台部を貫通し、表から見える露卯下駄である。台部は柾目材を用い、前幅が広がる長方形を呈し、裏面は四方から斜めに中央が高くなる形態である。W51はトネリコ属を用いた歯を失った台部で、鼻緒の孔は上面からは円孔を穿ち、下面からは鑿を打ち込んだだけの方孔を穿っている。後ろの歯を装着する溝と方孔の間の一部が焼け焦げている。W52の歯は板目材を用い、中央1ヶ所に出ほぞを作り出す。歯は使用により丸く擦り減っている。後ろの歯の方がより擦り減って、低くなっている。表面や目の孔内にも使用痕が見られるが、左右の判別は付けがたい。台部と後ろの歯がカツラ、前の歯がクリを用いている。付け替えたものであろう。

W53は一木から台部と歯を作り出した一木下駄で、2本の直線的な歯を有する連歯下駄になる。モミ属の板目材を用いている。歯の前後の根元に鋸の痕跡と思われる小溝が観察できる。歯はよく擦り減っており、特に後歯が低くなっている。また、両歯とも右側が低くなっており、後の歯は欠けていて、補修のためか孔を穿っている。表面や目の孔内にも使用痕が見られるが、左右の判別は付けがたい。

W54～56は針葉樹板目材を用いた板材で、釘孔を有し、おそらく建築部材に用いられたものであろう。W54は厚さ1.2cmの板材で、表面を斜め方向の手斧様の工具で削っている。刃物は一部刃こぼれが観察できる。W55はカヤを用いた厚さが1.85cmある頑丈な部材である。表面には斜め方向の細かい擦痕が残され鋸を用いたものと判断した。裏面はより平滑で切削痕は観察できず年輪界が浮き出ている。おそらくこの裏面が本来の表面で、床材などに使用されていたものであろう。短側面は鋸で切った後、手斧様の工具で整えている。短側辺に沿って2ヶ所の孔が穿たれるが、方形を成しており、細いノミを用いたものかもしれない。W31から挽き出された板材と厚さが通じる。

W56は厚さ1.0cmの板材で、48cm以上の長さをもつものである。一隅近くに円孔が穿たれている。

W57・58は角材である。W57は鋸によって切り落とされた端材で、表面には手斧様の工具による削りが残るが、裏面は調整されていない。W58は5.1×2.6cm、長さ25.95cmの二葉マツの角材で、両端部に釘が斜めに打ち込まれた痕跡が残るが、貫通は浅く、別部材に打ち付けたものではない。側面は鋸の痕跡を残しながらも、一部が非常に平滑で、鉋などを使用した可能性がある。

W59～61は杭である。丸太材の一端をW59では6方向から2～6回、W60は0.1cm幅の刃こぼれが1ヶ所ある刃物で、4方向、更に上部では7方向から1～4回削って尖らせている。上端部は風化によるものか劣化が著しい。W59ではクリを用いている。W61は長さ63.65cmで、直径3.9cmの丸太材を用いており、上端部にも切り込みや表面を削った痕跡が残ることから、ほぼ全長が残るものと思われる。下端部は7方向から1～2回程度、刃物を入れて尖らせている。先端は丸くなる。中央部分が大きく括れている。枝などは落とされているが、樹皮が一部残存しており、サクラの木かもしれない。

⑤　SK608（図版60・61、写真図版97・98）

W62～66はSK608から出土した。SK608は石組護岸をもつ大型の方形土坑である。石組の護岸は崩されて埋められており、北西部に突出するSK510との平面的な埋土の相違は観察できなかった。同時期に埋没した可能性が高い。出土した土器類は17世紀後葉までの時期のものが出土している。

W62・63は一木下駄である。W62はスギの台部裏面の中央を刳り、前部・後部に広い接地面をもつ露地下駄と呼ばれるものである。鼻緒の保護のため裏面の前壺周囲を方形に刳り込む。鼻緒孔の目内部には一部に縦方向の刃筋が観察され、鑿などの工具で両面から円形に抉り込まれたものである。表側には使用による指の痕跡が残り、裏面の歯の前後が最もよく擦り減っている。W63は二葉マツを用いた材の四隅の角を丸めた形状で、側面には鉈や手斧様の工具で上下方向に削った成形痕が残る。歯はよく擦り減っているためか低い。歯の前後の根元には、削り出す前に挽かれた鋸の溝が残されている。表面や目の孔内にも使用痕が見られるが、左右の判別は付けがたい。

W64はクリを用いた長さ35.3cmの棒状の形態で、基部は切断後、角を面取りしている。徐々に先細りとなるが、先端から15cmの位置から一側面に刃を付けるように削っている。先端近くの背には斜め方向の浅い切り込みが見られる。

W65はトチノキの横木取り挽物の漆器大皿で、直径30.4cmを復元し、器高2.8cmを測る。木地轆轤挽きの痕跡を残した高台は碁笥底を呈し、直径19.0cmの範囲で刳り込まれている。外面には黒色漆が施され、内面には赤色系漆を塗布した上に海老2匹の文様を描いている。追いかけるように左方向を向き、尻尾は皿の中心に向かって曲げている。1匹の髭は粘りが強く盛り上がるような黒色漆、もう1匹の髭は足と同様の金色を呈し、金色或いは銀色の微細粒を混ぜた透明な漆を用いている。黒褐色を呈した甲殻は同じ微細粒を少量混ぜた薄墨色の黒色漆を用いている。口縁部の布着せは観察できない。赤色系漆の下には黒色漆が覗く。高台接地部や口縁端部が使用のためか摩滅している。SK510出土のW67と同一個体の可能性があるが、接合できない。少なくとも対あるいはセットで作製・使用されたものであろう。

W66はコウヤマキを縦木取りで用いた杓子である。卵形の匙部から一旦厚さを減じて柄部に続くが、柄を欠く。柄は斜め上に続くようである。側面には成形痕が残る。欠損部以外はやや黒ずんでいるが、膜面は観察できず、柿渋などを塗布したものかもしれない。

⑥　SK510（図版61、写真図版99）

W67はSK510から出土した漆器大皿である。SK510はSK608の北西に付随するように検出された。碁笥底の底部を有する直径29.4cm、高さ3.3cm程の大皿が復元できる。外面は黒色漆が塗られ、内面には赤色系漆が塗られた後、海老の髭が黒色漆で描かれる。底部接地面及び口縁端部が使用によるものか漆が剥がれている。トチノキを用いておりW65と同一個体或いは少なくともセットで作られた可能性がある。

⑦　SK419（図版62、写真図版100）

W68～72はSK419から出土した。SK419はSR400とSR415交点の角に設けられた埋桶である。

W68は曲物の底板で、厚さ0.25cmの薄いスギ柾目板を円形に成形している。表面に墨書が残り、「□堂正藤」と読むことができる。上下が欠損していることから各々もう一文字書かれていた可能性はある。蓋として使われた可能性が高い。

W69はブナ属を用いた杓子である。短い柄に円形の匙部が連続する横杓子である。柄の端部は欠失するが、すでに細く薄くなることからあまり続かないものと思われる。匙部の刳り込みは浅い。全体に成形痕を顕著に残す。全体に柿渋或いは黒色漆を塗布したものと思われるが、膜面は形成されず、成形痕を残すものである。

W70はスギの白木丸箸である。全体にほぼ同じ幅を有するが、先端部及び基部近くのみ少し細くなるように削っている。基部端は真っ直ぐ切り落とし、先端部は使用のためか丸くなっている。長さ22.55㎝を測る。

W71は竹製の篦で、幅1.06㎝に竹表皮部分を残して薄く削り、断面はわずかに湾曲する。先端は丸く作っている。基部側は節の部分に当たる位置で失われているが、やや細くなるようである。

W72は建築部材と思われる。厚さ1.3㎝、幅5.9㎝以上の板材に長方形の釘孔を残した二葉マツ柾目の板材である。

⑧　SK601（図版62、写真図版100）

W73はSK601から出土した漆器椀底部である。よく踏ん張った高台から丸みをもって立ち上がる。クリを用いた木胎が分厚いことからやや大型のものとなろう。高台径は6.4㎝を測る。高台内面も含めて外面は黒色、内面は赤色系の漆で仕上げている。赤色系漆の下には黒色の下地が観察できる。

⑨　SK464（図版62、写真図版100）

W74は埋桶SK464から出土した。カキノキ属丸太材を使用した棒状の木製品で、上端部は面取りのように周囲から細かく刃物を入れて丸く成形している。上端から1.7㎝の位置に直径0.2㎝の円孔が貫通している。

⑩　SK449（図版62、写真図版100）

W75は埋桶SK449から出土した漆塗りの箸である。断面五角形に削られており、両端部を欠失するが、下端部は徐々に細くなる。下端から上端部近くまで赤色系漆を掛けているが、下地は不明である。上端部は黒色漆で仕上げており、塗り分けている。この部分の下地も黒色を呈している。タケを用いている。

⑪　SK65（図版62、写真図版100）

W76は上段中央地区のSK65から出土した。上段出土で唯一図化できた木製品である。

アスナロ属板目板材で、長さ21.35㎝、幅5.15㎝、厚さ0.3㎝の薄板に仕上げている。表裏面には少し湾曲した刃物痕が斜め方向に細かい間隔で並んで観察でき、一方の面では異なった方向の痕跡も観察できる。当初鋸の痕跡と考えていたが、各痕跡が擦痕ではなく、段を有しており、手斧様の工具で細かく成形したものと考える。節のある部分も残る。

⑫　SK575（図版63、写真図版101）

W77はSK575から出土した。SK575からは丹波焼擂鉢が出土している。アスナロ属を縦木取りした角材を削って把手状に作り出している。下半部を失っているが、外側の上方は斜めに削って小段を設けた後、直角に切り落としている。下方は斜めに削って続いている。内側の上方は3.6㎝の長さで平坦に仕

上げ、別部材との接合に備えているが、その下はわずかに内繰りをもち、角を面取りして手の当たる部分を作っている。接合部には直径0.5cmの木釘を打って別部材に取り付けたものと思われるが、この面と内繰りの面の段差はほとんどない。

⑬　SK621（図版63、写真図版101）

W78～80及び写真のみ掲載したW111・112はSK621から出土した。SK621からは土師器皿・炮烙・軒瓦など18世紀後半までの遺物が出土している。

W78は曲物或いは小型桶の底板である。スギ板目材を用いている。直径9.7cm、厚さ0.9cmを測る。

W79は漆器椀である。口径11.0cmを復元し、器高3.5cmを測る。高台を削り出し、横方向に開いた後、緩やかに内湾して立ち上がる。ミズキ属を用いており比較的器壁は薄い。全面赤色系漆で仕上げ、下には黒色漆が観察できる。

この他、写真を掲載した赤色系漆を内外面に施した漆器椀の口縁部W111や、外面が黒色、内面に赤色系の漆を施した漆器椀W112も出土している。

W80は一木下駄の破片で角を落とした方形の台部をもつ。前壺の目がわずかに残り、歯の付け根には鋸痕跡と思われる細い溝が残る。歯は低く、前壺より前方の下面もよく摩滅している。上面中央に焼き印が押されている。二葉マツを用いている。

⑭　SK736（図版63・64、写真図版101・102）

W81～96はSK736から出土した。その他に竹の薄板を編んだ網代片が出土している。埋桶であるSK736からは17世紀中葉～後葉の丹波焼甕などが出土している。

W81～85は針葉樹を用いた箸である。W82を除くと全体を削って断面円形に近づけている。W81は完形で長さ21.7cm、最大径0.6cmを測る。両端部は真っ直ぐに切り落としているが、下端部側をやや細く削っている。W82も完形で長さ21.0cmを測る。下半部では断面が扁平な四角形の各々の角を面取りした多角形を呈するが、上半部では成形は粗く一部が割り面のまま残されている。上端部幅は0.9cm、下端部幅0.4cmと細くなり、下端部は使用のためか丸くなる。また、下端部から8cm周辺には当たりが観察できる。W83・84は類似した材を用いて作られており、端部は真っ直ぐに切られている。W81はヒノキ、W84はアスナロ属を用いている。

W86・87は竹製の篦である。共に中央に節の部分を配し、外面は堅い表皮を残し、内面は平らになる程度に削っている。W86は上端部が右下がりの斜めに切り落としているが、薄くして刃を作るものではない。下端部は左下がりの斜めに切るが、表皮側から内面が薄くなるように斜めに切って、刃を作り出している。一部がささくれ立っており、使用によるものかもしれない。W87は下端部を真っ直ぐ切り落とすが、上端部は右下がりの斜めに切り、表皮側が薄くなるように刃を付けている。

W88・89は切匙である。W88は竹製で表皮も一部残している。刃部は表皮側を残して内側から削って刃を作っている。柄基部端に両面から刃物で穿った円孔をもつ。全長24.2cm、刃部長3.5cm、刃部幅2.25cmを測り、刃部先端は少し擦り減っている。W89はヒノキを用いており、W88よりは21.2cmと短めだが、刃部幅は2.95cmと太めで刃部長も4.4cmと大きい。刃は両面から削った両刃となるが、鋭さはない。柄基部端に両面から刃物で穿った円孔をもつ。刃部や柄の基部側は白木の木肌であるが、柄の刃部側は黒化しており、柿渋などが塗布されていて、使用により刃先や持ち手部が摩耗したものか。

W90・91は角材である。W90はカヤを用いており、割れたかけらの部分である。厚さ0.9cmの針葉樹

板目材の両面を丁寧に加工したもので、両面は使用によるものか黒ずんでいる。表面には細い刃物の古い痕跡が残される。W91は3.3×2.6cmの角材で、26.5cmの長さで残存する。下端近くに貫通する長方形の釘孔が見られ、さらに裏面に未貫通の釘孔がもう一つ見られる。下端部は対向する両面から切断しており、中央部は折り取っている。切断後に再利用したものか。下端の一部が黒ずんでおり、柿渋などが付着したものかもしれない。W58の角材とも長さはほぼ一致している。

W92は桶の底板で5枚の板を目釘によって繋いでいる。木取りは中3枚が柾目取り、両端が板目取りで、厚さも揃っていない。各々は目釘によって接合されるが、各材には隣り合った材に対応しない釘孔がある。但し中央の板には1ヶ所を除いては接合する材の対応する位置すべてに釘孔が存在している。破損に伴って補修されたもので、中央の材は新しく入れられたものであろう。5枚ともスギを用いている。現状で残存する目釘は、板状を呈しており、竹ではない。W93は桶樽板でスギ板目材を用いている。長さ29.6cm、幅5.75cmを測る。側面の1ヶ所に目釘孔が確認できる。

W94～96は二葉マツを用いた建築部材の板材である。W94は厚さ1.7cm、長さ55.15cmの半柾目材を用いており、一長辺と一短辺は直角に成形されるが、一長辺は斜めに削られている。下端部近くに1ヶ所、上端部に接して2ヶ所の釘孔が確認できる。表面には平行する細かい刃物傷が残る。W95は幅18.8cm、厚さ2.7cmの板目材に直径0.5cmの釘孔をもつものである。全長は残っておらず、表面の調整も不明である。W96は幅14.7cm、厚さ1.25cm、長さ51.2cmの板目材で、節の部分は斜め方向から手斧様の工具で丁寧に削って平らに仕上げており、その他の柔軟な部位の調整痕が観察できない程度に使用されたものと思われる。裏面には斜め方向の擦痕が残り、鋸挽きの製材痕と思われる。一方の長側辺はやや斜めに切られているが、もう一方は直角に切られ、面取りも行っている。一隅に近い位置に0.4×0.3cmの釘孔が開く。

⑮　SK888（図版64、写真図版103）

W97はSK888を構成する埋桶である。小型の桶でスギを用いた17枚の樽板と一枚板の底板で結桶を作る。樽板の最も残存の良い長さは28.8cmを測り、厚さは1.4cm程度の板目材を用いている。内面には縦方向に削った痕跡が残る。下から2～4cmの位置がやや凹み、当たりがあるため底板を嵌め込んだ位置と思われる。対応する外面にはやや斜め方向のあたりが観察できることから、構成していた竹材は失われているが、箍を嵌めていた位置と判断した。下から17cmの高さの外面にも同様の痕跡が見える。底板は樹芯近くの板目材で、厚さが2.0cmのものである。底板上面や樽板内面の下部表面には付着物が残る。

⑯　SK739（図版66、写真図版104）

W104はSK739の埋甕埋土から出土した竹筒で、下端は節の部分を斜めに4回以上刃を入れて切り落としている。切り口の裏面にも５回以上刃物を打ち込んでいる。他端は欠損している。

⑰　その他（図版65・66、写真図版103・104）

W98～103・105～109は下段北地区の機械掘削や遺構検出中に出土した木製品で、所属遺構が不明なものであるが、他の木器と同じ時期のものであろう。W98・99・102・103・105・108・109はSR415に属する可能性が高いが、大きく攪乱されており、上面から切り込んだ別の遺構の可能性も排除できないため、所属遺構は決定しなかった。

W98・99は桶の樽板と思われる。下端部は風化しているが残存しており、上端部は欠損する。W98の

内面には斜め方向に走る擦痕が見られる。W99の内面には4cmほどの幅に縦方向に削った痕跡が残る。外面は風化が著しい。

W100は針葉樹板目材の幅7.7cm、厚さ2.6cmの板材で、長側辺の偏った位置に１×2cmの方形のほぞ孔を深さ1.2cm抉っており、建築部材の端材と思われる。W101は針葉樹半柾目材を用いた断面長方形を呈した角材で、一方の長側辺に釘孔2ヶ所が見られる。短側辺の一方は切断されているが、ほかの面や角はよく摩耗している。

W102・103は一木下駄である。W102はW62と同様の台部裏面の中央を刳り、前部・後部に広い接地面をもつ露地下駄と呼ばれるものである。前壺周囲も刳り込むが劣化が著しい。二葉マツ芯持材を用いている。歯となる部分はよく摩滅しており、特に前端部と後端部が著しい。W103はアスナロ属を用いており、縦半分に割れているが、方形の台部を有す。前の歯、後ろの歯とも前後両側に鋸で切れ目溝を入れ、前中後ろを削り落としている。歯はよく擦り減っている。鼻緒孔の内面は黒ずんでいるため、藍染めされた鼻緒が通してあった可能性がある。後ろ壺の鼻緒孔は前外方に当たりがある。

W105はスギの半柾目材を用いた板材で、表裏面は黒色を呈しており、黒色漆を塗布したものと思われるが、丁寧に重ね塗りを施したものではない。W19などと同様に調度品などの箱物の部材であろう。

W106は針葉樹柾目材の幅1.4cm、長さ27.7cm、厚さ0.6cmの細板で、一端には破損しているが、径0.1cmほどの釘孔が見られ、もう一端には厚さの中ほどで止まった貫通しない孔が見られる。表面は丁寧に削って仕上げられている。

W107は厚さ0.9cmの板目材に円孔を穿ったもので、上端部には削った痕跡が見られ、下端部には切れ込みがあり、丸くなっている。円孔内も一部焼け焦げによるものか黒化している。W108は板目材に円孔を穿った部材であるが、欠損部が多い。両短辺が残存しているのであるなら、円孔ではなく凹部となる。凹部裏面は著しく摩滅している。W109はスギ柾目薄板で、上端部を斜めに切り落としていることから、屋根の隅部に用いられた柿葺きの経木板と思われる。厚さ0.2～0.35cm、最大長16.0cmを測る。

この他に、整形されていない小さな角材に、赤色顔料が付着するもの（W114）などが出土している。

４．小結

漆器の容器類には黒色系漆の盆、外黒内赤色系漆の椀や色絵の描かれた大皿、内外面が赤色系漆の椀がある。10点確認できたが、トチノキ・ケヤキ・ミズキ属・クリなどの広葉樹が用いられている。比較的薄造りの内外面赤色系漆椀にはケヤキやミズキ属が用いられており、黒色漆系の漆器にはトチノキやクリが用いられている。

これに対して器表面に膜面が観察できず、黒化しているものは柿渋を塗布したものと考えた。これらには箱物部材や杓子、桶材、切匙など9点があるが、主にヒノキ・スギ・アスナロ属・二葉マツ・コウヤマキなどの針葉樹が用いられており、杓子の1点に広葉樹のブナ属が使われていた。

下駄には連歯下駄と差歯下駄がある。連歯下駄にはモミ属・スギ・二葉マツ・アスナロ属が用いられている。差歯下駄台部にはトネリコ属・カツラが使われており、歯には台部と同じカツラとクリの別材を用いたものがあり、補修したものと考える。連歯下駄では針葉樹が用いられ、差し歯下駄では広葉樹が用いられている。

山名氏の此隅山城跡武家屋敷跡である宮内掘脇遺跡からは、16世紀前半から1580年の有子山城落城時

までの木製品が多く出土している。後半の安土桃山時代にはホオノキ等が含まれるモクレン属の差歯下駄・連歯下駄、二葉マツの連歯下駄が出土している。前半期の室町時代ではモクレン属の差歯下駄・連歯下駄、スギの差歯下駄・連歯下駄、ヒノキの差歯下駄、ヤナギ属・二葉マツの連歯下駄が出土しており、樹種、特に針葉樹が減っている。

17世紀前半～19世紀後半の明石城武家屋敷跡では、ヒノキ・スギ・二葉マツ・ネズコ・モミ・ツガ・カツラ・トネリコ属・ケヤキ・ホオノキ・ヌルデが用いられている。

【参考文献】

奈良国立文化財研究所1984.3「木器集成図録　近畿古代」奈良国立文化財研究所史料第27冊

兵庫県教育委員会1992.3「明石城武家屋敷跡」兵庫県文化財調査報告第109冊

第３節　金属製品（図版67・68、写真図版105・106）

１．銅製品

M1～4は銭貨である。

M1は上段中央地区SK820上面の攪乱部から出土した一銭銅貨である。

M2は上段南地区SK71出土。破損し折れ曲がるが、寛永通寶である。SK71からはM17の角釘も出土している。

M3は上段南地区包含層出土。寛永通寶　新寛永である。

M4は上段南地区の人力掘削の際に出土した寛永通寶（新寛永）で、裏面上部に「文」の字のあるいわゆる文銭である。1668～1683年江戸亀戸での鋳銭とされる。

M5は下段中央地区の埋甕SK739の甕内部埋土中から出土した銅製の水滴である。長さ4.4cm、幅2.7cm、高さ1.75cmの巻き貝を表しており、五本のらせんが表面に刻まれている。田螺であろう。体部中央の頂部に直径0.7cmの円孔を開け、らせんの先頂部に直径0.2cmの小円孔を開けて、水注としている。底板・筒部・上蓋部に分かれたものを接合しており、らせんは上蓋部のみに施されている。

M6は下段北地区の遺構面検出中に出土した。銅製の幅0.45cm、厚さ0.08cmの細長い薄板で、直角に折り曲げた部分から一方は直線的に作られ、もう一方はらせん状に円弧を描いて作られており、直線部と曲線部に作り分けられる。同様の形態には蚊取り線香立てがあるが、渦巻き形の蚊取り線香は明治28（1895）年以降のものである。

M7は下段北地区のSK450の埋桶埋土から出土した銅製の煙管吸口である。薄い銅板を筒状に丸めておそらく蝋付けしたものである。

M8は上段中央地区SK68出土の銅鈴である。当初、青銅製の分銅と考えていたが下部の溝の存在や、中実としては6.1ｇとやや軽く、X線透過写真で明瞭ではないが内部がやや透けていることから、本来内部が中空の鈴と判断した。上部に板状の突起が付き、0.2cmの円孔が両側に広がるように開いている。突起の上端部は両側から面取りを施してやや尖らせ気味になる。体部表面には溝状の文様のようなものが見られるが不明である。

M9は上段南地区南端部の調査中に出土した鉛製の玉で、鉄砲の弾丸であろう。直径1.4cm以下で一方が平たくなっている。11.7ｇの重さがある。

M10は下段北地区SR415の埋土から出土した。銅製の卸金で、柄部を欠くが、羽子板形の両面目立てのものと思われる。縁のない下端部の幅10.0cmから徐々に幅を減じて柄の方へと向かう。側辺は二重に折り返して表裏に縁を作っている。目の細かい表面は、目立鑿を幅0.1cm、0.2cmの長さで縦横0.3cmの間隔で一方向から打って刃を作り出している。1列に26ヶ所程度打ち込んでいるが、前後の列では目をずらしている。裏面では鑿を幅0.3cm、0.3cmの長さで斜め方向から打ち込んでおり、目相互の距離は列内では0.5cm以上となり、粗くなる。1・2列目は下方から打ち込むが、その後は上方、下方と交互に打ち込んでいる。厚さ0.1cmの銅板の両面から目を立てて刃を作り出しているが、貫通している箇所はほとんどない。羽子板形のものは江戸時代には作られていたものとされ、1712年頃に描かれた「和漢三才図絵」には「わさびおろし」として掲載されている。

2．鉄製品

M11は下段北地区SK419の埋桶埋土から出土した火打金で、方形の鉄板の両短辺と一長辺を薄くしており、その長辺の両隅から突起を突き出して木の把手への装着に備えている。一部に木質が残存する。火を切り出す部分は直線的でやや厚く、厚さ0.43cm、長さは8.1cmで隅は丸くなっている。

M12～19は鉄釘で、断面が方形を呈する角釘である。

M12は上段北地区のSK224埋土下半部から出土した。両端部を失う。

M13はSK342から出土した。SK342は上段北地区中央の東端にある段落ちである。下端部を失い、頭部も屈曲部を失っている。

M14は北地区の機械掘削の際に出土した。下端部を失うが、長さ3cm程度の小型のものである。

M15・16は上段中央地区SK70から出土した。M15は頭部を失うが、長さ5.2cm残存しており、小型のものと思われる。M16は下端部を失うが、長さ11.1cm残存しており、大型のものと思われる。頭部はあまり叩きつぶさずに曲げている。

M17は上段南地区北端のSX1007が埋まった後に掘られたSK71から出土した角釘で、両端部を失うが、上端部近くが屈曲しており頭部が近いものとすれば、残存長2.4cmから見て小型のものと思われる。

M18は下段南地区SK932出土の角釘で頭部を失うが、残存長8.62cmの大型のものである。

M19は上段南西地区SK2001埋土出土。0.5×0.6cmの断面方形のいわゆる角釘で、下端部を欠くが8.2cmの長さが残存していた。上端は薄く叩き伸ばして折り曲げている。上端から約8cmまで軸方向に直交する木質が残存しており、木に打ち込まれていたものである。

M20は上段中央地区のSK65の南半部から出土した板状の鉄片で、直線部には鈍い刃が付けられており、断面は蒲鉾状となる。0.6cmの厚さがあり、唐鋤等農具の刃と思われる。

M21は上段南地区SX1001出土の包丁で、茎端を失うが、全長25.0cm、刃部長21cmの刃先が上下から狭まる柳葉形の刃をもついわゆる出刃包丁である。大型のものであるが比較的薄造りである。

【参考文献】

永井久美男　1996「日本出土銭総覧」兵庫埋蔵銭調査会

第４節　石製品（図版69～71、写真図版106～108）

石鏃

S1は上段北地区のSK224北西の遺構検出面から出土したサヌカイト製の石鏃で、元々基部は凹基であった（意図していた）ようだが、平基状に再加工されている。長さ17.0mm、幅14.9mm、厚さ3.0mm、重さ0.5ｇである。形態・風化度合いを参考に、縄文時代後～晩期に属するものと類推した。周辺では数点のサヌカイト剥片が採集されている。

碁石

S2～4は遺跡内で採集された碁石と思われる自然礫である。S2・3は下段北地区、S4は南地区の表面採集品であるため所属時期は不明であるが近世以降のものと考える。厚さ0.45～0.65cm、直径が最大2.5cmの扁平な円礫で、灰色から暗灰色の自然礫を用いている。

砥石

S5～12は砥石である。

S5は下段北地区のSR400西肩部の上層攪乱層・下層暗青灰色粘砂から出土した砥石である。泥岩質の砂岩を用いた方柱状の形状をもち、表裏面と一側面を使用している。一方の小口は折損のためか一部に鑿状の工具による抉りが見られ、突出部は摩滅している。器表面は平滑で、縦横斜めに擦痕が残る。

S6は下段北地区のSR415から出土した。ホルンフェルスと思われる暗灰色を呈した粒状の部分が観察できる石材を用いており、方柱状の一面を使用している。使用面は大きく窪んでおり、縦横斜めの擦痕が観察できる。中砥か。

S7は下段南地区のSR400上面から出土した。両端部を欠失した板状を呈しており、表裏面、一側面を使用しており、残る一側面は成型痕のみで使用していない。灰色から黄褐色の石英質に近い硬質な石材を用いており、仕上げ砥であろう。

S8は下段北地区SE416の埋土下層から出土した。白色の筋の入ったきめの細かい青灰色の石材を用いており、このいわゆる輝緑凝灰岩は篠山から三田にかけての丹波地域で産出するものとされる。一端を失うが、方形板状の角を落として成型しており、小口面や側面には成形時の削痕が残る。表面のみ使用しており中央部付近が大きく窪む。仕上げ砥であろう。

S9は下段北地区のSR415から出土した。両端部を欠失し、断面が平行四辺形を呈しており、最も狭小な面のみ風化した自然面で、残りの3面をよく使用している。使用された各面の両端は小段をもって盛り上がっている。大理石のような石英質に近い硬質な石材を用いており、仕上げ砥であろう。

S10は北地区の上段裾で採集された。層状を呈した粘板岩系の石材を用いている。方柱状の石材を用い、左側面は剥がれ落ちているが、一端部は磨かれて平滑になっており、破損後も利用し続けたものであろう。表面は中央が緩やかに窪みよく使用されている。裏面は1/3の位置で屈曲し、各々使用している。右側面も平滑に使用されている。仕上げ砥或いは中砥であろう。

S11は上段南地区のSX1007の東肩から出土した。S8と同様の白色の筋や点の石紋が入ったきめの細かい青灰色の石材を用いており、層状に剥がれる。このいわゆる輝緑凝灰岩は遺跡近隣の丹波地域で産出するものとされ、同系統のものに中国の端渓硯も含まれるが、出土品は色が薄くやや軟質である。一端を失うが、方形板状の角を面取りして成型しており、小口面には横方向、側面には横方向とやや斜め方

向の成形時の削痕が残る。表裏面を使用しているが、裏面の過半は剥離している。仕上げ砥であろう。

S12は上段南地区のSK70から出土した。褐灰色の石材を用いており、端部と一側面を失うが、方柱状の形状をもち。４面を使用している。裏面は成形痕も認められず、割れた面を残す。一側面には横方向の鑿状の工具と思われる痕跡が残り、成形痕と思われる。割れた面を含めて一部に火を受けた可能性がある。仕上げ砥或いは中砥であろう。

石臼

S13～15は花崗岩を用いた石臼である。全て半分に割れている。いずれも近世以降のものである。

S13は下段北地区のSR400上層から出土した。上臼でもの配りの供給孔、軸受け孔、横打ち込み式の把手の孔及びその予備の孔が残る。復元直径34.3㎝、高さ18.9㎝を測る。上面には縁が付き、窪んでいる。下面は平らで、ふくみは少ない。供給孔は両側から穿孔されている。下面には供給孔に向かう弧状の溝と、その溝や孔から放射状に刻まれた溝が3区画分残っている。全体は6区画に分けられていたと思われるが、彫り直しの可能性が高い。

S14は埋桶と思われるSK437から出土した下臼である。軸受孔の一部が残り、幅0.6㎝程の細く浅い鑿の痕跡が斜めに走っている。4区画分残っており、復元すると8区画のものと思われる。直径28.35㎝、高さは10.0cmを測る。

S15は下段南地区のSD916から出土した下臼である。軸受孔の一部が残り、幅0.5㎝程の細く浅い鑿の痕跡が斜めに走っている。直径31.25㎝、厚さは7.1cmと比較的薄い。3区画分が残存しているが、5本、6本、8本と溝の数が異なり、目立てをし直した可能性が高い。

五輪塔

S16～18は五輪塔の地輪である。いずれも石組などの石材として再利用されたものであろう。今回の調査では五輪塔の他の部位は出土しておらず、利用しやすい直方体の石材を利用したものであろう。

S16は下段北地区のSR400上層の攪乱内から出土した。27.7×23.5㎝のやや長方形で、高さは22.1㎝を測る。下面が摩滅している。

S17は下段北地区のSR415から出土した。一辺21.5㎝の方形、15.3㎝の高さで、上面に直径4.5㎝、深さ2.0㎝の孔を穿つ。

S18は下段北地区のSR415から出土した。29.8×28.5㎝、高さ22.9㎝を測る。上面の中央部は直径15㎝ほど風化が認められない範囲があり、長らく水輪が乗っていたものであろう。下面は丁寧な整形は行っておらず、五輪塔としては土に少し埋まるような据え方をしていたものと思われる。

【参考文献】

三輪茂雄1978「ものと人間の文化史25　臼」法政大学出版局

第５章　西地区（日下部経塚）の調査

第１節　調査に至る経緯

平成26年9月から実施された日下部遺跡本発掘調査（遺跡調査番号：2014116）の際、調査区の北西側に隣接する斜面地でその存在が確認された遺跡である。

遺跡は、神戸市北区八多町柳谷付近のキスラシ山（標高443m）に端を発し、北に伸びる尾根先端部の東向斜面地に立地している。円形の積石塚状の遺構と、その上面周辺より土師器片が採集され、埋蔵文化財が存在する可能性があった。

このため平成27年2月から3月にかけてトレンチによる確認調査（№19－２地点・遺跡調査番号：2014153）を実施した。トレンチは西側斜面上方から東側下方に向けて幅１ｍ、長さ12.3m～16mの規模で7ヶ所設定した。

調査の結果、南側に設定したトレンチ（Ｔ１）で墳墓ないしは経塚の可能性をもつ積石塚状の遺構と、さらに北側のトレンチ（Ｔ２・３）では2ヶ所の平坦面が確認され、297㎡の範囲に埋蔵文化財が存在することが明らかになった。この範囲については調査前の現況を記録するため測量調査を実施した。

この成果をもとに、開発事業者である西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所と協議した結果、本発掘調査を実施することになった。本発掘調査は、平成27年4月7日から5月1日にかけて実施した。

なお、この西地区は他の地区とは離れており、立地や性格も他の地区が集落であるのに対して丘陵上の経塚と異なる。検出された遺構番号は、他の地区から独立して01番から付与した。

第２節　調査の方法

調査は人力掘削により埋土を除去した後、遺構面の精査を行い遺構を検出した。埋土はベルトコンベアーにより調査区外搬出した。検出された遺構は必要に応じて写真撮影・遺構実測等の記録作業を行った。また遺跡の立地状況を記録するため調査区内の地形測量を電子平板（遺構くんCubic：株式会社CUBIC製）により実施した。

第３節　遺　構

調査区は標高187～184mの東向斜面地に位置する。調査区南側で経塚SX01、中央付近で集石SX02、中央付近斜面下方と北端部で平坦面（テラス１・２）を検出した。以下遺構の詳細について述べる。

１．SX01（図版73～76、写真図版110～113）

調査区南側、標高187m～186m間に造成された平坦面上に築かれた積石塚状の経塚である。

平坦面は南北方向10m、東西方向４ｍの範囲に及び、その中央付近に南北方向6m、東西方向4.4mの範囲に楕円形に、大きさが5×5㎝前後から40×20㎝前後の亜角礫が敷き詰められている。石は中央部付近で2段前後、東側斜面部で3段前後積み上げている。中央部および南側は石の密度は高いが、北側は散乱した状況で人為的に破壊された様相を呈す。

中央部北寄りに35×35㎝、厚さ10㎝の扁平な石が敷かれており、石の上より土師器経筒底部片、中国

銭貨11枚が集中して出土した。扁平の石は石室の底板と理解でき、経筒の埋納場所と特定できる。

経塚の下部構造は斜面地を削平し、幅2.5m前後の狭小な平坦地を造っている。斜面上方側には溝状に削り出した痕跡が認められる。また平坦部の縁辺には東西方向2m前後、南北方向1.2mの土坑が掘削されている。遺物の出土はなかったが、10×15㎝～20×30㎝大の亜角礫が検出された。土坑の機能については不明である。平坦部造成後2層程度の土を盛土し塚を築いている。

経筒・副納品出土状況

経筒蓋298は底板を覆う埋土上層中より出土し、経筒口縁部・底部片299、中国銭貨（M22～32）11枚が底板直上ないしはその付近より出土した。このうちM32の皇宗通寶は底部破片の下、それ以外は底部破片の上より出土している。景祐元寶M24、元豊通寶M25、開元通寶M26、元豊通寶M28、元祐通寶M30、熙寧元寶M31は底部破片の直上より纏まって出土している。M23の元祐通寶はこれらの銭貨より少し浮いた状態、元祐通寶M22、皇宗通寶M27、嘉祐通寶M29は少し西に離れた状態で出土している。また天聖元寶M35は、銭貨が集中して検出された付近の表土中より出土している。

雁股鏃M33は埋納場所より30㎝東の石の間より、鏃身先を南に向けて出土した。刀子M34は埋納場所の南西側１mのところで、切先を北に向けた状態で出土した。

経筒・副納品は、盗掘を受け散乱した状況で出土したと考えられ、副納品は原位置をとどめていない。

２．SX02（図版72・77、写真図版113）

調査区の中央部斜面上方、標高186～187mの斜面地に立地する集石である。東西方向2.5m、南北方向2.0mの範囲に10×15㎝～30×35㎝大の礫が集中している。遺物は出土しなかった。

３．テラス１（図版72・77、写真図版114）

調査区中央、斜面下方の標高184～185mにかけて広がる平坦地である。南北方向10m、東西方向5m前後の規模である。平坦面は斜面地を2段に開削し、その後盛土で造成している。遺物は出土しなかった。

４．テラス２（図版72・77、写真図版114）

調査区北端、標高185～186.2mにかけて広がる平坦地である。斜面下方の東側部分の盛土は流出しており、全体の規模は不明確であるが、南北方向4m以上、東西方向2.5m以上の規模である。平坦面は斜面上方側を幅2.5mの規模で平坦に削り出した後、斜面下方部分の地山を削り出して整形している。

平坦面上方側には溝の痕跡が確認でき、SX01の下部構造と類似している。遺物は出土しなかった。

第４節　遺　物（図版78、写真図版115）

遺物はSX01より蓋付きの土師器製経筒と副納品の中国銭貨、鉄製雁股鏃・刀子が出土した他、表土中より須恵器杯身、銅製の笄が出土した。

１．土師器製経筒（298・299）

298・299はSX01中央部より北側の扁平な石の上（299）および表土中（298）から出土した。経筒と考えられる土師器製の蓋付容器である。

蓋298は全体的に剥離が著しく遺存状況は悪い。器形は天井部が丸く、口縁部が外傾する丸底の皿状を呈する。口縁部は復元値で17.0㎝、高さ3.0㎝である。

筒身299は胴部を欠き、口縁部と底部の破片が遺存していた。口縁部は内傾し端部を丸く収めている。胴部には斜め方向のユビナデの痕跡が認められる。底部は丸底でユビオサエ調整の痕跡が顕著に残る。口縁部径は復元値で15.2㎝、底径は13.8㎝である。筒身の高さは26㎝前後と想定しているが明確な根拠はない。

２．須恵器

表土中より杯身300が1点出土している。口縁部は短く内傾し、先端は尖っている。外面体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ（右回転）が施されている。法量は復元値で口径11.9㎝、受部径14.6㎝、器高4.05㎝である。

陶邑編年のＴＫ209型に併行する時期と考えられる。

３．金属製品（M22～M36）

鉄製品（M33・M34）

雁股鏃M33と刀子M34が出土した。いずれもSX01より出土している。

M33はSX01中央部東側より出土した大型の雁股鏃である。積石の直下で鏃身先端を南西方向に向け、ほぼ水平の状態で出土した。鏃身端・茎端部を欠損するが、残存長は10.05㎝、残存幅は5.1㎝を測る。股内側に刃をもつ片切刃造で刃部幅は1.9㎝、厚さは0.35㎝を測る。刃部は大きく反り返っている。

経塚から出土する太刀や刀子には折り曲げられたものがあることが知られており、同様の行為が行われた可能性が考えられる。鏃身部と茎部の境は台形関で、茎部の断面形は四角形を呈する。

M34はSX01中央部付近より切先を北側に向けた状態で出土した。長さ20.2㎝、刃幅2.5㎝、刃の厚さ0.6㎝の刀子である。刃先がわずかに反り上がり、直角の背関を有して茎部へ続く。刃先は斜めに造られる。先細りの茎部の中央には直径0.6㎝の比較的大きな目釘孔が穿たれる。

銅製品（M22～M36）

中国銭貨（M22～M32・M35）と笄M36が出土した。

中国銭貨はM35を除きSX01中央部より北側の扁平な石の上に集中して出土した。その内訳は元祐通寶３枚、元豊通寶・皇宗通寶各２枚、景祐元寶・開元通寶・淳寧元寶・天聖元寶各１枚である。M26の唐銭を除きすべて北宋銭である。

M22　元祐通寶（北宋、初鋳年1086　篆書）縁が幅広。M23　元祐通寶（北宋、1086　篆書）。M24　景祐元寶（北宋、1034　真書）。M25　元豊通寶（北宋、1078　篆書）やや厚い。M26　開元通寶（唐、621　真書）裏面に笵ずれ。M27　皇宗通寶（北宋、1038　篆書）裏面わずかに笵ずれ。M28　元豊通寶（北宋、1078　行書）。M29　　嘉祐通寶（北宋、1056　真書）やや厚い。M30　元祐通寶（北宋、1086　篆書）。M31　淳寧元寶（北宋、1068　真書）。M32　皇宗通寶（北宋、1038　真書）裏面わずかに笵ずれ。M35　SX01周辺表土中出土　天聖元寶（北宋、1023　篆書）裏面に笵ずれ。

笄（M36）

M36は調査区南西側の表土中より出土した銅製笄である。折れ曲がっているが長さ15.9㎝の完形である。上端部は軸方向に直角に終わっており、背面は角を面取りしている。

基部の幅は1.55㎝で、上端から8㎝の位置以下から幅を減じている。基部表面の中央に幅0.5㎝、深さ0.2㎝の断面形がU字形の溝を10.5㎝の長さで走らせており、溝の周囲は幅0.2～0.3㎝、高さ0.1㎝で盛り上がって縁取りを施している。同じ縁取りは上端部にも見られる。この縁取り部や溝の底では白褐色の銹が生成している。他に魚々子模様などの装飾は見られない。基部の両側面は刃をもつように薄くなるが、幅を減じた部分の断面は比較的丸い。

第５節　小　結

調査の結果、積石塚状の遺構SX01は雁股鏃・刀子・中国銭貨を副納する経塚であることが判明した。その構造は地山を開削し、斜面下方に盛土することにより平坦面を造成している。その後さらに塚状に盛土を行い、盛土上に石を敷き詰め、土師器製経筒片と中国銭貨が集中して出土した扁平な石を底板とし周囲を石で囲い石室が構築されていたと考えられる。

ただ散乱する石や副納品の状況から盗掘による破壊を受けており、石室構造や経筒等の埋納状況は明らかにできなかった。

またテラス１・２についてもSX01と同様の基礎構造をもっており、複数の経塚の存在が想起される。

積石に用いられた石材は、周辺の露頭観察から判断すると、地山中に含まれる亜角礫ないしは円礫が使用されている。

土師器製経筒の出土した経塚は三田市下深田経塚、姫路市甲山経塚、赤穂市八祖山経塚、篠山市上板井経塚・西山北古墳経塚・丹波市立石経塚、朝来市宮ノ谷古墳群経塚、豊岡市馬場ケ先古墳経塚・田多地経塚などをはじめ、日下部遺跡近隣の神戸市北区淡河町で萩原経塚・北別僧経塚がある。

第３図　調査区周辺の露頭

なかでも本遺跡出土の経筒は、豊岡市馬場ケ先古墳経塚出土の経筒と口縁部の形態、丸底の底部などが類似している点が注目される。

経塚の時期については、副納品の中国銭貨が参考となる。北宋銭のうち初鋳年代が一番新しい元祐通寶（元祐年間：1086～1093年）以降の時期が考えられるが、唐銭である開元通寶を除きすべて北宋銭で構成されている点を考慮すると、12世紀代までに収まる可能性が高いと考えられる。

【参考文献】　森内秀造1992『兵庫の経塚』博物館普及資料第10集　兵庫県立歴史博物館
永井久美男1996「日本出土銭総覧」兵庫埋蔵銭調査会

第６章　日下部遺跡における樹種同定

１．はじめに

本報告では、遺跡より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

２．試料と方法

試料は、日下部遺跡より出土した提灯上輪、桶樽板、漆器椀、箸、樽蓋板、曲物底板、箱物、横櫛、鍋蓋、下駄などの木製品計77点である。なお、W52の下駄では差歯の状態が異なったため、またW92の桶底板では組合せの底板であったたため、計４点を参考試料とした。時代は近世である。試料は第２表に記す。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

３．結果

観察の結果、21分類群が同定された。第２表に結果を示し、分類群の顕微鏡写真を示す（第４～10図）。以下に木材構造の特徴を記す。

１）カヤ　Torreya nucifera Sieb. et Zucc.　イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で１分野に１～４個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が２本対で存在する。放射組織が単列の同性放射組織型である。

以上の特徴から、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性が強く水湿にも耐え、保存性が高く、弓などに用いられる。

２）マキ属　Podocarpus　マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やかで、多くの樹脂細胞が散在して見られる。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属にはイヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

３）モミ属　Abies　マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末

端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は５種であり、モミ以外は亜寒帯種であるため、温帯性のモミが考えられる。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

４）ツガ属　Tsuga　マツ科

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急である。放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、１分野に２～４個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴から、ツガ属に同定される。ツガ属にはツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20～25m、径50～80cmである。材は耐朽、保存性は中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

５）マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と穏やかな箇所があり、垂直樹脂道が見られる。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では、放射組織が単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴から、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材はいずれも水湿によく耐え、広く用いられる。

６）スギ　Cryptomeria japonica D.Don　スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

７）コウヤマキ　Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。

以上の特徴からコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽・耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

８）ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Endl.　ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭でらい、耐

朽、耐湿性も高い。良材であり、建築などに広く用いられる。

９）アスナロ属　Thujopsis　ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が存在する。放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型からややヒノキ型を示し、１分野に２～４個存在する。また放射柔細胞内に内容物が多い。放射組織は単列で、樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からアスナロ属に同定される。アスナロ属には、アスナロ、ヒノキアスナロがあり、常緑高木で、本州、四国、九州に分布し、関東北部や木曽に比較的多い。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径１mに達する。材は、耐朽、保存性が高く、建築など広く用いられる。なお、アスナロの特殊用途には漆器木地があり、輪島塗り（石川県）がそれである。

10）クマシデ属イヌシデ節　Carpinus sect. Carpinus　カバノキ科

小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は、同性で１～３細胞幅のものと、集合放射組織からなる。

以上の特徴からクマシデ属イヌシデ節に同定される。落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。

11）クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、ほだ木など広く用いられる。

12）ブナ属　Fagus　ブナ科

小型でやや角張った道管が、単独あるいは２～３個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。ほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、２～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の特徴からブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密で、靱性があり、保存性は低い。容器などに用いられる。

13）コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科

中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以

上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

14）ケヤキ　Zelkova serrata Makino　ニレ科

年輪のはじめに大型の道管が１～２列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で上下の縁辺部の細胞のなかには大きく膨らんでいるものがある。幅は１～７細胞幅である。

以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径３mに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

15）カツラ　Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.　カツラ科

小型で薄壁の角張った道管が、単独ないし２～３個複合してかなり密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40本ほどである。放射組織は、異性放射組織型で、２細胞幅である。道管内にチロースが多数存在する。

以上の特徴からカツラに同定される。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmであるが、大きいものは高さ35m、径２mに達する。材は軽軟で靱性があり加工しやすく、建築材などに用いられる。

16）イスノキ　Distylium racemosum Sieb. et Zucc.　マンサク科

小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性放射組織型で、ほとんどが１～２細胞幅であるが、まれに３細胞幅のものも存在する。多室の直立細胞には菱形結晶が見られる。

以上の特徴からイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径１mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

17）トチノキ　Aesculus turbinata Blume　トチノキ科

小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に２～数個複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。放射組織は単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

以上の特徴からトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽性、保存性が低いが、容器などに用いられる。

18）ミズキ属　Cornus　ミズキ科

小型で丸い道管が、ほぼ単独で散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～35本ぐらいである。放射組織は、異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のものと、２～５細胞幅ぐらいで紡錘形を呈する多列のものからなる。

以上の特徴からミズキ属に同定される。ミズキ属には、ミズキ、クマノミズキなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。材は建築、器具、彫刻、旋作、薪炭など

に用いられる。

19）カキノキ属　Diospyros　カキノキ科

中型の道管が、単独および放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の壁は厚い。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。いずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列し、リップルマークを呈する。

以上の特徴からカキノキ属に同定される。カキノキ属は、本州（西部）、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径１ｍぐらいに達する。材は、建築、器具などに用いられる。

20）トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で１～３列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に２～３個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチローシスが著しい。放射組織は同性放射組織型で、１～３細胞幅である。

以上の特徴からトネリコ属に同定される。トネリコ属には北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運動道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

21）タケ亜科　Bambusoideae　イネ科

基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。放射断面及び接線断面では柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列する。

以上の特徴からタケ亜科に同定される。タケ亜科にはマダケ属、メダケ属、ササ属などがある。

４．所見

同定の結果、日下部遺跡の木製品は、77点中57点が針葉樹であり、過半を占める。多いものからスギ23点、マツ属複維管束亜属13点、アスナロ属11点、クリ５点、トチノキ５点、ヒノキ４点、カヤ２点、モミ属２点、ケヤキ２点、カツラ２点、ミズキ属２点、マキ属１点、ツガ属１点、コウヤマキ１点、クマシデ属イヌシデ節１点、ブナ属１点、コナラ属アカガシ亜属１点、イスノキ１点、カキノキ属１点、トネリコ属１点、タケ亜科１点であった。

スギが最も多く、桶樽板、樽蓋板、曲物底板、桶底板、箱物、鍋蓋、下駄、箸に利用されている。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材で建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる樹木である。次いでマツ属複維管束亜属が多く、提灯上輪、鍋蓋、下駄、擂り粉木、角材、板材、丸太材に利用されている。重硬で水湿に良く耐え腐りにくい樹木である。アスナロ属は、曲物底板、箱物、柄、把手、下駄、箸、付木、板材に利用されている。アスナロ属は、ヒノキには劣るが木理通直、肌目緻密であり、耐久・保存性が高く、水湿にはヒノキよりもよく耐える樹木である。そのため建築や桶などの用材としてよく用いられる。ヒノキは、桶樽板、経木板、箸、切匙に利用されている。木理通直で大きな材が取れる良材であり、保存性が高い樹木である。特に心材は耐久・耐湿性が高く、用途は広汎で工作が容易で表面の仕上がりはきわめて良好で光沢が出る。カヤは、棒状木製品、板材に利用されている。耐久・保存性が高く水湿に耐える材であり、加工が容易で割裂し易く、表面の仕上がりが良好で光沢が出る樹木である。モミ属は、経木板、下駄に利用されている。モミ属は温帯性のモミと考えられ、耐久・保存性は低いが、軽軟なため加工が容易な樹木である。マキ属は、桶樽板に

利用されている。耐久・保存性は高く水湿に強くやや重硬で強靱な樹木である。ツガ属は、板材に利用されている。重硬で耐久・保存性は中庸で切削・加工はあまり容易でない樹木である。コウヤマキは、杓子に利用されている。耐湿性に特に優れ、針葉樹の中では最も加工が容易な材である。古代以前に多用され、また自然の繁殖力が弱いこともあり中世以降の報告例は少ない。クリは、漆器椀、下駄の歯、柄、杭に利用されている。なお、下駄は台と片方の歯はカツラであったが、もう片方はクリであった。クリは重硬で保存性が良い材であり、柱材などの建築材として比較的よく用いられる樹木である。トチノキは、漆器椀、漆器大皿、円形挽物などの容器に利用されている。耐久・保存性は極めて低く、切削・加工が容易な柔らかい材で、刳物の容器によく用いられる。ケヤキは漆器椀に利用されている。高木になり大きな材が取れ、概して強く強靱で従曲性に富み、耐久・保存性は高く水湿にもよく耐える樹木である。ケヤキは縄文時代以降現在まで伝統的に木地に用いられる材で、刳物に普通に使われるが、漆椀では挽物が多い。カツラは、同一個体の下駄の台と歯に利用されており、もう一方の差歯はクリであった。軽軟均質で、耐久・保存性は低いが、切削・加工が極めて容易な樹木である。また、明石城武家屋敷跡から出土した下駄の歯もカツラであった。ミズキ属は、漆器椀に利用されている。緻密で重さ、堅さともに中庸で、加工が容易な樹木であり、材は白く、磨くとつやが出るため盆や椀などの容器や器具の柄、杓子などに用いられる。なお、容器では椀などの丸物の木地に特に用いられる。クマシデ属イヌシデ節は、箸に利用されている。弾力性に富み、強さ中庸の材である。ブナ属は、杓子に利用さている。強さ中庸、切削・加工も中庸であるが、弾性と従曲性に富む材である。コナラ属アカガシ亜属は、輪切り材に利用されている。堅硬な材であり、広く用いられるが、西南日本では弥生時代以降、特に農耕具を中心に用いられる傾向にある。イスノキは、横櫛に利用されている。材質は耐久・保存性にすぐれるが、重硬で切削・加工が困難な材であり、櫛によく利用される。表面仕上げが良好であるため、細かい細工や器具類にもよく利用される。カキノキ属は、棒状木製品に利用されている。カキノキ属は概して堅硬な材と言える。トネリコ属は、下駄に利用されている。概して強靭で堅硬な材で、従曲性が非常に大きく、割裂は容易である。タケ亜科は、塗り箸に利用されている。材は乾燥が十分なされると硬さと柔軟さを備え割裂性に富み、また細工が容易であるので、さまざまな素材として利用される。

本遺跡で同定された樹種は温帯に広く分布する樹木が多い。桶樽板や箱物などの板状木製品や底板、鍋蓋などには加工が容易で水湿によく耐える針葉樹を用いて、椀や皿などの容器、横櫛などには広葉樹の中でも比較的加工が容易であるが丈夫で木目がきれいなものを用いる傾向が見られる。なお、一般に椀などの容器は刳物・挽物であり、その用材には形を整えやすく加工が容易であり狂いや割れが少ないことから、広葉樹材の中でも比較的硬いものが選定されることが多い。下駄には手に入れやすく加工が容易で水湿に耐える針葉樹を用いるが、一方で広葉樹のカツラを用い、破損部にはクリを利用し修繕しているものもある。同定された樹種は遺跡周辺や近隣地域より流通によってもたらされたと推定される。

【参考文献】

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

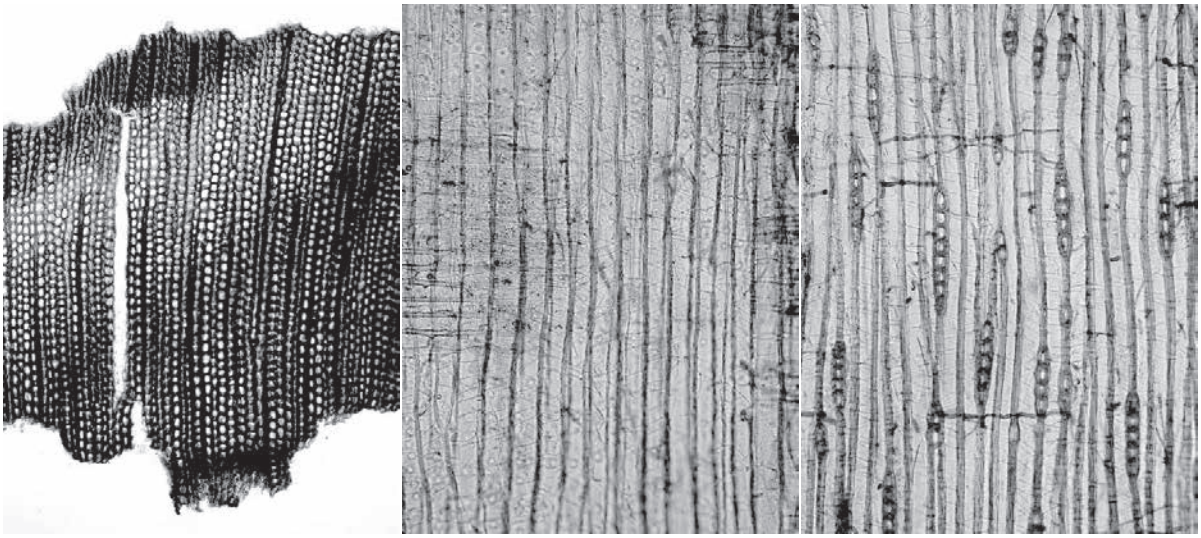
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.

第２表　日下部遺跡における樹種同定結果

番号	製品名	結果（学名／和名）		地区	位置	遺構	土層	備考
W 2	付木	*Thujopsis*	アスナロ属	中央		SR400 枝溝		
W 4	桶樽板	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	中央	北端	SR400	中下層	小型桶
W 5	提灯上輪	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北		SR400	上層	鋼鋲
W 6	輪切り材	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	南		SR400	埋土	
W 7	桶樽板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SR400	上層	
W 9	板材	*Tsuga*	ツガ属	北	南半	SR400	上層桜丸太列上	切り込み
W10	漆器椀	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ	北		SR415	畔内	赤色系漆
W11	漆器椀	*Aesculus turbinata* Blume	トチノキ	北	北東	SR415		外黒内赤色系漆
W12	円形挽物	*Aesculus turbinata* Blume	トチノキ	北	北東	SR415		黒色漆盆
W14	箸	*Carpinus* sect. *Carpinus*	クマシデ属イヌシデ節	北	北部東半	SR415	畔整形時	
W16	樽蓋板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北	北端	SR415		黒色・転写文字
W17	曲物底板	*Thujopsis*	アスナロ属	北	北東部	SR415 の北肩上	灰色粘質砂	墨書
W18	長円形曲物底板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北	北東	SR415		円孔
W19	箱物	*Thujopsis*	アスナロ属	北	北端	SR415		黒色
W20	経木板	*Abies*	モミ属	北	北端	SR415 南岸の上	人力	折敷
W21	経木板	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	北	北東	SR415		
W23	柄	*Thujopsis*	アスナロ属	北	北端	SR415		円孔
W24	桶樽板	*Podocarpus*	マキ属	北		SR415	畔内	
W28	丸太材	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北	北部	SR415	埋土下半	
W31	製材板	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北	北端	SR415		横挽き
W32	曲物底板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北	北端	SE416	埋土東端部	釘孔
W33	曲物底板	*Thujopsis*	アスナロ属	北		SE416	埋土土層図あり	
W34	曲物底板	*Thujopsis*	アスナロ属	北	北部	SE416	埋土下層	
W36	鍋蓋	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北	北部	SE416	埋土下層	桶底か
W38	横櫛	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ	北	北端	SE416	埋土東端部	
W39	箱物	*Thujopsis*	アスナロ属	北	北部	SE416	埋土下層	木釘
W40	箱物	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北	北部	SE416	埋土下層	
W41	杭	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	北	北部	SE416	埋土下層	
W44	桶樽板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SK501		矢板状再加工
W46	鍋蓋	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SK501		桶底か
W47	鍋蓋	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SK501		桶底か
W48	箱物	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SK501		釘孔
W50	擂り粉木	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北		SK501		
W51	下駄	*Fraxinus*	トネリコ属	北		SK501		差歯
W52	下駄	*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.	カツラ	北		SK501		差歯
	下駄 歯 1	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	北		SK501		
	下駄 歯 2	*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.	カツラ	北		SK501		
W53	下駄	*Abies*	モミ属	北		SK501		連歯
W55	板材	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	カヤ	北		SK501		釘孔
W58	角材	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北		SK501		釘孔
W59	杭	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	北		SK501		
W62	下駄	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SK608	北端石組内	連歯　露地
W63	下駄	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北		SK608 北端	下層	連歯
W64	柄	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	北		SK608 北端	下層	
W65	漆器大皿	*Aesculus turbinata* Blume	トチノキ	北		SK608		外黒内赤色系海老絵
W66	杓子	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ	北		SK608	北端石組内	
W67	漆器大皿	*Aesculus turbinata* Blume	トチノキ	北		SK510	中央部西寄り	外黒内赤色系海老絵
W68	曲物底板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SK419	埋土	蓋　墨書
W69	杓子	*Fagus*	ブナ属	北		SK419	埋土	黒色
W70	箸	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SK419	埋土	
W72	板材	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北		SK419	埋土	釘孔
W73	漆器椀	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	北	北半	SK601		外黒内赤色系漆
W74	棒状木製品	*Diospyros*	カキノキ属	北		SK464	桶内埋土	
W75	塗箸	Bambusoideae	タケ亜科	北	中央	SK449	桶内埋土	赤色系・黒色漆
W76	板材	*Thujopsis*	アスナロ属	中央	上段	SK65		
W77	把手	*Thujopsis*	アスナロ属	北		SK575		木釘
W78	曲物 or 桶底板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SK621		
W79	漆器椀	*Cornus*	ミズキ属	北		SK621		赤色系漆
W80	下駄	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北		SK621		連歯　焼き印
W81	箸	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	中央		SK736	桶内埋土	
W84	箸	*Thujopsis*	アスナロ属	中央		SK736	桶内埋土	
W89	切匙	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	中央		SK736	内部埋土埋桶	
W90	角材	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	カヤ	中央		SK736	桶内埋土	
W92	桶底板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	中央		SK736	桶内埋土	組み合わせ
		Cryptomeria japonica D.Don	スギ	中央		SK736		
		Cryptomeria japonica D.Don	スギ	中央		SK736		
		Cryptomeria japonica D.Don	スギ	中央		SK736		
		Cryptomeria japonica D.Don	スギ	中央		SK736		
W93	桶樽板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	中央		SK736	桶内埋土	
W94	板材	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	中央		SK736	内部埋土	
W95	板材	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	中央		SK736	桶内埋土	釘孔
W96	板材	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	中央		SK736	桶内埋土	釘孔
W97	埋桶　249 ～ 266	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北		SK888		埋桶組み上げ
W102	下駄	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	北	北東	東半攪乱	機械	連歯　露地
W103	下駄	*Thujopsis*	アスナロ属	北	北東	東半攪乱	機械	連歯
W105	箱物	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北	北東	東半攪乱	機械	黒色
W108	加工板材	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ	北	北東	東半攪乱	機械	
W111	漆器椀	*Aesculus turbinata* Blume	トチノキ	北		SK621		外黒内赤色系漆
W112	漆器椀	*Cornus*	ミズキ属	北		SK621		赤色系漆
W113	漆器椀	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ	北		表採		赤色系漆

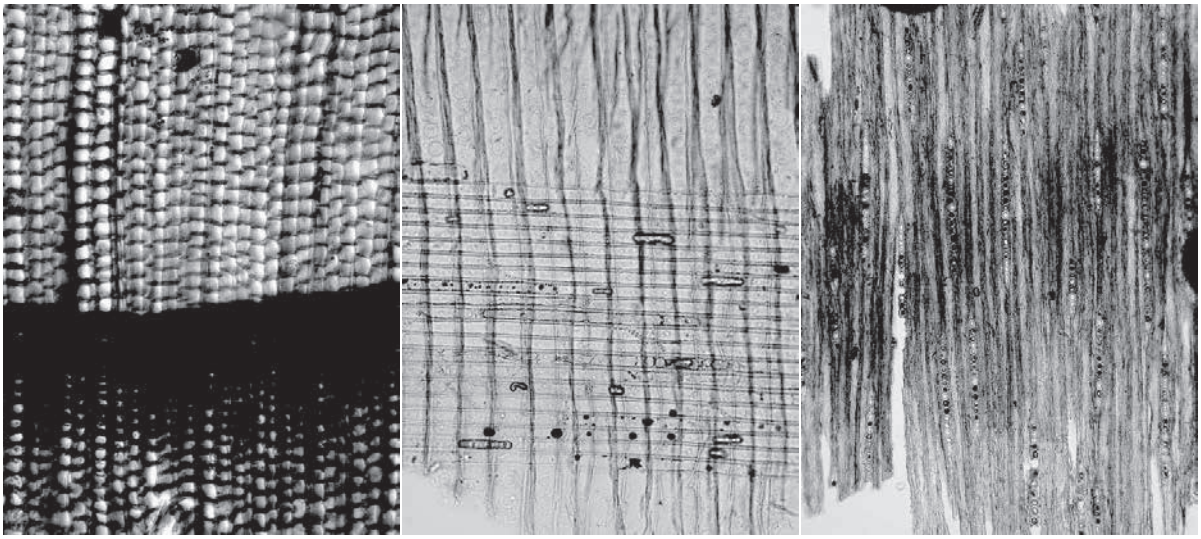


横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

カヤ　W55 板材

横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

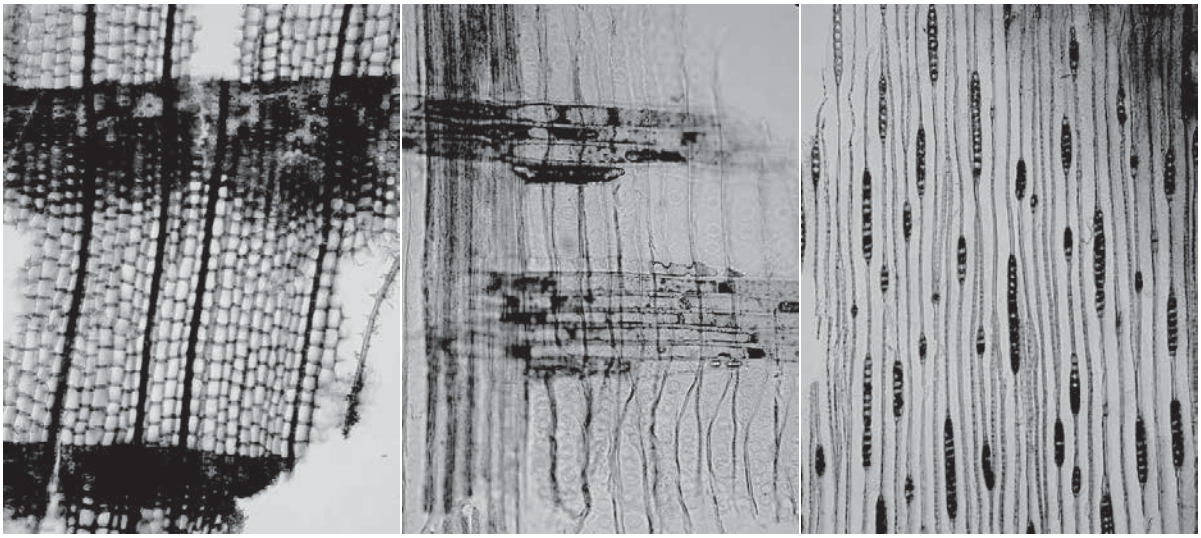
マキ属　W24 桶樽板



横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

モミ属　W53 下駄

第4図　日下部遺跡の木材I

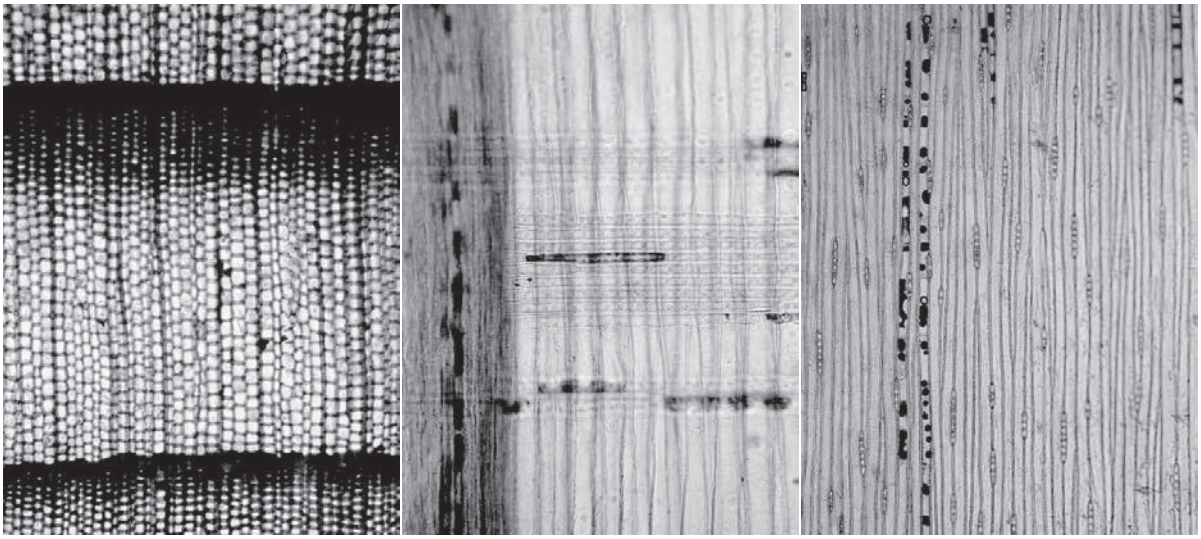


横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

ツガ属　W9 板材

横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

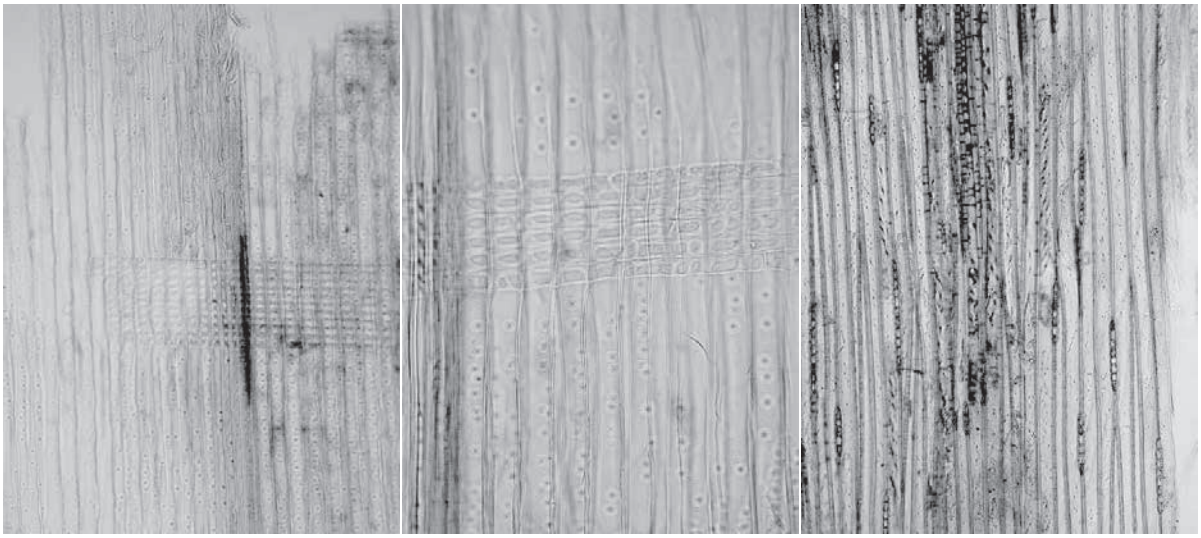
マツ属複維管束亜属　W28 丸太材



横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

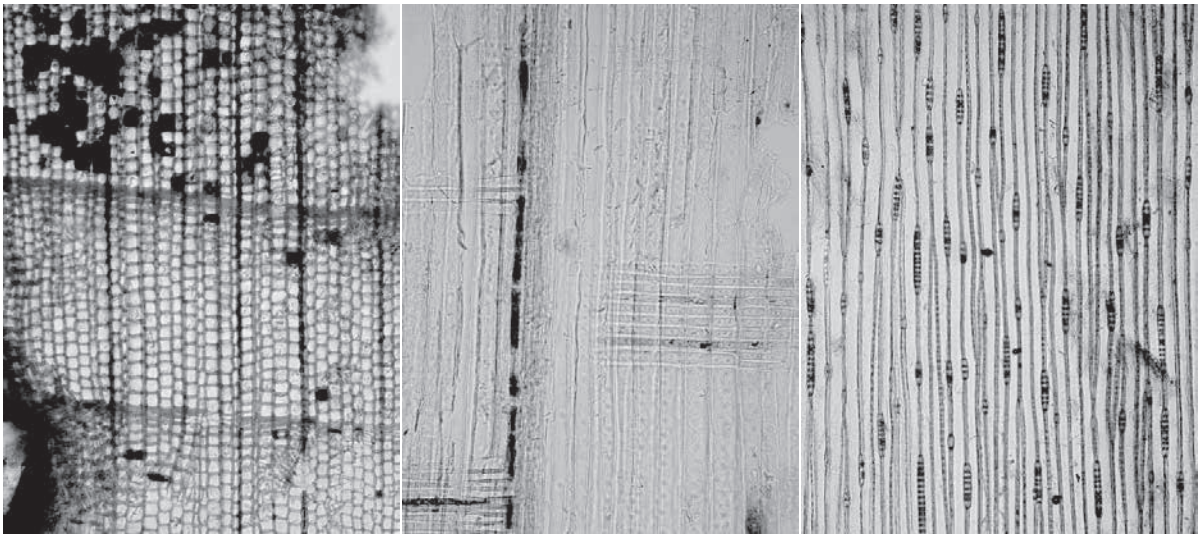
スギ　W62 下駄

第5図　日下部遺跡の木材Ⅱ



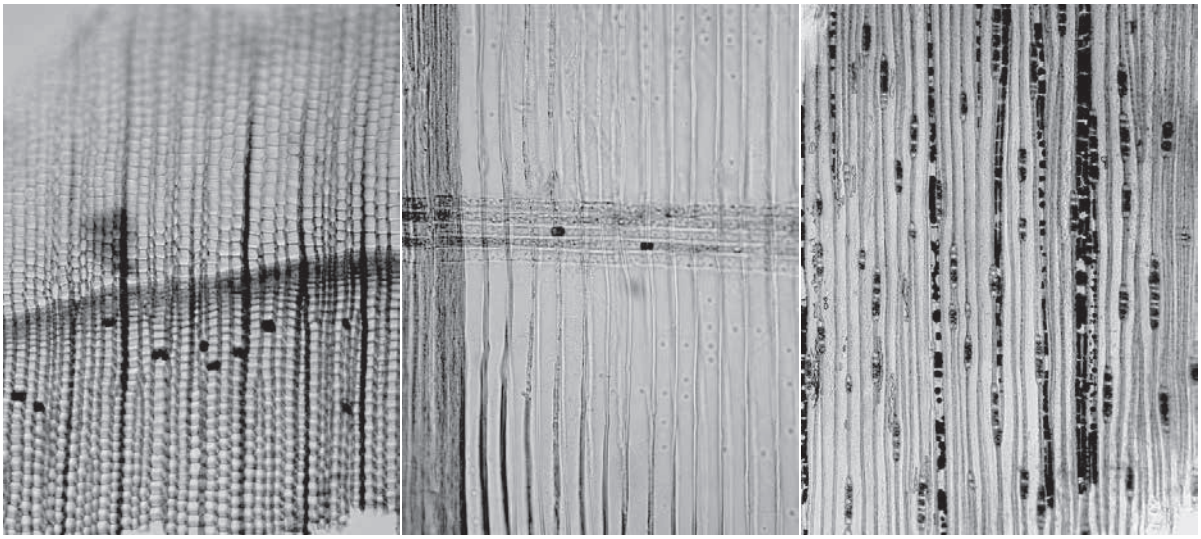
放射断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

コウヤマキ　W66 杓子



横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

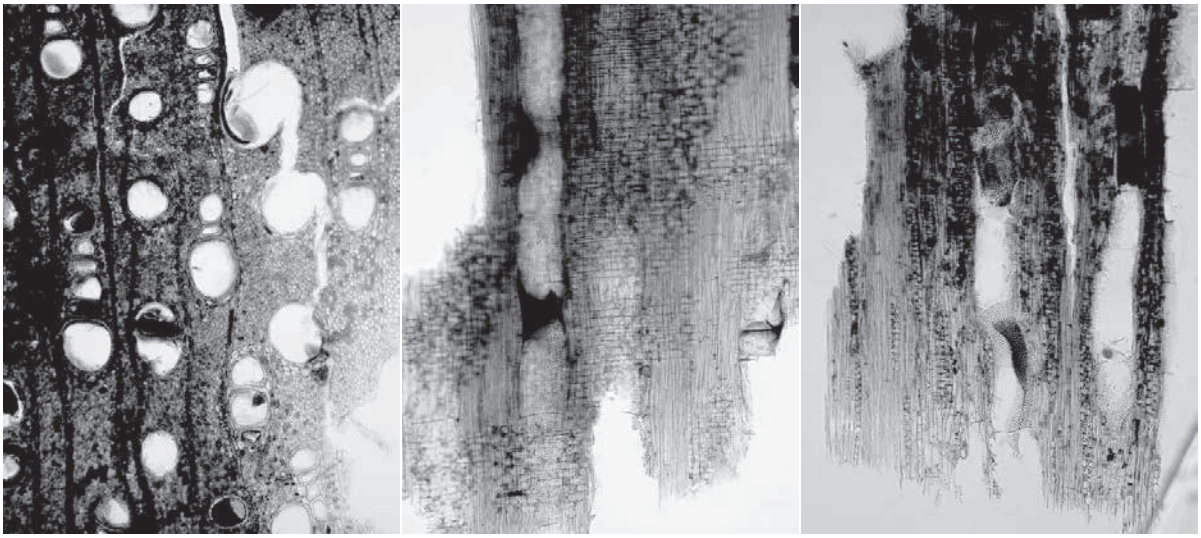
ヒノキ　W21 経木板



横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

アスナロ属　W77 把手

第6図　日下部遺跡の木材Ⅲ

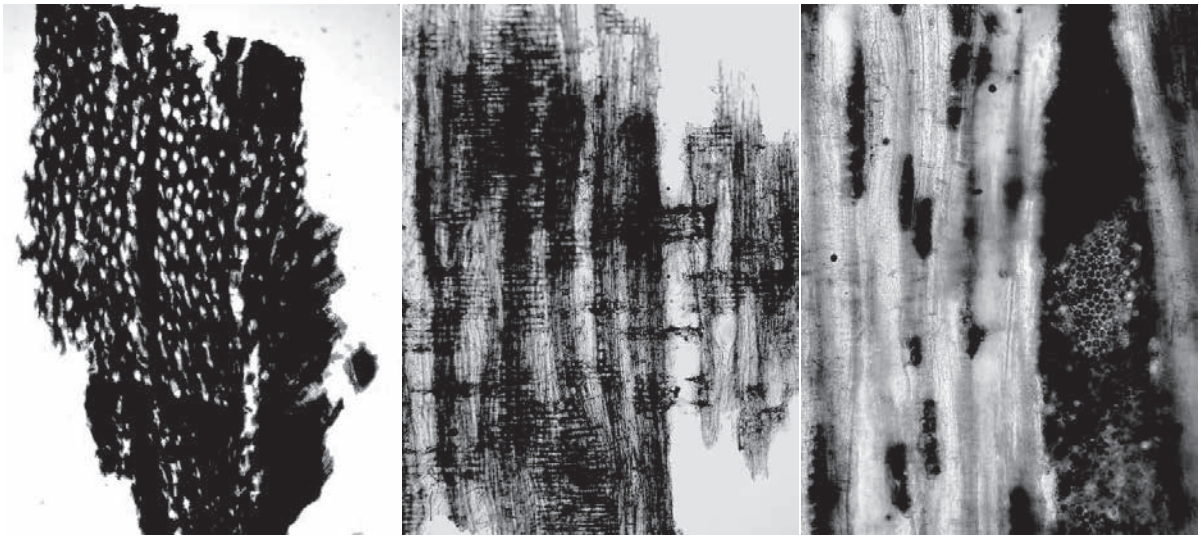


横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

クマシデ属イヌシデ節　W14 箸

横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

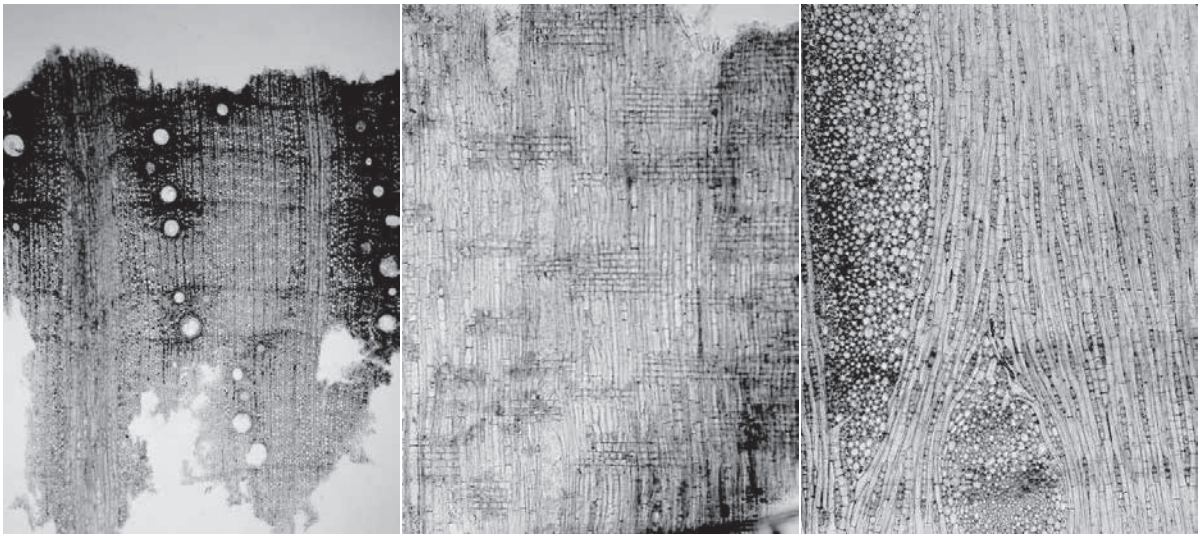
クリ　W41 杭



横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

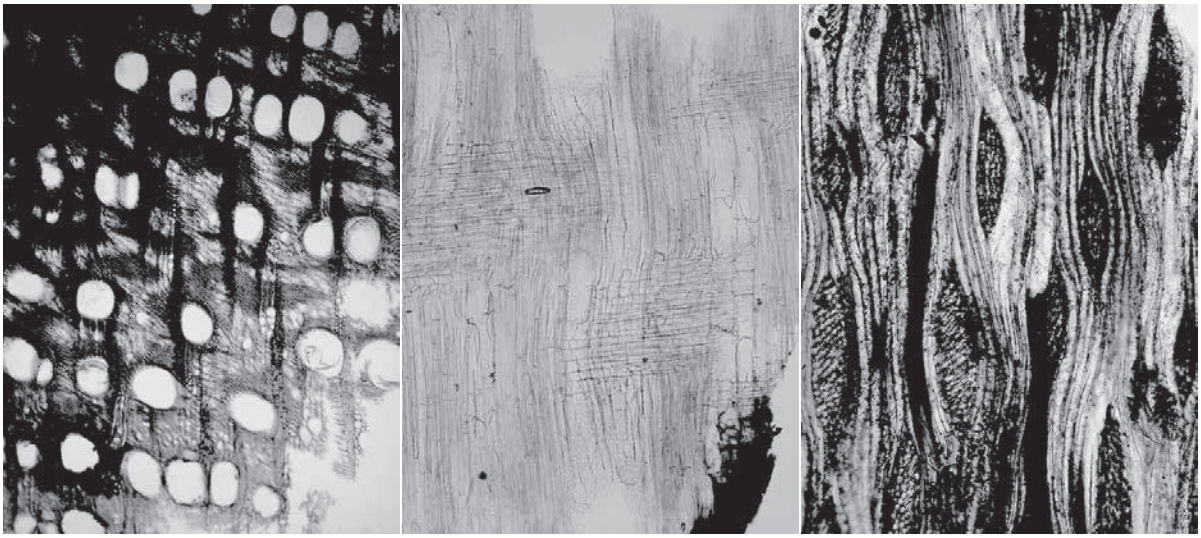
ブナ属　W69 杓子

第7図　日下部遺跡の木材Ⅳ



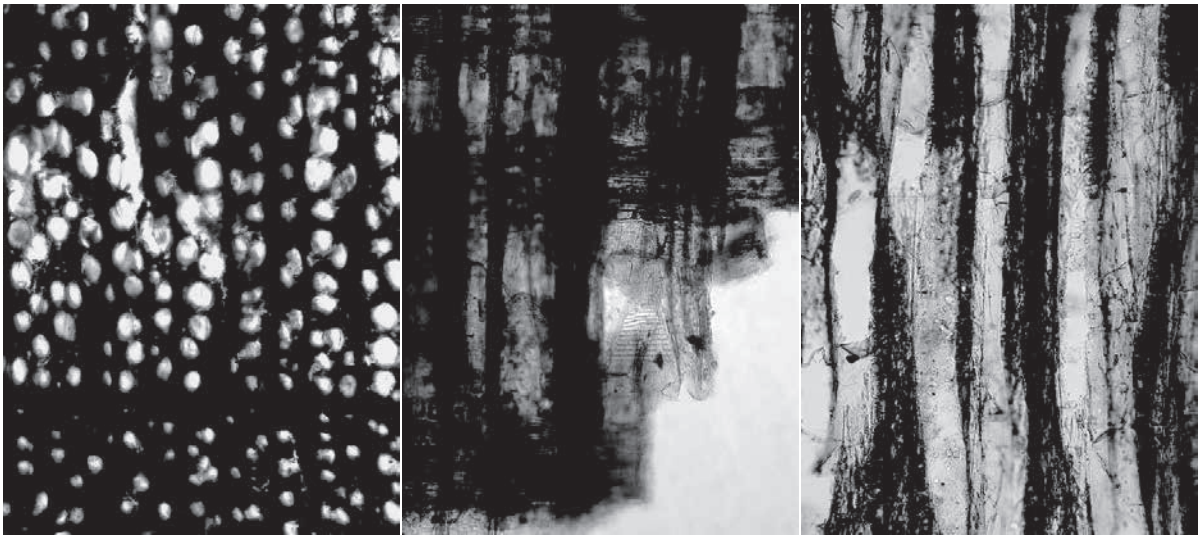
横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

コナラ属アカガシ亜属　W6 輪切り材



横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

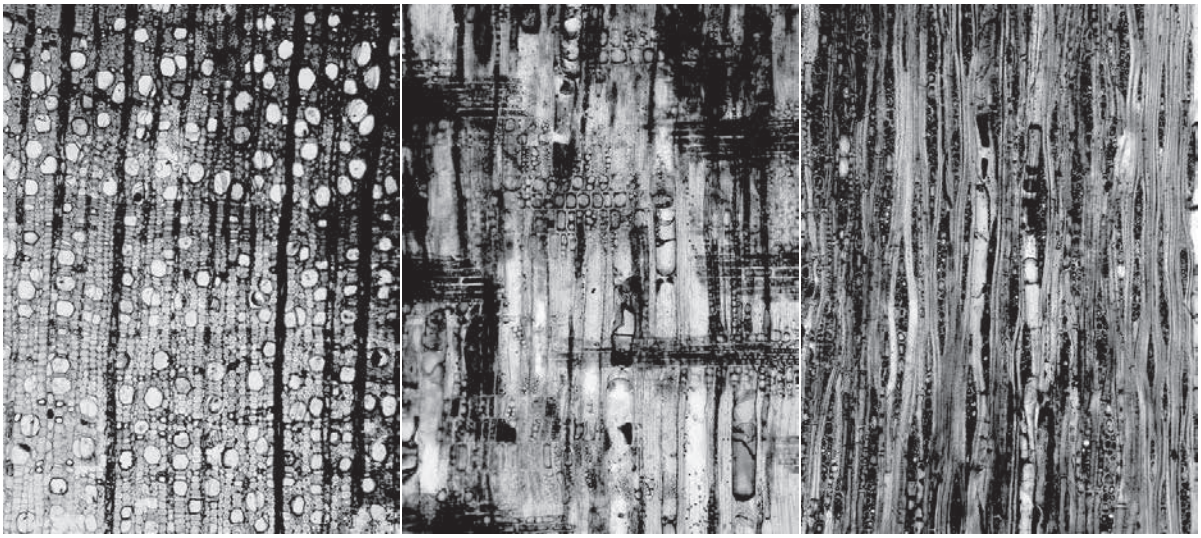
ケヤキ　W10 漆器椀



横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

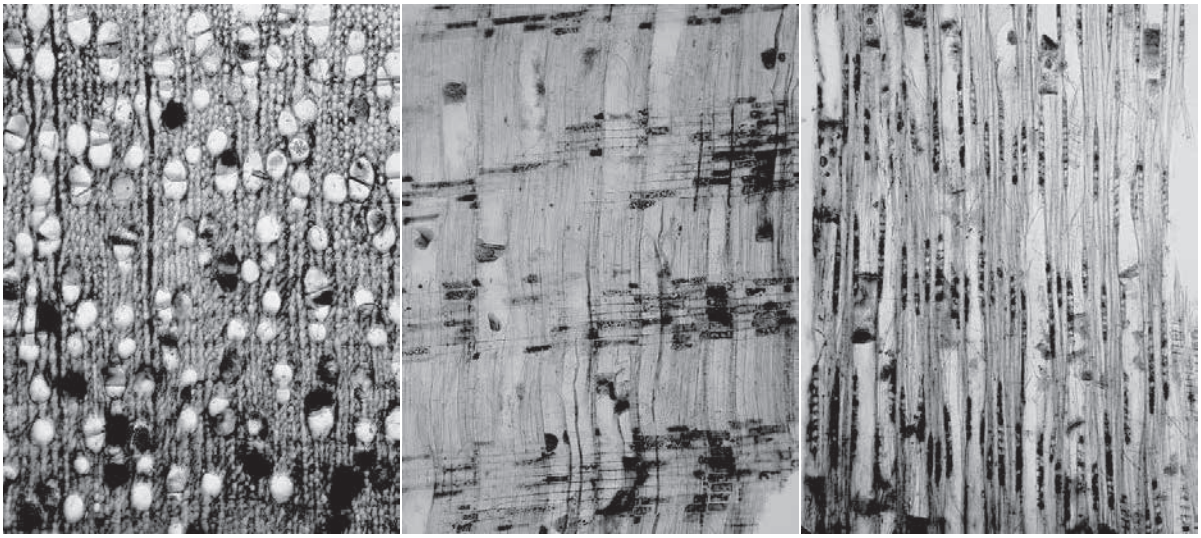
カツラ　W52 下駄 歯2

第8図　日下部遺跡の木材V



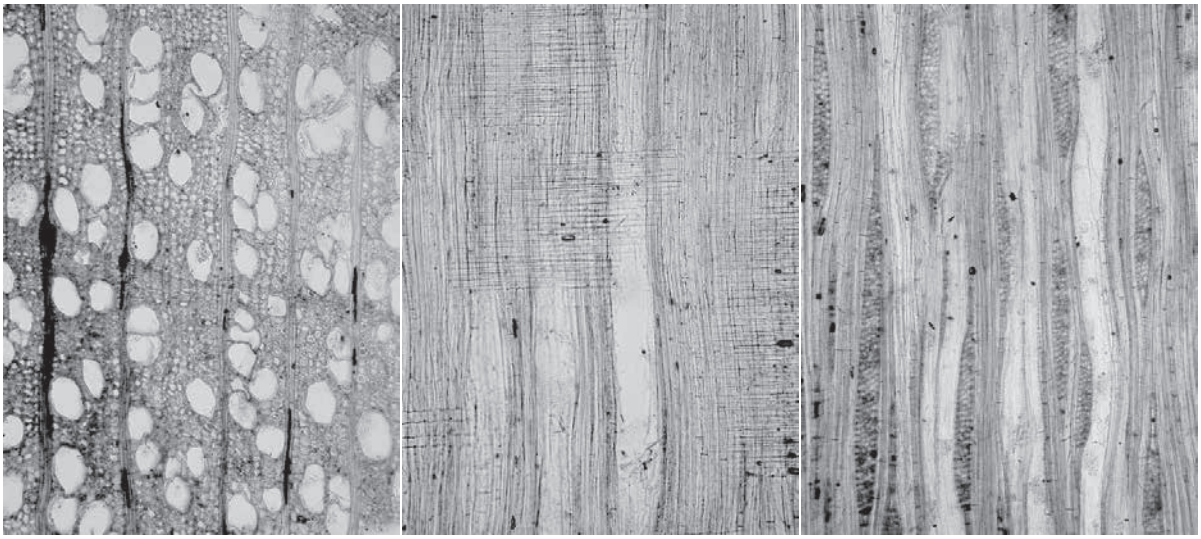
横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

イスノキ　W38 横櫛



横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

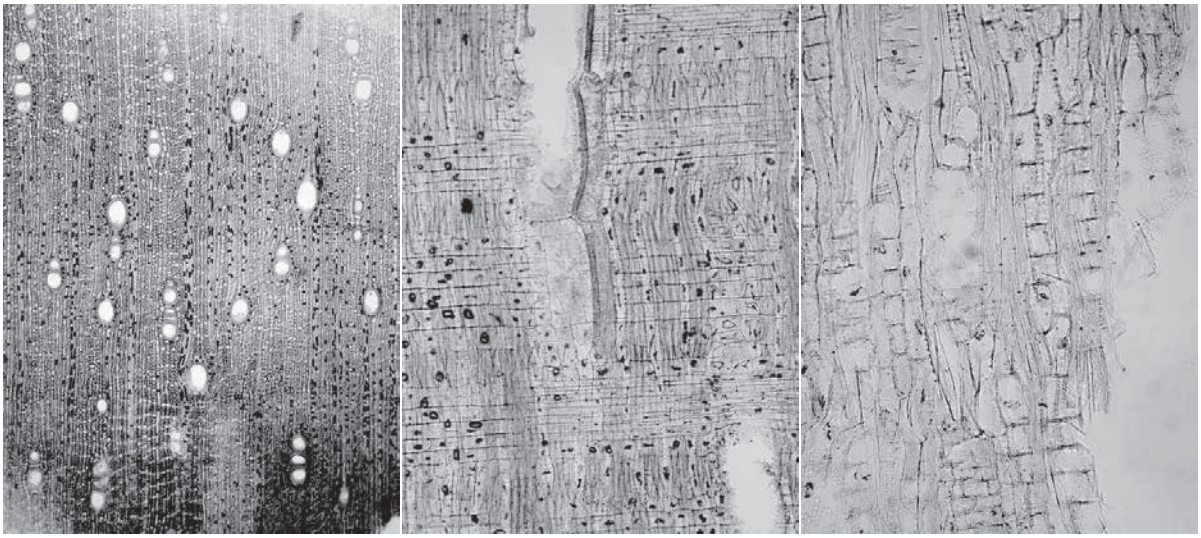
トチノキ　W111 漆器椀



横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

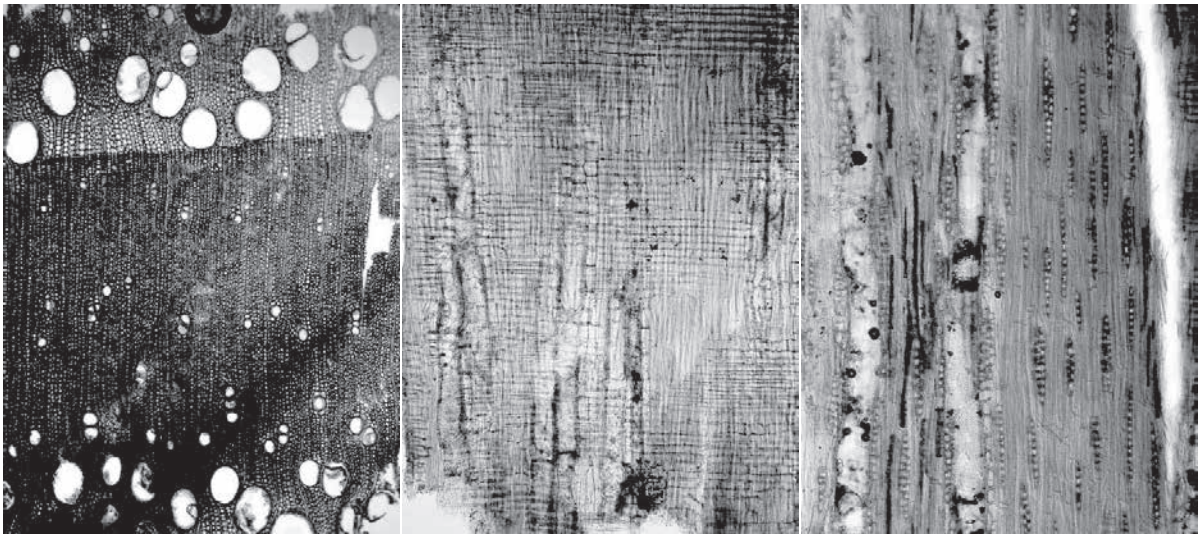
ミズキ属　W79 漆器椀

第9図　日下部遺跡の木材Ⅵ



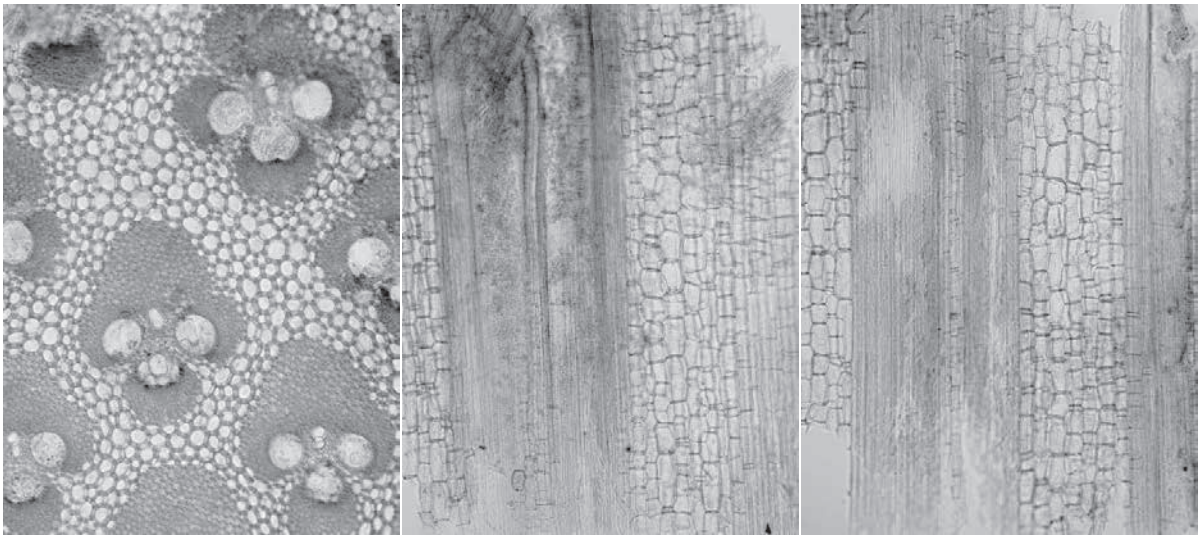
横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

カキノキ属　W74 棒状木製品



横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

トネリコ属　W51 下駄



横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

タケ亜科　W75 塗箸

第10図　日下部遺跡の木材Ⅶ

第７章　まとめ

（１）遺構について

調査区は上段と下段に大きく分かれ、中世前半の遺構は上段に集中し、下段の北地区・中央地区に近世の屋敷に関連した遺構が集中することがわかった。

下段ではSR400を除くと多くが近世以降に作られた遺構であることがわかった。これらの近世の遺構では、水路や溜井など排水・用水施設を上段や下段の縁辺部に配していることが伺われ、埋桶や柱穴などが集中する部分が屋敷の中心を占めている。中でも北地区と中央地区南半部に偏っており、おそらく一～二軒程度の屋敷が建っていた可能性が推定できる。

下段で検出された遺構はほとんどが近世のものであるが、18世紀後半以降の遺構は非常に浅くしか残存していなかった。これはさらに後世に削平されたものと思われるが、16・17世紀までの遺構がより残存していることから、発掘調査中には明確にできなかったが、一旦部分的に整地されていた可能性が考えられる。特に下段北地区は湧水が著しく、SR415のような大規模な排水施設を構築すると同時に生活面を嵩上げしていたのであろう。嵩上げした上面から掘り込まれた遺構は、それ以前の同種の遺構よりは浅い位置までしか掘削されなかったためであろう。

検出された埋甕・埋桶には近世家屋に当然配置される便槽である便甕・便桶の性格を有するものがあると思われる。桶が2基東西に並んで検出されたのは北地区の東端部のSK533・534やSK574・572であるが、これらには切り合いがあるようで、併置されたものではないようである。またやや大型の埋桶はSK608の近く屋敷区画の南寄りに配されている。

埋桶・埋甕から食事具（木製椀・箸・杓子・擂り粉木など）や文房具（水滴）が出土する状況は食器を洗うなどの炊事や墨を擦る際の水を溜めていた水桶・水甕であった可能性が高いものと考えている。

調査区内からある程度の瓦や塼が出土している。塼は南地区上段周辺に集中しており、瓦もその周辺に多い。下段北地区からも出土するが、下段では積極的に瓦葺建物が存在した状況ではない。少なくとも瓦葺建物を解体して、廃材を埋めたような様子ではなかった。

上段の南地区や南西地区では、大歳神社の旧境内が検出された。北側の区画溝や整地層内からは16世紀に遡る遺物が検出されているが、神社関連の施設は江戸時代のものとおもわれる。

（２）遺物から見た遺跡の変遷

今回の調査地点は、日下部遺跡の中でも最も南に位置しており、日下部遺跡の中心を占める位置ではない。河川と丘陵及び丘陵からの谷地形に囲まれた、比較的独立性のある地形内に立地する。

今回の調査地点からは、縄文時代晩期・弥生時代中期・弥生時代終末期～古墳時代初頭・奈良時代・平安時代末～鎌倉時代前半・室町時代後半・江戸時代前半・江戸時代後半とそれ以降の時期の遺物が出土したが、遺構に伴い比較的まとまって出土したのは、平安時代末～鎌倉時代前半と室町時代後半・江戸時代前半・江戸時代後半の時代である。

日下部遺跡の他の調査地点で検出された弥生時代後期後半～古墳時代前期の竪穴住居や方形周溝墓、古墳時代後期～7世紀の飛鳥時代頃の竪穴住居・掘立柱建物などは見つかっていない。

縄文時代の土器は、西側の丘陵からの谷地形内から出土した1点のみ図化できた（第2図1）。縄文時代晩期中葉の篠原式古段階にあたる。サヌカイト製の石鏃（S1）も同時代に属するものであろう。北摂

の六甲山北側は同時期の遺跡の希薄な地域にあたり、資料を付け加えることとなった。

弥生時代中期に属すると思われる土器片はわずかな出土である。また、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器は流路（SR218）内からまとまって出土しているが、集落や墳墓が検出されたものではない。古墳時代後期の土器片も数点出土しているが、調査区内に遺構は存在しておらず、西側の丘陵上に何らかの遺跡が存在していた可能性が高い。丘陵北側には大橋山古墳群が存在するが、今回の調査地点西側ではすでに削平を受けて大きく失われており、本来ならば様々な時代の人々が痕跡を残していたことと思われる。

奈良時代から平安時代前半の土器もわずかで、後の時代の遺物とともに出土しているものがほとんどである。日下部遺跡の北東にある日下部北遺跡では同時期の遺物が大量に出土している。

平安時代末～鎌倉時代前半の時期には、掘立柱建物が建てられ人々が生活していた。復元できた建物は周囲を攪乱されており全容は不明ながら、５×３間以上の規模をもつ。この時期には集石土坑（SK224）や大規模な水路（SR400）が設けられている。土師器皿・堝、瓦器埦、須恵器埦・皿･鉢･甕、白磁碗や青白磁小壺が出土している。西側の斜面を整地して経塚を構築したのもこの時期であろう。

この日下部遺跡の南端にあった集落は、一旦途絶えるようである。13世紀後半～15世紀前半にかけての遺構・遺物はほとんど確認できない。その後、室町時代の後半に入って生活の痕跡が再び確認できる。但しこの時期の明瞭な遺構は不明である。土師器の煮炊具や東播系須恵器鉢、退化した蓮弁文の青磁碗などが一定量出土している。

続く戦国時代から江戸時代初期には、溝（SD59）や水溜状の石組土坑（SE465）など生活の痕跡が見られ、明の青花磁器・ベトナム製陶器・胎土目唐津・絵唐津・初期伊万里など普通の農村集落では見かけないような陶磁器が含まれている。中には天目茶埦や建水、花生など茶の湯の道具類が含まれている。

17世紀中頃～後半になると土師器の煮炊具が炮烙形になり、丹波焼の擂鉢・甕が増える。護岸に石列を配した大型の土坑（SK608）などはこの時期のものと思われ、そこから出土した一部の木製品もこの時期に属する。備前焼は貯蔵具の大甕が少量入ってはいるが、擂鉢はほとんど見られない。

17世紀後半～18世紀前半は、丹波焼などの在地産の土器が多く、一般の集落との差異は認めにくくなる。

18世紀後半～19世紀後半の時期には、一部に三田青磁などの在地の優品が見られるが、くらわんか茶碗、広東碗など通有の肥前陶磁器が見られる。遺物量は減少し、調査区北端のSR415等からも出土するが、南端の旧大歳神社境内に近い位置から出土する傾向が高い。瓦類が出土するのも上段の南地区や中央地区が多く、塼を用いた建物などが神社に関連してあったのかもしれない。

木製品・石製品・金属製品のほとんどは、経塚出土のものを除くと、近世後半の時期のものと思われる。食事具には漆器椀・大皿、箸、切匙、杓子、鍋蓋、擂り粉木、卸金、包丁など生活に密着したものが揃うが、漆器大皿など一般の家では見られないものも含まれる。この漆器大皿もよく使用されており、各時期の擂鉢も非常に磨り減っていることからも、ここで生活する人数が多かったことを示している。

下駄も１軒の家としては多く見られ、焼き印の押された下駄も含まれており、多くの人間が出入りしていたことを想像させる。提灯の部品とした木製品も一般の農家ではなく商家や庄屋など格を表す、あるいは格上の者を迎えるような家に備わった品であろう。その反面、歯を補修した下駄や、補修したと思われる桶の底板、丸太から切り出す製材途中の板材なども出土している。

水滴は文書を認めるための道具だが、石の硯は見つかっていない。砥石は非常に多い。

明治時代の砥部焼の破片が調査区内の広い範囲で検出されており、明治時代以降に屋敷は廃され、整地されて農地へとなったものと考えられる。

以上のように遺物を中心に調査地点における遺跡の変遷を通観したが、考古学的に見て集落或いは屋敷としてある程度定着し安定するのは、A.平安時代末から鎌倉時代初頭の時期と、B.戦国時代から江戸時代初期にかけての２時期が挙げられる。

（３）周辺の状況

三田盆地の南縁部に六甲山北麓から手の指のように広がる細長い開析谷。これらの狭小な谷内において、古墳時代後期・飛鳥時代・奈良時代にかけて続々と入植が見られ、開発が進んでいく。その中で木簡・墨書土器・硯や銙帯等が出土する遺跡があり、その地域の中核である官衙やそれに準ずる性格をもつものと考えられ、一部の遺跡は後代へと継続している。

その後、早くて平安時代中頃、多くは平安時代末～鎌倉時代にかけてさらに多くの場所に開発の手が入り、所々に並立的に屋敷が構えられるようになる。荘園開発としての性格が附される小規模な屋敷や集落は、平安時代末～鎌倉時代初頭の時期に面的に広がり、細かく分布するようになる。周辺には平安時代中期に超大型の掘立柱建物を有する集落も存在し、他の地域を凌駕している。

播磨や摂津における発掘調査例では、これらの荘園開発の背景には平家一族による所領掌握や、その後の平家没官領に入部する関東武士の存在が考えられているが、検出遺構や出土遺物からはまだ裏付けられてはいない。

二郎宮ノ前遺跡では、9世紀までに一旦集落が途絶えるが、12世紀末頃に再び広い範囲に掘立柱建物が建てられるようになる。13世紀後半にはそれまで並立的だった周辺の中小規模の建物が排除されて居館と呼ばれる屋敷が成立している。これは15世紀中頃に突如姿を消す。

八多川を遡ると、既に10世紀の後半に９×４間の四面庇の建物や、床面積が250㎡を超える８×５間の大型の掘立柱建物が建てられる上小名田遺跡がある。この遺跡では平安時代末～鎌倉時代にはさらに大型の掘立柱建物も建てられている。集落は鎌倉時代の中で収斂し、次に人々の生活の痕跡が現れるのは近世になってからである。

日下部遺跡の今回の調査区の集落も並立的なものの一つである。建物の規模も通有であり、上小名田遺跡で検出された同時期の掘立柱建物に遠く及ばない。この比較的規模の小さい集落は長くは続かず、おそらく二郎宮ノ前遺跡の居館に集約されていったのであろう。二郎宮ノ前遺跡との間には谷地形があり、今回の調査地点とは区切られているが、その生活領域は共通する。現在では二郎宮ノ前遺跡周辺の水田には、両遺跡を隔てるこの谷を堰き止めた溜池の水が使われており、大規模な水路（SR400）を踏襲すると考えられる現在の水路はより東側の田畑を潤している。有野川と西側の丘陵に挟まれた可耕地の水利を管理する位置に今回検出された掘立柱建物は存在するが、二郎宮ノ前遺跡背後の山からの湧水も発掘調査で検出された池や堀・溝によって利用されており、比較的水利には利便性が高く、水源地に近い集落の優位性は高くはない。

戦国時代、周辺にも戦乱の炎が及んでいる。有馬温泉の温泉城の戦（1540年）をはじめとする有馬氏対別所氏の攻防。織田方の荒木村重の侵入（1574年）と村重の変心による三田城周辺の攻防（1578年）や三木城攻め（1580年）など、それ以前からも直接、間接的に戦の影響は及んだことであろう。三田城

跡の調査では城に係わる遺構が形成され始めるのが15世紀の後葉であり、廃城となるのが1633年の九鬼氏入封時である。

16世紀後半～17世紀初頭に明の青花や、ベトナム製陶器などの輸入陶磁器が出土する遺跡は限られている。ベトナム製陶器が出土したのは、近隣では三田城跡などの城郭内の屋敷跡からであり、貿易都市である堺では屋敷内の茶室といった極めて限られた場所からのみ出土している。

唐津焼皿は二郎宮ノ前遺跡からも一定量出土しており、16世紀後半までの土師器や明青花も含まれるが、今回調査分の日下部遺跡より少なく、遺構は激減する。八多中遺跡のカイモリ地区でも15世紀まで継続するようである。宅原遺跡では16世紀に入っても園地など特殊な遺構をもち、集落は近世まで継続している。

（4）日下部遺跡集落の画期

A.平安時代末から鎌倉時代初頭

この時期は、日下部遺跡内や二郎宮ノ前遺跡で広い範囲に並立的に屋敷が営まれている状況が判明している。周辺の三田盆地南縁部でもよく見られる状況であり、比較的短期間で消え去るものが多い。継続して後代へ続く遺跡は限られており、園地などを有する居館を構成するようになる。

日下部遺跡南端のこの屋敷では、掘立柱建物や土坑などがあり、スラッグなど鍛冶に関連した微細な痕跡が観察できた。墓址は確認されていないが、背後の丘陵上に経塚を築いていることが特徴の一つである。

経塚は集石をもって塚を築いており、土師器筒形容器を経筒（もしくは有機質製の経筒の外容器）として用い、刀子（短刀）や鏃を入れ、銭貨を撒く所作を行っている。土師器筒形容器を経塚に用いる例は、近隣では三田市下深田経塚が知られ、また丹後地方や但馬地方に多く見られるものである。

副納品の鉄製武器を有しており、経巻の護持のために副納されたものであろう。雁股鏃は多くが鏑矢として用いられており、神事における破魔の作法に使用される。雁股鏃は豊岡市田多地経塚や京都府私市丸山経塚、静岡県堂ヶ谷経塚などでも出土しており、経典埋納前に一部が副納されたことがわかっている。出土した大型の雁股鏃は刃の部分が折れ曲がっており、堂ヶ谷経塚や兵庫県江ノ上経塚などで出土した折り曲げられた太刀や短刀との共通性が見られる。

経塚で銭貨が用いられる例はやや後出するようだが、新温泉町対田清水谷経塚などでは埋納の途中やその最終段階で銭貨を撒くような所作が観察されている。今回検出された日下部経塚でも盗掘を被っているものの、経塚を造営する際の様々な所作が観察でき、新知見や類例の追加を行うことができた。

B.戦国時代から江戸時代初期

出土遺物から見ると15世紀後半頃の土器が少量出土しており、16世紀に入って溝や溜井が設けられ、同じ性格の遺構が重複、或いは近くに作り続けられていく様子が見られた。15世紀以降の状況は二郎宮ノ前遺跡の集落・居館が廃絶するのに引き続いており、生活の場の移動とも捉えられる。

また、伝承では大永年間（16世紀前半）にこの地に入り、17世紀末にも近隣の寺院に仏画を寄進するような有力者、宮崎弾正二郎広綱一族が二郎の地にいたとされ、文献によると大庄屋芝家が19世紀に二郎に分家を立て、三田藩の御用を務める大家となっており、二郎の地に土豪・豪農と呼ぶことのできる家があったことが知られており、両者は時期的に重複していないようである。

それでは日下部遺跡の南端のここに居住した者の性格はあくまでも農民であるのか、それとも、例え

ば湯山城や三田城を拠点としていた有馬氏や、近くの松原城に城郭を構えていたとされる松原氏の被官となった地侍的な性格をもつものなのか。

一般に中世後半期に新たに営まれる居住に関連した集落遺跡は、城館など時代的な背景を色濃く表した性格を有することが多くなるが、ここでは検出された遺構や出土遺物からはそのような状況は観察できない。遺跡の立地や周辺の状況として、今回の調査地点の東には有野川、西にSR400の流路や丘陵を背負う防御的な立地を持つことと、背後の丘陵上に平坦面・堀切・竪堀・切岸・土塁・石塁等を備えた、いわゆる小規模城館とされている「小坂砦」が存在することだけが、丘陵の麓に屋敷を構えた地侍的な存在を想定させうる根拠となり、可能性はあまり高くはない。

では、三田城等でも見られる肥前産の陶磁器や到来物の茶道具を有してここに居住していた家はどのような階層に属していたのであろうか。茶道具の所有であれば、武家だけではなく寺院や商家であっても可能である。秀吉が逗留し茶会も開かれたであろう有馬温泉や、茶の湯に通じていたとされる荒木村重一族が一時入っていた三田城が控え、丹波・但馬・播磨と畿内の都や港町を結んでいた街道筋にあたるこの地は大きな流通の通過点であったことは想像に難くない。周辺部にまで力を及ぼしうる有力な農民層の土豪が茶道具を有していたとしても、不思議ではない。

六甲山北麓の内陸部にあたる近隣には、山田荘の栗花落家や上谷上の板屋家、有名な箱木の千年家などがあり、16世紀頃に次々と土地を手に入れて行くような古文書を残して、中世から続いてきた土豪とも呼ぶことのできる有力者が存在している。少なくともこの場所にも土豪的な存在がおり、今回の調査地点にその痕跡を残したものとすることは可能であろう。

同じように文献や伝承と発掘調査が一致するような事例が、下宅原遺跡大前Ⅱ地区で行われている。現在、宅原遺跡に包含されているが、江戸時代末期に当地方で私札を発行するなど、財力を誇った嶋屋五兵衛の屋敷跡と伝承される所で、17世紀～19世紀にわたる陶磁器が多量に出土している。

今後、三田城跡・淡河萩原城跡などと日下部遺跡や宅原遺跡・箱木千年家などの発掘調査資料を検討することで、六甲山北麓における武士階級と土豪的階層の流通の偏位などが明らかにできるのではなかろうか。

【参考文献】

・神戸市教育委員会1987「昭和59年度　神戸市埋蔵文化財年報」

・神戸市教育委員会1998　「平成7年度　神戸市埋蔵文化財年報」

・新修神戸市史編集委員会1988.4「新修　神戸市史　歴史編Ⅰ　自然・考古」神戸市

・新修神戸市史編集委員会2010.3「新修　神戸市史　歴史編Ⅱ　古代・中世」神戸市

・淡神文化財協会1992「下小名田遺跡その１」

・妙見山麓遺跡調査会1988.3「宅原遺跡　宮之元地区の調査1986年」

・妙見山麓遺跡調査会2002「宅原遺跡　豊浦地区の調査1987年」

・妙見山麓遺跡調査会2005「下小名田遺跡」

・兵庫県教育委員会2000.3　「三田城跡発掘調査報告書」兵庫県埋蔵文化財調査報告第194冊

・兵庫県教育委員会2000「公園都市線（第2期）車両留置施設設置事業に伴う
二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第220冊

・兵庫県教育委員会2001.3　「神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う
日下部遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第215冊

・兵庫県教育委員会2014.3　「堂垣内遺跡・小坂遺跡」兵庫県埋蔵文化財調査報告第470冊

第３表　日下部遺跡出土土器一覧（１）

番号	図版	写真図版	種別	器種	法量（cm）			残存			備考１	出土地区		出土遺構	層位	備考２
					口径	器高	底径	口縁	底	他						
1	第2図	55	縄文土器	深鉢	(31.3)	(8.9)	-	1/12	-			上段	中央地区	SR81		攪乱落ち込み内表採
2	37	55	土師器	小皿	(11.2)	(1.75)	(8.0)	1/8	1/8 以下			下段	中央地区	SR400 枝溝セクション		
3	37	55	土師器	皿	(11.6)	2.3	(7.6)	1/4	1/4			下段	南地区	SR400	中層	
4	37	55	土師器	皿	13.2	2.25	-	5/6	完存			下段	南地区	SR400	埋土	畔以北
5	37	55	土師器	皿	(14.8)	3.1	-	1/8	-			下段	中央地区	SR400 南端	上層	攪乱含む
6	37	56	土師器	塊	(23.1)	(9.1)	-	1/6	-	体部上半 1/6		下段	北地区	SR400	埋土	
7	37	56	土師器	塊	不明	(6.3)	-	わずか	-			下段	南地区	SR400	下層（青灰砂礫）	
8	37	55	黒色土器	埦	-	(1.25)	(7.2)	-	1/4			下段	南地区	SR400	埋土	畔以北
9	37	55	瓦器	埦	-	(1.0)	4.5	-	2/3		暗文あり	下段	南地区	SR400	埋土	畔以北
10	37	56	須恵器	坏Ｂ蓋	-	(2.3)	-	-	-	天井部 1/2 つまみ完存		下段	北地区 アゼ南北	SR400	下層	
11	37	56	須恵器	坏Ａ	(11.9)	2.7	(8.0)	1/8 弱	1/4 弱	体部 1/8 弱		下段	北地区	SR400	埋土	
12	37	56	須恵器	坏Ｂ	-	(3.3)	(11.8)	-	2/5			下段	北地区	SR400 北部	暗灰色粘質以下	下層分
13	37	56	須恵器	坏Ｂ	-	(4.2)	(11.4)	1/4	-	体部下半 1/4　高台 1/4		下段	北地区 アゼ南北	SR400	下層	
14	37	56	須恵器	埦	-	(3.25)	6.0	-	完存			下段	南地区	SR400	上層	写真
15	37	56	須恵器	埦	-	(3.7)	7.2	-	完存			下段	中央地区	SR400		
16	37	55	須恵器	埦	(15.3)	4.7	5.5	1/3	1/6			下段	中央地区中央	SR400	下層	
17	37	57	須恵器	埦	(14.7)	4.75	(5.8)	1/6	3/4			下段	南地区	SR400	下層	
18	37	57	須恵器	埦	(15.4)	5.0	5.4	1/3	1/2 強			下段	中央地区南半	SR400	上層	
19	37	57	須恵器	埦	(15.6)	(4.45)	(6.2)	1/8	わずか			下段	南地区	SR400	上層	
20	37	57	須恵器	埦	(15.5)	5.0	(6.4)	わずか	1/4	体部 1/4		下段	北地区 アゼ南北	SR400	下層	
21	37	57	須恵器	埦	(14.1)	(4.05)	(6.1)	2/5	1/3		図上復元	下段	南地区	SR400	下層	
22	37	55	須恵器	埦	(16.65)	4.85	6.3	1/5	完存			下段	南地区	SR400 北半	下半腐植土まじり砂	
23	37	57	須恵器	埦	(16.0)	5.2	(7.3)	1/3	1/3			下段	中央地区中央	SR400	下層	
24	37	57	須恵器	埦	(14.5)	(4.7)	6.5	1/9	1/2			下段	南地区北側	SR400	最上層	
25	37	55	須恵器	埦	(16.5)	(5.05)	5.6	1/3	3/4			下段	北地区	SR400 北端		
26	37	57	須恵器	埦	(16.8)	4.3	(6.4)	1/5	1/3			下段	北地区南端	SR400	中・下層	
27	37	57	須恵器	埦	(15.0)	(4.0)	(4.9)	1/5	わずか			下段	北地区	SR400 (SE938 下層)		
28	37	55	須恵器	埦	(15.7)	3.7	(6.2)	2/5	1/2			下段	中央地区	SR400 枝溝		
29	37	55	須恵器	埦	-	(2.9)	(5.2)	-	1/4		墨書あり	下段	中央地区	SR400		
30	37	55	須恵器	埦	-	(1.3)	(5.7)	-	2/5		墨書「ト」あり	下段	南地区	SR400		中央部西岸
31	37	55	須恵器	小皿	(7.3)	1.45	4.9	1/2	完存			下段	中央地区	SR400 セクション		
32	37	58	須恵器	片口鉢	(32.4)	(9.9)	-	1/8 以下	-			下段	北地区	SR400		
33	37	58	須恵器	捏鉢	(31.0)	(6.5)	-	1/8	-			下段	中央地区南半	SR400	下層	
34	37	58	須恵器	片口捏鉢	(32.6+α)	(10.9)	-	-	1/4	片口部残存	高台	下段	北地区	SR400 北部	暗灰色粘質以下	下層分
35	37	58	須恵器	捏鉢	不明	(5.2)	-	わずか	-			下段	南地区	SR400	上層	
36	37	58	須恵器	甕	(18.7)	(4.4)	-	1/4	-			下段	南地区	SR400	下層（青灰砂礫）	
37	37	58	須恵器	甕	(21.7)	(5.1)	-	1/4	-			下段	南地区	SR400		中央部西岸
38	38	58	無釉陶器	壺	(9.9)	(21.8)	-	1/3	-	肩部 1/7 体部 1/4	ベトナム製長胴壺	下段	北地区南半	SR400 西肩	近世攪乱層	上層相当
39	38	58	無釉陶器	盤	(16.0)	3.45	(17.4)	1/2	1/3		ベトナム製か	下段	北地区南端	SR400	中・下層	
40	38	60	無釉陶器	擂鉢	(30.8)	(6.85)	-	1/8 以下			丹波焼　１本引き	下段	中央地区北端	SR400	中・下層	
41	38	60	無釉陶器	擂鉢	不明	(8.9)	-	破片	-		丹波焼　１本引き	下段	北地区南端	SR400	最上層	
42	38	60	無釉陶器	擂鉢	(31.4)	(13.0)	-	1/11 弱	-	体部 1/11 弱	丹波焼　１本引き	下段	北地区	SR400	埋土	
43	38	59	施釉陶器	（溝縁）皿	(11.7)	(2.6)	-	1/4	-		唐津焼	下段	北地区南半	SR400 西肩	近世攪乱層	上層相当
44	38	58	施釉陶器	皿	(12.2)	(4.1)	5.1	若干	完存		絵唐津	下段	北地区南端	SR400	最上層	
45	38	59	施釉陶器	（輪花）皿	(10.4)	(2.7)	(5.7)	1/7	1/4		美濃焼か	下段	北地区南端	SR400	最上層	
46	38	58	施釉陶器	皿	(11.1)	2.7	(6.0)	3/7	1/2		志野　御深井	下段	北地区	SR400		
47	38	59	白磁	碗	(17.6)	(2.7)	-	1/12	-		玉縁	下段	南地区	SR400	上層	
48	38	59	白磁	碗	(15.6)	(3.2)	-	1/8	-		玉縁	下段	中央地区	SR400 枝溝		
49	38	59	青磁	碗	-	(2.85)	(4.7)	-	3/5		底部	下段	北地区南端	SR400	最上層	
50	38	59	染付磁器	碗	-	(2.85)	5.25	-	完存		青花 景徳鎮民窯か	下段	北地区	SR400 南部	近世攪乱層中	
51	38	60	土師器	小皿	6.7	1.65	-			完形	灯明皿	下段	北地区北東	流路 SR415		
52	38	60	土師器	小皿	(8.9)	1.96	5.9	わずか	完存			下段	北地区北部	SR415	埋土下半	畔より東側
53	38	61	土師器	炮烙	(30.2)	(5.05)	-	1/8	-			下段	北地区北東	SR415		
54	38	61	無釉陶器	擂鉢	(28.0)	(9.9)	-	1/4	-		丹波焼　櫛粗	下段	北地区北東	SR415		機械含む
55	38	61	無釉陶器	擂鉢	(36.4)	(16.35)	(21.3)	1/6	1/8		丹波焼　櫛密	下段	北地区北東	SR415		
56	38	60	施釉陶器	埦	(9.8)	5.4	4.0	2/5	ほぼ完存		唐津焼	下段	北地区北端	SR415 南岸の上		人力
57	38	60	無釉陶器	甕	34.7	35.7	20.2	ほぼ完存	完存		埋甕　内面墨書　丹波焼	下段	北地区	SK940	SR415 北肩	
58	38	61	須恵器	埦	(15.5)	(4.35)	-	1/6	-			下段	南地区	SD114 南端		
59	38	61	施釉陶器	皿	(10.3)	2.1	(5.6)	わずか	1/4		瀬戸美濃　天目釉	下段	南地区	SD94	埋土	

第３表　日下部遺跡出土土器一覧（２）

番号	図版	写真図版	種別	器種	法量（cm）			残存			備考１	出土地区		出土遺構	層位	備考２
					口径	器高	底径	口縁	底	他						
60	39	62	土師器	小皿	(7.1)	(1.6)	-	1/2	1/2			下段	北地区北部	SE416	埋土	畔の西側
61	39	62	土師器	皿	10.2	1.9	6.4	1/2	1/2		灯明皿	下段	北地区	SE416	埋土下層 石組井戸	
62	39	62	無釉陶器	擂鉢	(32.6)	(12.85)	-	1/4 弱	-		丹波焼　櫛粗	下段	北地区北端	SE416	埋土	東端付近
63	39	62	施釉陶器	丸碗	8.8	6.5	4.6	1/4 欠損	完存		天目釉	下段	北地区北端	SE416	埋土	東端付近
64	39	62	施釉陶器	埦	(11.7)	(7.4)	(5.5)	1/7	2/5		京焼系か	下段	北地区北部	SE416	埋土	
65	39	62	染付磁器	皿	13.34	2.92	6.14	1/2 強	完存	体部 1/2 強		下段	北地区	SE416	埋土下層 石組井戸	
66	39	62	染付磁器	碗	10.15	4.95	4.3	1/6 欠損	完存		波佐見産	下段	北地区北端	SE416	埋土	東端付近
67	39	62	施釉陶器	皿	11.4	3.1	4.5	ほぼ完存	ほぼ完存		唐津焼	下段	北地区	SK465	方形石組内 埋土	
68	39	62	施釉陶器	埦	(9.5)	5.45	4.5	1/3	完存		唐津焼	下段	北地区	SK465	方形石組内 埋土	
69	39	63	土師器	堝	(16.2)	(4.95)	-	1/5	-		播磨型か	下段	北地区南部	SK608		集石部分
70	39	63	土師器	炮烙	(25.8)	(5.2)	-	1/12	-		タタキ	下段	北地区	SK608 北端 集石	下層	
71	39	63	土師器	羽釜	(33.5)	(6.55)	鍔径 (42.3)	1/8		鍔 1/6		下段	北地区	SK608 西肩		石列
72	39	63	無釉陶器	片口 擂鉢	(32.8)	(17.75)	(15.0)	1/4	1/2		丹波焼　櫛粗	下段	北地区	SK608 北端	石組内	
73	39	63	無釉陶器	盤	(49.8)	(6.2)	(36.0)	1/18	1/4 弱		丹波焼	下段	北地区南部	SK608		集石部分
74	39	63	施釉陶器	皿	(11.8)	2.7	4.0	1/2	完存		唐津焼	下段	北地区	SK608 北端 集石	下層	
75	39	63	瓦器	埦	-	(0.9)	(4.6)	-	1/4		墨書あり	下段	北地区	SK510		一段下げ
76	39	63	土師器	小皿	8.3	1.65	4.05	4/5	ほぼ完存			下段	北地区	SK404	埋土	
77	39	64	瓦器	埦	(11.3)	(3.8)	-	1/4	-			下段	北地区	SK578		SR400 肩上
78	39	63	土師器	小皿	6.9	1.4	-			ほぼ完形		下段	北地区	SK621		
79	39	63	土師器	小皿	(8.2)	(2.15)	-	1/2	-			下段	北地区	SK621		
80	39	64	土師器	炮烙	(27.8)	(6.5)	-	1/2 弱	-			下段	北地区	SK621		
81	39	64	土師器	炮烙	(26.0)	(7.0)	-	1/2				下段	北地区	SK621		
82	39	65	施釉陶器	皿	(12.1)	3.3	5.0	1/2 強	ほぼ完存		砂目跡　唐津焼	下段	北地区	SK503		
83	40	65	瓦質土器	羽釜	(17.3)	(4.75)	鍔径 (22.3)	1/9	-	鍔 1/5		下段	中央地区	SK908		
84	40	65	無釉陶器	片口 擂鉢	(28.6)	15.0	(12.2)	1/8	わずか		丹波焼　1 本引き	下段	北地区	SK575 （南東）		
85	40	65	施釉陶器	ひさご 形壺	-	(7.1)	-	-	-	体部のみ 1/3	丹波焼	下段	北地区中央	SK449	桶内埋土	
86	40	65	染付磁器	碗	(8.6)	6.5	4.1	わずか	完存	体部 1/2		下段	南地区	SE189		
87	40	65	青磁	碗	-	(3.2)	5.2	-	ほぼ完存	高台　ほぼ完存		下段	中央地区	SP720		掘方
88	40	65	無釉陶器	甕	-	(51.1)	(20.1)	-	完存	体部上半 2/3 下半完存	埋甕　丹波焼 腹径(57.6)cm	下段	中央地区	SK739		
89	40	65	磁器	鬢盥	-	(0.65)	長 10.5 短 5.5	-	ほぼ完存	底部以外は全欠	楕円形　墨書あり	下段	中央地区	SK739		甕内埋土
90	41	66	無釉陶器	甕	(48.2)	62.8	22.3	1/3	若干欠損		埋甕　近世大谷焼	下段	北地区	SK435		
91	41	66	施釉陶器	甕	(36.4)	(35.3)	-	1/5	-		埋甕　丹波焼	下段	中央地区	SK736	内部埋土	埋桶
92	41	66	土師器	皿	(10.8)	(1.9)	-	1/4	-		灯明皿	下段	中央地区	SK736	内部埋土	埋桶
93	42	67	須恵器	坏	(13.3)	4.5	6.3	1/2	4/5			下段	北地区北部		遺構検出中	
94	42	67	施釉陶器	皿	(10.6)	(3.15)	(5.6)	1/4	1/2		唐津焼　碁笥底　胎土目	下段	北地区			機械
95	42	67	施釉陶器	天目 茶埦	(11.2)	(6.25)	-	1/2	若干		未製品か 瀬戸美濃系	下段	北地区南端			人力
96	42	67	施釉陶器	(溝縁) 皿	-	(3.95)	(5.5)	-	3/4		唐津焼	下段	北地区北半			機械
97	42	66	施釉陶器	ひさご 形壺	3.5	(9.2)	-	1/2	-		丹波焼か	下段	北地区			東北部遺物 集中地点
98	42	67	施釉陶器	鬢盥	-	3.4	-	わずか	1/4			下段	北地区			東北部遺物 集中地点
99	42	66	無釉陶器	盤 or 鉢	(33.6)	(6.5)	(23.4)	1/6	1/8		丹波焼	下段	北地区			東北部遺物 集中地点
100	42	67	施釉陶器	皿	(15.16)	4.4	(3.8)	1/12	3/4		唐津焼　碁笥底　胎土目跡	下段	北地区南端			人力
101	42	66	無釉陶器	甕	(58.6)	(75.8)	腹径 (72.6)	ほぼ完存	全欠	体部上半ほぼ完存　下半若干残存	砥部焼（近代）	下段	北地区	東半攪乱		機械・SD94
102	43	68	弥生土器	壺	13.6	28.85	4.25	2/3	完存			上段	北地区	SR218 南肩		位置図あり
103	43	68	弥生土器	壺	12.2	(10.5)	-	ほぼ完存	-	肩部 1/4		上段	北地区	SR218		中央部西岸
104	43	68	弥生土器	壺	-	(15.9)	腹径 (23.4)	-	1/2			上段	北地区東端	SR218 東端	最下砂礫層 直下	位置図あり
105	43	68	弥生土器	壺	(11.8)	(3.8)	-	1/4	-			上段	北地区北部	SR218	灰色砂質	中層下部
106	43	68	弥生土器	壺	26.4	(9.9)	-	1/2 強	-	頸部完存		上段	北地区北部	SR218 内		位置図あり
107	43	68	弥生土器	甕	(12.6)	(7.75)	-	1/3 弱	-			上段	北地区北部	SR218 内		位置図あり
108	43	68	弥生土器	甕	(13.5)	(3.55)	-	1/8				上段	北地区東端	SR218 東半	砂礫層	
109	43	68	弥生土器	高坏	(22.5)	(3.95)	-	1/9	-			上段	北地区北部	SR218	灰色砂質	中層下部
110	43	68	弥生土器	高坏 or 台付鉢	(10.7)	8.75	(15.6)	1/2	1/4			上段	北地区北部	SR218 内		位置図あり
111	43	68	弥生土器	鉢	(27.5)	(7.65)	-	1/7	-			上段	北地区北部	SR218 内		位置図あり
112	43	68	弥生土器	底部	-	(5.2)	(5.1)	-	2/3		壺	上段	北地区	SR218		
113	43	68	弥生土器	底部	-	(2.95)	5.5	-	ほぼ完存			上段	北地区北部		乳灰色シルト	東西サブトレ
114	43	68	弥生土器	底部	-	(2.15)	(4.6)	-	1/3		甕	上段	北地区	SR218		
115	43	68	弥生土器	底部	-	(2.3)	(3.15)	-	3/4		壺	上段	北地区	SR218	底の砂礫層	東半部のみ

第３表　日下部遺跡出土土器一覧（３）

番号	図版	写真図版	種別	器種	法量（cm）			残存			備考１	出土地区		出土遺構	層位	備考２
					口径	器高	底径	口縁	底	他						
116	43	68	弥生土器	底部	-	(1.85)	(5.2)	-	1/3			上段	北地区北部	SR218	灰色砂質	中層下部
117	43	69	須恵器	高坏・台付鉢	(10.2)	(3.6)	-	1/2	-			上段	北地区	SD363（北）		
118	43	69	須恵器	捏鉢	(29.0)	(6.2)	-	1/10	-			上段	北地区	SK220	灰褐色埋土	
119	43	69	須恵器	埦	(15.6)	5.45	(6.7)	1/5	若干	体部 1/5		上段	北地区	SK323		
120	43	69	瓦器	埦	-	(1.1)	4.8	-	若干欠損		暗文あり	上段	北地区南端	SP313	柱痕上部	
121	43	69	須恵器	片口鉢	(35.8)	(11.45)	-	1/6	-			上段	北地区	SP335		柱痕
122	44	69	須恵器	埦	(15.7)	4.9	(6.9)	1/4	1/2	体部 1/4 弱		上段	北地区	SK224		位置図あり
123	44	69	須恵器	埦	16.5	4.7	6.1	2/3	完存	体部ほぼ完存		上段	北地区	SK224 北半部		
124	44	70	須恵器	埦	(15.5)	(4.45)	(5.1)	1/7	1/4			上段	北地区	SK224	灰褐色埋土	南半部
125	44	69	須恵器	埦	16.2	5.05	5.7	3/4	完存			上段	北地区	SK224 北半部		
126	44	69	須恵器	埦	15.8	4.95	5.8	一部欠損	完存			上段	北地区	SK224	埋土下半	底まで
127	44	69	須恵器	埦	16.3	4.9	5.6	4/5	完存			上段	北地区	SK224		位置図あり
128	44	69	須恵器	埦	16.6	5.05	(7.2)	4/5	1/2			上段	北地区	SK224		位置図あり
129	44	69	須恵器	埦	15.84	4.9	6.3	1/2 強	完存	体部 1/2 強		上段	北地区	SK224		位置図あり
130	44	70	須恵器	埦	15.5	4.7	6.3	1/2 強	1/2 強			上段	北地区	SK224		位置図あり
131	44	70	須恵器	埦	(15.9)	4.8	(4.9)	2/5	1/4			上段	北地区	SK224	埋土下半	底まで
132	44	70	須恵器	埦	16.0	4.75	5.5			ほぼ完形		上段	北地区	SK224		位置図あり
133	44	70	須恵器	埦	15.1	4.7	6.15			ほぼ完形		上段	北地区	SK224	灰褐色埋土	南半部
134	44	70	須恵器	埦	(16.3)	(4.6)	(6.3)	1/4	若干			上段	北地区	SK224	灰褐色埋土	南半部
135	44	70	須恵器	埦	15.9	4.7	6.3	1/2	完存	体部 1/2		上段	北地区	SK224	灰褐色埋土	南半部
136	44	70	須恵器	埦	(15.8)	(4.7)	(5.8)	1/2 弱	若干			上段	北地区	SK224 北半部		
137	44	70	須恵器	埦	(16.3)	4.75	(6.6)	わずか	1/2 弱	体部 1/4 弱		上段	北地区	SK224 北半部		
138	44	70	須恵器	埦	(16.5)	(4.75)	(5.8)	2/5	2/3			上段	北地区	SK224		位置図あり
139	44	70	須恵器	埦	16.65	4.7	5.9	3/4	ほぼ完存			上段	北地区	SK224	埋土下層	
140	44	70	須恵器	埦	15.3	4.7	6.85			完形		上段	北地区	SK224		位置図あり
141	44	70	須恵器	埦	(15.6)	4.5	(5.5)	1/4 強	1/2 強	体部 1/4 強		上段	北地区	SK224		位置図あり
142	44	70	須恵器	埦	(16.1)	(4.55)	(6.4)	1/7	2/3			上段	北地区	SK224	灰褐色埋土	南半部
143	44	70	須恵器	埦	16.15	4.4	5.9	4/5	完存			上段	北地区	SK224	埋土下半	底まで
144	44	70	須恵器	埦	16.1	4.5	6.05	1/2 強	3/4			上段	北地区	SK224	灰褐色埋土	南半部
145	44	71	須恵器	埦	(15.7)	(4.25)	(6.0)	1/10	1/2			上段	北地区	SK224		
146	44	71	須恵器	埦	(15.4)	(4.15)	(5.8)	1/6	1/4			上段	北地区	SK224 北半部		
147	44	71	須恵器	埦	(16.0)	(4.2)	-	1/6	-			上段	北地区	SK224	埋土下層	
148	44	71	須恵器	埦	(15.8)	(4.0)	-	1/3	-	体部 1/3		上段	北地区	SK224		位置図あり
149	44	71	須恵器	捏鉢	(27.6)	10.7	(8.5)	1/4 弱	わずか	体部 1/4 弱		上段	北地区	SK224		位置図あり
150	44	71	須恵器	鉢	(32.6)	(4.4)	-	1/8 以下				上段	北地区	SK224	埋土下半	底まで
151	45	71	土師器	小皿	(7.7)	1.9	(6.6)	1/6	3/4			上段	北地区	SK224 北半部		
152	45	71	土師器	小皿	(7.8)	1.45	-	1/5	ほぼ完存			上段	北地区	SK224		位置図あり
153	45	72	土師器	小皿	7.6	1.7	-	1/4	1/4			上段	北地区	SK224		位置図あり
154	45	71	土師器	小皿	8.1	1.6	6.7	わずかに欠		ほぼ完形		上段	北地区	SK224 北半部		
155	45	71	土師器	小皿	(8.2)	1.6	6.8	3/4	11/12			上段	北地区	SK224		位置図あり
156	45	71	土師器	小皿	(8.2)	1.35	(7.1)	1/8 強	1/2			上段	北地区	SK224 北半部		
157	45	71	土師器	小皿	7.45	1.4	-			ほぼ完形		上段	北地区	SK224	底近く	位置図あり
158	45	71	土師器	小皿	7.6	1.7	-			ほぼ完形		上段	北地区	SK224 北半部		
159	45	71	土師器	小皿	8.25	1.75	-			完形		上段	北地区	SK224		位置図あり
160	45	72	土師器	小皿	(8.2)	(1.35)	-	2/5	2/5			上段	北地区	SK224	埋土下層	
161	45	71	土師器	小皿	8.2	(1.4)	7.1	2/3	2/3			上段	北地区	SK224 北半部		
162	45	71	土師器	小皿	(8.2)	1.3	(6.8)	1/3	1/3			上段	北地区	SK224 北半部		
163	45	72	土師器	小皿	(8.4)	1.25	-	1/4	1/3			上段	北地区	SK224		位置図あり
164	45	72	土師器	小皿	(8.4)	1.3	-	わずか	ほぼ完存			上段	北地区	SK224		位置図あり
165	45	72	土師器	小皿	(8.4)	(1.4)	-	1/8	1/8 以下			上段	北地区	SK224	埋土下層	
166	45	72	土師器	小皿	(8.4)	(1.2)	-	1/5	1/8 以下			上段	北地区	SK224	埋土下層	
167	45	72	土師器	小皿	(8.7)	(1.4)	-	1/2	1/2			上段	北地区	SK224		位置図あり
168	45	71	須恵器	小皿	(8.0)	1.15	5.6	1/4	7/8			上段	北地区	SK224	埋土下半	底まで
169	45	71	須恵器	小皿	7.65	1.45	4.9			ほぼ完形		上段	北地区	SK224	灰褐色埋土	南半部
170	45	71	須恵器	小皿	8.35	1.4	(5.65)	2/3	ほぼ完存			上段	北地区	SK224		位置図あり
171	45	73	土師器	塝	25.6	(14.9)	-	6/7	-	体部上半 3/4		上段	北地区	SK224		位置図あり
172	45	71	土師器	塝	(25.2)	(10.5)	-	わずか	-	肩部 1/4		上段	北地区	SK224 北半部		
173	45	72	土師器	塝	(26.8)	(11.4)	-	1/2	若干	肩部 1/4		上段	北地区	SK224		位置図あり
174	45	71	土師器	塝 or 甕	(20.6)	(4.8)	-	1/4	-			上段	北地区	SK224		
175	45	73	瓦器	埦	(13.9)	(5.1)	-	3/5	-		暗文あり	上段	北地区	SK224		位置図あり
176	45	73	瓦器	埦	-	(1.6)	(4.8)	-	1/3	高台 1/2	暗文あり	上段	北地区	SK224		
177	45	73	瓦器	埦	-	(1.7)	(4.7)	-	1/4		暗文あり	上段	北地区	SK224		
178	45	73	青白磁	小壺	-	(2.3)	(3.95)	-	1/3	体部下半 1/8		上段	北地区	SK224 北半部		
179	45	73	白磁	碗	-	(2.1)	(5.65)	-	1/3			上段	北地区	SK224	埋土下半	底まで
180	45	73	土製品	土錘	長 3.75	幅 1.01				ほぼ完形	孔径 0.25cm	上段	北地区	SK224 北半部		
181	45	74	無釉陶器	擂鉢	(39.3)	13.75	(22.4)	わずか	わずか	不接合破片（口縁）	丹波焼　1 本引き	上段	北地区	SD273（西）		
182	45	74	無釉陶器	擂鉢	-	(5.9)	(13.2)	-	1/8		丹波焼　1 本引き	上段	北地区	SD273（西）		
183	45	73	施釉陶器	埦	-	(4.9)	(4.4)	-	3/4			上段	北地区	SD273（東）		
184	45	74	土師器	塝	(20.7)	(7.15)	-	1/4	-			上段	北地区	SD273 アゼ		
185	45	74	須恵器	広口壺	-	(4.8)	-	-	-	頸 ～ 肩 部 1/6		上段	北地区	SE362		
186	45	73	無釉陶器	火入れ	9.8	5.5	8.0			完形	丹波焼	上段	北地区	SE362		
187	45	74	無釉陶器	擂鉢	不明	(5.4)	-	わずか	-		丹波焼　1 本引き	上段	北地区	SE368	下半部（砂層等）	セクション内

第３表　日下部遺跡出土土器一覧（４）

番号	図版	写真図版	種別	器種	法量（cm）			残存			備考１	出土地区		出土遺構	層位	備考２
					口径	器高	底径	口縁	底	他						
188	46	74	土師器	羽釜	(27.3)	(6.8)	鍔径 (29.2)	若干	1/18			上段	北地区西半			人力
189	46	74	土師器	塝	(20.6)	(6.5)	腹径 (23.0)	1/9	-			上段	北地区　南半			機械
190	46	74	土師器	塝	不明	(5.25)	-	わずか	-			上段	北地区　北半			人力２回目
191	46	74	須恵器	埦	-	(3.55)	6.25	-	ほぼ完存		底部に縄目様痕跡	上段	北地区南西部	大攪乱	埋土（下層）	
192	46	74	須恵器	埦	(15.0)	(4.2)	(5.1)	1/4	1/4			上段	北地区　中央東半		中段旧耕土	人力
193	46	73	須恵器	小皿	7.5	1.25	4.9	1/2 弱	2/3			上段	北地区南半			機械
194	46	74	染付磁器	碗	(12.6)	(5.45)	-	1/9	-		明青花　漳州窯産か	上段	北地区南半			機械
195	46	74	青磁	碗	-	(3.55)	(5.7)	-	1/2 弱			上段	北地区		上層包含層	
196	46	74	青磁	碗	-	(1.8)	4.7	-	ほぼ完存		龍泉窯系	上段	北地区南半			機械
197	46	74	無釉陶器	擂鉢	不明	(9.85)	-	若干	-	破片	丹波焼　１本引き	上段	北地区	遺構検出中		
198	46	75	土師器	長胴甕	(28.2)	(20.3)	-	1/8	-	体部 1/4		上段	中央地区	SK834		一段下げ
199	46	75	土師器	坏 A	(15.7)	(2.9)	-	1/18	-		暗文あり	上段	中央地区	SK834		一段下げ
200	46	75	須恵器	坏 B	-	(2.3)	(11.2)	-	1/9			上段	中央地区	SX873	暗褐色	
201	46	75	須恵器	坏蓋	(14.8)	(2.1)	-	1/5	-			上段	中央地区北半中央	黒色土遺構?		機械
202	46	73	青磁	(脚付)鉢	(21.7)	(7.4)	(10.0)	1/6	1/2 弱		肥前系	上段	中央地区西北部			人力
203	46	75	須恵器	片口鉢	(27.7)	(4.65)	-	1/7	-			上段	中央地区北端		包含層	遺構検出時含む
204	46	75	施釉陶器	擂鉢	(35.4)	13.4	(15.3)	1/8	1/3		丹波焼　櫛粗	上段	中央地区東端			機械
205	46	76	瓦	軒平瓦	残 8.2 断 7.9	26.5	1.7			瓦当幅残 平瓦部 1/4 弱	数値は長さ・幅・厚さ	上段	中央地区	攪乱坑	埋土	
206	46	76	瓦	軒平瓦	残 15.9 断 11.2	26.0	1.6			瓦当 3/4 平瓦部 1/3	数値は長さ・幅・厚さ	上段	中央地区			攪乱内
207	47	77	施釉陶器	甕	(11.6)	16.1	9.3	1/4	完存		丹波焼	上段	中央地区	SK01		集石土坑
208	47	77	施釉陶器	甕	(26.9)	(5.15)	-	1/4+1/4	-			上段	中央地区	SK01		集石土坑
209	47	77	土製品	土人形	長 (3.8)	1.75	幅(2.2)			不明	恵比寿か 数値は長さ・器高・厚さ	上段	中央地区	SK11		
210	47	77	染付磁器	碗 or 皿	-	(1.95)	(5.6)	-	1/4		明青花	上段	中央地区	SK12		
211	47	77	色絵陶器	碗	(17.6)	8.5	7.7	1/4	高台 7/8			上段	中央地区	SK12		
212	47	77	瓦	軒桟瓦	26.4	26.3	1.9			瓦当 2/3 平＋桟瓦 1/3	数値は長さ・幅・厚さ	上段	中央地区	SK10		
213	47	77	瓦質土器	火舎香炉	-	(9.7) (13.7)	(21.4)	-	1/4		線香立	上段	中央地区	SK14-E	下層黒灰砂	
214	48	78	施釉陶器	片口擂鉢	20.1	6.1	10.3	1/2	1/2		丹波焼　櫛密	上段	中央地区	SK78		
215	48	78	施釉陶器	片口擂鉢	27.3	13.4	15.0	1/2	完存		丹波焼　櫛密	上段	中央地区	SK78		
216	48	78	染付磁器	徳利	5.9	(21.1)	7.8	1/3 強	1/4	体部 1/3 高台 2/3	腹径 (11.7) cm	上段	中央地区	SK70		
217	48	78	染付磁器	小碗	(9.3)	5.1	4.0	1/5	完存	体部 1/5 強 高台 3/4		上段	中央地区	SK70		
218	48	78	陶胎染付	小鉢	8.1	2.4	4.7	3/4	3/4		数値は幅・器高	上段	中央地区	SK70		
219	48	80	瓦質?	甕	(27.5)	(3.75)	-	1/8 以下	-			上段	中央地区	P32		
220	48	80	染付磁器	碗	-	(2.3)	(6.2)	-	1/7		明青花　笠形	上段	中央地区	SK64	石の下	
221	48	79	染付磁器	碗	9.9	5.45	4.55	3/4	ほぼ完存		コンニャク印判手	上段	中央地区南半	SK64		
222	48	79	青磁	皿	(8.8)	2.3	4.3	1/3	ほぼ完存		三田青磁	上段	中央地区	SK65-S		
223	48	79	土師器	炮烙	(28.4)	(4.95)	-	1/3	1/8 以下			上段	中央地区南半	SK43 周辺		人力
224	48	80	無釉陶器	擂鉢	(30.4)	(11.55)	(10.7)	1/9	1/4		丹波焼　１本引き	上段	中央地区	SK43	石の下	
225	48	80	無釉陶器	擂鉢	不明	(7.9)	-	破片			丹波焼　１本引き	上段	中央地区南半	SK43.W		集石溝断ち割り
226	48	80	青磁	碗	-	(3.35)	(5.3)	-	1/3			上段	中央地区	SK43		
227	48	79	染付磁器	皿	(11.9)	3.7	3.9	1/4	ほぼ完存			上段	中央地区南半	SK43 周辺		人力
228	48	79	白磁	小碗	6.4	3.05	2.7			ほぼ完形	波佐見産	上段	中央地区南東	SD174 石 列下		写真あり
229	48	80	染付磁器	碗	(13.0)	(4.05)	-	1/9	-		明青花	上段	中央地区	SD59		
230	48	79	瓦	平瓦	28.55	25.3	2.05			7/8	数値は長さ・幅・厚さ	上段	南地区南半	SK72		
231	48	80	無釉陶器	甕	(26.4)	(6.0)	-	1/5 強	-	肩部 1/5	丹波焼	上段	南地区	SK932		
232	49	81	土師器	皿	9.1	2.0	6.1	9/10	完存		灯明皿	上段	南地区	方形土坑 SK71		SX56 と切りあう
233	49	81	須恵器	埦	(15.4)	(5.15)	-	1/18	-			上段	南地区	断ち割りセクション除去時		主に砂礫中
234	49	81	無釉陶器	甕	(13.4)	(4.95)	-	1/4	-		丹波焼	上段	南地区	SX1007 西半	褐色砂礫	
235	49	81	須恵器	甕	(15.7)	(4.8)	-	1/5	-			上段	南地区	SX1007 東半肩部	砂礫中	
236	49	81	無釉陶器	甕	不明	(8.2)	-	わずか	-		丹波焼	上段	南地区	SX1007-E	礫層	
237	49	82	無釉陶器	擂鉢	(28.8)	(6.9)	-	1/4	-		丹波焼　１本引き	上段	南地区	SX1007 東半溝部		主に礫内
238	49	82	無釉陶器	擂鉢	(32.7)	(14.5)	(13.8)	1/7+1/6	1/3		丹波焼　１本引き	上段	南地区	SX1007		
239	49	82	無釉陶器	擂鉢	-	(6.5)	(13.2)	-	1/8 以下		丹波焼　１本引き	上段	南地区	SX1007 東半	黄褐色砂礫	人為的埋土
240	49	82	無釉陶器	擂鉢	(47.9)	(10.9)	-	1/12	-		丹波焼　櫛粗	上段	南地区	SX1007 東半溝部		主に礫内

第３表　日下部遺跡出土土器一覧（５）

番号	図版	写真図版	種別	器種	法量（cm）			残存			備考１	出土地区		出土遺構	層位	備考２
					口径	器高	底径	口縁	底	他						
241	49	82	無釉陶器	擂鉢	不明	(4.3)	-	1/8 以下	-		丹波焼　櫛粗	上段	南地区	SX1007	東端礫溜り	
242	49	81	施釉陶器	擂鉢	27.7	11.35	13.65	2/5	2/3		丹波焼　櫛密	上段	南地区	SX1007 東肩		写
243	49	83	施釉陶器	皿	(10.3)	(2.7)	(6.0)	1/7	1/3		瀬戸美濃	上段	南地区	SX1007 東半溝部		主に礫内
244	49	83	施釉陶器	皿 or 埦	-	(1.9)	(3.9)	-	1/3		唐津焼	上段	南地区	SX1007 東半	黄褐色砂礫	人為的埋土
245	49	83	施釉陶器	皿	(13.0)	3.3	(5.0)	1/9 以下	1/4		唐津焼	上段	南地区	SX1007 中央	砂礫中	
246	49	81	施釉陶器	無頸壺	(10.4)	13.55	(12.0)	1/4	1/3		丹波焼か	上段	南地区	SX1007 東肩		
247	49	83	白磁	皿	-	(2.1)	-	-	3/4		砂目跡	上段	南地区南半	SX1007-W	茶褐砂礫	
248	49	83	染付磁器	皿	-	(1.25)	(6.0)	-	2/3	高台わずか	明青花か	上段	南地区	SX1007	東端礫溜り	
249	49	83	染付磁器	碗	-	(3.4)	5.8	-	完存		初期伊万里焼	上段	南地区	SX1007 東半溝部		主に礫内
250	50	83	施釉陶器	甕	(51.8)	67.6	20.4	1/2	完存		埋甕　丹波焼	上段	南地区	SX1001		
251	50	83	染付磁器	瓶	-	(4.9)	5.0	-	完存			上段	南地区	SX1001		
252	50	83	土師器	皿	8.5	1.7	-			ほぼ完形	灯明皿	上段	南地区	SX1010		瓦溜まり
253	50	84	土師器	皿	(9.8)	(2.35)	-	1/3	-			上段	南地区	SX1013 アゼ		
254	50	84	土師器	皿	(9.8)	(2.05)	-	1/7	-			上段	南地区	SX1013		
255	50	84	土師器	塊	不明	(2.3)	-	1/12	-			上段	南地区	SX1013 アゼ		
256	50	84	須恵器	壺（底部）	-	(2.35)	(12.1)	-	1/4 弱			上段	南地区	SX1013 アゼ		
257	50	84	無釉陶器	壺（把手）	不明	(4.4)	-	-	-	把手のみ	瀬戸焼か	上段	南地区	SX1013 アゼ		
258	50	84	無釉陶器	片口捏鉢	(30.4)	(9.35)	-	1/10	-		丹波焼か	上段	南地区	SX1013		
259	50	84	施釉陶器	ひょうそく	1.85	4.4	3.0	-	ほぼ完存	天井部と体部ほぼ残存 肩部 3/5	肩径 6.55cm	上段	南地区	SX1040	土坑底近く	濁茶色土
260	50	84	須恵器	甕	(31.2)	(5.5)	-	1/9	-	肩部 1/9		上段	南地区	SX1041		
261	50	84	染付磁器	皿	(12.6)	(3.5)	-	1/11	1/2	体部 2/5 高台 3/4		上段	南地区	SX1041		
262	50	85	土師器	皿	(8.7)	1.5	-	1/3	1/3		灯明皿	上段	南地区北東半	SK1039	珪化木も出土	
263	50	85	染付磁器	碗	10.0	5.4	3.7	1/2	完存		肥前	上段	南地区北東半	SK1039	珪化木も出土	
264	50	85	瓦類	塼	41.0	(38.5) 断(31.7)	断 3.35 最大 3.55			3/5 程度	数値は長さ・幅・厚さ	上段	南地区北東半	SK1039	珪化木も出土	
265	51	86	土師器	皿	(9.6)	(1.3)	-	1/12	-			上段	南地区	SX1037		全掘
266	51	86	土師器	皿	-	(1.05)	5.0	-	1/4?		数値は長さ・幅・厚さ	上段	南地区	SX1037		全掘
267	51	86	須恵器	壺	-	(4.7)	7.8	-	3/4			上段	南地区	SX1037		全掘
268	51	86	瓦質土器	羽釜か	(29.4)	(11.8)	-	1/7	-			上段	南地区	SK1035		集石上面まで
269	51	86	土師器	皿	(7.2)	(1.5)	-	1/3	-			上段	南地区	SF1053	濁茶灰色土	石敷下・石下
270	51	86	須恵器	埦	(12.0)	(3.2)	-	-	1/10			上段	南地区	SF1053	包含層（近世）	
271	51	86	土師器	皿	(7.9)	(1.8)	(5.4)	5/6	5/6		灯明皿	上段	南地区	SX1043		
272	51	86	瓦類	左桟瓦	(18.6)	(15.7)	(1.7)	-	-	左側 1/4	数値は長さ・幅・厚さ	上段	南西地区	SK2002		
273	51	88	土師器	高坏	-	(3.3)	-	-	-	坏部破片のみ		上段	南西地区			遺構面 精査
274	51	87	土師器	皿	8.3	1.8	-	1/2 強	-		灯明皿	上段	南地区		遺構面まで	
275	51	88	土師器	皿	(10.8)	(1.5)	-	1/6	-		灯明皿	上段	南地区南半		灰褐砂礫	
276	51	88	土師器	塊	(19.9)	(3.15)	-	1/18	-		硬質	上段	南地区北西半	遺構面まで		
277	51	88	施釉陶器	天目茶埦	-	(4.0)	(4.2)	-	1/4		瀬戸美濃系	上段	南地区北半		床土下～砂礫	砂礫 主
278	51	88	青磁	碗	(13.9)	(3.55)	-	1/10	-			上段	南地区北半		床土下～砂礫	砂礫 主
279	51	87	瓦類	塼	(23.3)	(19.8)	4.5			?	数値は長さ・幅・厚さ	上段	南地区北半北東端		遺構面まで	
280	51	88	土師器	皿	6.3	1.9	-	3/4	-		灯明皿	上段	南地区	北石垣 被覆土中	濁灰褐～褐灰茶土	
281	51	87	土師器	皿	(9.9)	(1.6)	(6.6)	1/8	1/2		灯明皿	上段	南地区	北半段落部		
282	51	87	土師器	皿	(6.7)	(1.4)	-	1/5	-		灯明皿	上段	南地区北東半～中央		濁灰褐色土主	
283	51	87	土師器	皿	(8.0)	1.8	-	わずか	4/5		灯明皿	上段	南地区	東側溝	濁灰褐色砂	
284	51	87	土師器	皿	(9.0)	1.7	-	1/8	1/8		灯明皿	上段	南地区北東端		遺構面まで	
285	51	88	土師器	皿	8.7	1.6	7.7	5/6	ほぼ完存		灯明皿	上段	南地区南東端	谷部	濁黄灰砂主	
286	51	88	土師器	皿	8.8	1.9	6.5	1/3	ほぼ完存		灯明皿	上段	南地区	北半段落部		
287	51	87	土師器	皿	(9.3)	1.6	(9.0)	1/4	1/4		灯明皿	上段	南地区南東端	谷部	濁黄灰砂主	
288	51	87	土師器	皿	(9.0)	1.5	(7.1)	1/3	若干		灯明皿	上段	南地区南東端	谷部	濁黄灰砂主	
289	51	88	施釉陶器	灯明受皿	10.7	2.3	4.0	3/4	ほぼ完存			上段	南地区北東端		遺構面まで	
290	51	89	陶胎染付	碗	(9.2)	(5.2)	(7.8)	1/12	わずか	体部 1/5		上段	南地区	北半段落部		
291	51	89	染付磁器	碗	(9.9)	5.05	4.0	わずか	完存			上段	南地区	東側溝	濁灰褐色砂	
292	51	89	染付磁器	碗	-	(5.65)	(6.0)	-	1/2 弱		広東碗	上段	南地区	東側溝	濁灰褐色砂	
293	51	89	白磁	碗	(10.9)	6.5	6.44	7/16	完存	体部 1/2 高台ほぼ残存	広東碗	上段	南地区南東端	谷部	濁黄灰砂主	
294	52	90	施釉陶器	甕	(37.6)	(25.2)	-	1/4	-		丹波焼	上段	南地区東半			機械主に株の下
295	52	90	無釉陶器	甕	-	(31.5)	20.25	-	完存	体部下半のみ	丹波焼	上段	南地区北半	東壁（谷部）		断面図にあり
296	52	90	須恵器	捏鉢	(23.5)	(6.45)	-	1/15	-			上段	工事区 南端	南斜面		表採
297	52	90	無釉陶器	甕	-	(6.3)	(21.0)	-	1/7+1/9		備前焼か		南地区北西竹林上			№19 地点

第３表　日下部遺跡出土土器一覧（６）

番号	図版	写真図版	種別	器種	法量（cm）			残存			備考１	出土地区		出土遺構	層位	備考２
					口径	器高	底径	口縁	底	他						
298	78	115	土師器	経筒（蓋）	-	3.0	(17.0) 裾	-	1/6　裾				西地区	SX01	表土中	日下部経塚
299	78	115	土師器	経筒（身）	(15.2)	(6.0) + (6.8)	(13.8)	1/6	4/5	口縁と底部未接合			西地区	SX01	底板上	日下部経塚
300	78	115	須恵器	坏身	(11.9)	(4.05)	-	1/8	-				（西地区）№19-02 地点		表土中	
301	写真のみ	55	瓦質土器	羽釜							脚部	下段	南地区	SR400	埋土	畔以北
302	写真のみ	56	土師器	塝							タタキ	下段	北地区	SR400　セクション西半		近世
303	写真のみ	56	土師器	羽釜								下段	中央地区中央	SR400	下層	
304	写真のみ	56	土師器	塝								下段	下段中央地区	SR400　セクション		
305	写真のみ	56	須恵器	埦								下段	北地区	SR400	埋土	
306	写真のみ	59	青磁	碗							底部	下段	北地区	SR400 北部	暗灰色シルト以下	
307	写真のみ	59	白磁	碗							底部	下段	下段中央地区	SR400		
308	写真のみ	60	無釉陶器	盤か							丹波焼?	下段	北地区	SR400	埋土	
309	写真のみ	60	施釉陶器	壺							肩部耳付	下段	北地区	SR400	埋土	
310	写真のみ	61	施釉陶器	片口鉢							内面のみ施釉	下段	北地区北東	流路 SR415		
311	写真のみ	61	無釉陶器	徳利							備前焼　窯印	下段	北地区北東	流路 SR415		機械含む
312	写真のみ	62	染付磁器	碗							底部渦福	下段	北地区北部	方形石組井戸 SE416	埋土	畔の西側
313	写真のみ	62	染付磁器	蓋								下段	北地区北部	方形石組井戸 SE416	埋土	畔の西側
314	写真のみ	62	無釉陶器	盤							備前焼or丹波焼	下段	北地区	SE465		一段下げ
315	写真のみ	62	施釉陶器	天目茶埦							美濃焼	下段	北地区	SE450		一段下げ
316	写真のみ	64	土師器	皿							京都系	下段	北地区	SK404	埋土	
317	写真のみ	64	無釉陶器	壺							無頸壺	下段	北地区	SK501		
318	写真のみ	64	瓦	軒丸瓦							巴文	下段	北地区	SK621		
319	写真のみ	64	瓦	軒平瓦								下段	北地区	SK621		
320	写真のみ	65	施釉陶器	埦							唐津焼　砂目	下段	中央地区	SK675		
321	写真のみ	65	無釉陶器	甕							備前焼	下段	北地区東端	SK575	上層	
322	写真のみ	65	無釉陶器	甕							備前焼	下段	北地区東端	SK575	上層	
323	写真のみ	62	無釉陶器	擂鉢							丹波焼　櫛粗	下段	中央地区南半	SR400（攪乱含む）	上層	
324	写真のみ	67	施釉陶器	埦							唐津焼　砂目	下段	北地区			機械
325	写真のみ	67	施釉陶器	小皿							瀬戸美濃灰釉	下段	北地区			表採
326	写真のみ	66	青磁	碗							蓮弁文	下段	北地区北西端			人力
327	写真のみ	66	青磁	碗							印花文　印字打ち	下段	北地区北西端			人力
328	写真のみ	66	染付磁器	皿							明青花底部	下段	北地区北半			機械
329	写真のみ	74	無釉陶器	片口擂鉢							丹波焼　１本引き	上段	北地区北半			人力
330	写真のみ	77	施釉陶器	甕								上段	中央地区	SK01		集石土坑
331	写真のみ	77	瓦	軒平瓦								上段	中央地区	SK01		
332	写真のみ	77	瓦質土器	焜炉								上段	中央地区	SK12		
333	写真のみ	77	瓦類	塼								上段	中央地区	SK12		
334	写真のみ	80	染付磁器	皿							蛇ノ目釉剥ぎ	上段	中央地区	SK64	石の下	
335	写真のみ	80	染付磁器	瓶子								上段	中央地区	SK64	石の下	
336	写真のみ	80	染付磁器	碗							蛇ノ目釉剥ぎ	上段	中央地区南半	SK64		
337	写真のみ	80	青磁	瓶							伊万里焼　耳付き	上段	中央地区	SK64	石の下	
338	写真のみ	81	無釉陶器	甕							丹波焼底部	上段	南地区	SX1007 中央	砂礫中	
339	写真のみ	82	無釉陶器	擂鉢							丹波焼　１本引き	上段	南地区	SX1007	東端礫溜り	
340	写真のみ	82	無釉陶器	擂鉢							丹波焼	上段	南地区	SX1007	濁灰茶シルト	南北断ち割り
341	写真のみ	82	施釉陶器	鉢							胎土目跡	上段	南地区	SX1007		

第３表　日下部遺跡出土土器一覧（７）

番号	図版	写真図版	種別	器種	法量（cm）			残存			備考１	出土地区		出土遺構	層位	備考２
					口径	器高	底径	口縁	底	他						
342	写真のみ	82	施釉陶器	大皿							砂目跡	上段	南地区南端	SX1007-W	茶褐砂礫	
343	写真のみ	83	施釉陶器	埦							唐津焼　胎土目跡	上段	南地区	SX1007 東半溝部		主に礫内
344	写真のみ	83	青磁	碗							三田青磁か	上段	南地区	SX1007	東端礫溜り	
345	写真のみ	84	施釉陶器	埦								上段	南地区	SX1001		一段下げ
346	写真のみ	84	陶器	壺							肩部	上段	南地区	SX1041		
347	写真のみ	84	須恵器	壺							肩部	上段	南地区	SX1041		
348	写真のみ	85	瓦類	塼								上段	南地区北東半	SX1039	珪化木も出土	
349	写真のみ	85	瓦類	塼								上段	南地区	SX1010		
350	写真のみ	85	瓦類	塼								上段	南地区	SX1010		
351	写真のみ	85	瓦類	塼								上段	南地区	SX1010		
352	写真のみ	85	瓦類	塼								上段	南地区	SX1010		
353	写真のみ	86	土師器	皿							糸切り	上段	南地区	SX1036		
354	写真のみ	86	土師器	皿							糸切り	上段	南地区	SX1036		全掘
355	写真のみ	86	染付磁器	碗							緑色釉薬	上段	南地区	石列上炭層中		
356	写真のみ	86	土師器	小皿							灯明皿	上段	南地区	SX1043		
357	写真のみ	86	土師器	小皿							灯明皿	上段	南地区	SX1042	1 層	
358	写真のみ	86	須恵器	埦								上段	南地区	SX1054		
359	写真のみ	86	染付磁器	碗								上段	南地区	SX1035		
360	写真のみ	86	染付磁器	碗								上段	南地区北東半	SX1039	珪化木も出土	
361	写真のみ	87	土師器	小皿							手捏ね　灯明皿	上段	南地区北東端		遺構面まで	
362	写真のみ	87	土師器	小皿							手捏ね　灯明皿	上段	南地区北東端		遺構面まで	
363	写真のみ	88	須恵器	埦							糸切り	上段	南地区西半中央			人力
364	写真のみ	89	無釉陶器	瓶子								上段	南地区北東端		遺構面まで	
365	写真のみ	89	染付磁器	筒形碗							18C 後半	上段	南・南西地区		遺構面まで	
366	写真のみ	89	染付磁器	皿							蛇ノ目釉剥ぎ	上段	南地区北東端		遺構面まで	
367	写真のみ	89	染付磁器	小碗								上段	南地区		遺構面まで	
368	写真のみ	89	染付磁器	碗								上段	南地区		遺構面まで	
369	写真のみ	89	染付磁器	皿							蛇ノ目釉剥ぎ	上段	南地区東半			機械主に株の下
370	写真のみ	89	染付磁器	碗								上段	南地区北東半		遺構面まで	
371	写真のみ	90	瓦類	塼								上段	南地区	北半段落部		
372	写真のみ	90	瓦類	道具瓦							鯱瓦	上段	南地区		遺構面まで	
373	写真のみ	90	無釉陶器	甕							丹波焼	上段	南地区東半	谷部底		
374	写真のみ	90	無釉陶器	壺							貼付突帯	上段	南地区北西竹林上			№19 地点
375	写真のみ	66	土製品	窯壁 or 炉壁							孔あり	下段	北地区上段裾			表採

実測図の断面　白抜きは弥生土器・土師器・瓦器
黒塗りは須恵器
網点は陶磁器

第４表　日下部遺跡出土木製品一覧（１）

番号	図版	写真図版	製品名	備考１	地区	位置	遺構	土層	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ(cm)	備考２
W1	53	91	付木		北		SR400 北端	暗灰色ｼﾙﾄ以下	8.6	0.9	0.65	
W2	53	91	付木		中央		SR400 枝溝		11.4	0.8	0.8	
W3	53	91	曲物 or 桶底板		中央	南半	SR400	下層	(12.7)	(3.1)	0.8	
W4	53	91	桶樽板	小型桶　柿渋か	中央	北端	SR400	中下層	11.3	2.45	0.45	
W5	53	91	提灯上輪	銅鋲	北		SR400	上層	(9.8)	3.15	0.45	
W6	53	91	輪切り材		南		SR400	埋土	8.6	8.1	1.7	
W7	53	91	桶樽板		北		SR400	上層	31.9	8.3	1.1	
W8	53	91	桶樽板		北		SR400	上層	29.95	5.0	1.1	
W9	53	91	板材	切り込み	北	南半	SR400	上層桜丸太列上	(36.2)	(6.3)	0.7	
W10	54	C5・91	漆器椀	赤色系漆	北		SR415	畔内	(9.8)	(3.1)	(5.8)	数値は口径、器高、底径
W11	54	C5・91	漆器椀	外黒内赤色系漆	北	北東	SR415		10.8	(4.4)	(5.4)	
W12	54	91	円形挽物	黒色漆盆	北	北東	SR415		(20.6)	(12.1)	2.65	(30.0) 底径
W13	54	92	箸		北	北端	SR415		22.45	0.6	0.5	
W14	54	92	箸		北	北部東半	SR415	畔整形時	(24.3)	0.7	0.7	
W15	54	92	箸		北		SR415		(18.4)	0.55	0.65	
W16	54	C5・92	樽蓋板	黒色・転写文字	北	北端	SR415		23.4	(10.8)	1.05	
W17	54	92	曲物底板	墨書	北	北東部	SR415	灰色粘質砂		(6.75)	0.7	12.9 底径
W18	55	92	長円形曲物底板	円孔	北	北東	SR415		(45.3)	(5.2)	0.75	
W19	55	92	箱物	黒色　柿渋か	北	北端	SR415		(12.2)	4.1	0.9	
W20	55	92	経木板	折敷	北	北端	SR415	人力	(6.9)	(3.4)	0.3	
W21	55	92	経木板	柿葺き	北	北東	SR415		15.0	(3.6)	0.15	
W22	55	92	竹筒	竹	北		SR415	埋土畔除去中	10.8	2.7	2.3	
W23	55	93	柄	円孔	北	北端	SR415		22.8	1.6	1.9	
W24	56	93	桶樽板		北		SR415	畔内	24.6	6.7	1.0	
W25	56	93	角材		北	北東部	SR415	機械含む	(7.8)	(3.2)	1.55	
W26	56	93	角材		北	北部	SR415	埋土下半	7.3	6.4	3.03	
W27	56	93	角材		北	北部	SR415	埋土下半	13.4	2.7	2.8	
W28	56	93	丸太材		北	北部	SR415	埋土下半	(48.3)	8.8	6.0	
W29	56	93	杭		北	北部	SR415	埋土下半	(18.0)	4.4	4.4	
W30	56	93	杭		北	北部	SR415	埋土下半	(16.5)	4.8	4.9	
W31	56	C5・93	製材板	横挽き	北	北端	SR415		(73.4)	23.1	7.4	
W32	57	94	曲物 or 桶底板	釘孔	北	北端	SE416	埋土東端部	12.2	11.5	0.6	
W33	57	94	曲物 or 桶底板		北		SE416	埋土	12.6	11.5	0.9	
W34	57	94	曲物 or 桶底板		北	北部	SE416	埋土下層		(6.75)	0.9	12.3 底径
W35	57	94	曲物側板	箍　樺綴じ	北	北部	SE416	埋土下層	(5.7)	(2.0)	0.7	
W36	57	94	鍋蓋	桶底か	北	北部	SE416	埋土下層			1.5	23.0 底径
W37	57	94	箸		北	北部	SE416	埋土下層	(10.4)	0.55	0.55	
W38	57	94	横櫛		北	北端	SE416	埋土東端部	8.5	4.2	0.8	
W39	57	94	箱物	木釘	北	北部	SE416	埋土下層	22.8	(6.4)	0.75	
W40	57	94	箱物		北	北部	SE416	埋土下層	(21.6)	4.5	0.7	
W41	57	94	杭		北	北部	SE416	埋土下層	(24.4)	2.05	1.4	
W42	57	94	杭		北	北部	SE416	埋土下層	(16.4)	(3.1)	2.8	
W43	58	94	桶樽板	木釘孔	北		SK501		33.6	6.2	1.0	
W44	58	94	桶樽板	矢板状再加工	北		SK501		22.5	8.4	1.1	
W45	58	94	板材		北		SK501		(19.8)	8.75	1.4	
W46	58	95	鍋蓋	桶底か	北		SK501		(24.3)	(5.25)	1.2	
W47	58	95	鍋蓋	桶底か	北		SK501		30.7	(6.5)	1.1	
W48	58	95	箱物	釘孔 柿渋か	北		SK501		31.25	5.95	1.55	
W49	58	95	竹筒	竹	北		SK501		35.95	2.3	2.3	
W50	58	95	擂り粉木		北		SK501		26.9	4.4	4.25	
W51	59	96	下駄	差歯	北		SK501		21.3	9.35	2.45	
W52	59	96	下駄	差歯	北		SK501		21.65	9.55	2.4	5.7 器高
W53	59	96	下駄	連歯	北		SK501		21.05	8.9	3.3	
W54	59	97	板材	釘孔	北		SK501		(28.7)	(5.7)	1.2	
W55	59	97	板材	釘孔	北		SK501		(32.15)	(8.75)	1.85	
W56	59	97	板材	孔	北		SK501		(48.1)	(13.5)	1.0	
W57	60	97	角材		北		SK501		10.2	4.9	2.7	
W58	60	97	角材	釘孔	北		SK501		25.95	5.1	2.6	
W59	60	97	杭		北		SK501		(36.95)	4.1	4.15	
W60	60	97	杭		北		SK501		34.75	3.75	3.3	
W61	60	97	杭		北		SK501		63.7	3.9	3.5	

第４表　日下部遺跡出土木製品一覧（２）

番号	図版	写真図版	製品名	備考１	地区	位置	遺構	土層	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ(cm)	備考２
W62	60	97	下駄	連歯　露地	北		SK608	北端石組内	21.95	(5.7)	3.4	
W63	60	97	下駄	連歯	北		SK608 北端	下層	22.0	9.8	2.6	
W64	60	97	柄		北		SK608 北端	下層	35.3	2.3	1.7	
W65	61	C5・98	漆器大皿	外黒内赤色系海老絵	北		SK608		(30.4)	2.8	(19.0)	数値は口径、器高、底径
W66	61	C5・98	杓子	柿渋か	北		SK608	北端石組内	(13.4)	7.0	1.65	
W67	61	C5・99	漆器大皿	外黒内赤色系海老絵	北		SK510	中央部西寄り	(29.4)	(3.3)	(19.0)	数値は口径、器高、底径
W68	62	C5・100	曲物底板	蓋　墨書	北		SK419	埋土	11.95	(7.55)	0.25	
W69	62	C5・100	杓子	黒色　柿渋か	北		SK419	埋土	(13.7)	8.9	0.9	1.6 器高
W70	62	100	箸		北		SK419	埋土	22.55	0.65	0.65	
W71	62	100	篦	竹	北		SK419	埋土	(13.3)	1.06	0.13	
W72	62	100	板材	釘孔	北		SK419	埋土	(17.4)	5.9	1.3	
W73	62	100	漆器椀	外黒内赤色系漆	北	北半	SK601			(3.6)	6.4	数値は器高、底径
W74	62	100	棒状木製品		北		SK464	桶内埋土	(9.9)	1.6	1.6	
W75	62	100	塗箸	赤色系・黒色漆	北	中央	SK449	桶内埋土	(15.5)	0.5	0.5	
W76	62	100	板材		中央	上段中央	SK65	上段	21.35	5.15	0.3	
W77	63	101	把手	木釘	北		SK575		10.3	2.4	2.0	
W78	63	101	曲物 or 桶底板		北		SK621		9.7	9.7	0.9	
W79	63	C5・101	漆器椀	赤色系漆	北		SK621		(11.0)	3.5	(5.3)	数値は口径、器高、底径
W80	63	101	下駄	連歯　焼き印	北		SK621		(12.7)	(4.2)	1.5	
W81	63	101	箸		中央		SK736	桶内埋土	21.7	0.6	0.6	
W82	63	101	箸		中央		SK736	桶内埋土	21.0	0.7	0.5	
W83	63	101	箸		中央		SK736	桶内埋土	(18.7)	0.65	0.65	
W84	63	101	箸		中央		SK736	桶内埋土	(11.45)	0.55	0.55	
W85	63	101	箸		中央		SK736	桶内埋土	(10.6)	0.6	0.65	
W86	63	101	篦	竹	中央		SK736	桶内埋土	11.9	1.4	0.4	
W87	63	101	篦	竹	中央		SK736	桶内埋土	15.7	2.5	0.4	
W88	63	101	切匙	竹	中央		SK736	内部埋土埋桶	24.2	2.25	0.6	
W89	63	101	切匙	柿渋か	中央		SK736	内部埋土埋桶	21.2	2.95	0.9	
W90	64	102	角材		中央		SK736	桶内埋土	(12.1)	(1.0)	0.9	
W91	64	102	角材	釘孔	中央		SK736	桶内埋土	(26.5)	3.3	2.6	
W92	64	102	桶底板	組み合わせ	中央		SK736	桶内埋土	29.7	(30.6)	1.5	
W93	64	102	桶樽板		中央		SK736	桶内埋土	29.6	5.75	1.25	
W94	64	102	板材		中央		SK736	内部埋土	(55.15)	16.8	1.7	
W95	64	102	板材	釘孔	中央		SK736	桶内埋土	30.7	18.8	2.1	2.7 器高
W96	64	102	板材	釘孔	中央		SK736	桶内埋土	51.2	14.7	1.25	
W97	65	103	埋桶	埋桶組み上げ	北		SK888		36.8	(28.8)	35.2	数値は幅、器高、底径
W98	65	103	桶樽板		北	北東	東半攪乱	機械	(29.25)	4.05	1.25	
W99	65	103	桶樽板		北	北東	東半攪乱	機械	(29.8)	4.25	1.25	
W100	65	103	建築部材		北	南半部	攪乱含む	人力	(21.1)	7.7	2.6	
W101	65	103	建築部材		北	南部	遺構検出時		(10.25)	(3.8)	2.65	
W102	65	104	下駄	連歯　露地	北	北東	東半攪乱	機械	21.15	9.25	3.25	
W103	65	104	下駄	連歯	北	北東	東半攪乱	機械	(21.15)	(4.8)	2.1	
W104	66	104	竹筒	竹	中央		SK739 甕内埋土		(13.1)	1.8	1.7	
W105	66	104	箱物	黒色　柿渋か	北	北東	東半攪乱	機械	(8.95)	(5.55)	0.8	
W106	66	104	穿孔細板	部材	中央	北西端	近世落込	機械	27.7	1.4	0.6	
W107	66	104	加工角材		北	北西部		人力	(8.4)	1.5	0.9	
W108	66	104	加工板材		北	北東	東半攪乱	機械	10.15	(4.65)	1.35	
W109	66	104	経木板	柿葺き	北	北東	東半攪乱	機械	(16.0)	(3.0)	0.35	
W110	写真のみ	91	付木		北	北半	流路南 SR400					
W111	写真のみ	101	漆器椀	外黒内赤色系漆	北		SK621					
W112	写真のみ	101	漆器椀	赤色系漆	北		SK621					
W113	写真のみ	101	漆器椀	赤色系漆	北		表採					
W114	写真のみ	C5	角材	赤色系顔料	中央	東端	包含層及び攪乱					

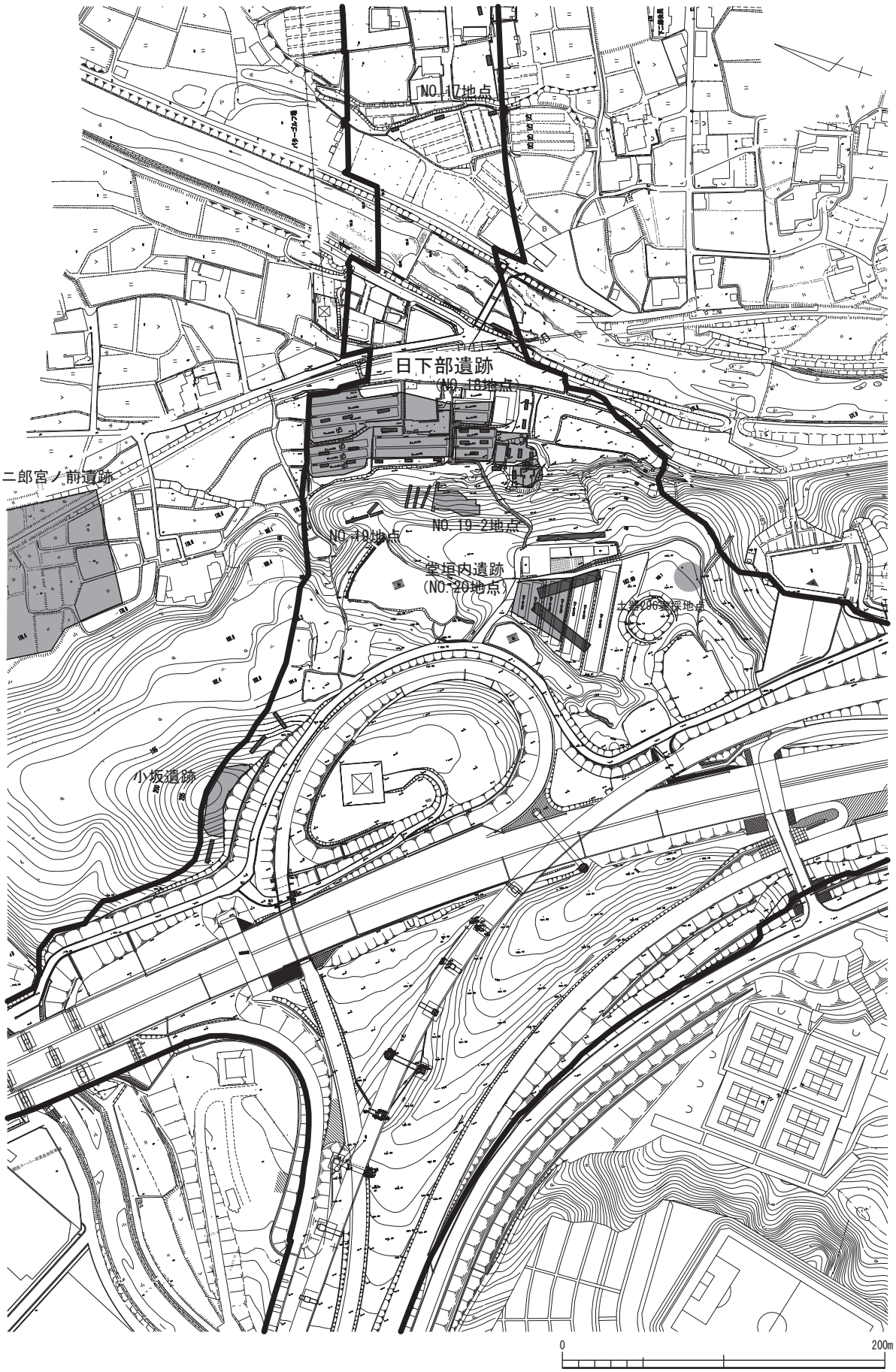
第５表　日下部遺跡・日下部経塚出土金属製品一覧

	番号	図版	写真図版	種別	製品名	種類	出土地区		遺構	土層	備考	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
日下部遺跡	M1	67	105	銅製品	銭	一銭銅貨	上段	中央	SK820	上面攪乱坑	一銭銅貨	2.75	3.75	0.20
	M2	67	105	銅製品	銭	寛永通寶	上段	南	SK71	SX1007と切りあう方形土坑	寛永通寶	(2.00)	(1.70)	0.10
	M3	67	105	銅製品	銭	寛永通寶	上段	南		包含層	寛永通寶	2.30	2.30	0.15
	M4	67	105	銅製品	銭	寛永通寶	上段	南		北端人力	寛永通寶	2.50	2.10	0.10
	M5	67	105	銅製品	水滴		下段	中央	SK739	甕内埋土	田螺形	4.40	2.70	1.75
	M6	67	105	銅製品	帯状金具	線香立て	下段	北		中央部遺構上面検出中	蚊取り線香？	7.35	0.4	0.05
	M7	67	105	銅製品	煙管	吸口	下段	北	SK450		吸口	5.90	0.90	0.90
	M8	67	105	銅製品	鈴		上段	中央	SK68	上層	6.1g	2.10	1.50	1.55
	M9	67	105	鉛製品	鉄砲玉		上段	南		北東半～中央濁灰褐色土主	11.7g	1.35	1.40	(1.10)
	M10	68	105	銅製品	卸金	両面卸金	下段	北	SR415	埋土畔内	両面使用	(12.30)	10.20	0.65
	M11	68	106	鉄製品	火打金		下段	北	SK419	埋土		8.10	3.18	0.43
	M12	68	106	鉄製品	釘		上段	北	SK224	埋土下半底まで		(2.50)	0.55	0.60
	M13	68	106	鉄製品	釘		上段	北	SK342	(南)		(2.95)	0.60	1.00
	M14	68	106	鉄製品	釘		上段	北		包含層		2.95	0.65	0.65
	M15	68	106	鉄製品	釘		上段	中央	SK70			(5.20)	0.70	0.55
	M16	68	106	鉄製品	釘		上段	中央	SK70			(11.10)	0.55	1.35
	M17	68	106	鉄製品	釘		上段	南	SK71	SX1007と切りあう方形土坑		(2.40)	0.45	0.40
	M18	68	106	鉄製品	釘		下段	南	SK932	西		(8.62)	0.98	0.75
	M19	68	106	鉄製品	釘		上段	南西	SK2001	埋土		(8.20)	2.05	1.32
	M20	68	106	鉄製品	鋤先		上段	中央	SK65-S			(6.80)	(4.53)	0.60
	M21	68	106	鉄製品	包丁		上段	南	SX1001	主に埋甕中		(25.00)	5.00	0.45
日下部経塚	M22	78	115	銅製品	銭	元祐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1086　篆書	2.50	2.50	0.15
	M23	78	115	銅製品	銭	元祐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1086　篆書	2.40	2.40	0.15
	M24	78	115	銅製品	銭	景祐元寶	経塚	西	SX01	底板上	1034　真書	2.50	2.50	0.15
	M25	78	115	銅製品	銭	元豊通寶	経塚	西	SX01	底板上	1078　篆書	2.40	2.40	0.20
	M26	78	115	銅製品	銭	開元通寶	経塚	西	SX01	底板上	唐 621　真書	2.25	2.25	0.10
	M27	78	115	銅製品	銭	皇宗通寶	経塚	西	SX01	底板上	1038　篆書	2.40	2.40	0.10
	M28	78	115	銅製品	銭	元豊通寶	経塚	西	SX01	底板上	1078　行書	2.40	2.40	0.10
	M29	78	115	銅製品	銭	嘉祐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1056　真書	2.50	2.50	0.15
	M30	78	115	銅製品	銭	元祐通寶	経塚	西	SX01	底板上	1086　篆書	2.50	2.50	0.10
	M31	78	115	銅製品	銭	熙寧元寶	経塚	西	SX01	底板上	1068　真書	2.40	2.40	0.10
	M32	78	115	銅製品	銭	皇宗通寶	経塚	西	SX01	底板上	1038　真書	2.40	2.40	0.10
	M33	78	115	鉄製品	鉄鏃	雁股鏃	経塚	西	SX01	積石内		10.05	5.10	0.35
	M34	78	115	鉄製品	刀子		経塚	西	SX01	積石内		20.20	2.50	0.60
	M35	78	115	銅製品	銭	天聖元寶		西	№19～20地点	表土中	1023　篆書	2.50	2.50	0.10
	M36	78	115	銅製品	笄			西	調査区南西部	表土中		15.90	1.55	0.30

第６表　日下部遺跡出土石器・石製品一覧

番号	図版	写真図版	器種	出土地区		出土遺構	層位	備考	法量				
									器高（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
S１	69	106	石鏃	上段	北地区　中央部		遺構面上	精査中		1.70	1.49	0.30	0.5
S２	69	106	碁石	下段	北地区			表採		2.1	1.8	0.65	3.6
S３	69	106	碁石	下段	北地区			表採		2.2	2.1	0.45	3.4
S４	69	106	碁石	下段	南地区			表採		2.5	1.7	0.55	3.7
S５	69	106	砥石	下段	北地区　南半部	SR400 西肩	上層攪乱層＋下層暗青灰粘砂			9.1	4.5	3.4	172.7
S６	69	107	砥石	下段	北地区	SR415		東北部遺物集中地点		8.02	4.4	2.68	134.5
S７	69	106	砥石	下段	南地区	SR400	上面	機械掘削		19.4	5.1	5.85	792.0
S８	70	107	砥石	下段	北地区	SE416	埋土下層石組井戸			8.93	3.98	1.71	83.9
S９	70	107	砥石	下段	北地区	SR415		東北部遺物集中地点		10.08	5.55	2.9	186.4
S10	70	107	砥石	下段	上段裾北地区			表採		13.95	2.4	3.3	133.7
S11	70	107	砥石	上段	南地区	SX1007 東肩				12.45	5.95	1.7	234.2
S12	70	107	砥石	上段	南地区	SK70				9.2	3.15	2.75	107.5
S13	71	108	石臼	下段	北地区	SR400	上層近世攪乱		18.9	径（34.7）		18.9	
S14	71	108	石臼	下段	北地区	SK437			10.0	径 28.35	-	9.5	
S15	71	108	石臼	下段	南地区	SD916			7.9	径 31.25	-	7.1	
S16	71	108	五輪塔地輪	下段	北地区	SR400	上層近世攪乱		22.1		27.7		
S17	71	108	五輪塔地輪	下段	北地区北東端	SR415			15.25		21.5		
S18	71	108	五輪塔地輪	下段	北地区北東端	SR415			22.9		29.8		

図　　版

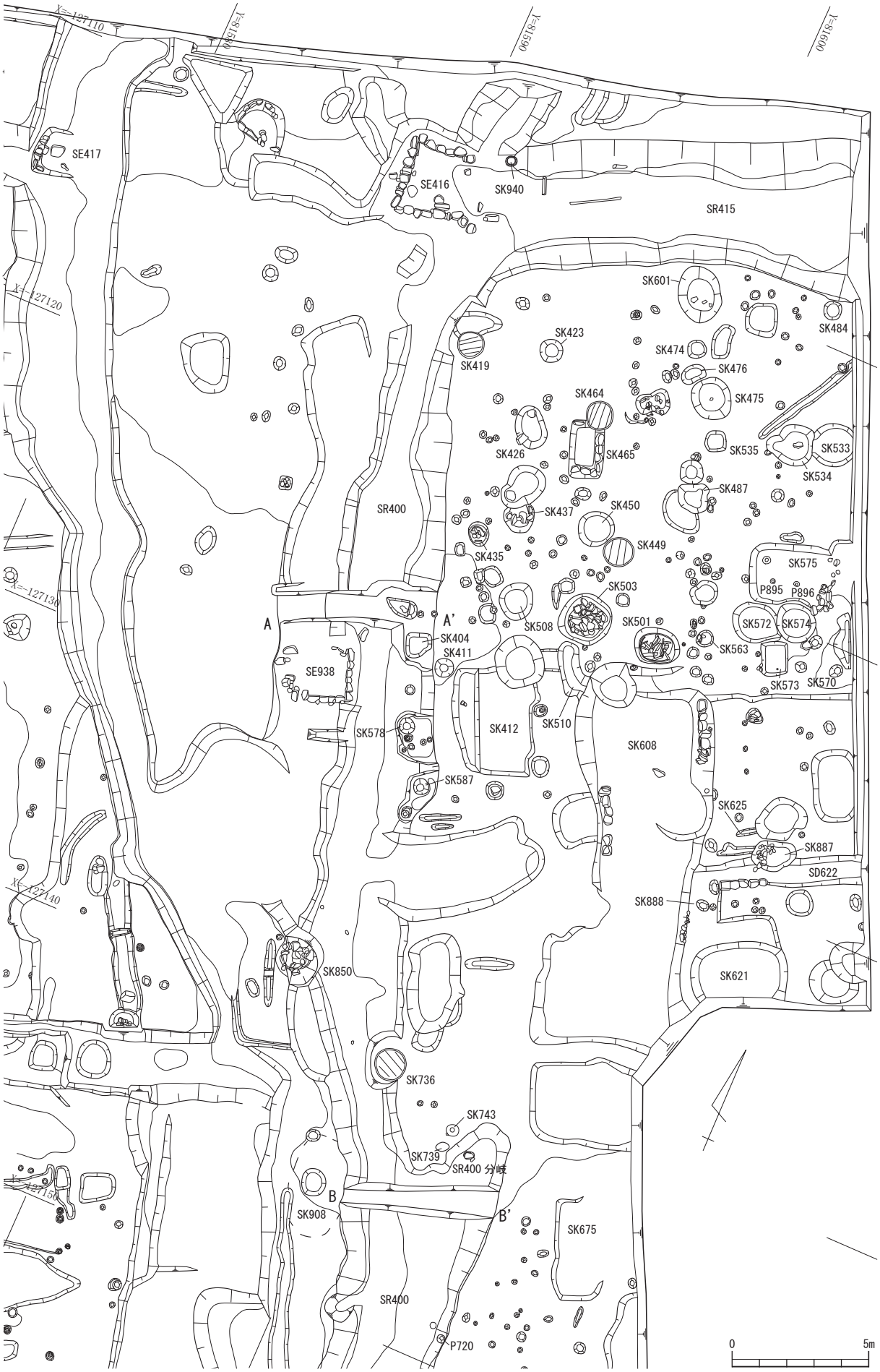

NO.17地点
日下部遺跡
(NO.18地点)
二郎宮ノ前遺跡
NO.19地点
NO.19-2地点
堂垣内遺跡
(NO.20地点)
土器206表採地点
小坂遺跡
0
200m

調査地点位置図

図版 2

Y=81560
Y=81580
Y=81600
Y=81620
X=-127100
X=-127120
X=-127140
X=-127160
X=-127180
X=-127200
X=-127220
X=-127240
下段
上段
北地区
中央地区
南地区
西地区
南西地区
下段
上段
大歳神社旧境内
0
50m

調査区全体図


X=-127110
X=-127120
X=-127130
X=-127140
X=-127150
Y=-81580
Y=-81590
Y=-81600
SE417
SE416
SK940
SR415
SK601
SK484
SK423
SK419
SK474
SK476
SK475
SK464
SK426
SK465
SK535
SK533
SK534
SK487
SR400
SK437
SK450
SK449
SK435
SK575
SK503
P895
P896
A
A'
SK508
SK501
SK572
SK574
SK404
SK411
SK563
SE938
SK573
SK570
SK578
SK412
SK510
SK608
SK587
SK625
SK887
SD622
SK888
SK850
SK621
SK736
SK743
SK739
SR400 分岐
B
B'
SK908
SK675
SR400
P720
0
5m

下段北地区遺構配置図

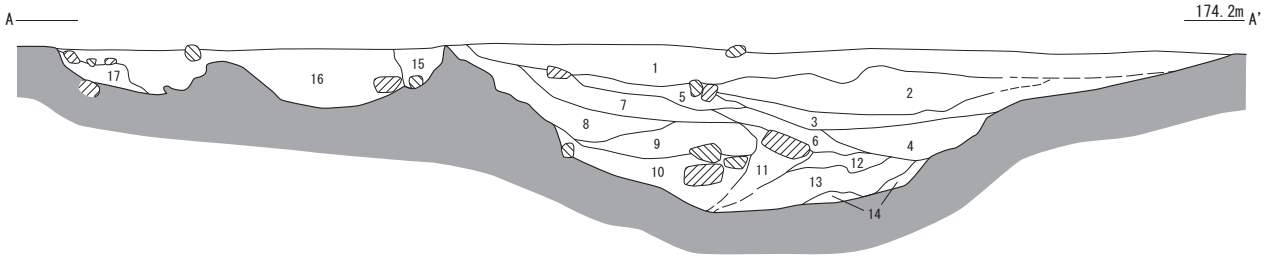
図版 4

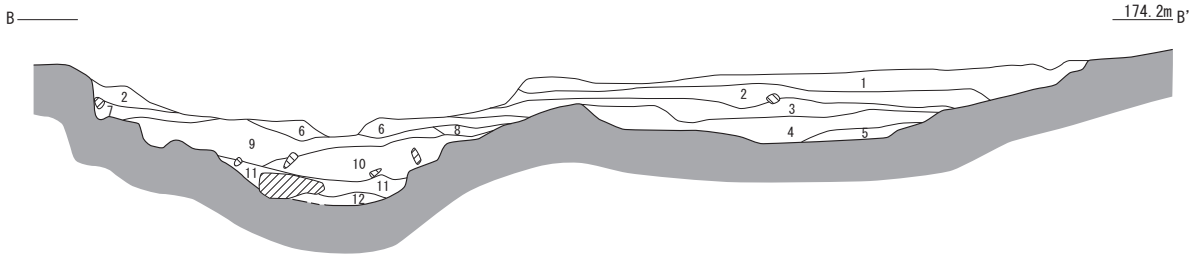
下段中央地区遺構配置図

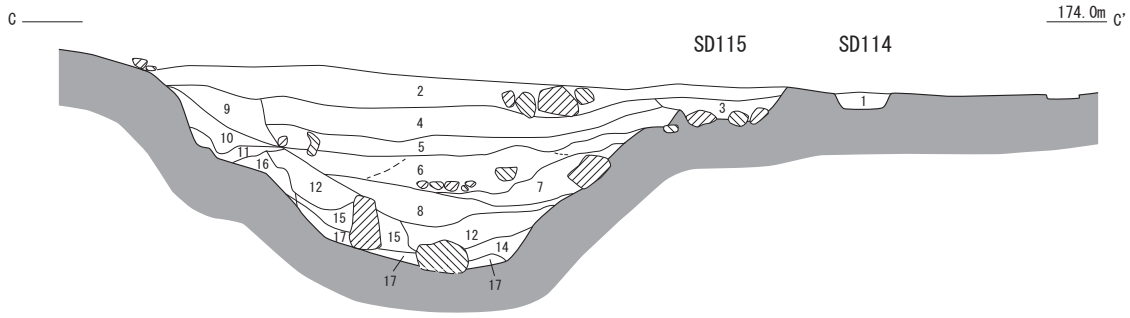
SK189
SR400
SD174
SK71
SK932
175.00
SD916
SD114
E
E'
X=-127180
X=-127190
X=-127200
X=-127210
X=-127220
Y=-81610
Y=-81620
0
10m

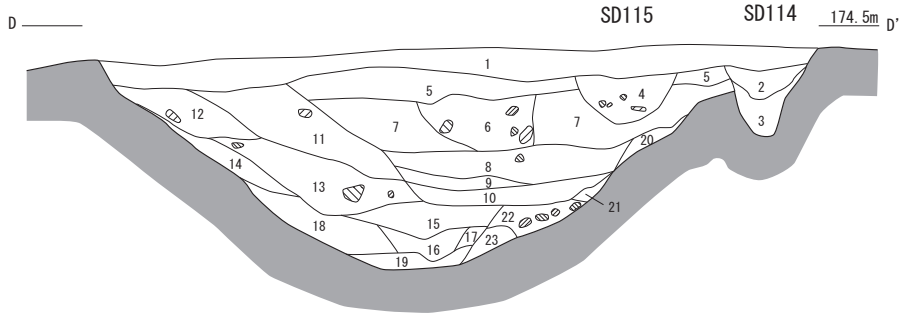
下段南地区遺構配置図

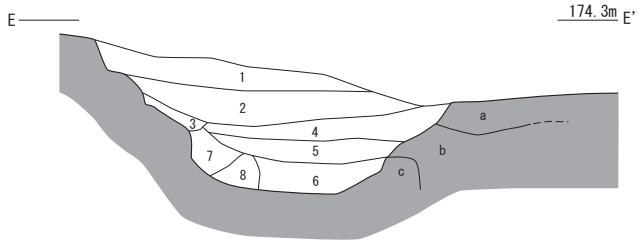
図版 6







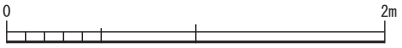




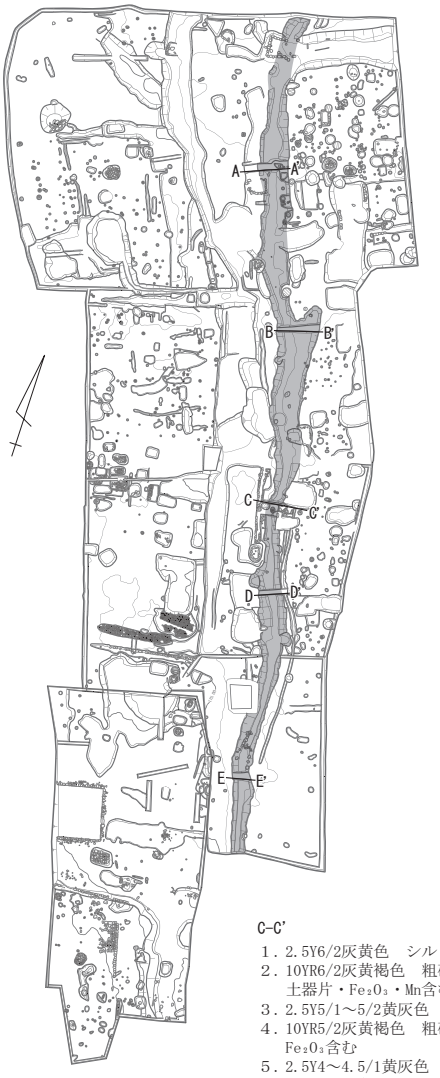
E-E'

1．2.5Y4.3/1 黄灰色　細砂で極細砂含む　粗砂～中砂微量に含む　やや砂質
2．2.5Y3.8/1 黄灰色　砂層軟質　細砂～中砂で粗砂微量に含む
3．2.5Y3/1 黒褐色　極細砂～細砂　やや粘質　炭化物微量に含む
4．5Y2.7/1 オリーブ黒色　砂層　細砂～極粗砂　細礫少量含む　淘汰悪い
5．5Y4/1 灰色　極細砂混じり細砂～中砂　粗砂～極粗砂微量に含む
6．10Y4.5/1 灰色　シルト質極細砂　粘質　軟質　植物遺体等有機物多く含む
7．10GY5.9/1 緑灰色　極細砂～細砂　地山崩落土
8．10GY6.4/1 緑灰色　粗粒シルト～極細砂　細砂多く含む
地山崩落土中に第 6 層が入り込んだ部分　有機質層のラミナあり

地山
- a. 2.5Y6.5/2 灰黄色　シルト質極細砂混じり細砂　極粗砂微量に含む
径 5 ～ 10 ㎝大の中礫・大礫微量に含む
- b. 10G6/1 緑灰色　砂礫層　中砂～径 3 ㎝大の中礫含む　淘汰悪い
- c. 5G5.5/1 緑灰色　砂層　細砂～中砂　軟質



下段 SR400 土層断面図



A-A'

1．7.5YR3/1黒褐色　極細砂～細砂で中砂～細礫含む　径5mm～中礫～径10cm大の大礫含む
2．2.5Y3.4/1黒褐色　細砂まじり中砂で粗砂～細礫含む
3．砂礫層2.5Y6/2灰黄色　細砂～細礫で径5cm大の中礫少量含む　淘汰悪い
4．2.5Y3/6黄灰色　極細砂まじり細砂～粗砂　砂層　極粗砂～細礫少量含む
　極細砂のラミナあり
5．砂礫層10YR5/6黄褐色　細砂～細礫で径3cm～10cm大の中礫・大礫少量含む　淘汰悪い
6．2.5Y4.5/1黄灰色　細砂～中砂の砂層で粗砂～細礫少量含む　淘汰悪い
7．2.5Y4/1黄灰色　極細砂まじり細砂　中砂少量含む　やや粘質
8．2.5Y3/1黒褐色　粗粒シルトまじり極細砂で細砂少量含む　粘質
　底面と左端に炭化物集中
9．5Y4/1灰色　シルト質極細砂～細砂　地山がマーブル状にまじる
10．2.5Y3.7/1黄灰色　極細砂で細砂～中砂含む　粘質　地山のラミナあり
11．2.5Y3/1黒褐色　極細砂粘質　木質等有機質含む
12．5Y4.5/1灰色　細砂～中砂　砂層に近い　粗砂少量含む
　極細砂のラミナ細いものあり
13．7.5GY5.5/1緑灰色　シルト質極細砂～細砂で11層がブロック状にまじる
14．2.5GY5/1オリーブ灰色　粗粒シルト～極細砂で細砂多く含む　粘質
15．砂礫層10YR6/7明黄褐色　極細砂まじり細砂で径7cm大の大礫詰まる
16．7.5YR3.3/1黒褐色　極細砂～細砂　腐植土系　植物遺体含む
17．10YR4.5/1褐灰色　極細砂で細砂～粗砂含む　粘質
　地山7.5GY6/1緑灰色　細砂で中砂微量含む

B-B'

1．10YR5/1.2褐灰色　極細砂～細砂で粗砂～極粗砂含む　やや砂質
2．10YR5.5/1.2褐灰色　極細砂まじり細砂で中砂～細礫 径2～3cm大の中礫少量含む
　砂礫層に近く淘汰悪い
3．7.5Y5.4/8明褐色　砂礫層(酸化第二鉄の色)細砂～極粗砂　固く締まる
4．2.5Y6/2灰黄色　砂層 細砂～中砂でFe_2O_3の沈着ラミナあり
5．5Y3.8/1灰色　極細砂まじり細砂～粗砂　粘質砂層　中礫少量含む
6．2.5Y5/1.2黄灰色　細砂～中砂　軟質砂層　有機物含む
7．2.5Y6/2.2灰黄色　細砂～粗砂で極粗砂～径2cm大の中礫多く含む
　砂礫層に近い　淘汰悪い
8．10YR6/7明黄褐色　砂礫層 中砂～細礫～径1cm大の中礫含む　淘汰悪い
9．10YR3/2黒褐色　粗粒シルト～極細砂で有機物多く含む　細砂～中砂のラミナ多い
10．2.5Y6/4にぶい黄色　砂礫層　中砂～細礫で径6mm～3cm大の中礫多く含む　淘汰悪い
　細砂～中砂のラミナあり
11．5GY5/1オリーブ灰色　シルト質極細砂で植物遺体等有機物多く含む　やや粘質
12．10GY5.5/1緑灰色　粗粒シルト～極細砂で粘質を主とし、マトリックスは粗砂～細礫
　全体的に粘質

C-C'

1．2.5Y6/2灰黄色　シルト質極細砂～細砂　7cm大の円礫含む　Fe_2O_3含む(SD114埋土)
2．10YR6/2灰黄褐色　粗砂混じりシルト質極細砂～細砂　細礫含む　10cm～20cm大の大礫(亜角礫から亜円礫)含む
　土器片・Fe_2O_3・Mn含む
3．2.5Y5/1～5/2黄灰色　シルト質極細砂～粗砂　細礫まばらに含む　10cm～15cmの大礫(亜円礫)底部に含む(SD115埋土)
4．10YR5/2灰黄褐色　粗砂混じりシルト質極細砂～細砂　径1～3cmの中礫(円礫)まばらに含む　土器片わずかに含む
　Fe_2O_3含む
5．2.5Y4～4.5/1黄灰色　シルト混じり細砂～極粗砂　8～10cm大の大礫(角礫～亜円礫)わずかに含む　炭化物まばらに含む
6．7.5Y5/1灰色　シルト混じり細砂～極細砂　ラミナ　下部に3～10cm大の中礫～大礫(亜角礫～円礫)の礫層入る
7．5Y5/1灰色　シルト混じり極細砂～粗砂　ラミナ　1～2cm大の中礫(円礫)含む
8．5Y4/1灰色　シルト質極細砂～粗砂　ラミナ　極粗砂が薄い層状に入る、植物遺体を含む
9．2.5Y5/1～1.5黄灰色　シルト質極細砂～細砂　5cm大の中礫(亜角礫)含む、Fe_2O_3・Mn含む
10．10YR4/2灰黄褐色　シルト質極細砂～細砂　クサレ礫わずかに含む、Fe_2O_3含む
11．7.5Y6/1灰色　シルト質極細砂～細砂　Fe_2O_3わずかに含む
12．2.5Y5/1黄灰色　粗砂混じりシルト～細砂　細礫～3cm大の中礫まばらに含む　粘性やや高い
13．5Y5/1灰色　極細砂～細砂　ラミナ　10Y6/1灰色シルトブロックまばらに入る　植物遺体含む
14．5Y3.5/1灰色　シルト～粗砂　植物遺体含む、炭化物多く含む　粘性高い
15．7.5Y6.5/1灰色　粗砂混じりシルト　植物遺体含む　長さ30cmの亜角礫含む
16．5Y6/1灰色　シルト～細砂　Fe_2O_3含む
17．10Y6.5/1灰色　粗砂～極粗砂　ラミナ 径1～2cm大の中礫含む　最下部にシルト層薄く堆積　東側砂粒細かい
　植物遺体含む　径25cmの巨礫(円礫)含む
18．2.5Y7/2灰黄色　シルト質極細砂～細砂　Fe_2O_3・Mn含む(地山)

D-D'

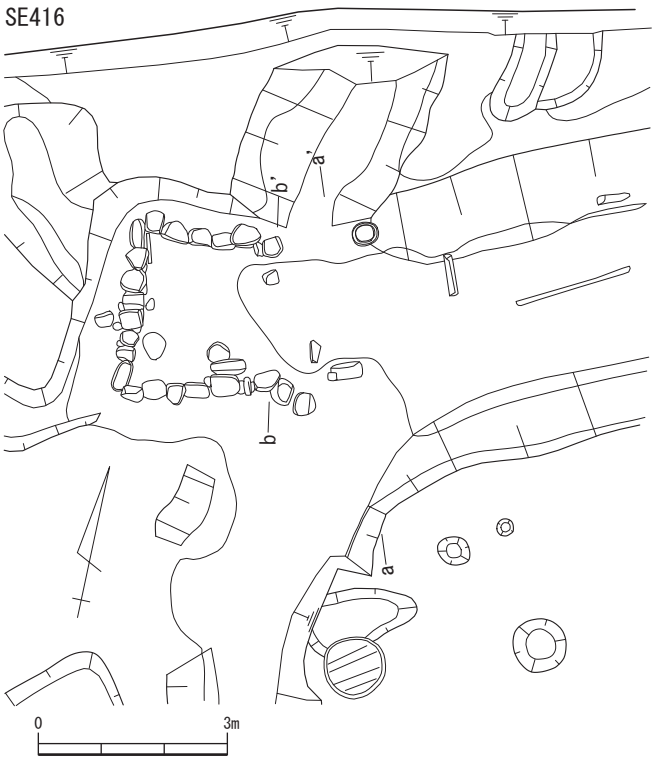
1．2.5Y6/2黄灰色　極粗砂混じりシルト質極細砂～細砂　1～5cm大の亜角礫～円礫含む　土器・炭化物含む
2．2.5Y5/2暗灰黄色　極細砂～粗砂　細礫多く含む(SD114埋土)
3．10YR5/2灰黄褐色　シルト混じり極細砂～細砂　1～5cm大の亜角礫わずかに含む　Fe_2O_3多く含む
4．10YR3/2黒褐色　粗粒砂～極細砂 細礫～7cm大の大礫(亜円礫～円礫)多く含む　上半は第１層の影響により砂粒が細かい(SD115埋土)
5．10YR5/2灰黄褐色　シルト質極細砂～細砂 細礫～5cm大の中礫、土器まばらに含む　Fe_2O_3含む　北側アゼ第４層と対応
6．10YR4/4褐色　シルト混じり細砂～極粗砂　細礫～10cm大の大礫(亜角礫～円礫)含む　Fe_2O_3含む
7．2.5Y5/2暗灰黄色　シルト質極細砂～細砂　細礫～5cm大の中礫まばらに含む　土器片含む　Fe_2O_3含む
8．2.5Y5/1黄灰色　シルト混じり細砂　ラミナ　径1～3cm大の中礫含む　炭化物含む　Fe_2O_3上部に層状に入る
9．2.5Y3.5/1黒褐色　シルト混じり極細砂～細砂　ラミナ 炭化物含む
10．5Y5/1灰色　シルト混じり細砂～粗砂　ラミナ 炭化物含む　径1～5cm大の中礫わずかに含む
11．5Y5.5/1灰色　シルト質極細砂～細砂　細礫～1cm大の中礫多く含む　酸化第二鉄含む
12．2.5Y4/2暗灰黄色　シルト質極細粒砂～細砂　細礫～10cm大の大礫まばらに含む　Fe_2O_3含む
13．5Y3.5/1灰色　粗砂混じりシルト質極細砂～細砂　細礫～10cm大の大礫多く含む　炭化物わずかに含む
14．10YR3/1黒褐色　シルト～粗砂　炭化物含む　径1～3cm大の中礫わずかに含む
15．7.5Y4.5/1灰色　シルト混じり細砂～粗砂　ラミナ　炭化物含む
16．5Y3/1オリーブ黒色　シルト質極細砂～粗砂　ラミナ　炭化物、植物遺体含む　北側アゼ第14層と対応
17．5Y5/1灰色　シルト～細砂　植物遺体・炭化物含む　粘性高い
18．2.5Y4/1黄灰色　粗砂混じりシルト～細砂　径1～3cm大の中礫わずかに含む　炭化物含む
19．5Y5.5/1灰色　シルト混じり細砂～極粗砂　炭化物含む ラミナ
20．北側アゼ第18層と対応
21．2.5Y6/1黄灰色　粗砂～極粗砂(地山)
22．2.5Y6/3にぶい黄色　シルト混じり粗砂～極粗砂　1～10cm大の中・大礫(亜角礫～円礫)多く含む(地山)
23．10Y6/1灰色　シルト混じり極細砂～極粗砂 粘性高い(地山)

0　50m

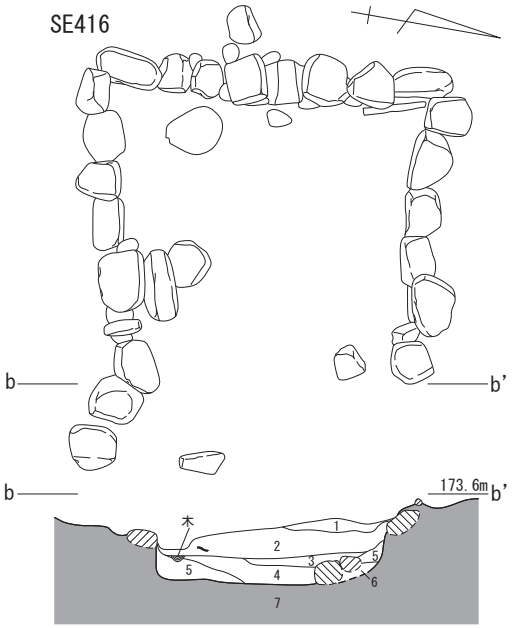
SR400 断面位置図と土層注記

図版 8

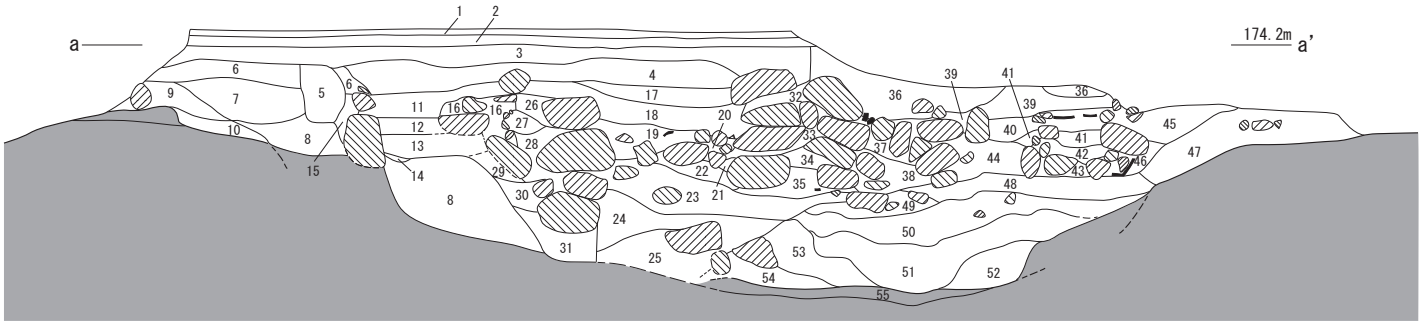
SR415・SE416



SE416



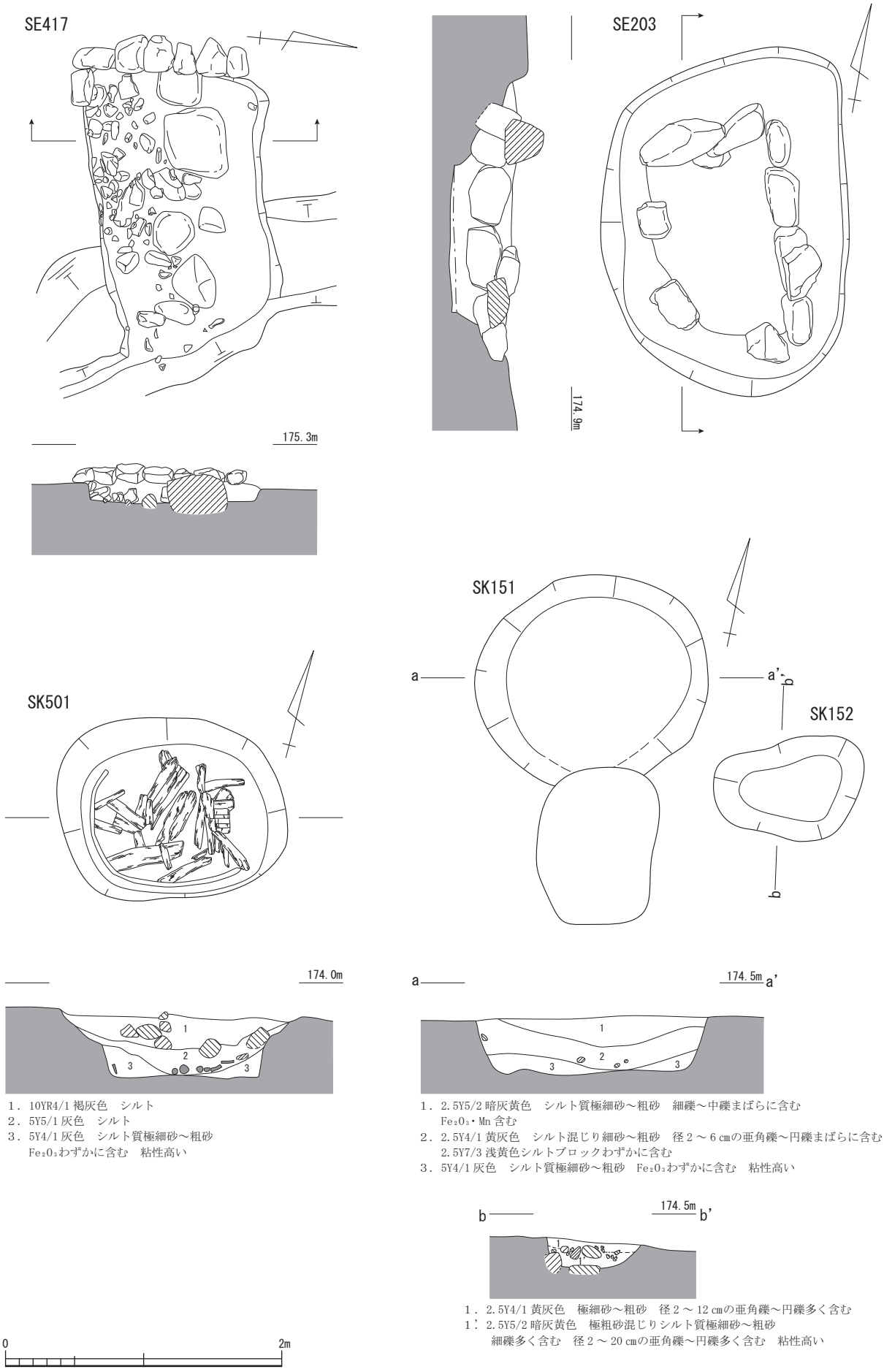
1. 2.5GY5.5/1 オリーブ灰色　細砂混じり中砂　粗砂含む
2. 5Y3/1.5 オリーブ黒色　粗粒シルト　極細砂～細砂少量含む　粘質　植物遺体多く含む
3. 2.5GY5.5/1 オリーブ灰色　極細砂～細砂　中砂～細礫含む　地山の小ブロック多く含む　やや粘質
4. 7.5Y4/1 灰色　粗粒シルト～細砂　中砂～細礫含む　やや砂質で粘質
5. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色　砂礫層　粗砂～径 1 cm大の中礫含む　淘汰悪い
6. 5G5/1 緑灰色　極細砂混じり細砂～中砂　粗砂～細礫多く含む　粘質砂層
7. 10BG6.7/1 明青灰色　地山　粗粒シルト～細砂　粘質



1. 10YR5.5/1 褐灰色　耕土（残り）　極細砂混じり細砂　やや砂質
2. 7.5YR5.4/7 明褐色　床土　極細砂～細砂　やや粘質　Fe 多く含む
3. 10YR5.5/1.4 褐灰色　旧耕土や水田嵩上げ土　極細砂～細砂で中砂～粗砂少量含む
径 1 ～ 30 cm大の中礫含む　多く含む部分とそうでない部分がある
4. 10YR5/1.8 灰黄褐色　極細砂～細砂　中砂～粗砂含む　流路埋め立て層
粘質地山ブロック多く含む　やや粘質
5. 10YR4.5/1.8 灰黄褐色　畦？　極細砂混じり細砂　粗砂～径 10 cm大の中礫含む
6. 2.5Y5/1.2 黄灰色　旧耕土　極細砂混じり細砂　中砂～細礫多く含む　Fe・Mn 含む
7. 2.5Y5/1.5 黄灰色　流路埋め土　極細砂～細砂　中砂～細礫含む　Fe 多く含む
8. 2.5Y5.6/2 灰黄色　流路堆積層　粗粒シルト～極細砂　粘質　上部に Fe 集中
9. 10YR5.6/2 灰黄褐色　流路堆積層　粗粒シルト～極細砂　細砂～中砂含む
粘質　Fe・Mn 含む
10. 2.5Y4.5/1 黄灰色　流路堆積層　細砂　極細砂少量混じる　粘質砂層のよう
} SR415 埋土
11. 10YR2/1 黒色　極細砂混じり細砂～中砂　粗砂含む
炭化物多く含む有機質土層　Mn 含む
12. 2.5Y4/1 黄灰色　細砂～中砂　粗砂～極粗砂含む　上部は Fe の沈着層で淡褐色
13. 10YR5/1.4 褐灰色　砂礫層　細砂～径 1 cm大の中礫含む　淘汰悪い
14. 2.5Y4.4/1 黄灰色　砂層　極細砂混じり細砂～中砂　やや粘質
} 溝 A 埋土
15. 10YR4/1.7 灰黄褐色　極細砂混じり細砂～中砂　粘質砂のよう　Mn 含む
16. 10YR4.5/2 灰黄褐色　極細砂～細砂　やや粘質　径 1 ～ 10 cm大の中礫・大礫含む
} 溝 A 裏込め
17. 10YR5/2 灰黄褐色　細砂～中砂　極細砂少量含む　粘質層に近い　Fe・Mn 含む
18. 5Y5.5/1 灰色　細砂～中砂　粗砂含む　砂質　Mn 含む
19. 2.5Y3.3/1 黒褐色　粗粒シルト～極細砂　細砂をラミナ状に含む　炭化物含む
20. 10YR6/8 明黄褐色　砂層　中砂～粗砂　Fe 多く含む
21. 10YR5/2 灰黄褐色　砂礫層　粗砂～径 1 cm大の中礫含む　淘汰悪い　Fe 多く含む
22. 10YR3.4/1 黒褐色　砂層　細砂～極粗砂　極細砂のラミナあり　炭化物含む
23. 5Y6/2 灰オリーブ色　砂層　中砂混じり粗砂～極粗砂
24. 2.5Y3.4/1 黒褐色　極細砂混じり細砂　極粗砂～径 1 cm大の中礫含む　炭化物含む
25. 10G5/1 緑灰色　礫層　径 5 ～ 40 cmの亜円礫～亜角礫含む
} 溝 B 埋土
26. 10YR4/2.6 にぶい黄褐色　細砂～中砂　軟質　Mn 含む
27. 10YR4/1 褐灰色　極細砂混じり細砂～中砂　粗砂～細礫多く含む
28. 2.5Y4/1 黄灰色　細砂～極粗砂　細礫～径 5 cm大の中礫 50%程度含む　砂礫層に近い
29. 2.5Y6.7/3 淡黄色　極細砂～細砂　Fe 多く含む　やや粘質
30. 5Y5/2 灰オリーブ色　細砂　やや軟質
31. 10YR2/1 黒色　粗粒シルト混じり極細砂～細砂　やや粘質
32. 10YR5/4 にぶい黄褐色　細砂混じり極細砂　粘質　Fe・Mn 含む
33. 2.5Y6/1.4 黄灰色　砂層　細砂混じり中砂～粗砂　Fe 含む
34. 2.5Y5/2 暗灰黄色　砂礫層　細砂～細礫　Fe 含む
35. 10YR3/1 黒褐色　砂礫層　細砂～極粗砂　炭化植物遺体非常に多く含む
} 溝 B 裏込め
36. 10YR5.5/2 灰黄褐色　極細砂～細砂　中砂～粗砂含む　Fe 含む
37. 10YR6.4/2 灰黄褐色　砂層　細砂～粗砂　やや粘質　Fe 含む
38. 2.5Y6/2 灰黄色　砂礫層　中砂～径 5 cm大の中礫含む　淘汰悪い　有機物遺物多く含む
} 溝 C 埋土
39. 2.5Y6/2.1 灰黄色　極細砂混じり細砂　中砂～極粗砂少量含む　Fe 暈管状
40. 2.5Y4/1 黄灰色　極細砂　細砂～粗砂多く含む　瓦等含む
} 溝 D 埋め土
41. 10YR6/8 明黄褐色　砂層　中砂～極粗砂　Fe 多く含む
42. 2.5Y5/1.4　黄灰色　極細砂混じり細砂～粗砂　粘質砂層　陶器含む
43. 5Y2.5/2 灰オリーブ色　極細砂混じり細砂～粗砂　粘質砂層
} 溝 D 埋土
44. 5Y4/1 灰色　極細砂混じり細砂～粗砂
45. 5Y6/1 灰色　細砂～中砂
46. 10YR5.4/8 黄褐色　極細砂混じり細砂～中砂　粗砂含む　Fe・瓦等含む
} 溝 D 裏込め
47. 10YR5.1/1 褐灰色　極細砂混じり細砂　中砂～粗砂多く含む　粘質
径 3 ～ 10 cm大の中礫・大礫（亜角状）10%程度含む
48. 5Y3/1 オリーブ黒色　細砂混じり中砂～粗砂　極細砂のラミナあり　有機植物遺体多く含む
49. 5Y5/2 灰オリーブ色　粗粒シルト～極細砂　やや粘質
50. 2.5Y3.6/1 黄灰色　粗粒シルト～極細砂　細砂少量含む　細砂のラミナあり
植物遺体含む　粘質
51. 2.5Y2/1 黒色　粗粒シルト　粘質　細砂のラミナあり　炭化物少量含む
52. 7.5GY5/1 緑灰色　砂礫層　極細砂混じり中砂～径 5 mm大の中礫
径 3 cmの中礫 5%程度含む　淘汰悪い
53. 7.5Y2/1 黒色　粗粒シルト～極細砂　細砂～極粗砂のラミナ多数あり　植物遺体含む
54. 7.5GY4.8/1 緑灰色　砂礫層　中砂～細礫　淘汰悪い
} SR415 埋土
55. 10BG6/1 青灰色　砂礫層　中砂～径 10 cm大の大礫（亜角礫）　淘汰悪い　地山

0　2m

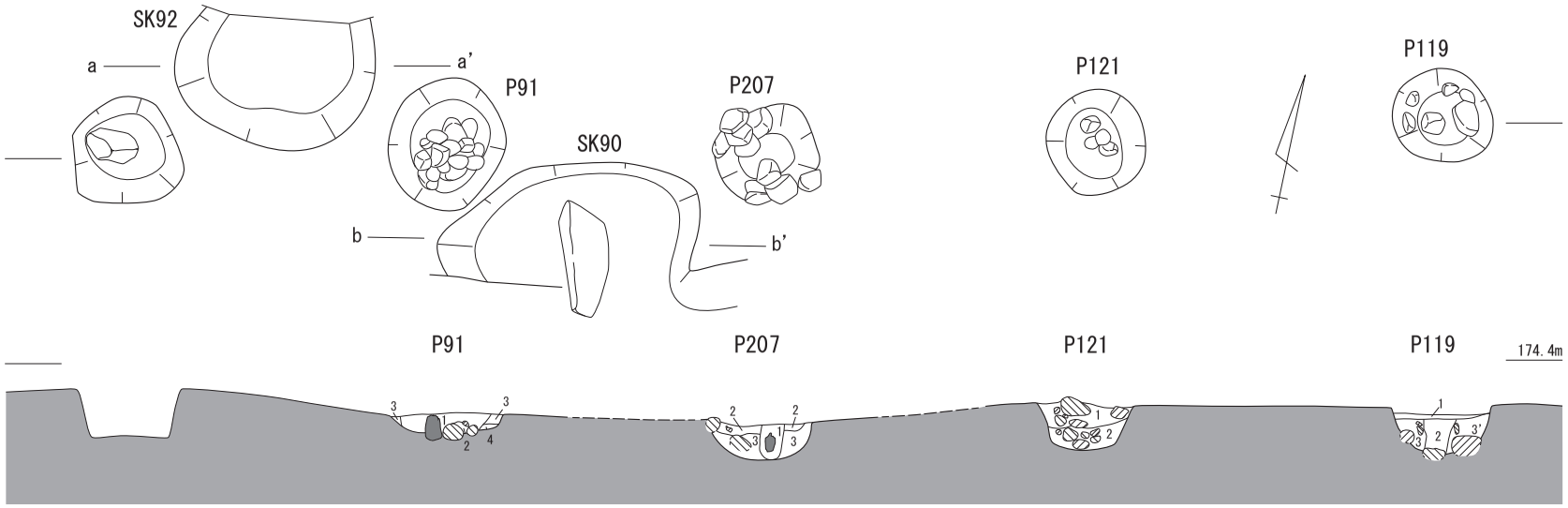
SR415・SE416 土層図


SE417
175.3m
SE203
174.9m
SK151
a
a'
b
SK152
b
SK501
174.0m
1
2
3
3
a
174.5m
a'
1
2
3
3
1．10YR4/1 褐灰色　シルト
2．5Y5/1 灰色　シルト
3．5Y4/1 灰色　シルト質極細砂～粗砂
Fe2O3わずかに含む　粘性高い
1．2.5Y5/2 暗灰黄色　シルト質極細砂～粗砂　細礫～中礫まばらに含む
Fe2O3・Mn 含む
2．2.5Y4/1 黄灰色　シルト混じり細砂～粗砂　径２～６㎝の亜角礫～円礫まばらに含む
2.5Y7/3 浅黄色シルトブロックわずかに含む
3．5Y4/1 灰色　シルト質極細砂～粗砂　Fe2O3わずかに含む　粘性高い
b
174.5m
b'
1
1'
1．2.5Y4/1 黄灰色　極細砂～粗砂　径２～12㎝の亜角礫～円礫多く含む
1'．2.5Y5/2 暗灰黄色　極粗砂混じりシルト質極細砂～粗砂
細礫多く含む　径２～20㎝の亜角礫～円礫多く含む　粘性高い
0
2m

下段 SE417 他

図版 10

下段中央地区柱穴列

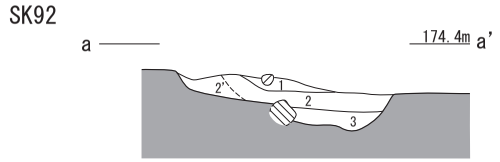


1．2.5Y6/2 灰黄色　極細砂～細砂　極粗砂混じる
　土器片・径 4 ～ 8 ㎝大の亜角礫～亜円礫含む　Fe_2O_3 含む
2．2.5Y4/1 黄灰色　シルト～極細砂　極粗砂混じる
　瓦片・径 5 ～ 10 ㎝大の亜角礫～円礫含む
3．2.5Y5/2 暗灰黄色　シルト質極細砂～粗砂　Fe_2O_3 含む
4．5Y5/1 灰色　極細砂～極粗砂　Fe_2O_3 含む　流路埋土

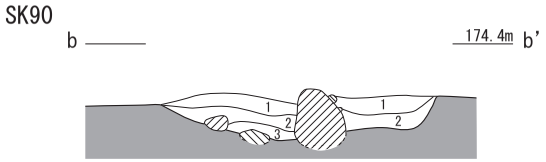
1．2.5Y4/1 黄灰色　粗砂混じりシルト～極細砂
　径約 10 ㎝の柱材残存　2 ㎝大の中礫わずかに含む
2．5Y5/1 灰色　シルト混じり極細砂～粗砂
　クサリ礫・Fe_2O_3・Mn 含む
　植物遺体わずかに含む
　径 3 ～ 5 ㎝大の亜角礫～円礫含む
3．5Y4/1 灰色　粗砂混じりシルト～極細砂
　径 5 ～ 20 ㎝大の亜角礫～亜円礫含む　粘性高い

1．2.5Y4/1 黄灰色　粗砂混じりシルト質極細砂～細砂
　瓦片・炭化物含む
　径 3 ～ 16 ㎝の亜角礫～亜円礫含む
2．2.5Y5/2 暗灰黄色　粗砂混じりシルト～極細砂
　径 3 ～ 10 ㎝の亜角礫～亜円礫含む

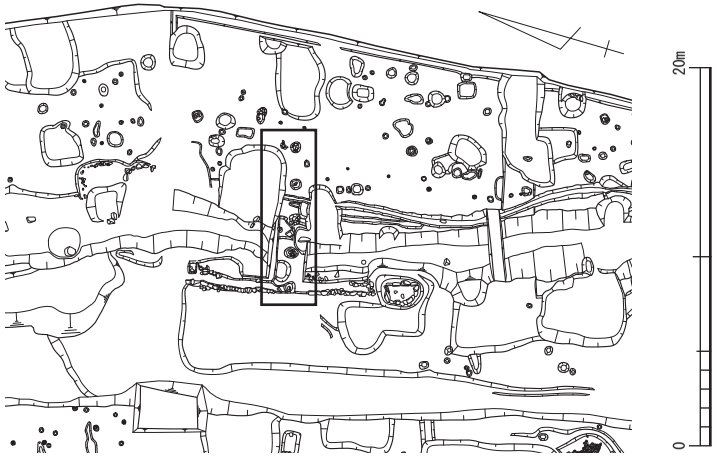
1．2.5Y4/1 黄灰色　極細砂混じりシルト
　炭化物・細礫まばらに含む
2．10YR4/2 灰黄褐色　極粗砂混じりシルト質極細砂～粗砂
　炭化物わずかに含む　底に 14 ㎝大の円礫含む
3．5Y4/1 灰色　極粗砂混じりシルト質極細砂
　径 3 ～ 12 ㎝の亜角礫～円礫含む　Fe_2O_3 含む
3'．2.5Y6/2 灰黄色　極粗砂混じりシルト質極細砂
　径 4 ～ 16 ㎝の亜角礫～円礫含む　Fe_2O_3 含む

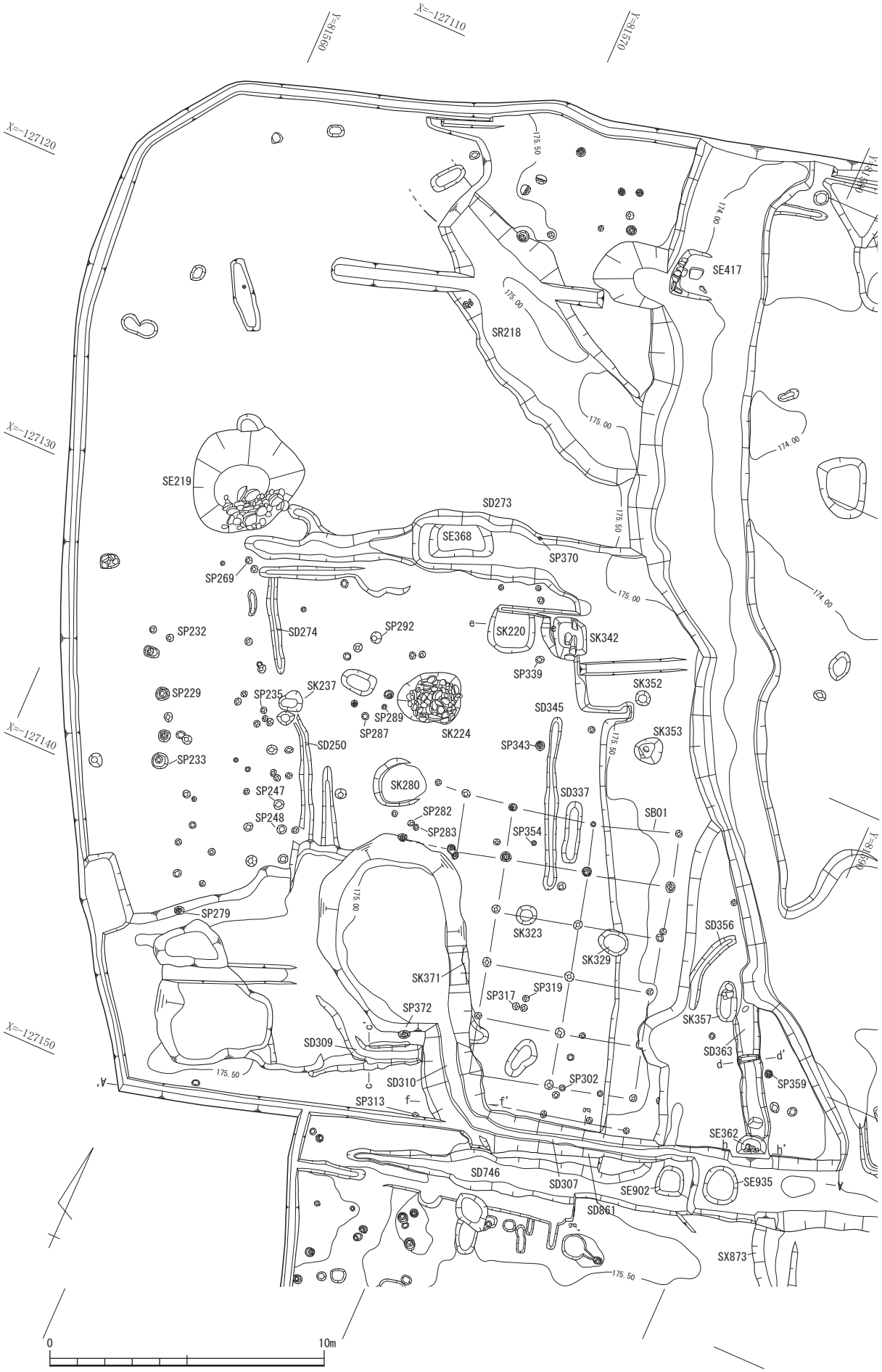


1．5Y4/1 灰色　シルト～極細砂　粗砂わずかに混じる
　径 10 ㎝の亜円礫入る
2．2.5Y5/2 暗灰黄色　シルト混じり細砂～粗砂　Fe_2O_3 含む
2'．7.5Y6/1 灰色　シルト混じり細砂～粗砂　2 よりシルト質強く Fe_2O_3 多い
3．5Y4/1 灰色　シルト～粗砂　Fe_2O_3 わずかに含む
　長さ 13 ㎝の亜角礫含む



1．5Y5/1 灰色　シルト混じり極細砂～細砂　長さ 5 ㎝大の亜角礫含む
　土器片・炭化物わずかに含む　Fe_2O_3 含む
2．7.5Y5/1 灰色　シルト質極細砂～粗砂　1 よりシルト質多い
　2.5Y6/6 明黄褐色シルトブロック含む炭化物・Fe_2O_3・径 12 ㎝の円礫含む
3．7.5Y6/1 灰色　シルト～粗砂　極粗砂混じる
　長さ 2 ～ 30 ㎝大の亜角礫含む　粘性高い

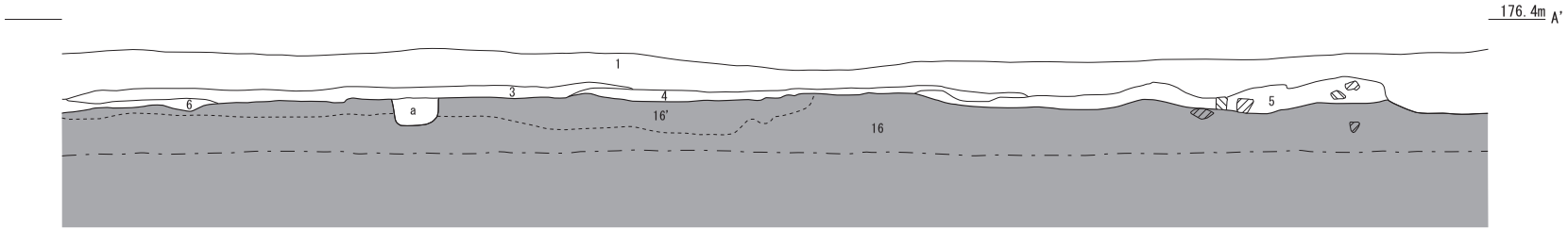


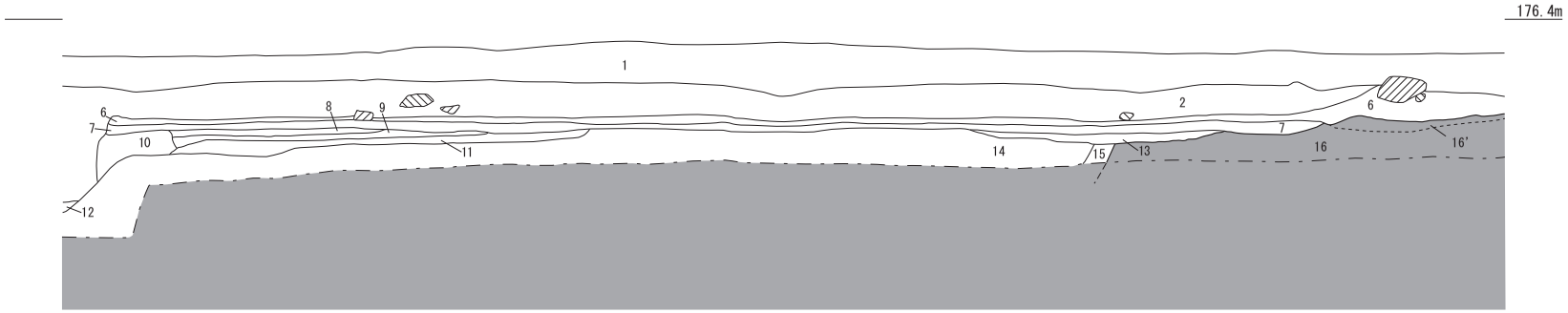

X=-127120
X=-127130
X=-127140
X=-127150
X=-127110
Y=81560
Y=81570
Y=81580
SE417
SR218
SE219
SD273
SE368
SP370
SP269
SP232
SD274
SP292
SK220
SK342
SP339
SP229
SP235
SK237
SP289
SP287
SK224
SD345
SK352
SK353
SP343
SD250
SP233
SK280
SP247
SP248
SP282
SP283
SD337
SB01
SP354
SP279
SK323
SK329
SD356
SK371
SP317
SP319
SP372
SK357
SD309
SD363
SD310
SP302
SP359
SP313
SE362
SD746
SD307
SE902
SE935
SD861
SX873
175.50
175.00
174.00
0
10m

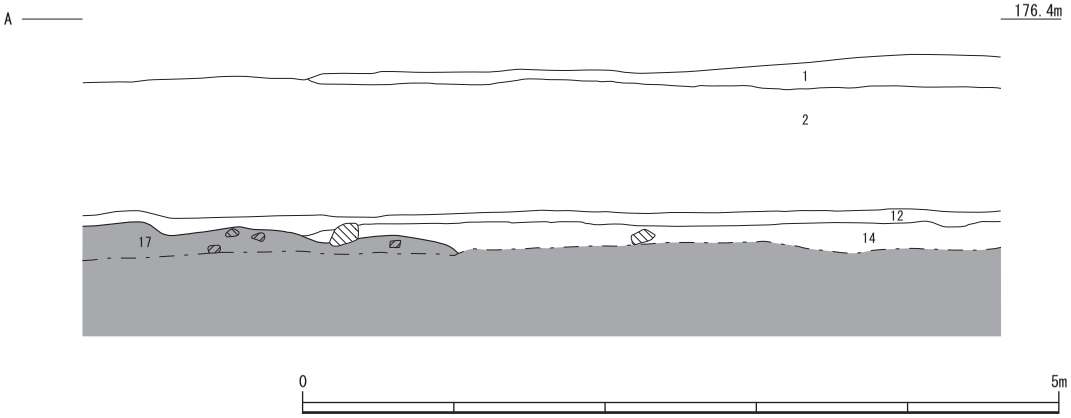
上段北地区遺構配置図

上段中央地区遺構配置図

上段北地区南側壁土層断面図



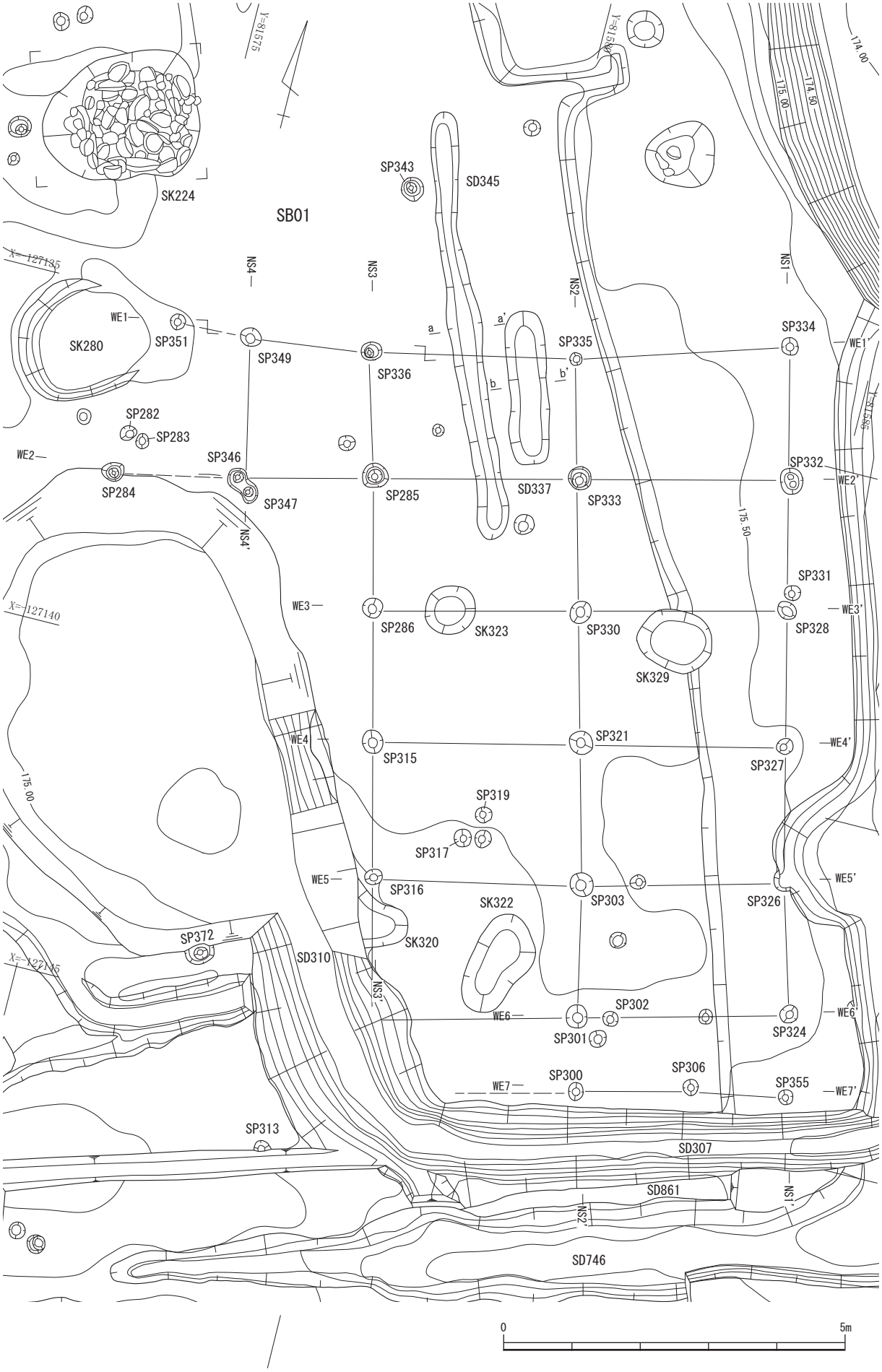




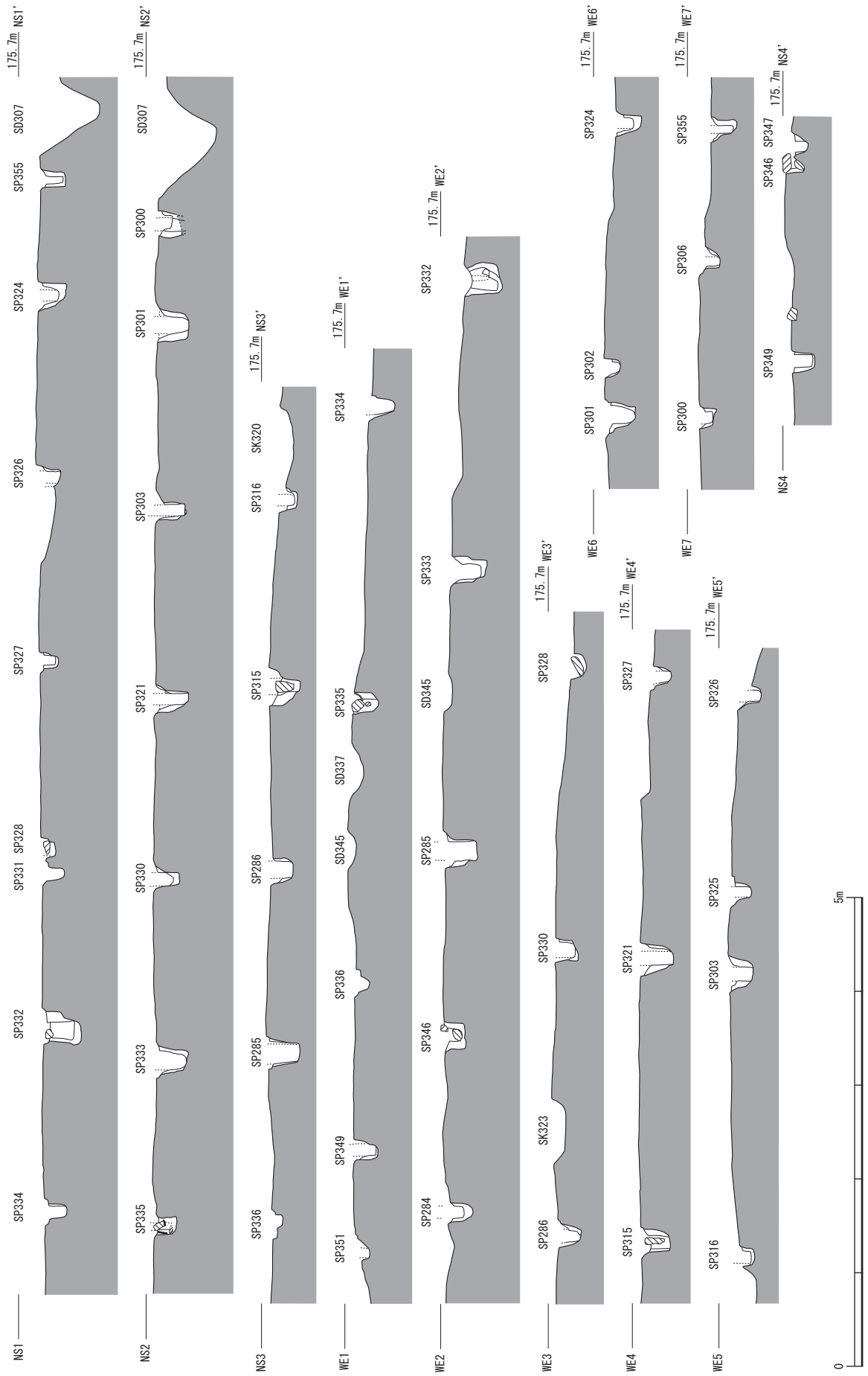
1．耕土　10YR4.5/2 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂でやや粘質
2．水田嵩上げ埋立層　10YR6.4/2.8 にぶい黄橙色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～ 10 cm大の大礫を 5%程度含む　粘質
3．2.5Y4 5/1 黄灰色 極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂　粘質砂で粗粒砂～細礫を少量含む　やや粘質　旧耕土か
4．2.5Y5/2 暗黄灰色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を非常に多く含む 3 cm大の中礫含む　水田嵩上げ層
5．5YR6/4 にぶい橙色 極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂を多く含む　粘質　地山だが桃色の変色部として明瞭に区別できる
6．旧耕土　10YR4.5/1 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂　粘質砂の感あり
7．旧耕土　10YR5/1.4 褐灰色 細粒砂～中粒砂で極細粒砂を少量含む　やや粘質で Mn 粒・Fe 含む
8．10YR5.5/1.4 褐灰色 細粒砂で中粒砂～粗粒砂を非常に多く含む　細礫含む　Mn 粒・Fe を含む
9．10YR5.5/1.6 灰黄褐色 細粒砂で中粒砂～粗粒砂を非常に多く含む　細礫～中礫を含む　Mn 粒・Fe を含む
10．旧畦畔 10YR6/2 灰黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～粗粒砂　粘質砂層　Mn 粒・Fe 含む
11．10YR4.8/1.2 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂～粗粒砂で Mn 粒・Fe 含む
12．2.5Y5.5/1 黄灰色 極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細礫を含む　粘質　1 cm大の中礫を少量含む
13．10YR4/1.4 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細礫を多く含む　Mn 粒・Fe 含む.SD307 埋土
14．10YR4.5/1.3 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂で粗粒砂・Mn 粒・Fe を多く含む　SD307 埋土
15．10YR5.5/1.4 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を少量含む　やや粘質で Fe・Mn 粒を含む　SD307 埋土
16．地山　2.5Y6.5/6 明黄褐色 極細粒砂～細粒砂　やや粘質（砂）Mn 粒多く含む
16'．地山　2.5Y6/4 にぶい黄色 粗粒シルト～極細粒砂　粘質で Mn 粒含む
17．地山　10YR5/2.4 灰黄褐色 極細粒砂　粘質で細粒砂を多く含む　Fe・Mn 含む　西部は 5 ～ 10 cm大の中礫・大礫を多く含む
a．遺構埋土　10YR3.4/1 黒褐色 粗粒シルト～極細粒砂　粘質　炭化物含む

X=127115
X=127120
Y=81585
175.50
110
111
102
106
SR218
Y=81570
X=127125
107
SE368
175.00
174.50
174.00
174.00
SD273
Y=81575
175.50
104
SE342
Y=81580
0
5m

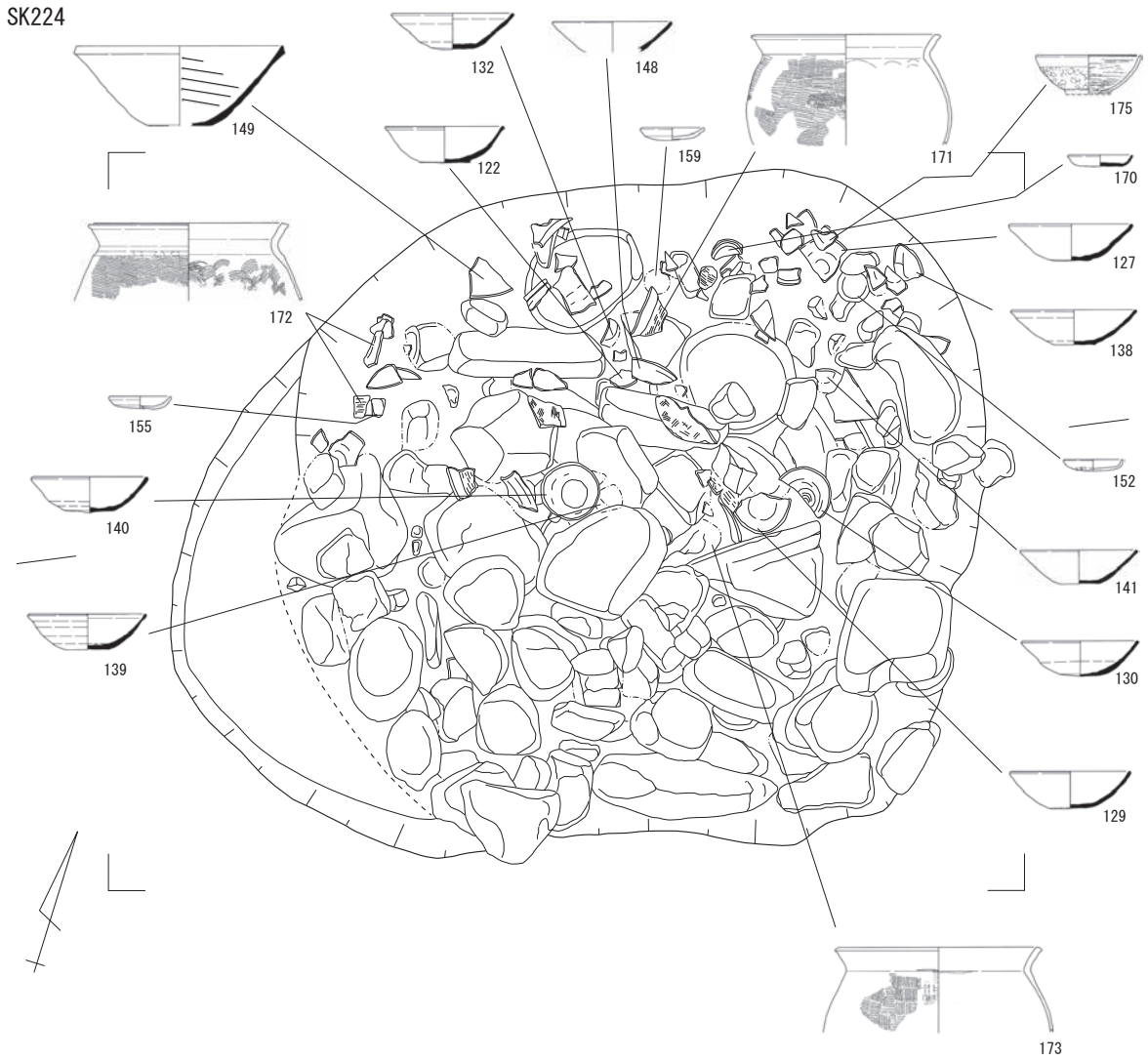
上段北地区 SR218

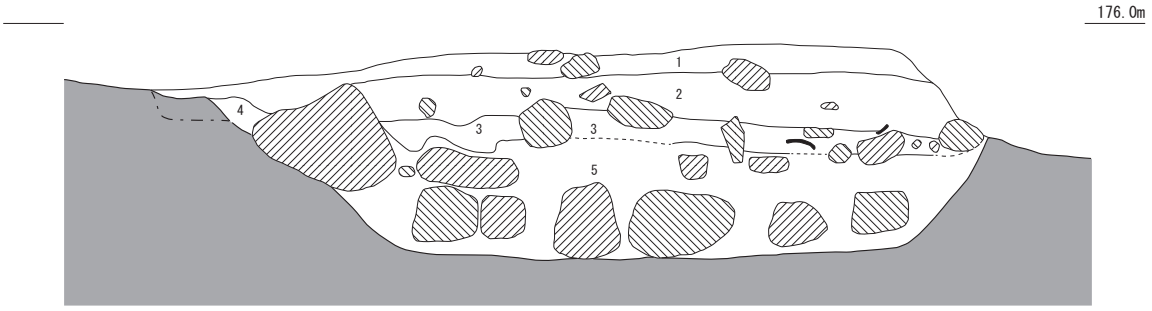


上段北地区掘立柱建物跡平面図



上段北地区掘立柱建物跡断面図



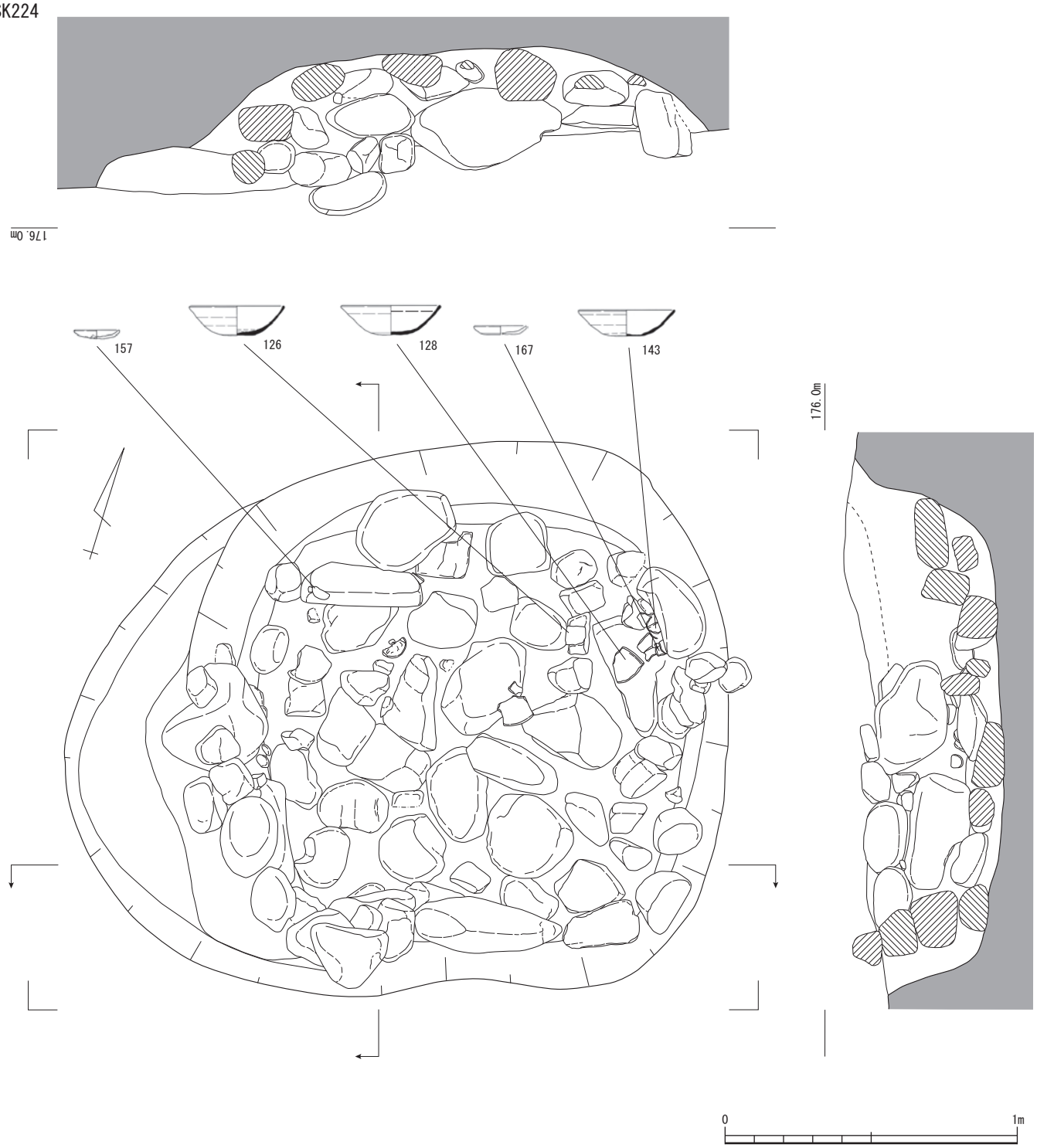


1．10YR2/3 黒褐（暗灰褐）色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂・大礫含む　土器・炭化物含む　やや砂質
2．10YR3/3 暗褐（灰褐）色 極細粒砂～細粒砂　やや粘質　土器含む
3．2.5YR4/6 赤褐色と2.5Y8/2灰白色が混じり合う　粗粒シルト～極細粒砂で粘質（粘土か？）
4．10YR5/2.4 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む　粘質砂に近い
5．10YR2/1 黒（暗濃褐）色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む　やや粘質　炭化物多く含む

上段北地区 SK224

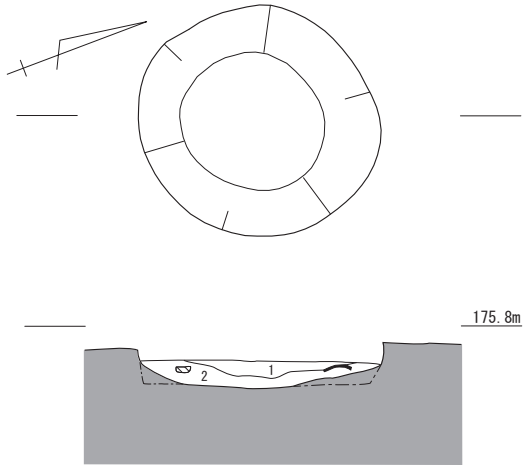
図版 18

SK224



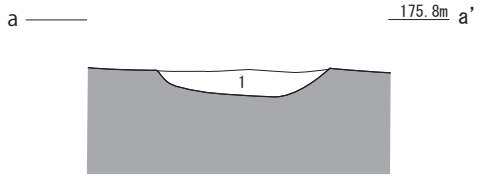
SK224

SK323



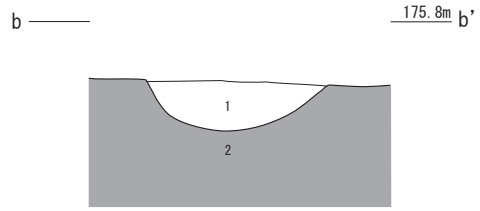
1．10YR3/2 黒褐（暗灰褐）色
極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む
中世初頭の土器片含む　やや粘質
2．10YR3/3 暗褐（灰褐）色
極細粒砂～細粒砂　やや粘質

SD345



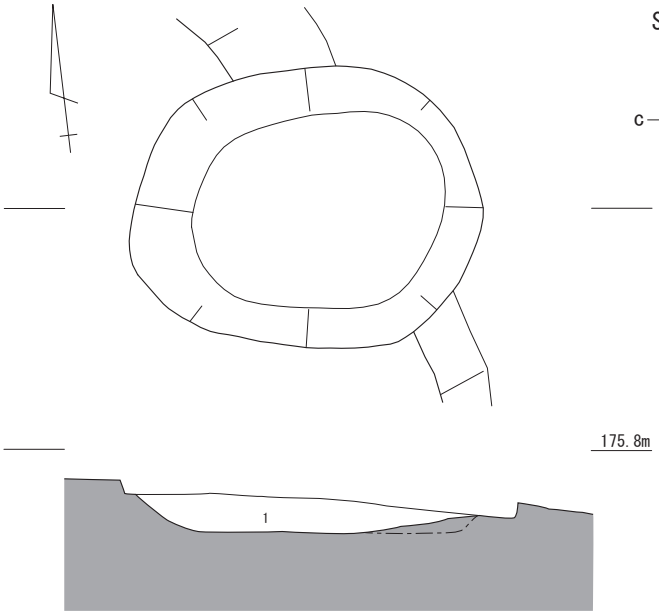
1．10YR3/2 黒褐（暗灰褐）色 極細粒砂～細粒砂で
中粒砂含む　中世初期の土器片・炭化物含む
やや粘質

SD337



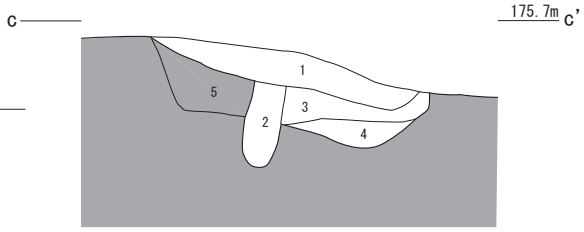
1．10YR3/2 黒褐（暗灰褐）色 極細粒砂～細粒砂で
中粒砂含む　中世初期の土器片・炭化物含む
やや砂質
2．地山 10YR6/6 明黄褐色 極細粒砂～細粒砂
粘質砂層に近い

SK329



1．10YR2/2 黒褐（暗灰褐）色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む
土器片・炭化物含む　やや砂質

SD309



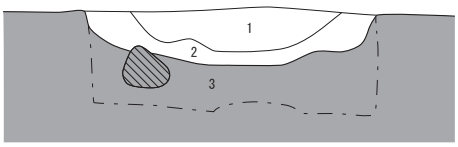
1．10YR5/3 にぶい黄褐色 細粒砂～粗粒砂
砂質　直径 0.5 ～ 2 ㎝大の礫を含む
2．10YR4/1.4 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂
粘質砂層に近い　柱穴埋土
3．10YR4/1 褐灰色 中粒砂混じり粗粒シルト
～極細粒砂　粘質
4．10YR4.5/2 灰黄褐色　粗粒砂～中粒砂混
じり粗粒シルト～極細粒砂　粘質
5．地山　2.5Y5/6 黄褐色 極細粒砂～細粒砂
やや粘質

上段北地区 SK323・329・SD337 他

図版 20

SD363

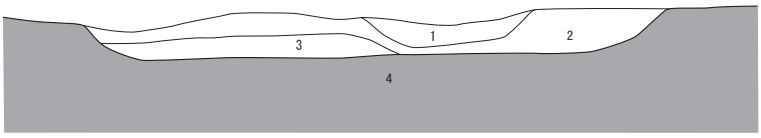
d ——— 175.2m d'



1．10YR3/2　黒褐（灰褐）色　極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂　やや砂質
中世初期の遺物包含層
2．10YR6/7　明黄褐色　粗粒シルト混じり細粒砂～中粒砂粘質砂層に近い
3．10YR5/4　にぶい黄褐色　細粒砂混じり中粒砂　砂質　地山

SK220

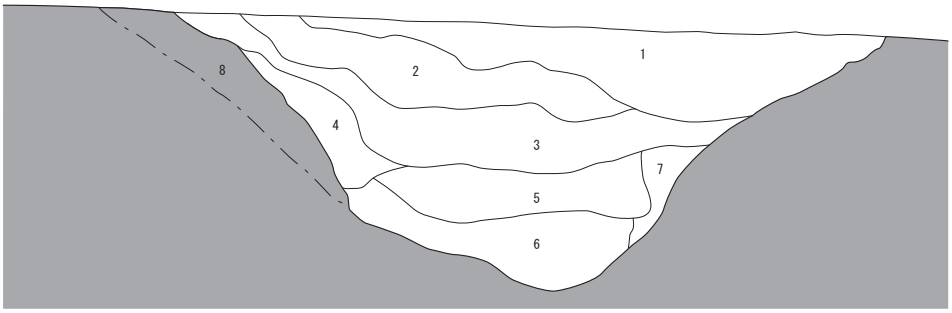
e ——— 175.8m e'



1．砂層 10YR7/2　にぶい黄橙色 粗粒砂～細礫
新しい時期の砂層と思われる
2．7.5YR3/1.5　黒褐（暗灰褐）色
極細粒砂～細粒砂で中粒砂をやや多く含む
中世初期の土器・炭化物含む　やや砂質
3．10YR4/2　灰黄褐色 細粒砂混じり極細粒砂で
中粒砂を少量含む　やや粘質
4．2.5Y7/4　浅黄（乳黄灰）色
シルト質極細粒砂で細粒砂を少量含む
地山　Mn 粒・Fe 含む

SD310

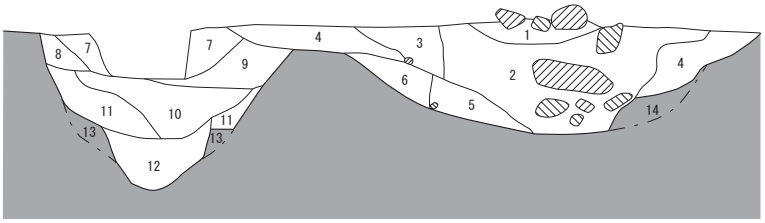
f ——— 175.8m f'



1．10YR3.2/2　黒褐色　極細粒砂混じり細粒砂～
中粒砂で Mn 含む　粘質砂層に近い
2．10YR5/2.6　にぶい黄褐色　粗粒シルト～極細粒砂で Mn 含む　粘質
3．10YR5/2.3　灰黄褐色　細粒砂で極細粒砂少量混じる　中粒砂含む　やや砂質
4．10YR5.6/3　にぶい黄橙色　極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を少量含む
Mn 含む　やや砂質
5．2.5Y5.5/1　黄灰色　細粒シルト～粗粒シルト　粘質　Fe 含む
6．5Y5.5/1　灰色　細粒砂～中粒砂　砂層
7．10YR5/1.3　褐灰色　極細粒砂で細粒砂～中粒砂を
微量含む　Fe・Mn 含む　粘質
8．2.5Y6/7　明黄褐色　極細粒砂～細粒砂　やや粘質　地山

0　1m

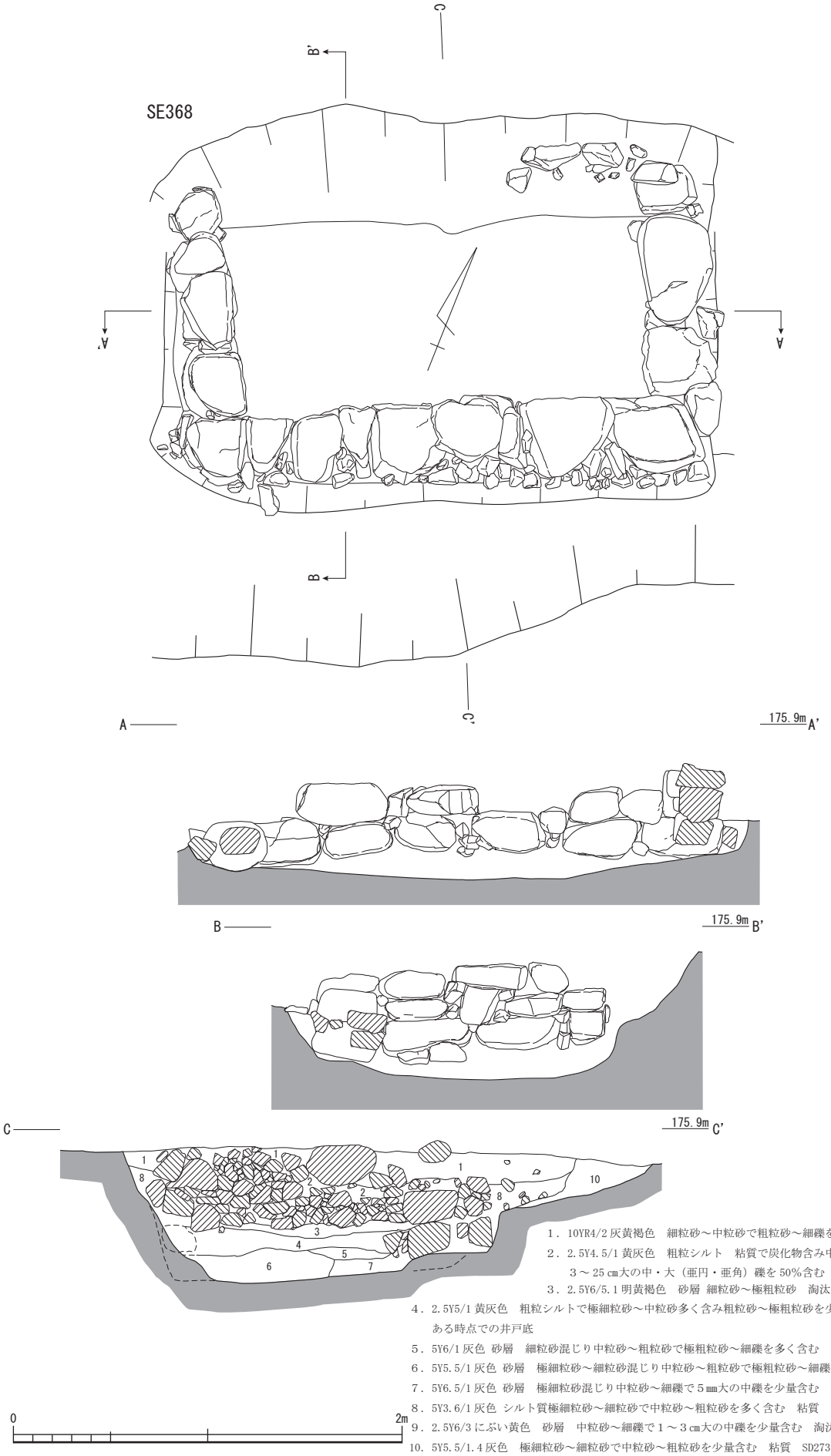
g ——— SD307　SD861　SD746　175.8m g'



0　1m

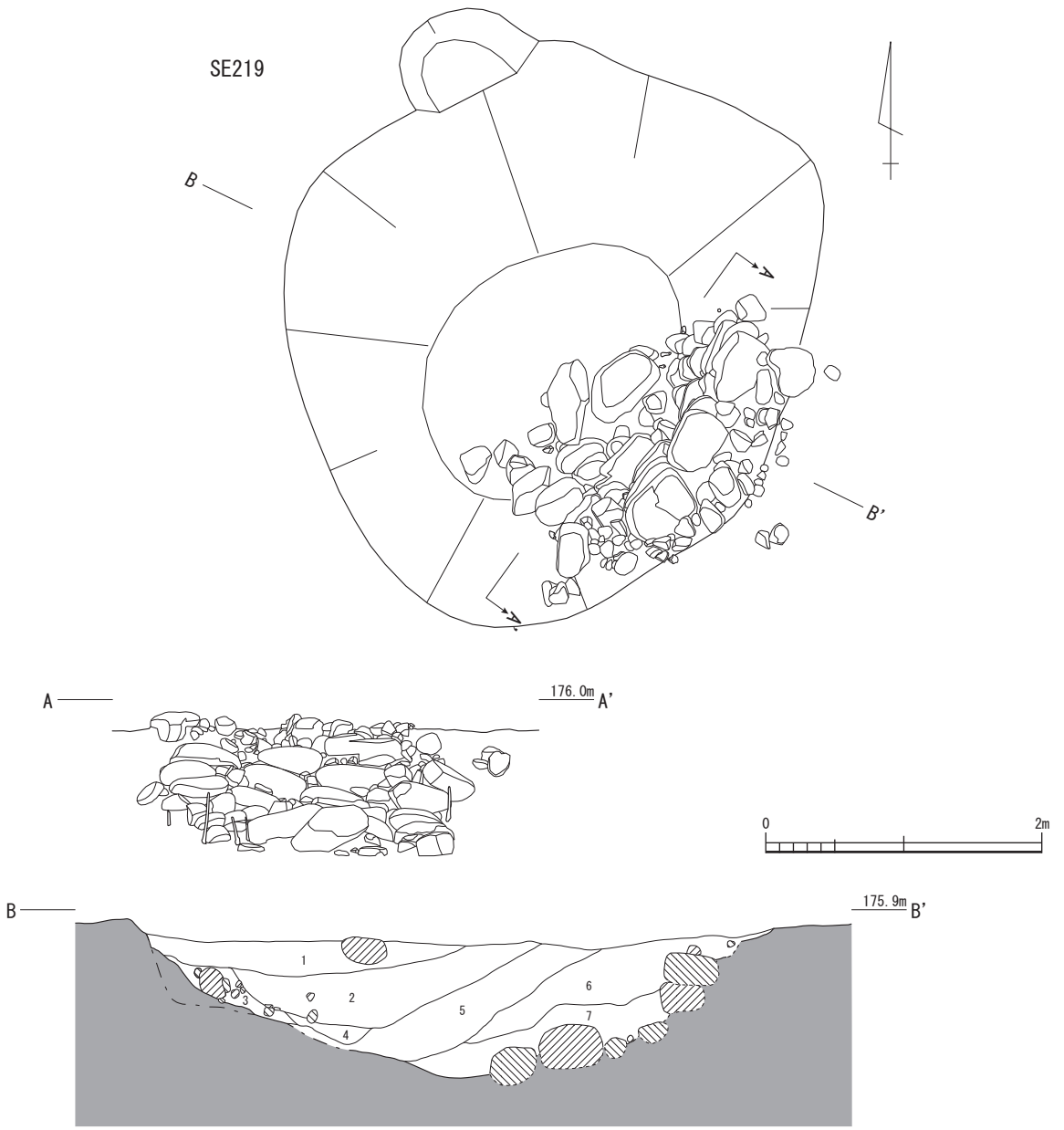
1．2.5Y6/2.6 にぶい黄色　極細粒砂で細粒砂を多く含む
粘質　SD746 暗渠埋土
2．2.5Y5/1.6 暗灰黄色　極細粒砂で中粒砂～細礫含む
粘質　Mn 含む　SD746 暗渠埋土
3．10YR5/1.3 褐灰色　細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
砂質　Mn 含む　SD861 埋土
4．10YR5/2 灰黄褐色　細粒砂で中粒砂～粗粒砂少量含む
砂質　Mn 含む　SD861 埋土
5．10YR4/1.7 灰黄褐色　細粒砂～中粒砂で極細粒砂と粗粒砂を微量含む
やや砂質　Mn 含む　SD861 埋土
6．10YR5/2.1 灰黄褐色　極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む
やや粘質　Mn 含む　SD861 埋土
7．10YR4/2 灰黄褐色　極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む
砂質　Mn 含む　SD307 埋土
8．第 7 層に 10YR5/6 黄褐色のブロックが多く混じる　極細粒砂～細粒砂で
中粒砂～細礫含む　やや粘質　Mn 含む　SD307 埋土
9．10YR5/3.5 にぶい黄褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を含む
やや粘質　Mn 含む　SD307 埋土
10．10YR4/1.6 灰黄褐色　細粒砂で極細粒砂・中粒砂含む　粘質砂層に近い
Mn 含む　SD307 埋土
11．10YR4.5/3 にぶい黄褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂含む　粘質砂層に近い
Mn 含む　SD307 埋土
12．10YR5/1.4 褐灰色　極細粒砂で細粒砂を多く含む　やや粘質
Mn 含む　SD307 埋土
13．地山　10YR4.8/6 黄褐色　極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂含む　粘質砂層に近い
Mn・Fe 含む
14．地山　10YR5/4.4 にぶい黄褐色　極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂　粘質砂層
Mn・Fe 含む

上段北地区 SD363・SK220・SD310 他

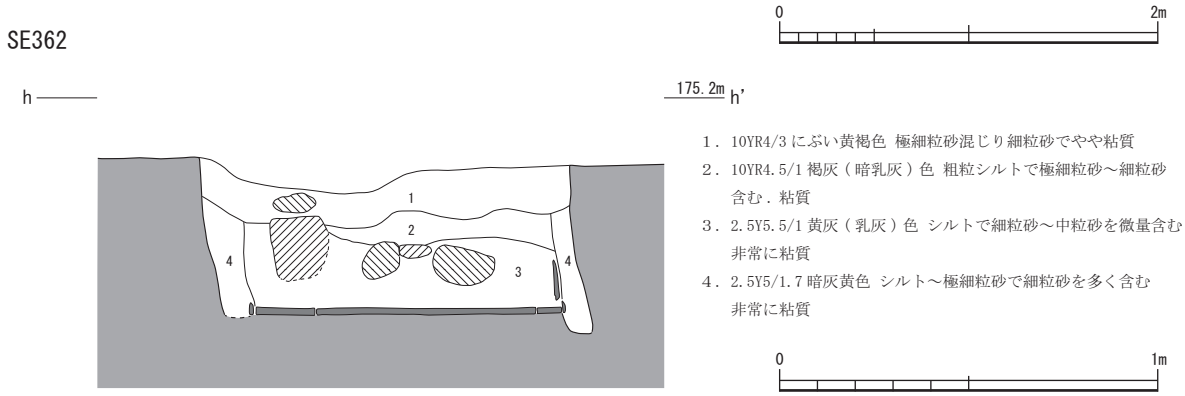


1．10YR4/2 灰黄褐色　細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細礫を多く含み中礫含む
2．2.5Y4.5/1 黄灰色　粗粒シルト　粘質で炭化物含み中粒砂を微量含む
　３～25 ㎝大の中・大（亜円・亜角）礫を 50%含む　埋立層
3．2.5Y6/5.1 明黄褐色　砂層 細粒砂～極粗粒砂　淘汰悪い
4．2.5Y5/1 黄灰色　粗粒シルトで極細粒砂～中粒砂多く含み粗粒砂～極粗粒砂を少量含む　やや粘質
　ある時点での井戸底
5．5Y6/1 灰色 砂層　細粒砂混じり中粒砂～粗粒砂で極粗粒砂～細礫を多く含む
6．5Y5.5/1 灰色 砂層　極細粒砂～細粒砂混じり中粒砂～粗粒砂で極粗粒砂～細礫を多く含む　淘汰悪い
7．5Y6.5/1 灰色 砂層　極細粒砂混じり中粒砂～細礫で５㎜大の中礫を少量含む　淘汰悪い
8．5Y3.6/1 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を多く含む　粘質
9．2.5Y6/3 にぶい黄色　砂層　中粒砂～細礫で１～３㎝大の中礫を少量含む　淘汰悪い　地山
10．5Y5.5/1.4 灰色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む　粘質　SD273 の埋土

上段北地区 SE368



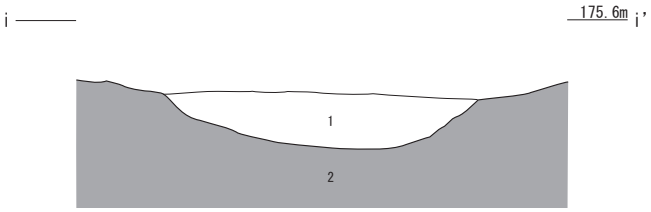
1．2.5Y5/2 暗灰黄（濁暗乳灰）色と 2.5Y7/4 浅黄色が混じる　極細粒砂で中粒砂～ 25 ㎝大の大礫含む　粘質
2．5Y6/2 灰オリーブ色 粗粒シルト～極細粒砂で粗粒砂～大礫を少量含む　粘質
3．第２層に花崗岩片や 10 ㎝大の大礫が多く混じる
4．5Y7/2.4 灰白色 粗粒シルト中に細粒砂のラミナあり　大半は前者
5．10YR5/6 黄褐色 中粒砂～細礫で３㎝大までの中礫を含む　花崗岩風化砂層で第４層のラミナあり
6．10YR6/4 にぶい黄橙色で質は第５層と同じ
7．7.5YR5/8 明褐色 第５層と同じだが、中礫の量が 20%程度と多く、大礫や巨礫（井戸側の礫）も含む



1．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや粘質
2．10YR4.5/1 褐灰（暗乳灰）色 粗粒シルトで極細粒砂～細粒砂含む．粘質
3．2.5Y5.5/1 黄灰（乳灰）色 シルトで細粒砂～中粒砂を微量含む非常に粘質
4．2.5Y5/1.7 暗灰黄色 シルト～極細粒砂で細粒砂を多く含む非常に粘質

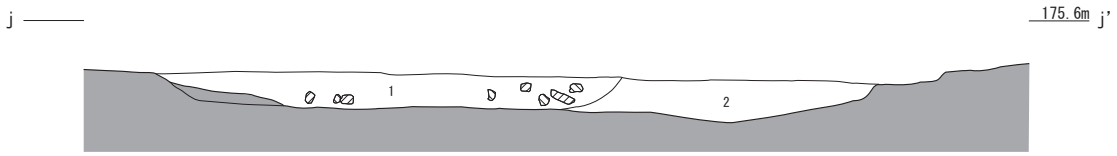
上段北地区 SE219・362

SK819



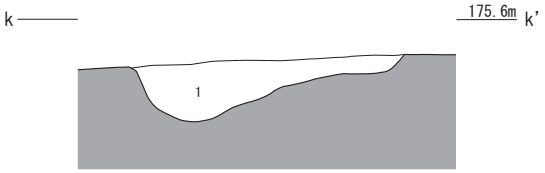
１．9YR3/2 黒褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む　やや粘質　Mn 粒・炭化物含む
２．地山　10YR6.5/6 明黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む　やや粘質

SK834



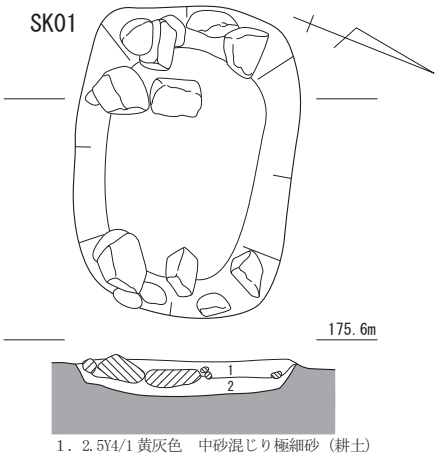
１．10YR3/1.8 黒褐色 極細粒砂で細粒砂を含み中粒砂～極粗粒砂を微量含む　下部に２～４cm大の中礫（亜角～亜円）を含む　やや粘質
２．10YR4/1.7 灰黄褐色 極細粒砂で細粒砂～粗粒砂を少量含み細礫を微量含む　粘質

SK862

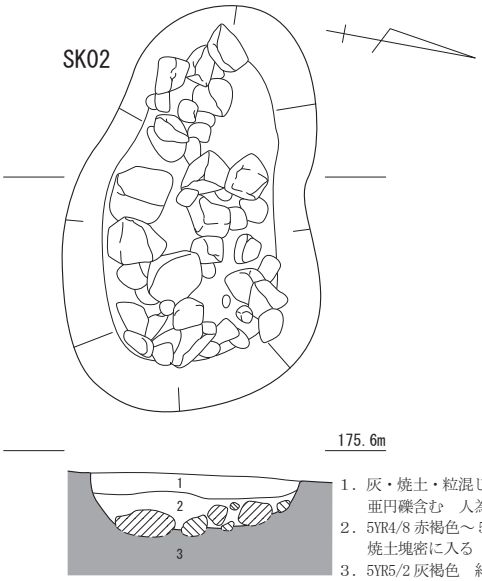


１．10YR3.3/3 暗褐色 極細粒砂で細粒砂を多く含み中粒砂～粗粒砂を少量含む　やや粘質

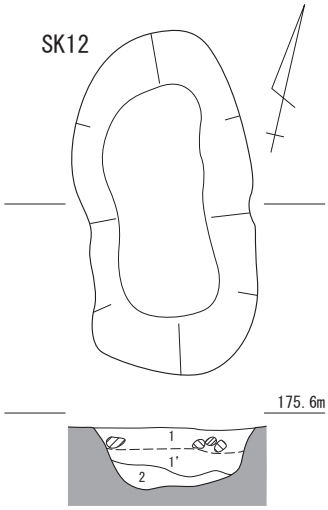
上段中央地区 SK819・834・862 土層図



1．2.5Y4/1 黄灰色　中砂混じり極細砂（耕土）
2．2.5Y6/3 にぶい黄色　中砂混じりシルト



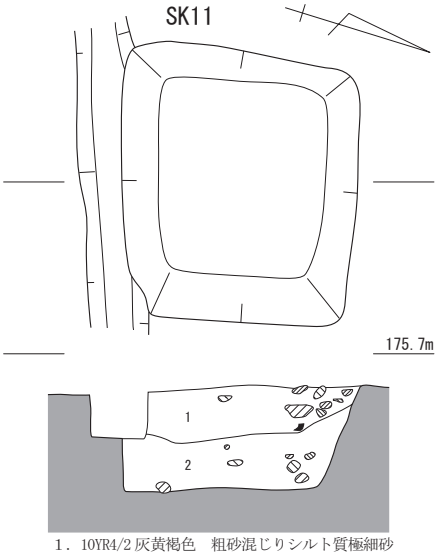
1．灰・焼土・粒混じる　径５cm内外の
　亜円礫含む　人為的埋土
2．5YR4/8 赤褐色～ 5YR5/8 明赤褐色
　焼土塊密に入る　人為的埋土　明るい赤褐色
3．5YR5/2 灰褐色　細砂～中砂



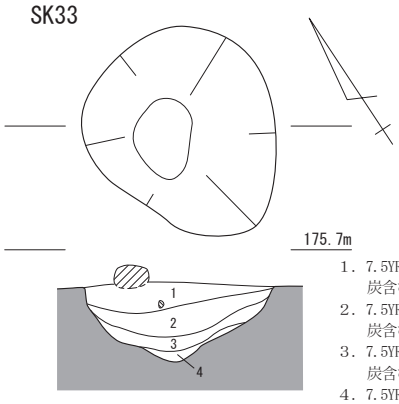
1．7.5YR5/2 灰褐色　礫混じり粗砂
　径 10 cm内外の亜角礫密に入る　瓦含む
1'．10YR4/2 灰黄褐色～ 7.5YR4/2 灰褐色　粗砂混じり礫
　灰色調　径 10 cm内外の亜角礫非常に密に入る
2．7.5YR5/2 灰褐色　細砂混じりシルト　鉄分斑に入る

1．2.5Y4/2 暗灰黄色　極細砂（耕土？）
2．2.5Y5/1 黄灰色　極細砂
3．2.5Y4/4 オリーブ褐色　中砂
4．10YR6/2 灰黄褐色　シルト
5．10YR3/2 黒褐色　シルト混じり中砂

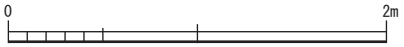
1．10YR3/2 黒褐色　シルト混じり中砂（耕土混じり）
2．10YR5/2 灰黄褐色　中砂
3．10YR4/1 褐灰色　中砂混じりシルト



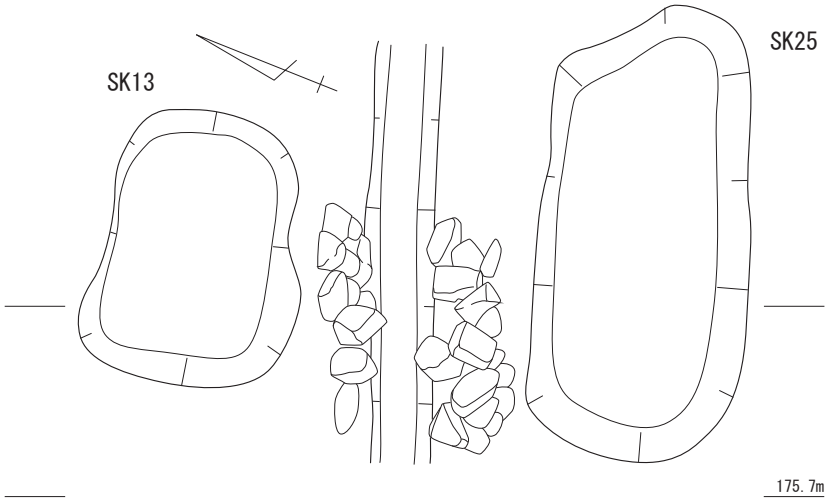
1．10YR4/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト質極細砂
2．10YR4/1 褐灰色　粗砂混じりシルト質極細砂（シルト分多い）



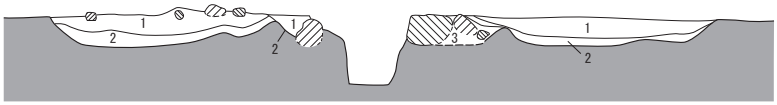
1．7.5YR4/3 褐色　礫混じり粘土質シルト
　炭含む　径５mm内外の角礫含む
2．7.5YR4/2 ～ 5YR4/2 灰褐色　粗砂混じり粘土
　炭含む　３層粘土ブロック入る
3．7.5YR4/1 ～ 10YR4/1 褐灰色　細砂混じり粘土
　炭含む　灰色調
4．7.5YR4/3 褐色　粗砂　径３mm内外の角礫含む

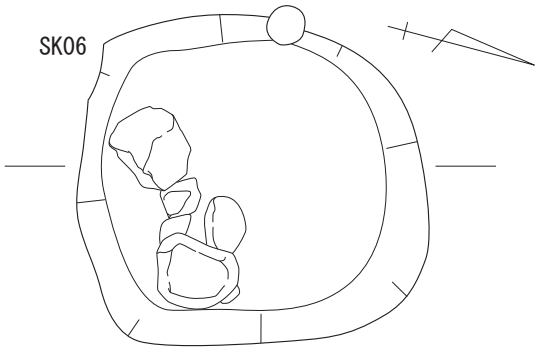


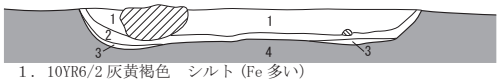
上段中央地区 SK01・02 他



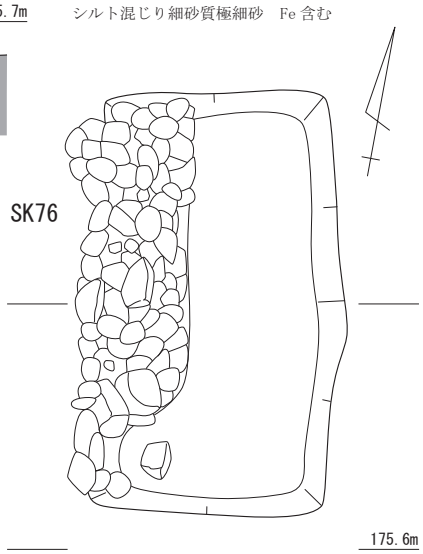
1．10YR5/2 灰黄褐色　細砂混じりシルト～粘土
地山土ブロック入る人為的な埋土
Mn 斑に混じる　Fe 集積
2．5YR4/1 ～ 7.5YR4/1 褐灰色　細砂質極細砂　淡調
3．5YR4/1 5/1 褐灰色
シルト混じり細砂質極細砂　Fe 含む

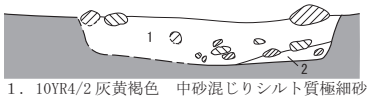




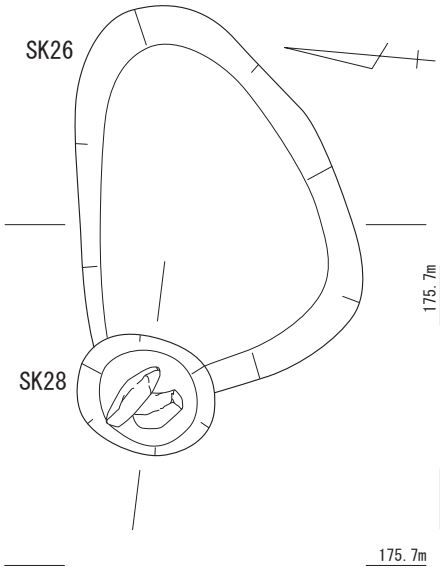


1．10YR6/2 灰黄褐色　シルト (Fe 多い)
2．10YR4/3 にぶい黄褐色　中砂
3．10YR3/3 暗褐色　極細砂混じり中砂
4．2.5Y4/4 オリーブ褐色　極細砂混じり中砂（ベース）

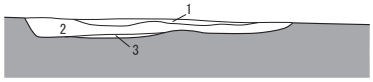




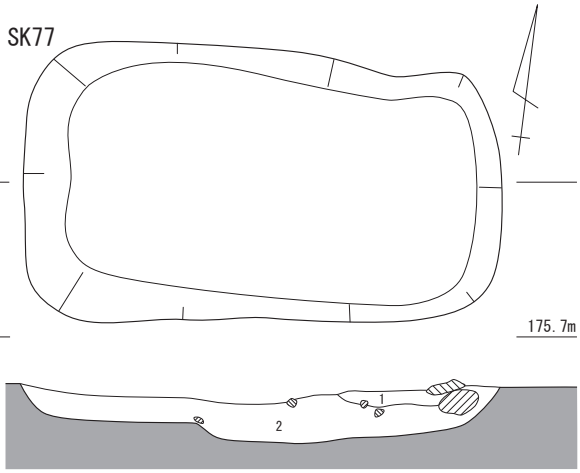
1．10YR4/2 灰黄褐色　中砂混じりシルト質極細砂
2．10YR5/3 にぶい黄褐色　シルト質細砂



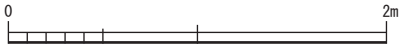
1．7.5YR5/2 灰褐色　シルト質粘土
径 1 ～ 2 ㎝の礫含む
2．7.5YR4/2 ～ 5/2 灰褐色　粘土
3．7.5YR4/2 灰褐色～ 10YR4/2 灰黄褐色
粗砂混じりシルト質粘土　炭含む
4．7.5YR4/2 灰褐色　粘土質シルト



1．7.5YR4/1 褐灰色　細砂
2．2.5Y4/4 オリーブ褐色　中砂
3．2.5Y5/6 黄褐色　シルト混じり中砂 (Fe)



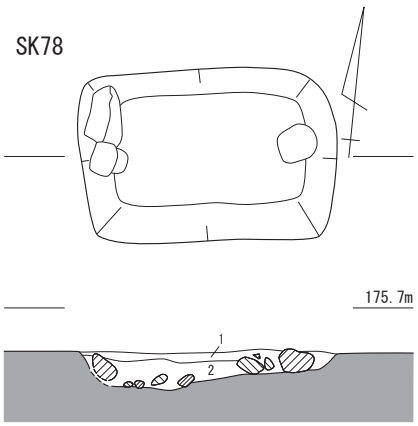
1．2.5Y5/2 暗灰黄色　粗砂混じりシルト質極細砂～細砂
径 3 ～ 20 ㎝大の角・円礫含む　粘性高い
2．2.5Y6/2 灰黄色　シルト混じり極細砂～粗砂　炭・酸化鉄含む



上段中央地区 SK13・25 他

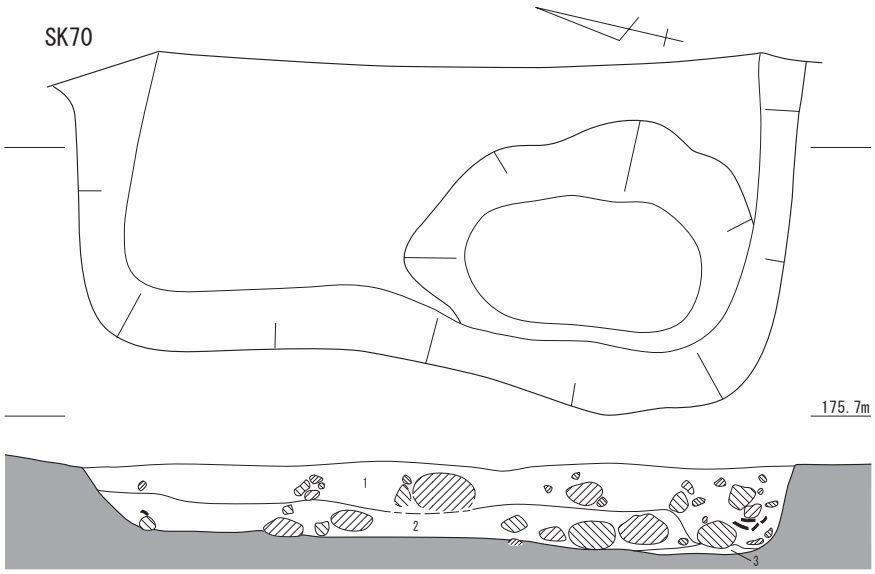
図版 26

SK78



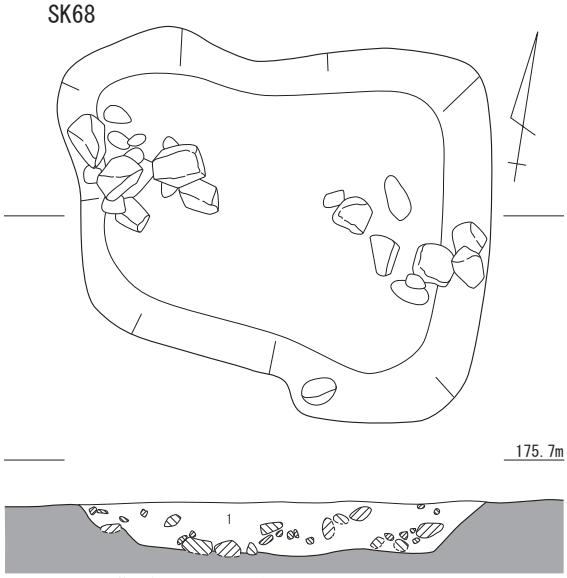
1．10YR5/2 灰黄褐色　シルト質極細砂～細砂
　炭まばらに含む
2．10YR4/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト質極細砂～細砂
　炭含む

SK70



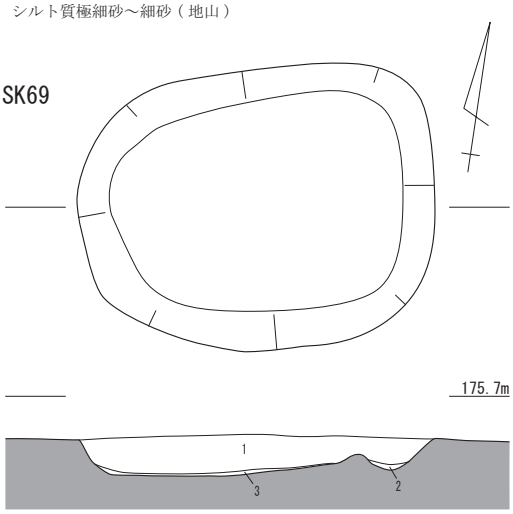
1．2.5Y5/2 暗灰黄色　シルト混じり極細砂～極粗砂　径 1.5 ～ 40 ㎝の亜角礫～円礫含む
　炭化物わずかに含む　有機質多い　南端に瓦片多く含む　Fe_2O_3含む
2．2.5Y6/2 灰黄色　粗砂混じりシルト質極細砂～細砂　径 1 ～ 35 ㎝の亜角礫～円礫含む
　炭化物・瓦片・Fe_2O_3含む
3．10YR6/2 灰黄褐色　シルト質極細砂～細砂（地山）

SK68



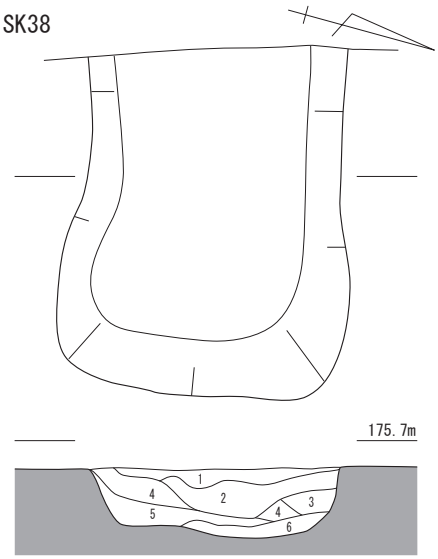
1．10YR4/2 灰黄褐色　粗砂混じり細砂

SK69



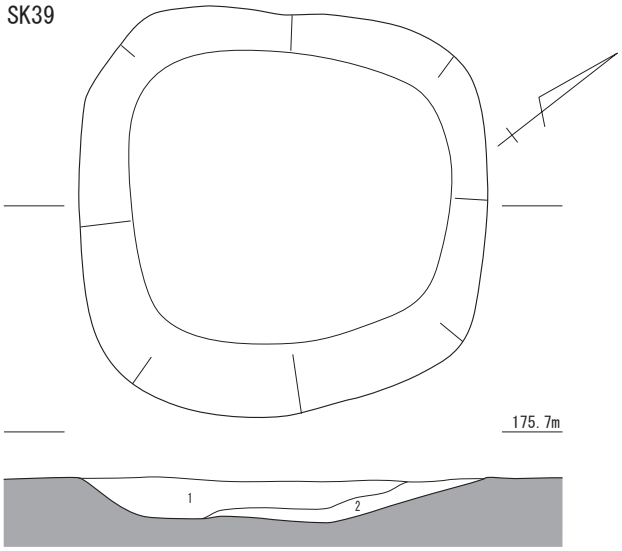
1．10YR4/3 にぶい黄褐色　シルト質極細砂　（炭・焼土多く含む）
2．10YR5/2 灰黄褐色　シルト混じり細砂（ラミナ？）
3．10YR5/4 にぶい黄褐色　細砂

SK38



1．5YR4/4 にぶい赤褐色　シルト混じり中砂～粗砂
　7.5YR4/2 灰褐色の旧耕土がブロック状に入る
2．7.5YR5/2 灰褐色　中砂～粗砂混じりシルト
3．7.5YR5/2 灰褐色　中砂～細砂混じりシルト
　5YR3/1 黒褐色　シルト混じり細砂の旧耕土ブロックと 4 層のブロックで構成
4．7.5YR5/2 灰褐色　シルト混じり細砂質中砂
5．10YR5/2 灰黄褐色　細砂質中砂混じりシルト　粘性多い
6．5Y5/1 灰色　シルト混じり中砂質細砂　グライ化　腐植分含む

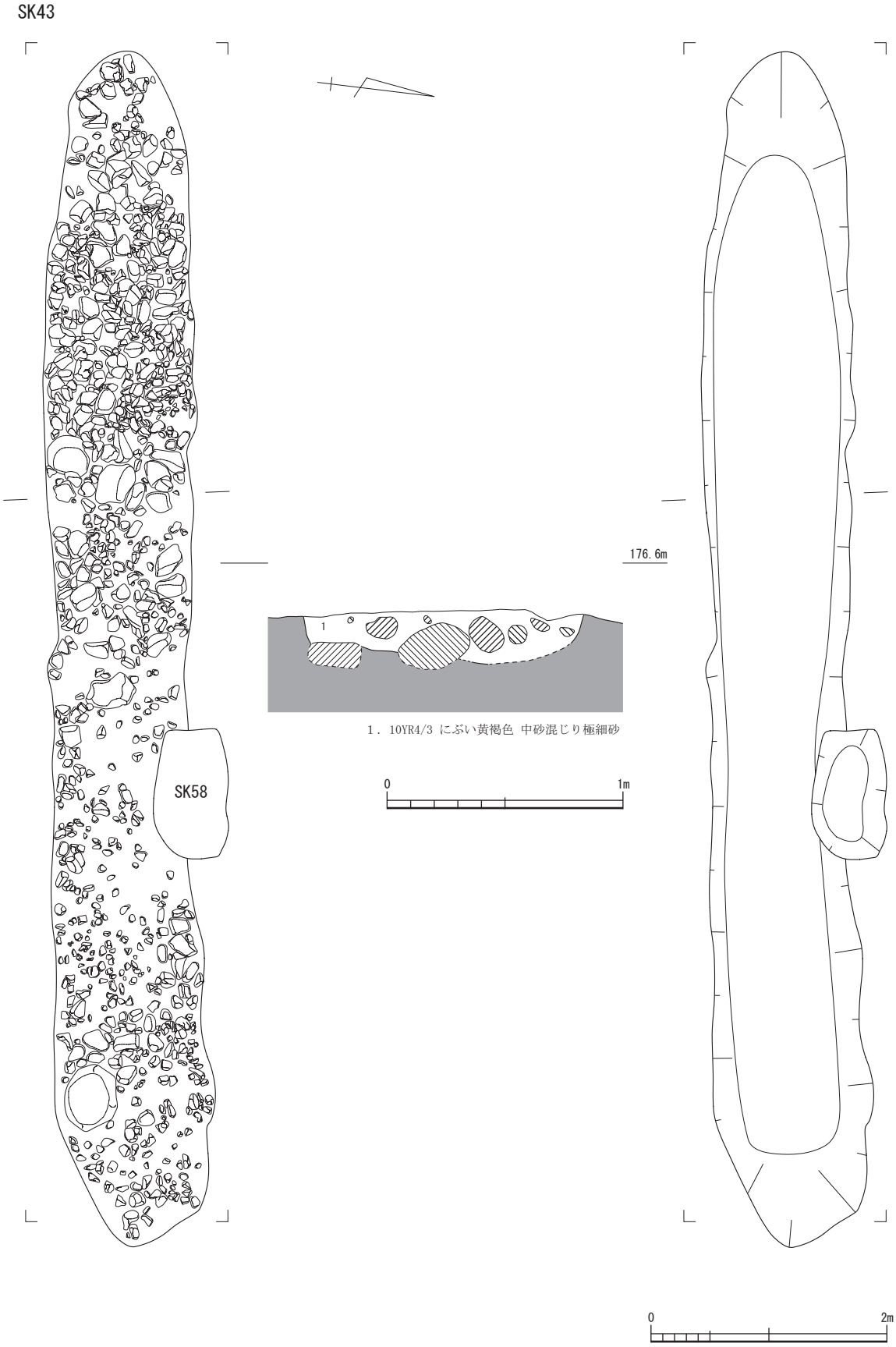
SK39



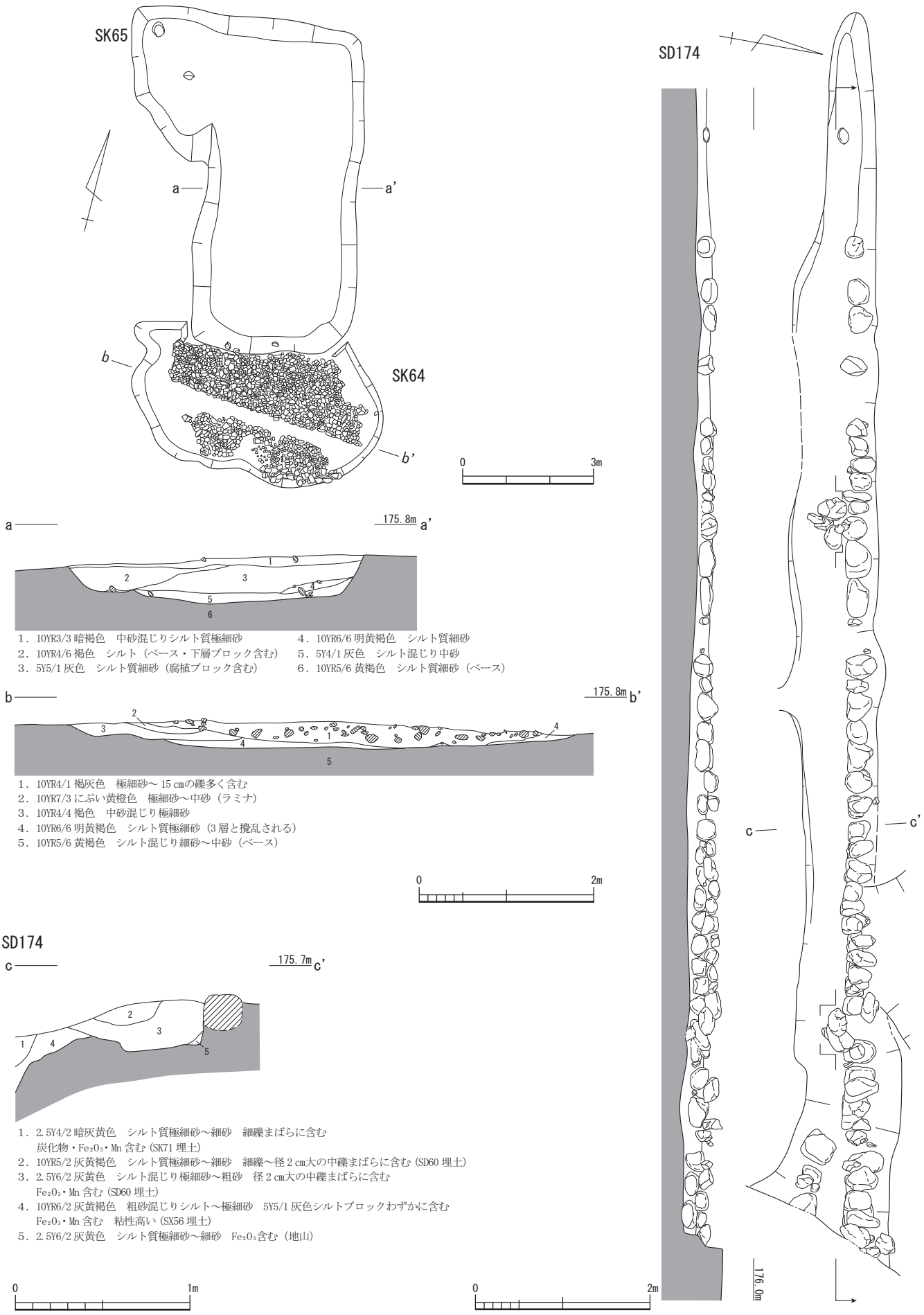
1．7.5YR4/4 褐色　細砂混じり中砂質粗砂　径 2 ㎝前後の角礫含む
　やや暗調　汚れる
2．10YR4/6 褐色　中砂

0　2m

上段中央地区 SK78・70 他



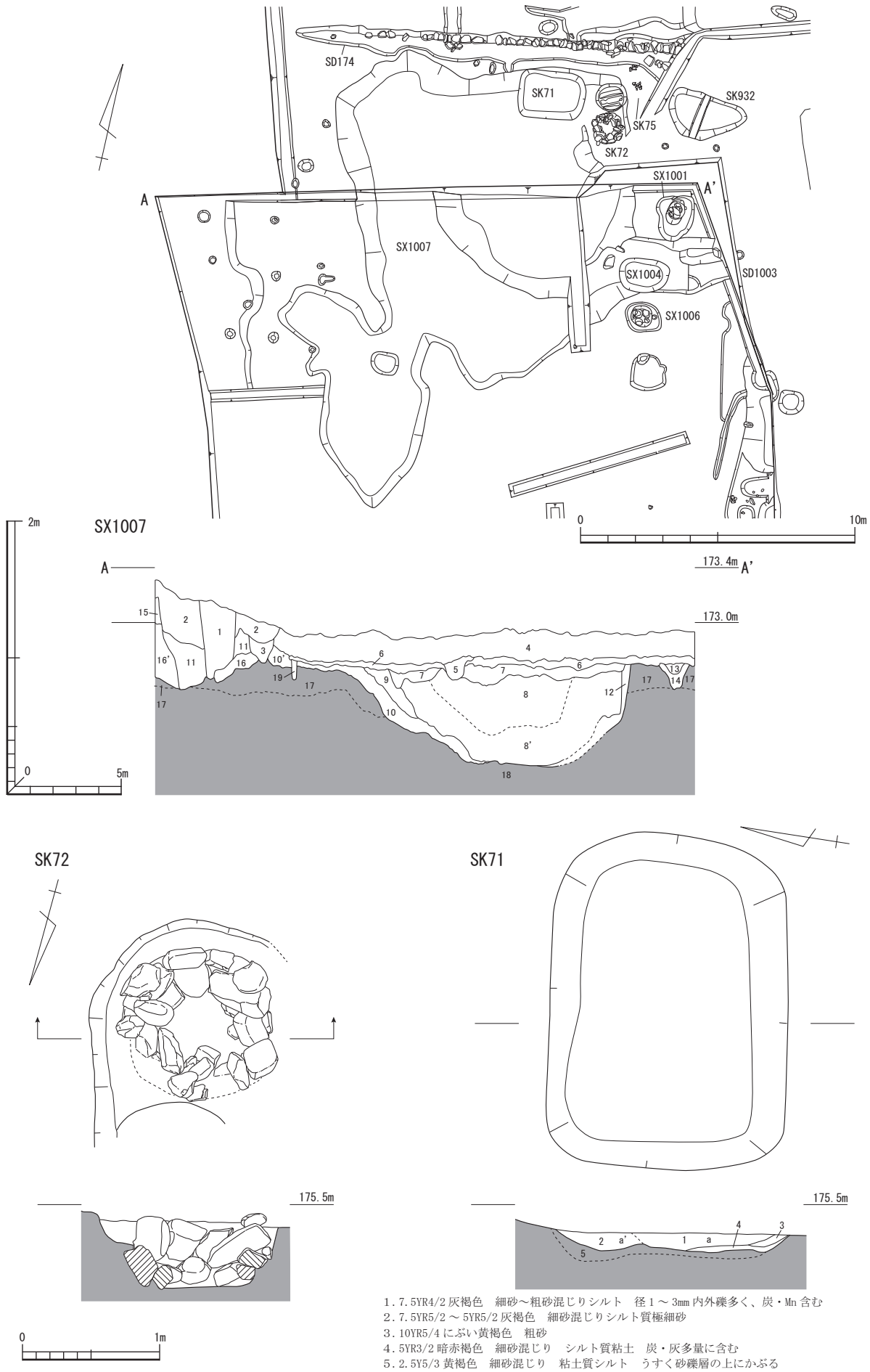
上段中央地区 SK43



上段中央地区 SK64・65・SD174

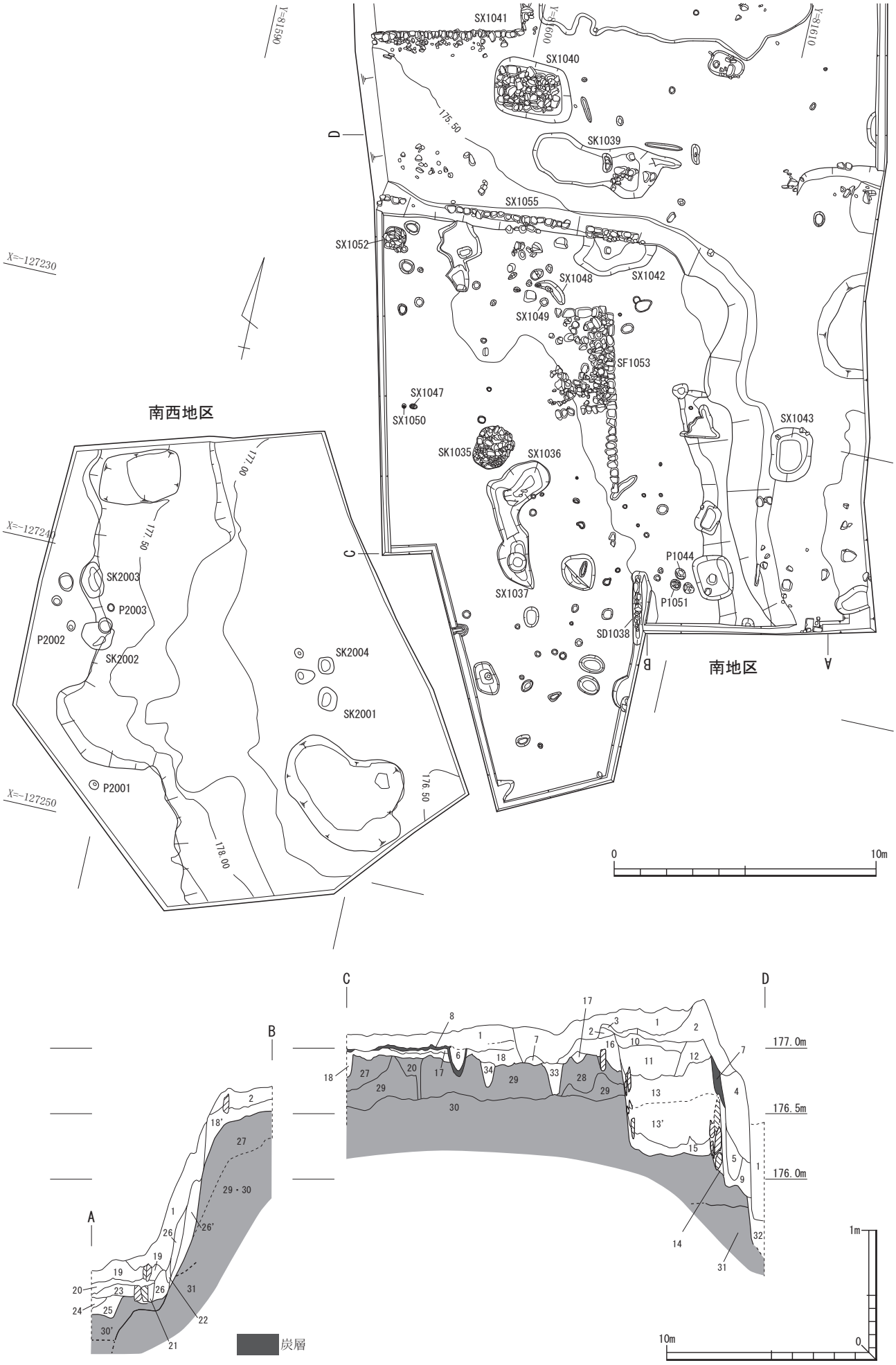
Y=-81580
Y=-81590
Y=-81610
X=-127200
X=-127210
X=-127220
X=-127230
SD174
SK71
SK75
SK932
SK72
SX1001
175.00
SX1007
SX1004
SD1003
SX1006
SX1012
SX1020
SX1013
SX1017
SX1014
SX1009
SX1015
SX1016
SX1010
SX1011
SX1041
SX1040
175.50
SK1039
SX1055
SX1052
SX1042
SX1054
SX1048
SX1049
SF1053
0
10m
SX1050
SX1047
SK1035
SX1043
SX1036
177.00
177.50
P1044
SX1037
P1051

上段南地区遺構配置図



1．7.5YR4/2 灰褐色　細砂～粗砂混じりシルト　径 1 ～ 3mm 内外礫多く、炭・Mn 含む
2．7.5YR5/2 ～ 5YR5/2 灰褐色　細砂混じりシルト質極細砂
3．10YR5/4 にぶい黄褐色　粗砂
4．5YR3/2 暗赤褐色　細砂混じり　シルト質粘土　炭・灰多量に含む
5．2.5Y5/3 黄褐色　細砂混じり　粘土質シルト　うすく砂礫層の上にかぶる

SX1007・SK72・71



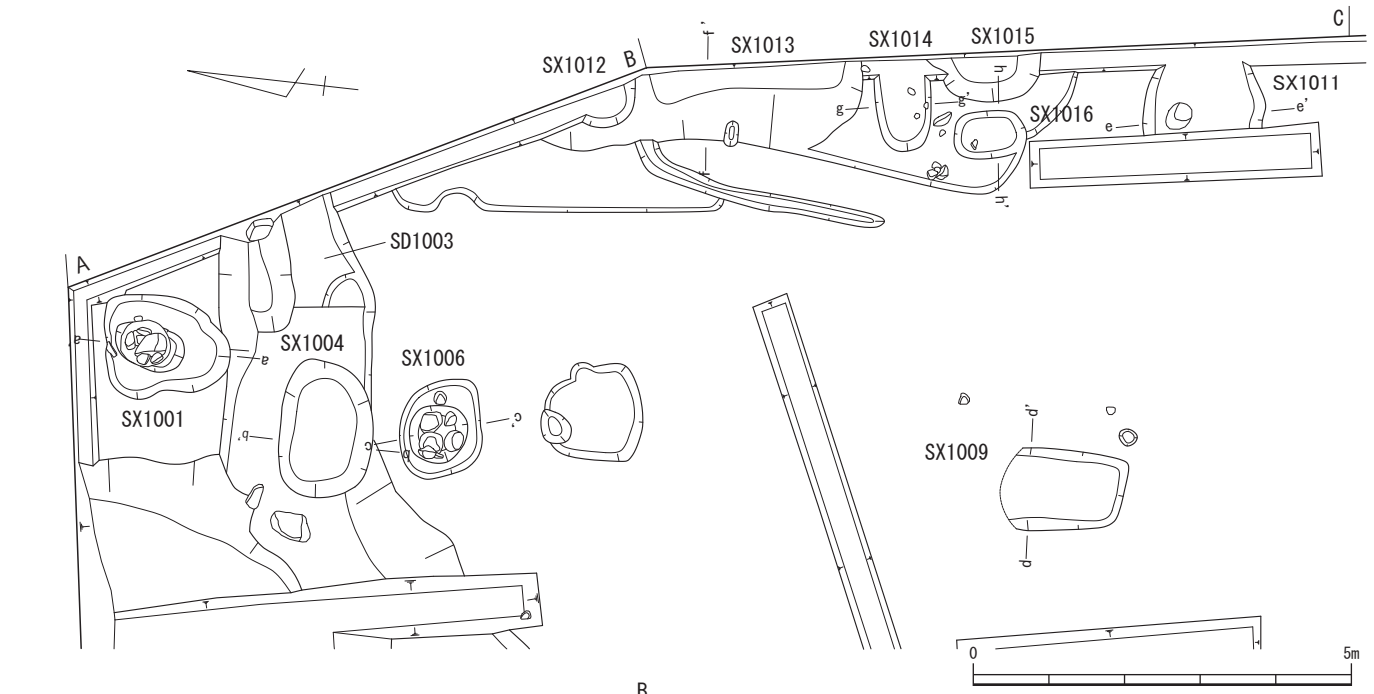
上段南地区・南西地区　大歳神社旧境内

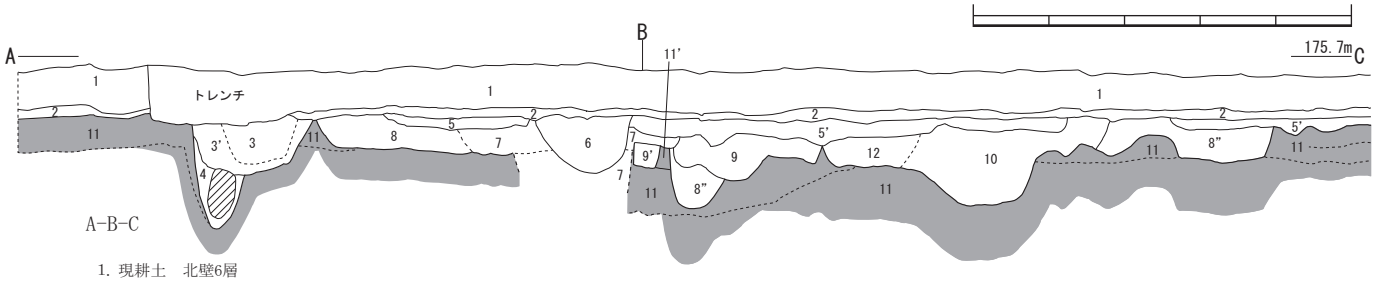
図版30 SX1007土層名

１．トレンチによる攪乱
２．攪乱土
３．攪乱土
４．7.5YR3/1黒褐色　細砂混じりシルト　現耕土
５．10YR3/2～4/2黒褐色～灰黄褐色　シルト混じり極細砂質細砂　溝　埋土
６．10YR6/8明黄褐色シルト混じり中砂　床土・Fe集積層　層下半は7層と同一質
７．5YR4/2灰褐色　シルト混じり中砂　土壌化する　Mn斑あり
８．7.5YR4/4褐色　礫混じり粗砂　径10～20cmの亜円礫を多量に含む　人為的な埋め土
８’８層よりも亜円礫が密集
９．7.5YR4/2灰褐色　細砂～中砂混じりシルト 粘性あり　土壌化する
10．7.5YR4/2灰褐色　中砂質細砂混じりシルト 土器片を若干含む　9層よりも粒子粗く土壌化　耕作土と考えられる
　11層と基本同じ
10’7.5YR4/2灰褐色　シルト混じり細砂
11．7.5YR5/4にぶい褐色　中粒砂～粗砂　径1cm～5cmの亜角礫と若干の極細砂を含む
12．7.5YR3/4暗褐色　シルト混じり細砂　土壌化する　9・10層に対応する
13．7.5YR5/2灰褐色　細砂
14．7.5YR4/2灰褐色　極細砂混じり細砂～中砂　炭化物含む
15．10YR4/6褐色　極細砂混じり中砂～粗砂　径5cm前後の角礫含む
16．7.5YR4/4褐色　礫・細砂混じり中砂～粗砂　径3～5cm亜角礫入る　洪水砂礫
16’7.5YR4/4褐色　粗粒砂 径2～3mmの粗粒砂
17．10YR5/3にぶい黄褐色　シルト混じり中砂　Mn斑根多し
18．7.5Y5/1灰色～N5/灰色　シルト～細砂　腐植物含みグライ化する
19．10YR4/1褐灰色　シルト混じり細砂　ピット埋土

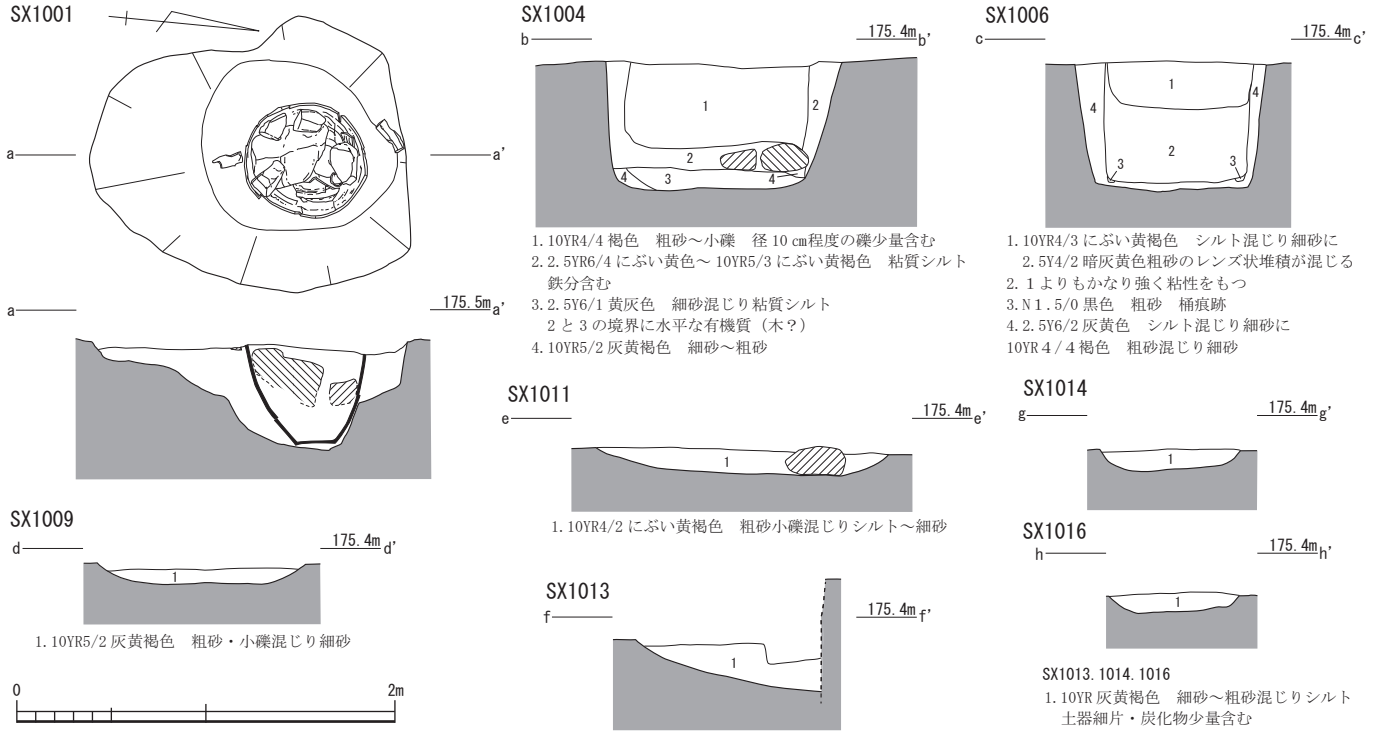
図版31 南地区南半南壁A-B・西壁C-D断面土層名

１．攪乱土
２．2.5YR2/1赤黒色　細砂混じり腐植土　現表土
３．大歳神社社殿の土間コンクリート
４．7.5YR3/3暗褐色～4/3褐色　シルト・極細砂混じり中砂～細砂　盛土
５．7.5YR3/3暗褐色 細砂・礫　径5cm内外亜円礫密集
６．近現代の焼土坑埋土
７．5YR3/1色黒褐　シルト・粗砂・礫混じり細砂　炭多く含み汚れる
８．2.5YR1.7/1赤黒色　極細砂混じり細砂　灰・炭層及び火化面・火災による炭層　下面が火化　上半は土壌化
９．5YR3/3暗赤褐色　極細砂・粗砂混じり細砂　瓦片多く含む
10．5YR4/2灰褐色　シルト混じり細砂　土壌化
11．7.5YR4/6褐色　細砂　径3～5mm礫含む　盛土
12．2.5Y6/1黄灰色　礫　径5～10cm亜円礫人為的に密集
13．2.5Y6/1黄灰色　礫　径10～15cm亜円・亜角礫人為的に密集
13’2.5Y6/1黄灰色　礫　径20cm内外亜円・亜角礫人為的に密集
14．5YR4/2灰褐色　細砂　近現代の大歳神社石垣・掘方
15．7.5YR4/4褐色　シルト混じり中砂　若干土壌化する　石列SX1055構築よりも先行する
16．7.5YR3/3暗褐色　シルト・極細砂混じり細砂　径3mm内外角礫含む
17．10YR5/1褐灰色　シルト　粘性あり、旧地表
18．7.5YR4/3褐色～4/4褐色　細砂混じりシルト
18’10YR3/2黒褐色　シルト混じり細粒砂　炭・土器含み土壌化する
19．10YR5/4にぶい黄褐色　粗砂　山土による現参道に伴う敷砂か
20．7.5YR4/3褐色　粗砂～中砂　旧参道の路面　上半が土壌化
21．10YR4/3にぶい黄褐色　若干シルト混じる中砂　石材の掘方埋土　やや汚れる
22．7.5YR4/3褐色　シルト混じり中砂
23．10YR5/4にぶい黄褐色　礫混じり粗砂　径5cm内外亜円礫多く入る　砂利敷
24．7.5YR5/4にぶい褐色～7.5YR3/3暗褐色
25．7.5YR4/3褐色～7.5YR3/3暗褐色　シルト混じり中砂
26．10YR4/6褐色　細砂混じり中砂　径3cm内外亜円礫含む　27層の土壌化
26’10YR5/4にぶい黄褐色～4/4褐色　中砂質細砂　礫少ない　27層が若干土壌化
27．10YR4/6褐色 細砂　30・30’層の上層　ベース
28．7.5YR5/4にぶい褐色～10YR5/4にぶい黄褐色　シルト混じり細砂～中砂　18層と同一か
29．10YR5/4にぶい黄褐色　シルト混じり細砂～中砂
30．10YR5/2灰黄褐色～7.5YR5/2灰褐色　シルト～細砂質中砂
30’10YR5/4にぶい黄褐色　細砂質中砂　下半に径5cm内外の亜円礫流れ込む
31．7.5YR5/2灰褐色　粗砂混じり礫　径10cm内外亜円礫多く含む　扇状地中州の砂礫
32．10YR5/4にぶい黄褐色　細砂混じりシルト　SX1041掘方
33．7.5YR5/4にぶい褐色～7.5YR4/4褐色 礫混じりシルト　径5cm内外の亜円礫・粗砂を含む　樹木の根痕か
34．10YR5/4にぶい黄褐色～7.5YR5/4にぶい褐色　シルト混じり中砂　汚れる　樹木の根痕か





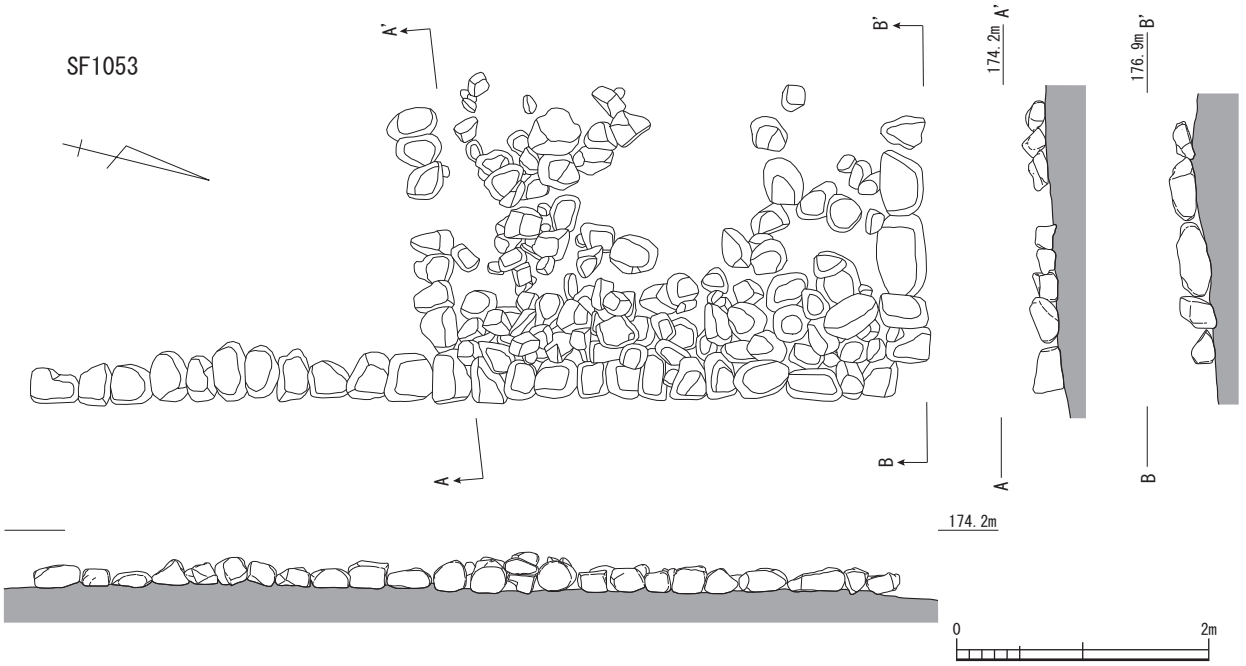
1. 現耕土　北壁6層
2. 床土　北壁7層
3. SX1007東端　集石　径10cm内外亜角礫密集
3'. 7.5YR4/4褐色　シルト混り細砂　北壁13層対応
4. 7.5Y3/3暗褐色　中砂質細砂～中砂（SX1007内溝）
5. 5YR4/2灰褐色　礫・シルト混じり中砂～粗砂～7.5YR4/2灰褐色 洪水砂を耕土化　畠耕土　径1～２cmの亜円礫
5'. 畠耕作土　９・12層を耕す　土器・炭化物多く含む 5YR4/2灰褐色（暗調）礫・シルト混じり細砂質中砂
6. 7.5YR5/2灰褐色　シルト混じり細砂～中砂　SX1012埋土 11層を人為的に埋土としている　粘性あり
7. 2.5YR3/1暗赤灰色　シルト・礫混じり中砂質細砂　SX1013埋土 炭化物含む　８層よりも暗調　粒子粗く有機分多し
8. 7.5Y3/3暗褐色　シルト混じり中層質細砂　SX1013下層もしくは切られた遺構埋土 a　Mn含む
8'. 5YR4/2灰褐色　極細砂混じり細砂　SX1011埋土　a'Mn含む
8". 7.5YR3/3暗褐色　シルト混じり細砂　土器多く含む　SX1031内土坑
9. 7.5YR5/2～4/2灰褐色　シルト混じり中砂～粗砂　炭・土器多く含む 径1～2cm大の亜角礫含む
9'. 7.5YR4/2灰褐色　９層と同じ　上層と混在やや暗調
10. 7.5YR4/2灰褐色～10YR5/2灰黄褐色　シルト混じり中砂～粗砂　SX1015埋土 8"より粒子粗い　径３cm内外亜角礫入る
11. 北壁　15層　10YR5/2灰黄褐色～7.5YR灰褐色　シルト～極細砂混じり細砂　Mn含む
11'. 7.5YR4/2褐色　極細砂混じり細砂　ベース土内の差か　Mnを斑に含む
12. ９層と同じ　SX1014埋土



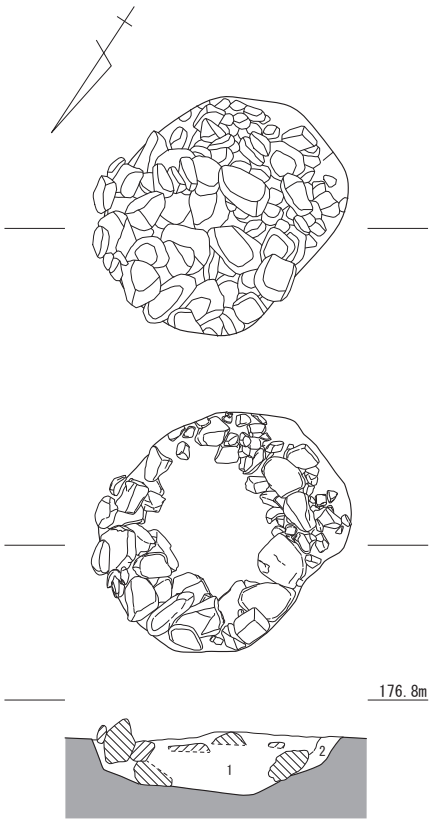
上段南地区南半遺構配置図　SX1001・1004 他

図版 34

SF1053

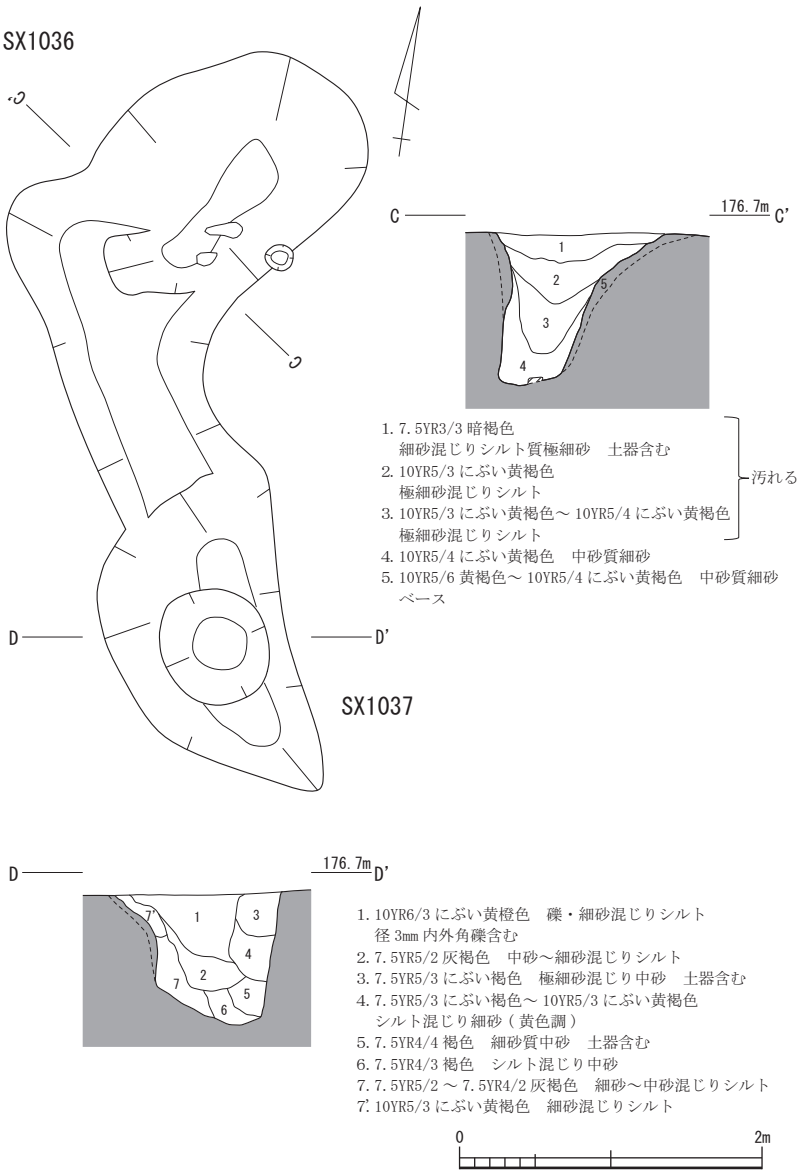


SK1035



1. 10YR3/2 黒褐色　細砂質中砂
　炭　地山土（細砂）混じり　汚れる
2. 7.5YR3/3 暗褐色　中砂～細砂混じりシルト
　炭混じり中砂　汚れる

SX1036



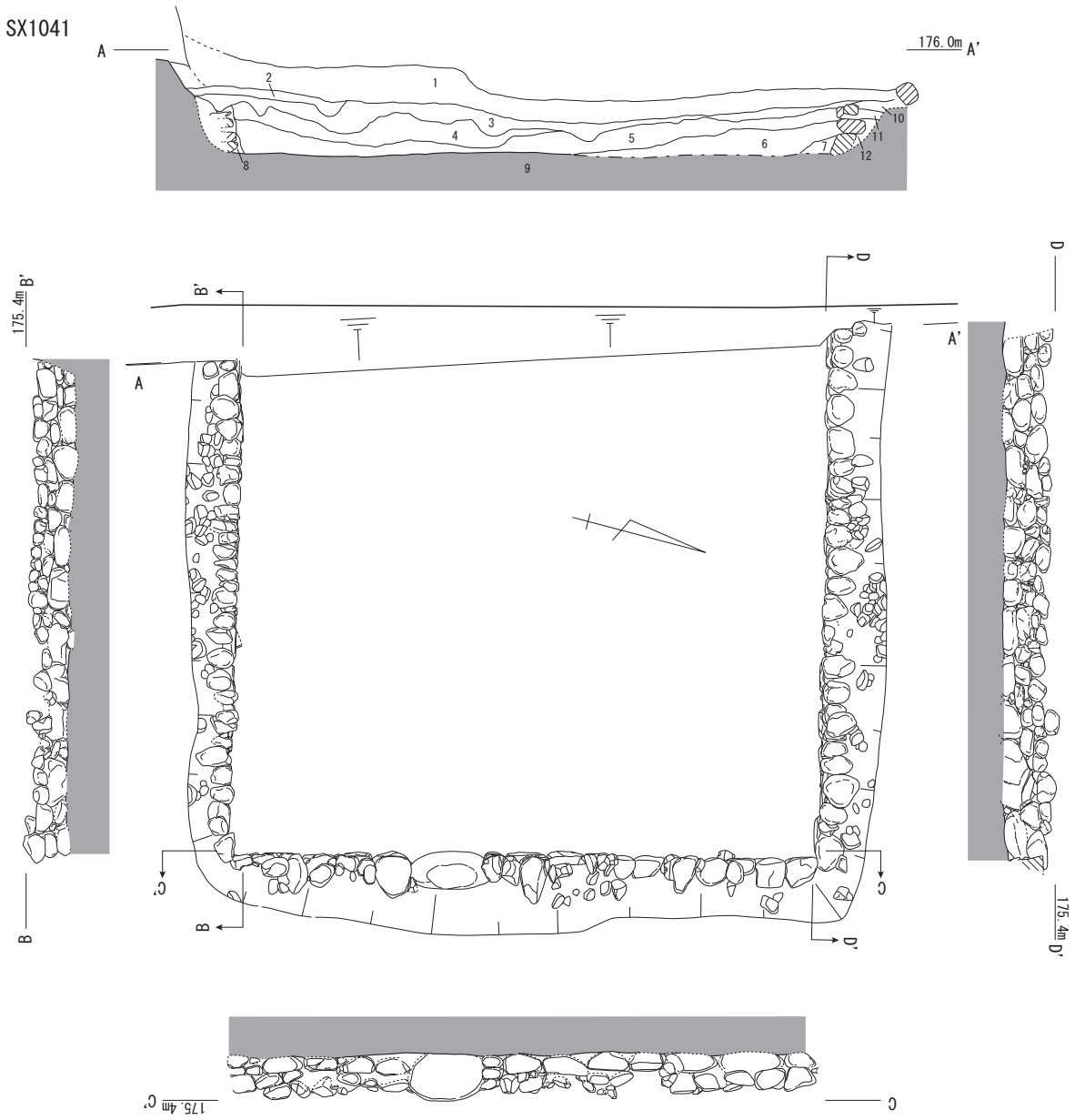
1. 7.5YR3/3 暗褐色
　細砂混じりシルト質極細砂　土器含む
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色
　極細砂混じりシルト
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色～ 10YR5/4 にぶい黄褐色
　極細砂混じりシルト
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色　中砂質細砂
5. 10YR5/6 黄褐色～ 10YR5/4 にぶい黄褐色　中砂質細砂
　ベース

汚れる

1. 10YR6/3 にぶい黄橙色　礫・細砂混じりシルト
　径 3mm 内外角礫含む
2. 7.5YR5/2 灰褐色　中砂～細砂混じりシルト
3. 7.5YR5/3 にぶい褐色　極細砂混じり中砂　土器含む
4. 7.5YR5/3 にぶい褐色～ 10YR5/3 にぶい黄褐色
　シルト混じり細砂（黄色調）
5. 7.5YR4/4 褐色　細砂質中砂　土器含む
6. 7.5YR4/3 褐色　シルト混じり中砂
7. 7.5YR5/2 ～ 7.5YR4/2 灰褐色　細砂～中砂混じりシルト
7'. 10YR5/3 にぶい黄褐色　細砂混じりシルト

0　2m

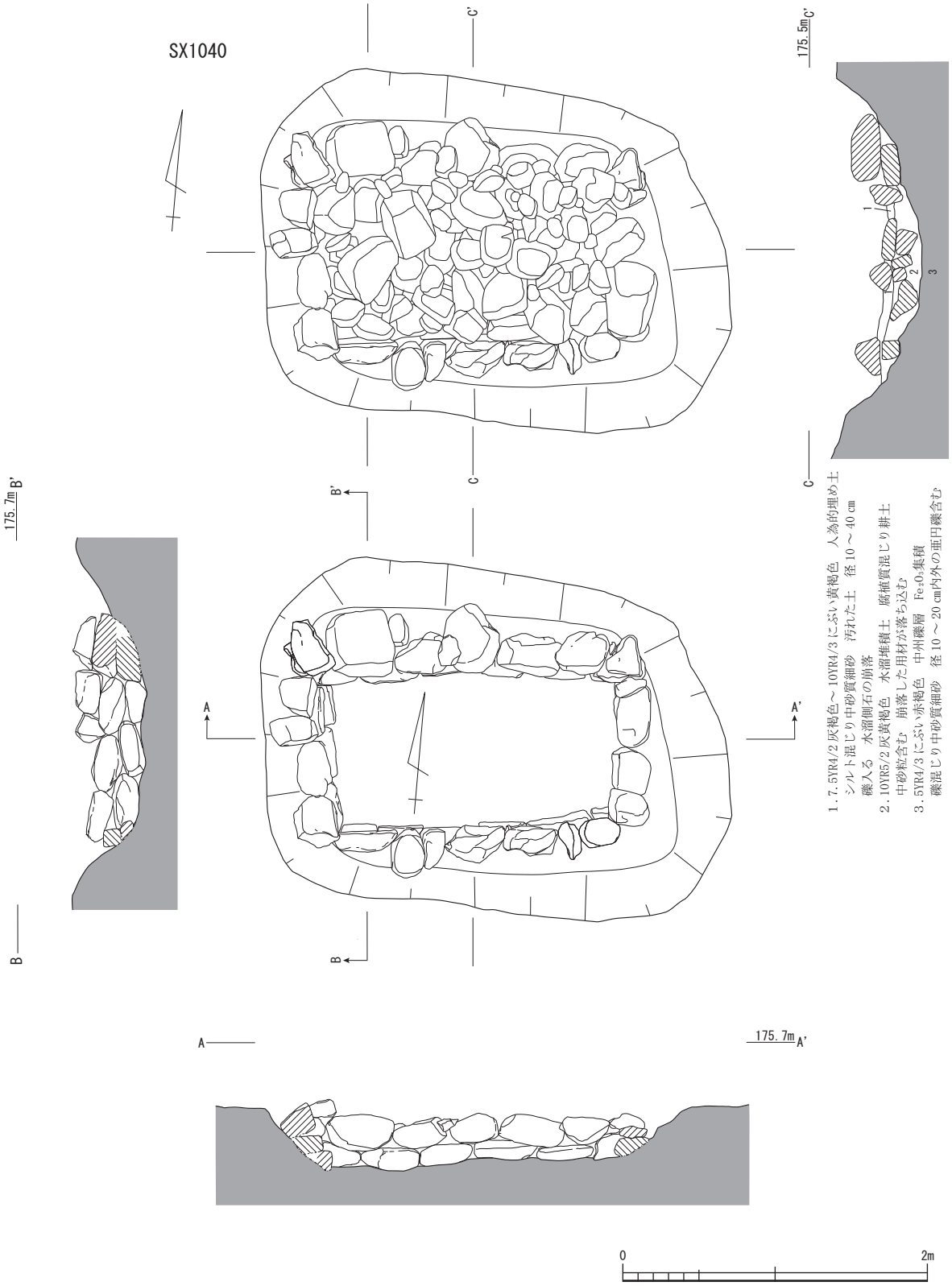
SF1053・SK1035 他



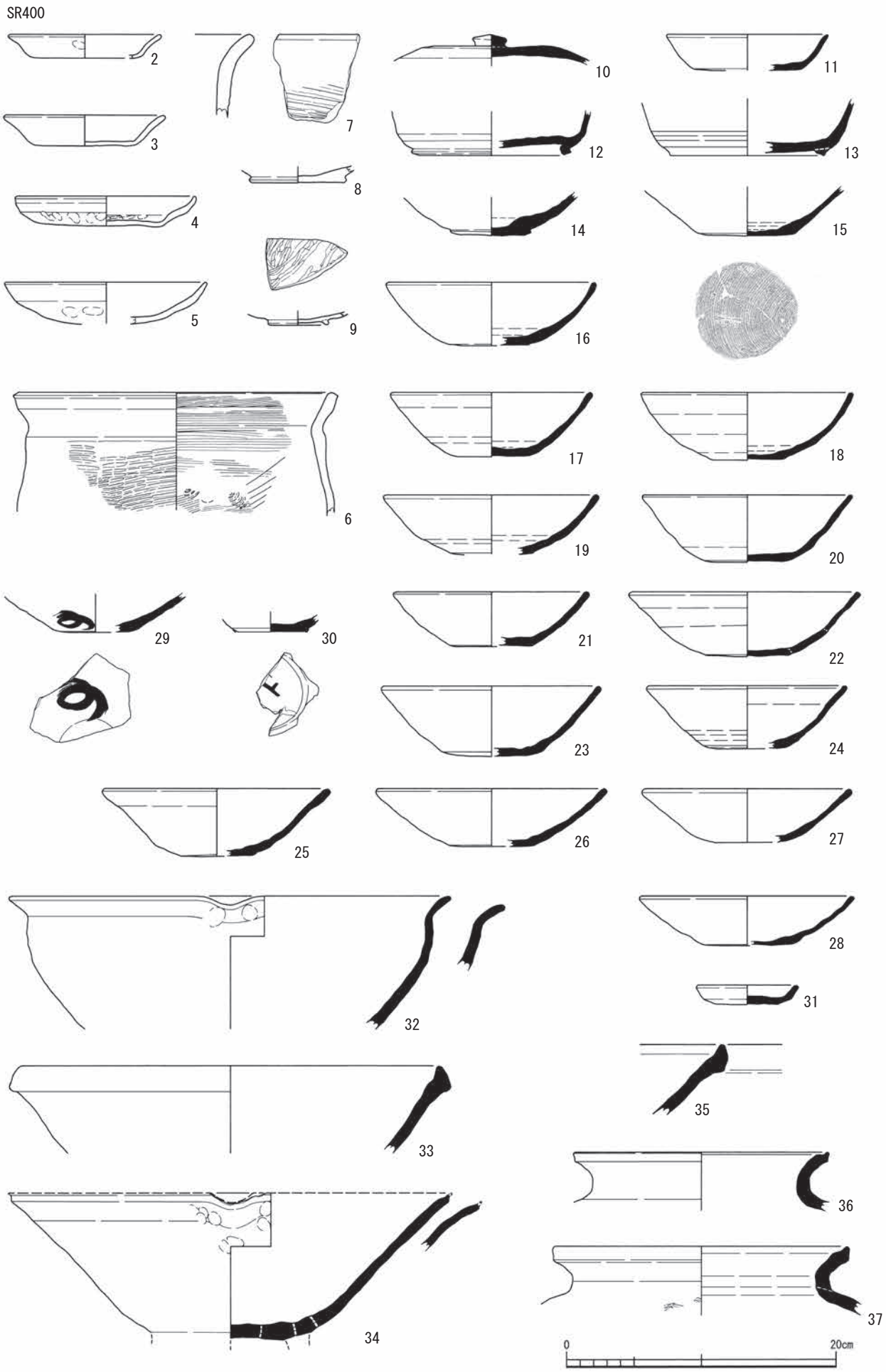
1．5YR3/2 暗赤褐色　細砂　現表土
2．7.5YR4/3 褐色～ 7.5YR4/32 灰褐色　中砂質細砂～粗砂　3 層より暗調
3．7.5YR4/3 褐色　細砂
4．7.5YR5/2 灰褐色　極細砂混じり細砂　酸化鉄 7.5YR5/6 明褐色含む
5．10YR5/1 褐灰色　シルト・細砂混じり極細砂　径 5cm 内外礫入る　酸化鉄・地山土ブロック状に入る
6．10YR6/1 褐灰色 +5YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂　地山・旧地表ブロック状に入る　酸化鉄含む
7．7.5YR5/2 灰褐色　礫・シルト混じり中砂　地山・旧地表ブロック状に入る
8．10YR5/2 灰黄褐色～ 10YR5/3 にぶい黄褐色　礫混じり中砂質細砂～中砂　地山・旧地表ブロック状に入る　酸化鉄多く含む
9．7.5YR5/2 灰褐色　礫混じり粗砂　ベース　中州　礫層　径 2～20 cm亜円礫多く入る
10. 7.5YR4/3 褐色　中砂粒混じりシルト　粘性あり
11. 10YR4/4 褐色　シルト混じり中砂　径 3 cm内外円礫含む
12. 10YR4/6 褐色　礫　中砂混じりシルト

0　2m

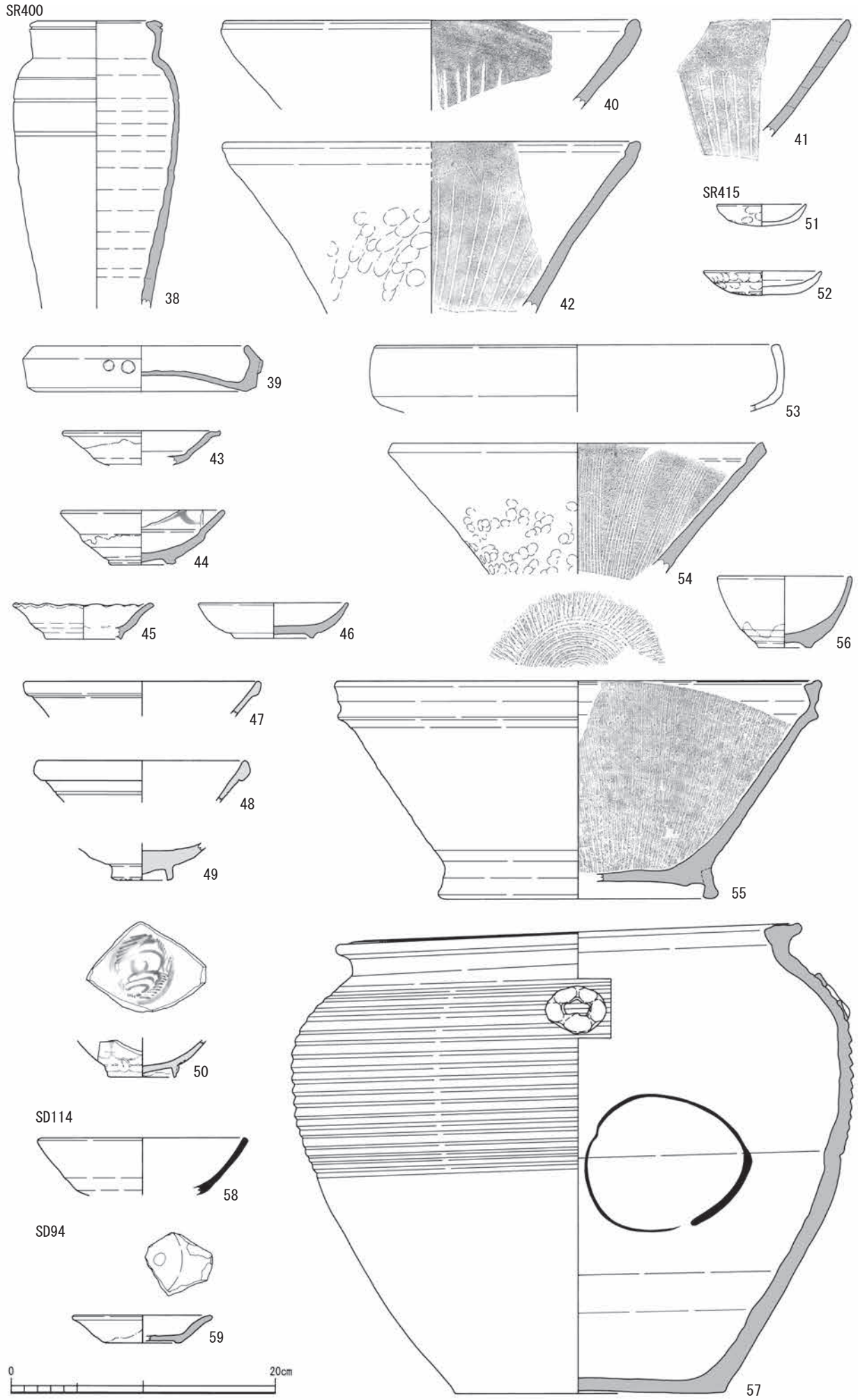
SX1041


SX1040
175.5m C'
C
C'
1
2
3
175.7m B'
B
B'
A
A'
175.7m A'
A
1．7.5YR4/2 灰褐色～10YR4/3 にぶい黄褐色　人為的埋め土
シルト混じり中砂質細砂　汚れた土　径 10 ～ 40 ㎝
礫入る　水溜側石の崩落
2．10YR5/2 灰黄褐色　水溜堆積土　腐植質混じり耕土
中砂粒含む　崩落した用材が落ち込む
3．5YR4/3 にぶい赤褐色　中州礫層　Fe₂O₃集積
礫混じり中砂質細砂　径 10 ～ 20 ㎝内外の亜円礫含む
0
2m

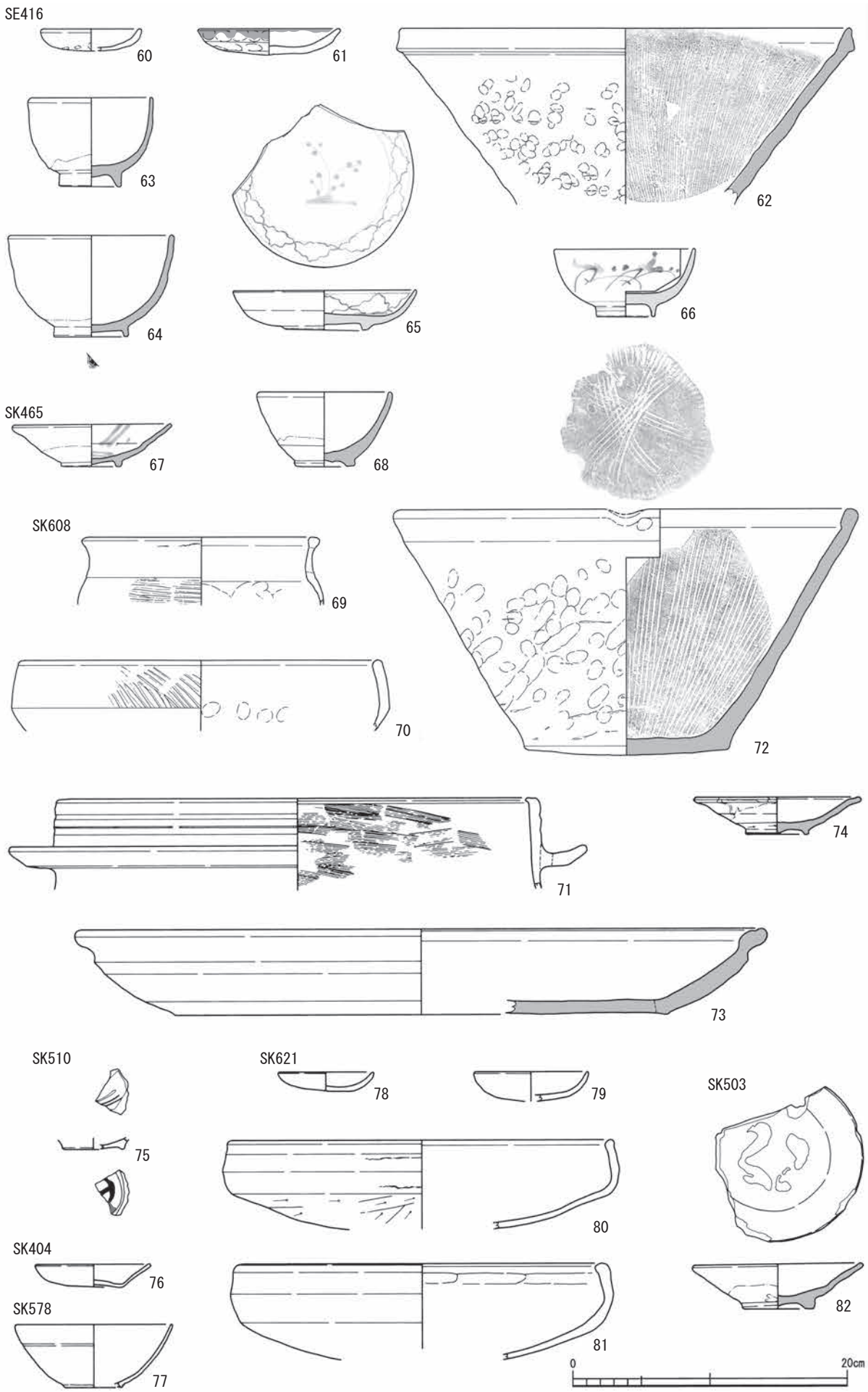
SX1040



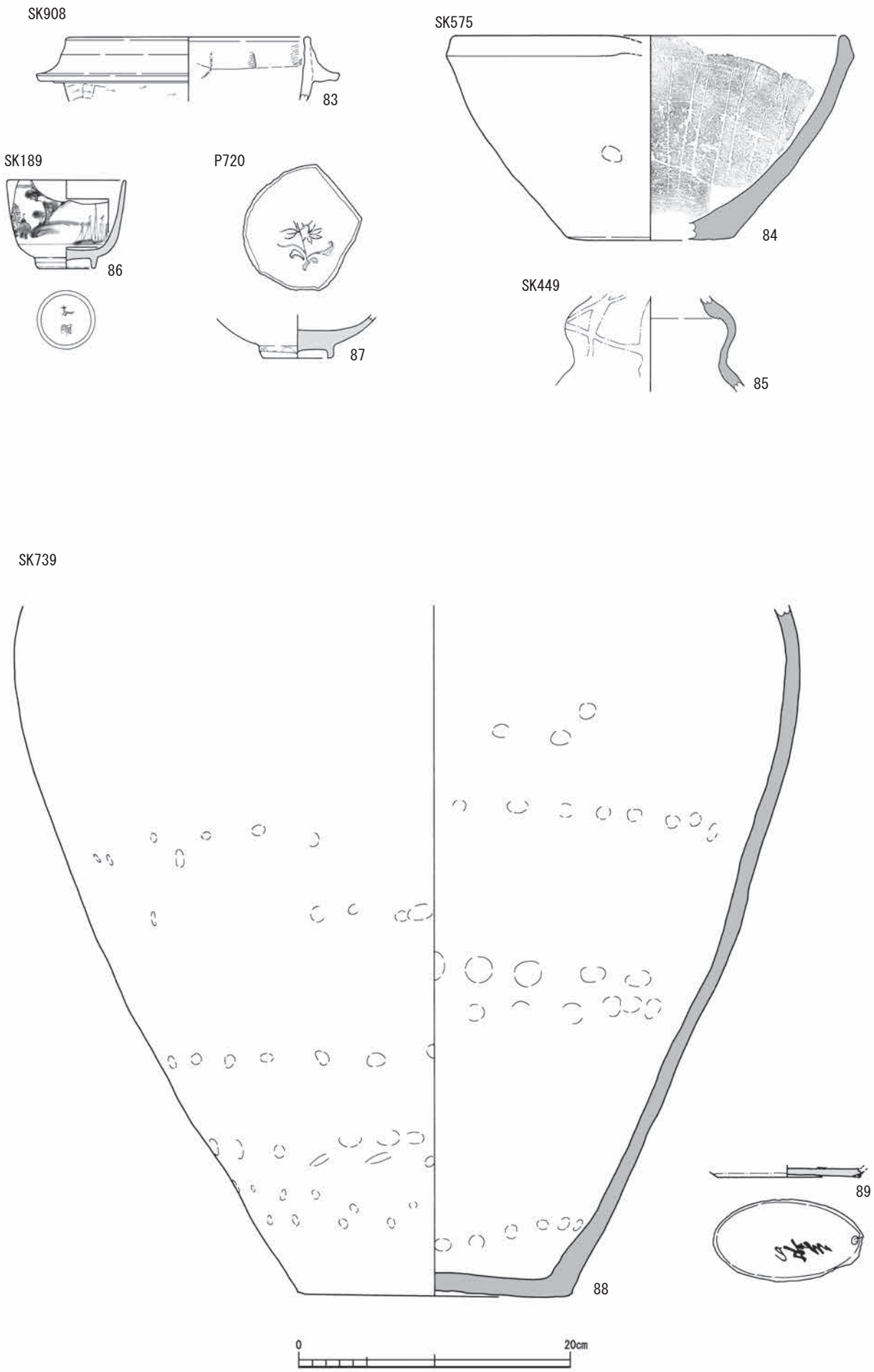
下段　SR400 出土土器



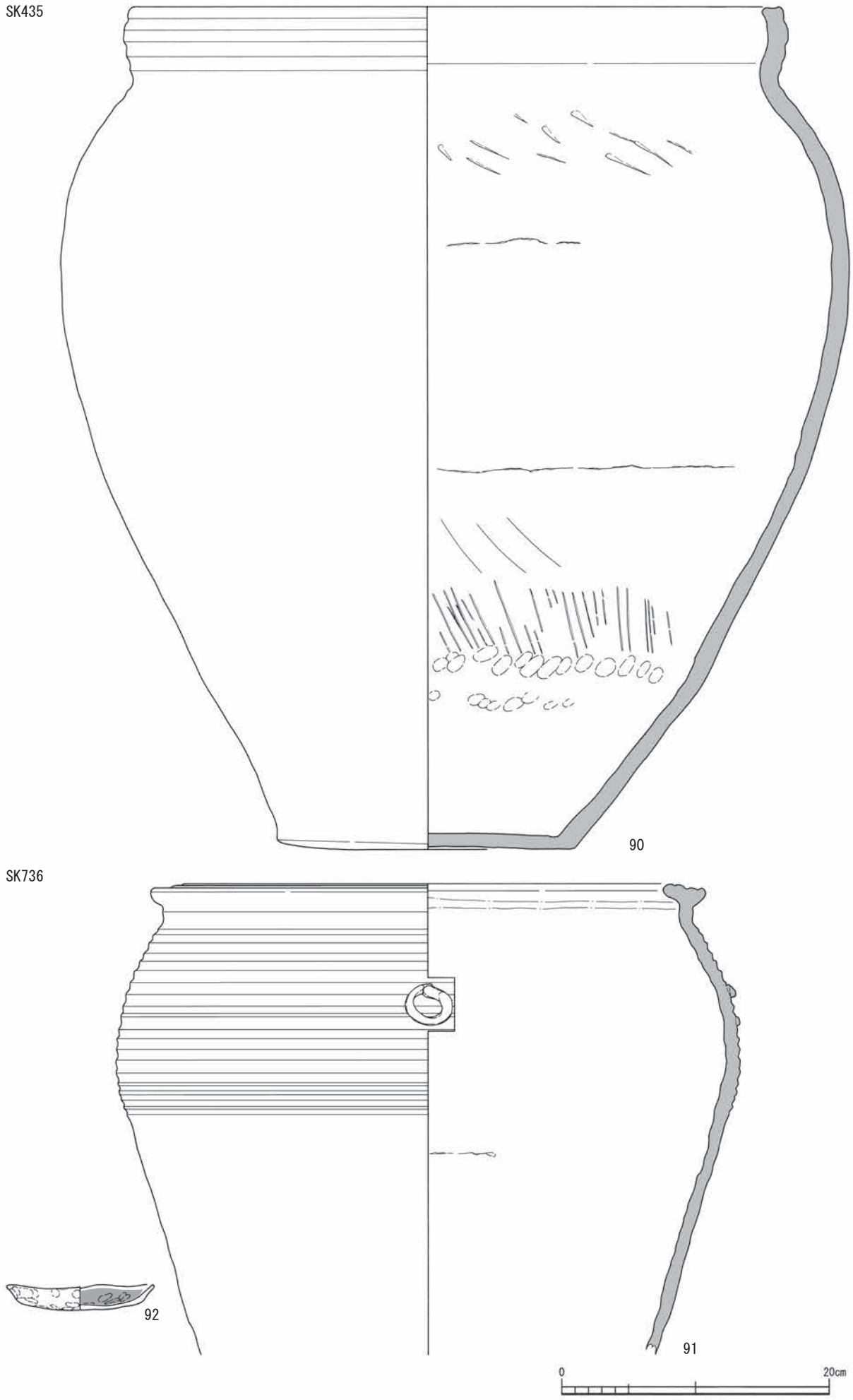
下段　SR400・415 他出土土器



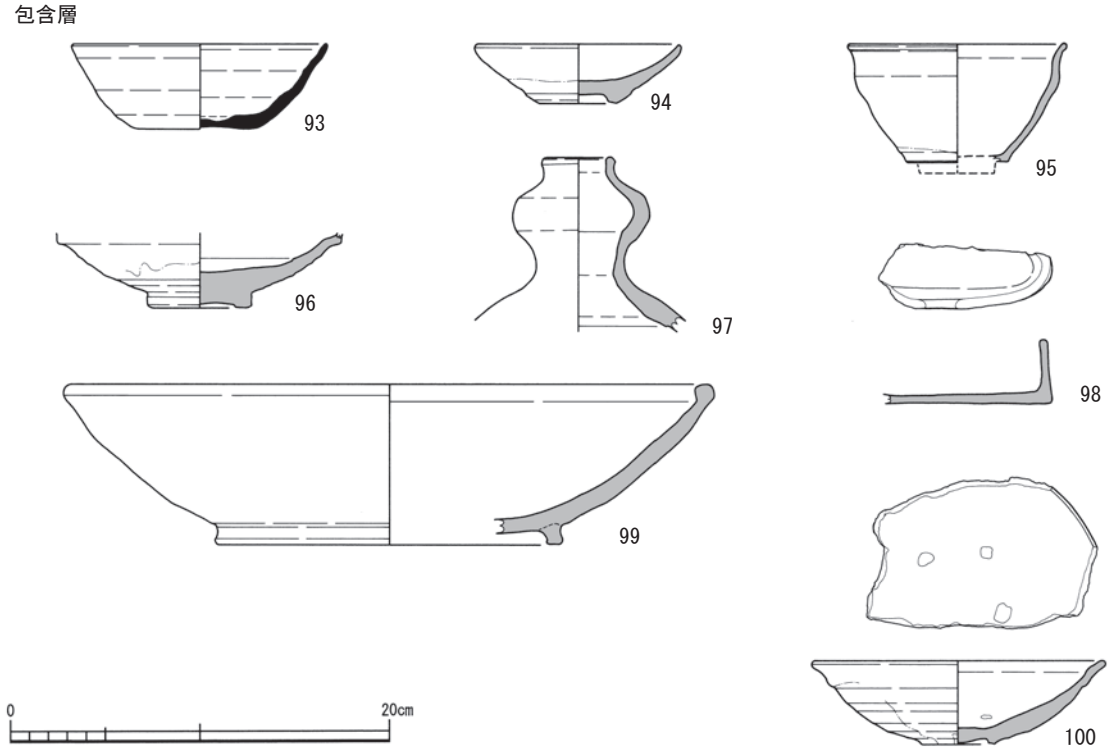
下段　SE416・SK465 他出土土器

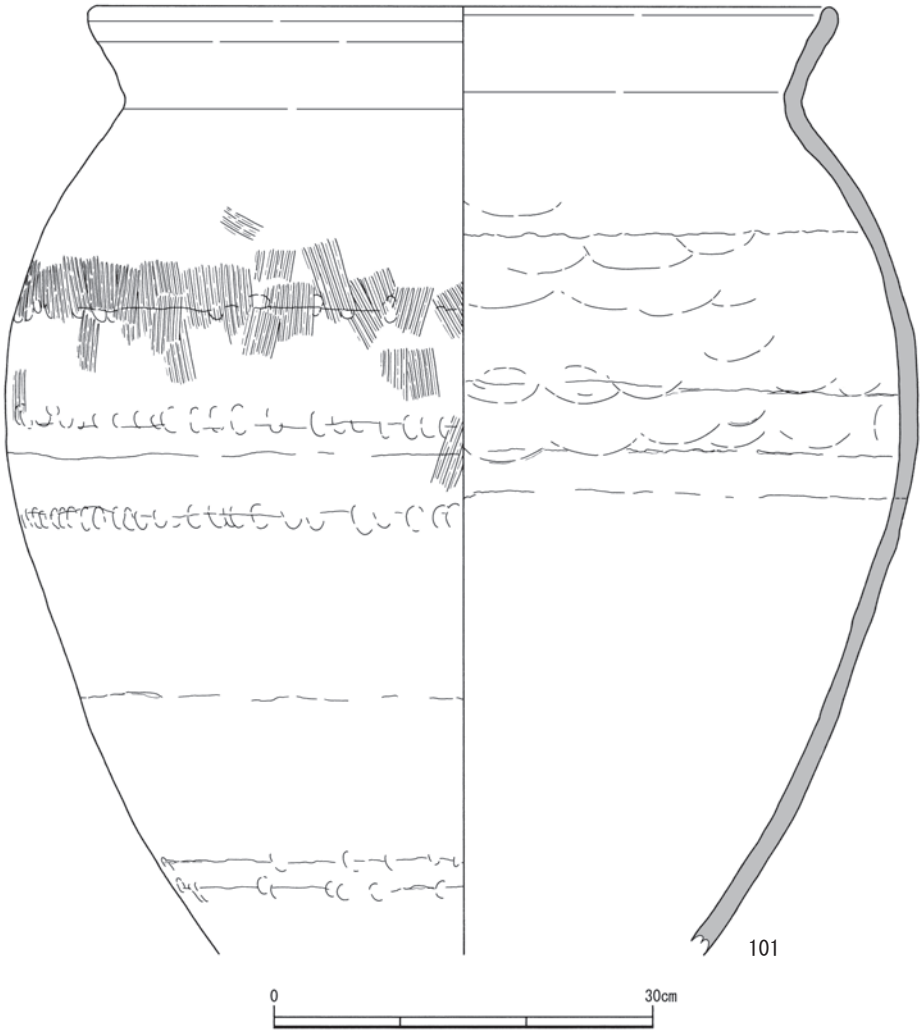


下段　SK908・575 他出土土器

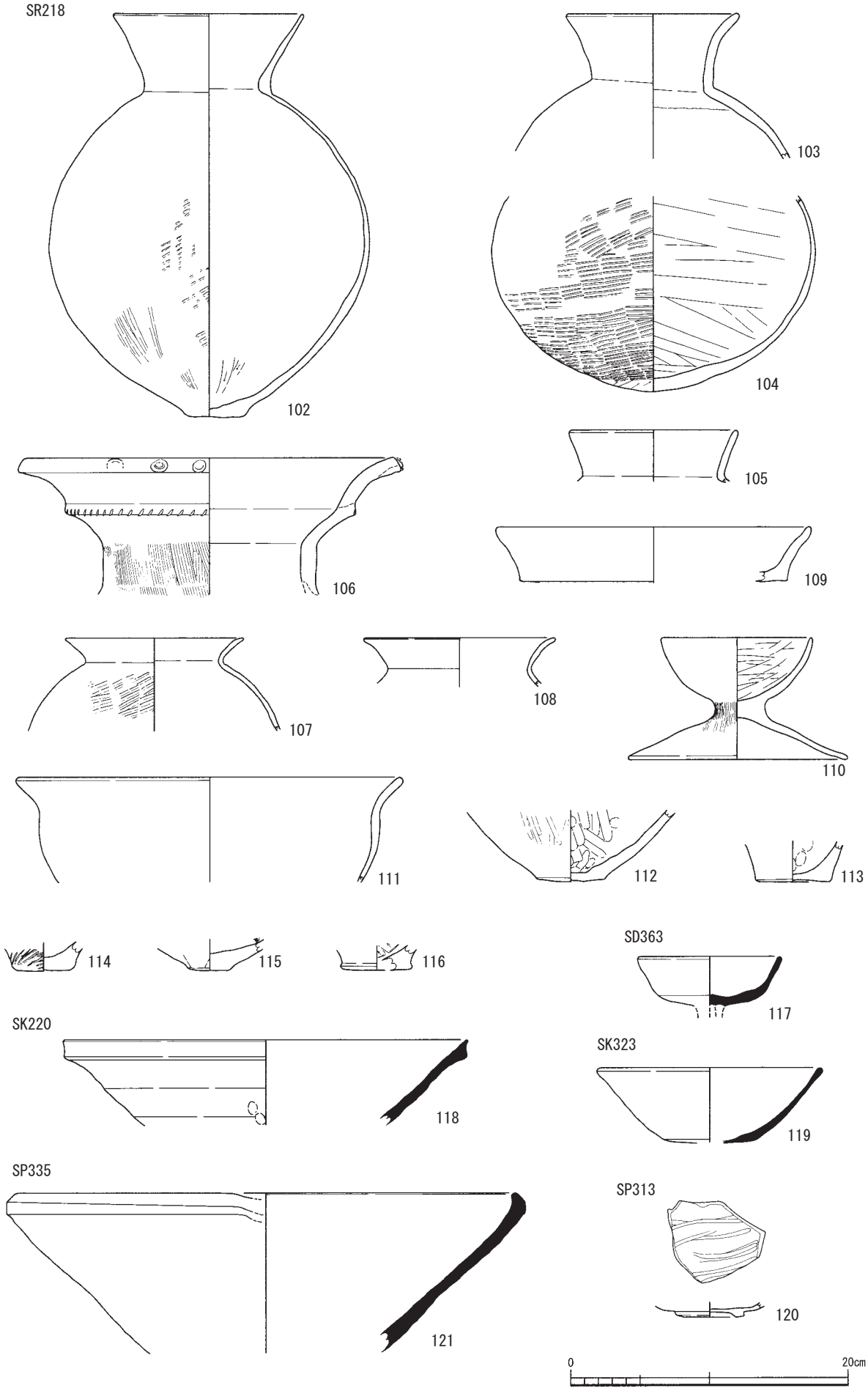


下段　SK435・736 出土土器

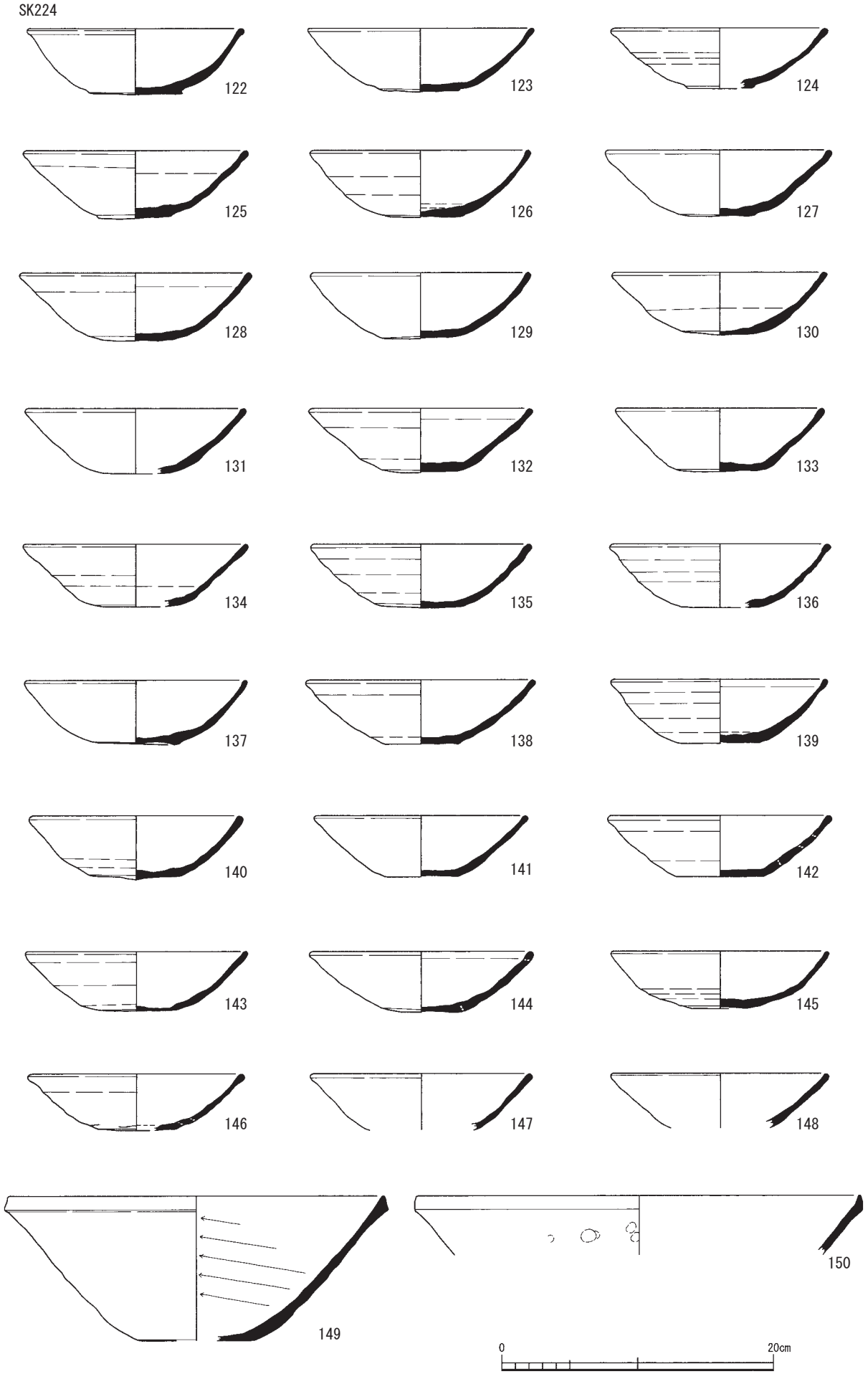




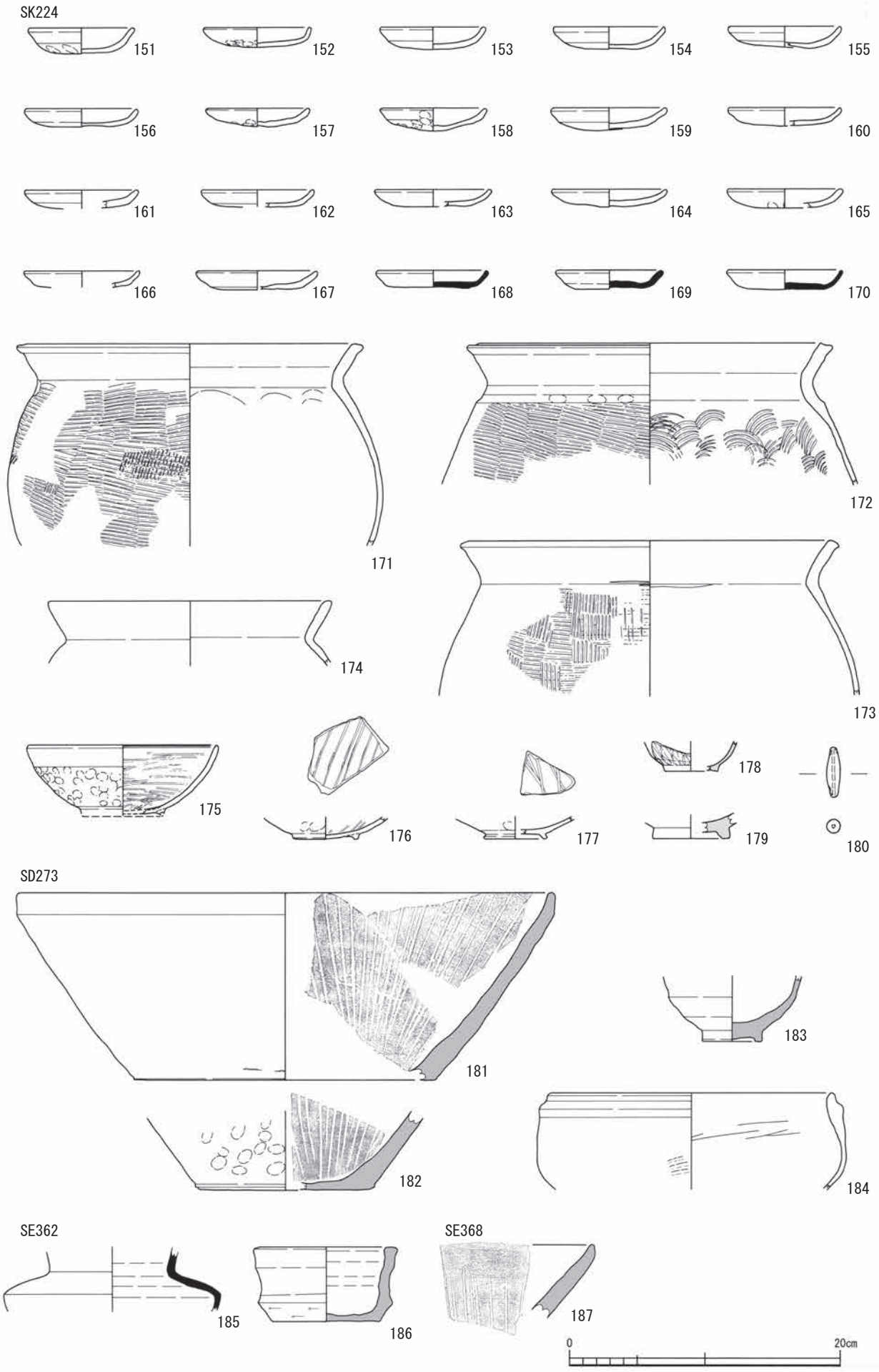
下段　包含層出土土器



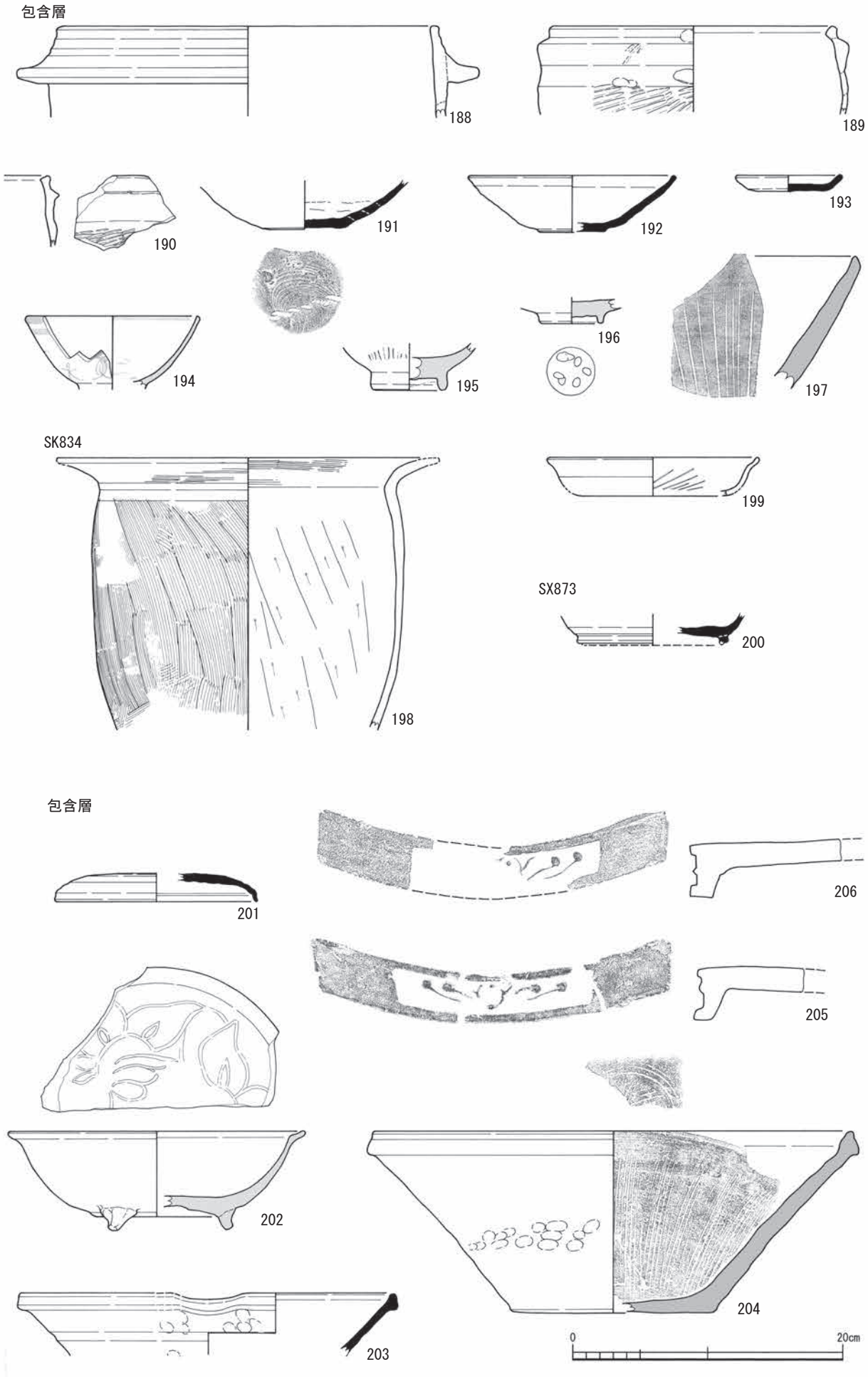
上段北地区　SR218・SD363 他出土土器



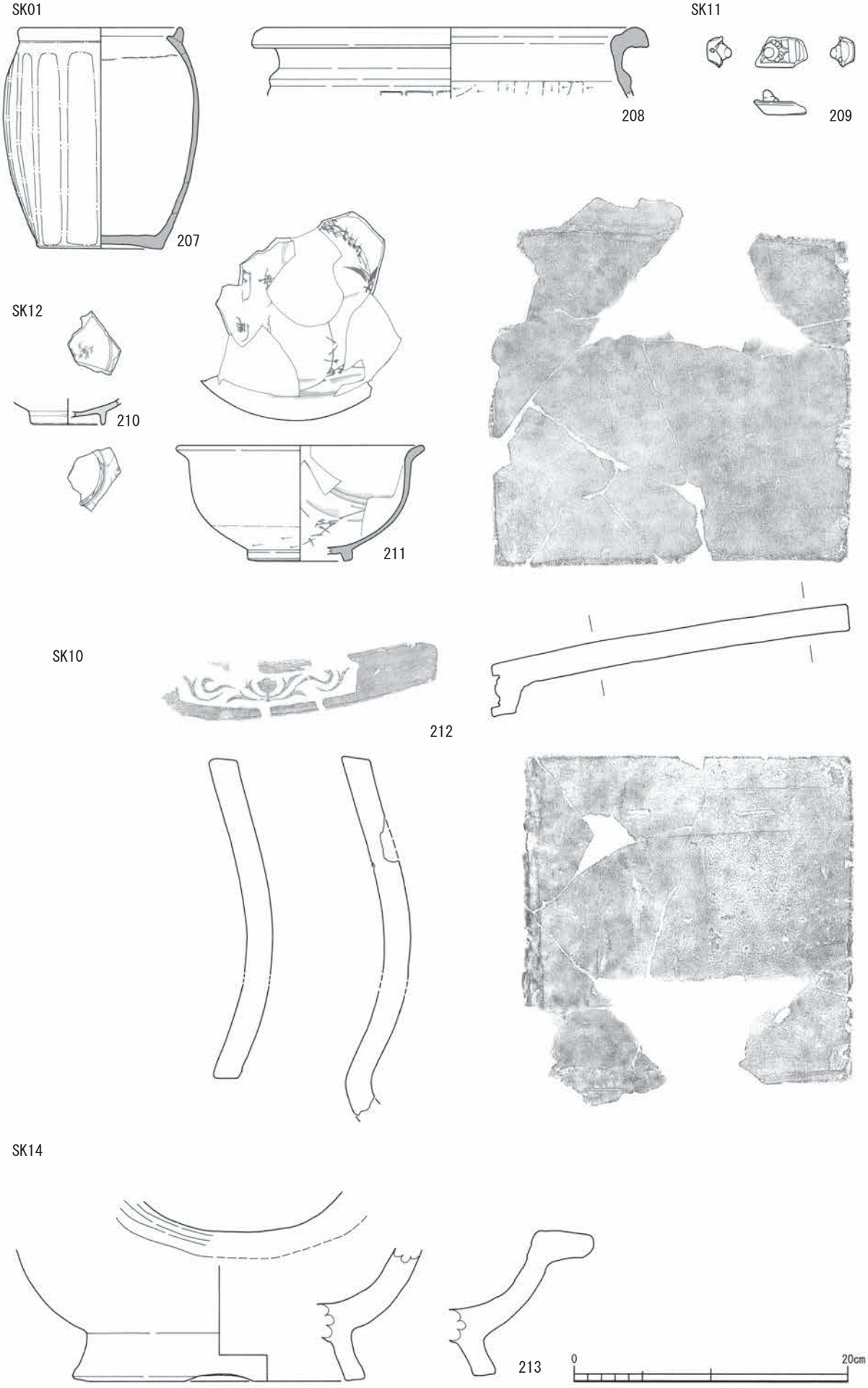
上段北地区　SK224 出土土器



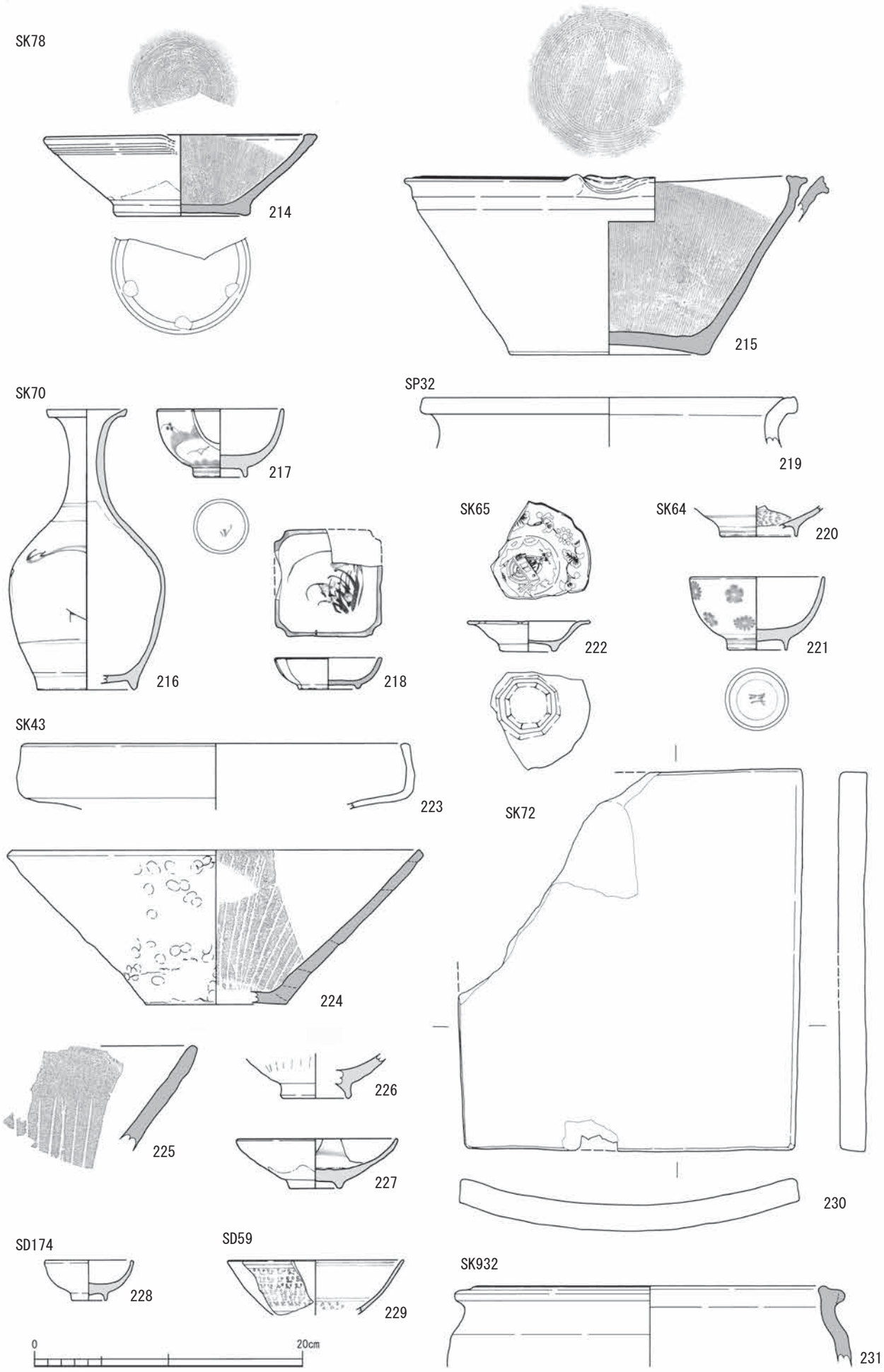
上段北地区　SD273 他出土土器



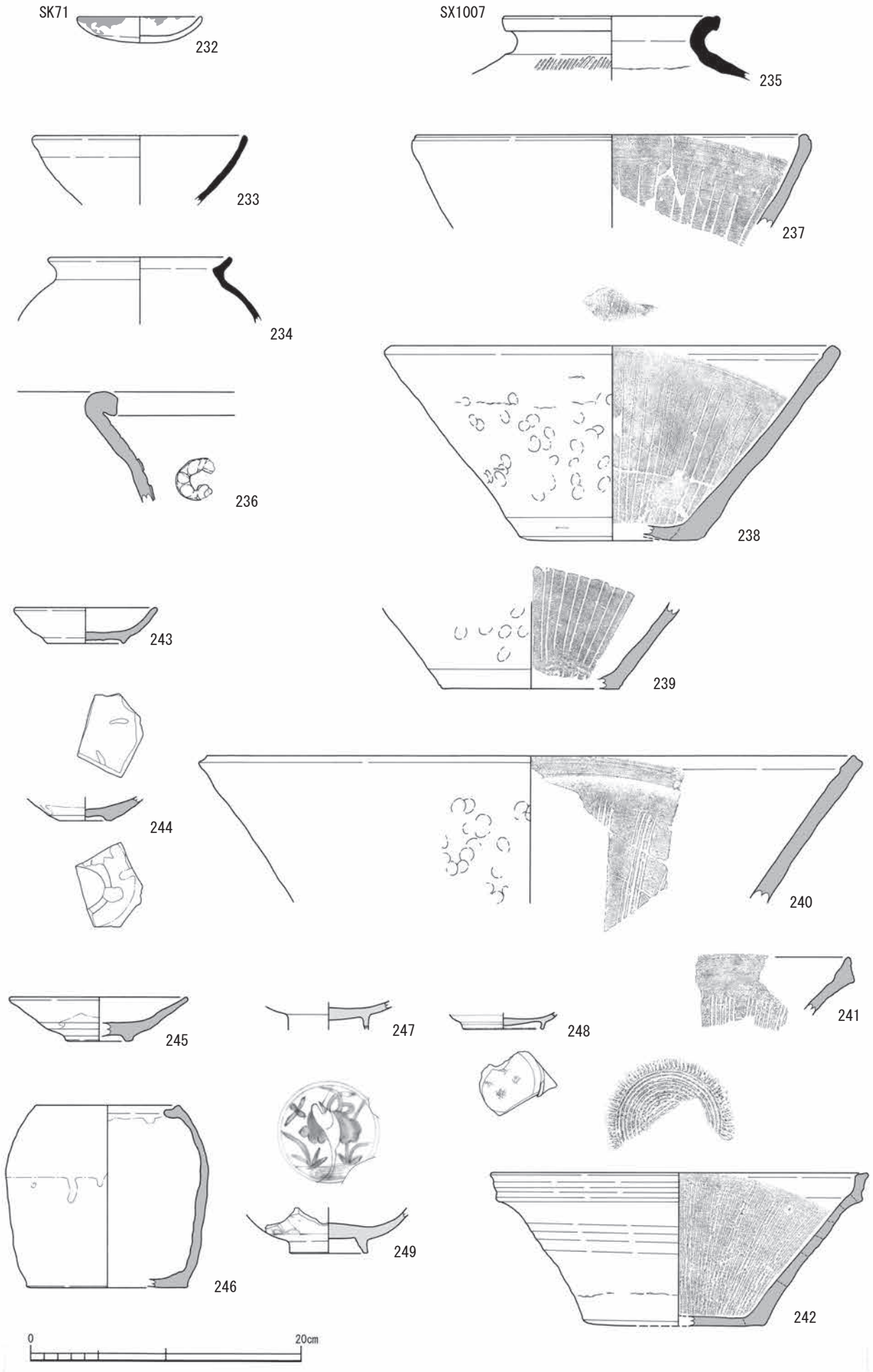
上段北地区包含層、中央地区 SK834 他出土土器



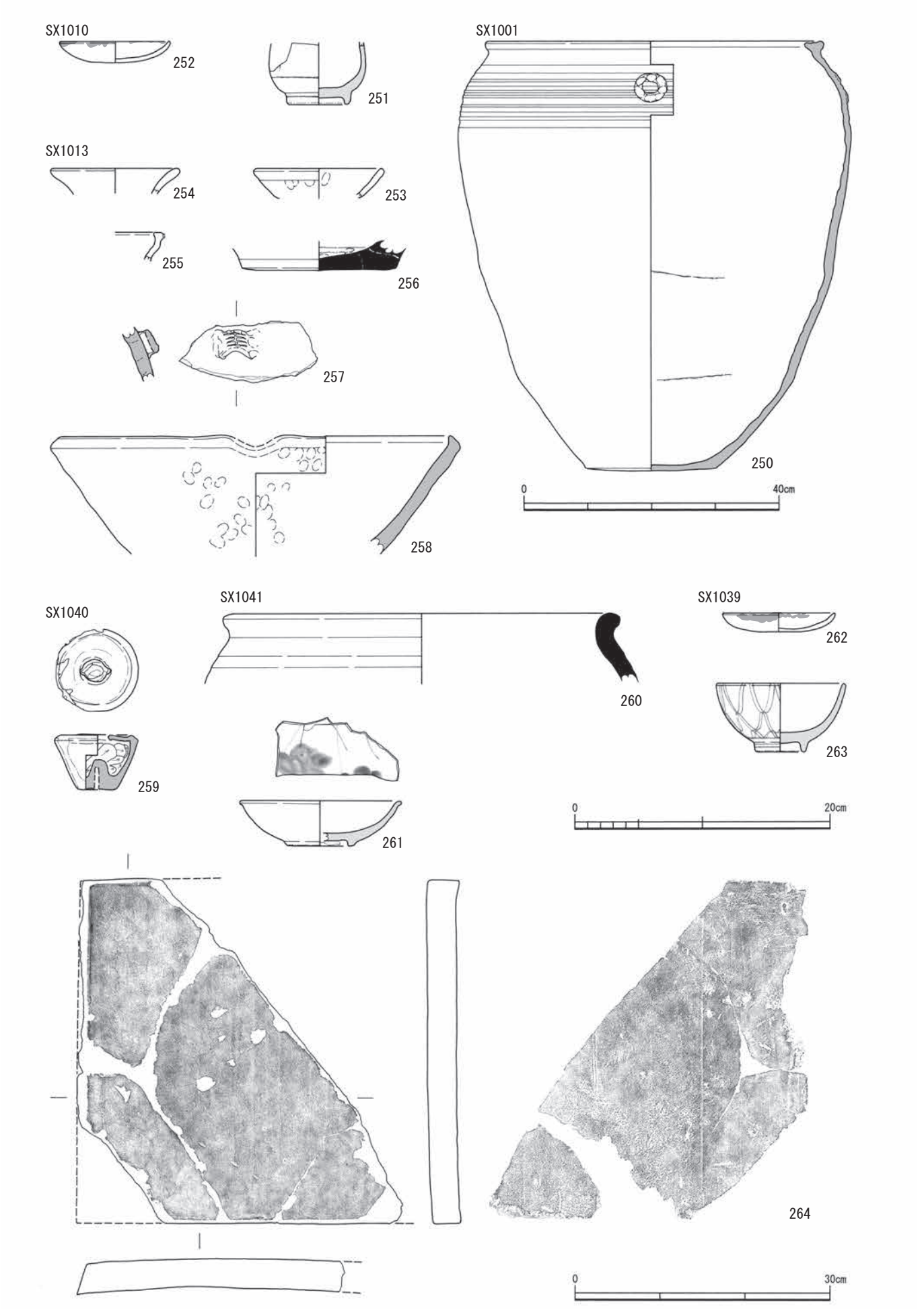
上段中央地区　SK01 他出土土器



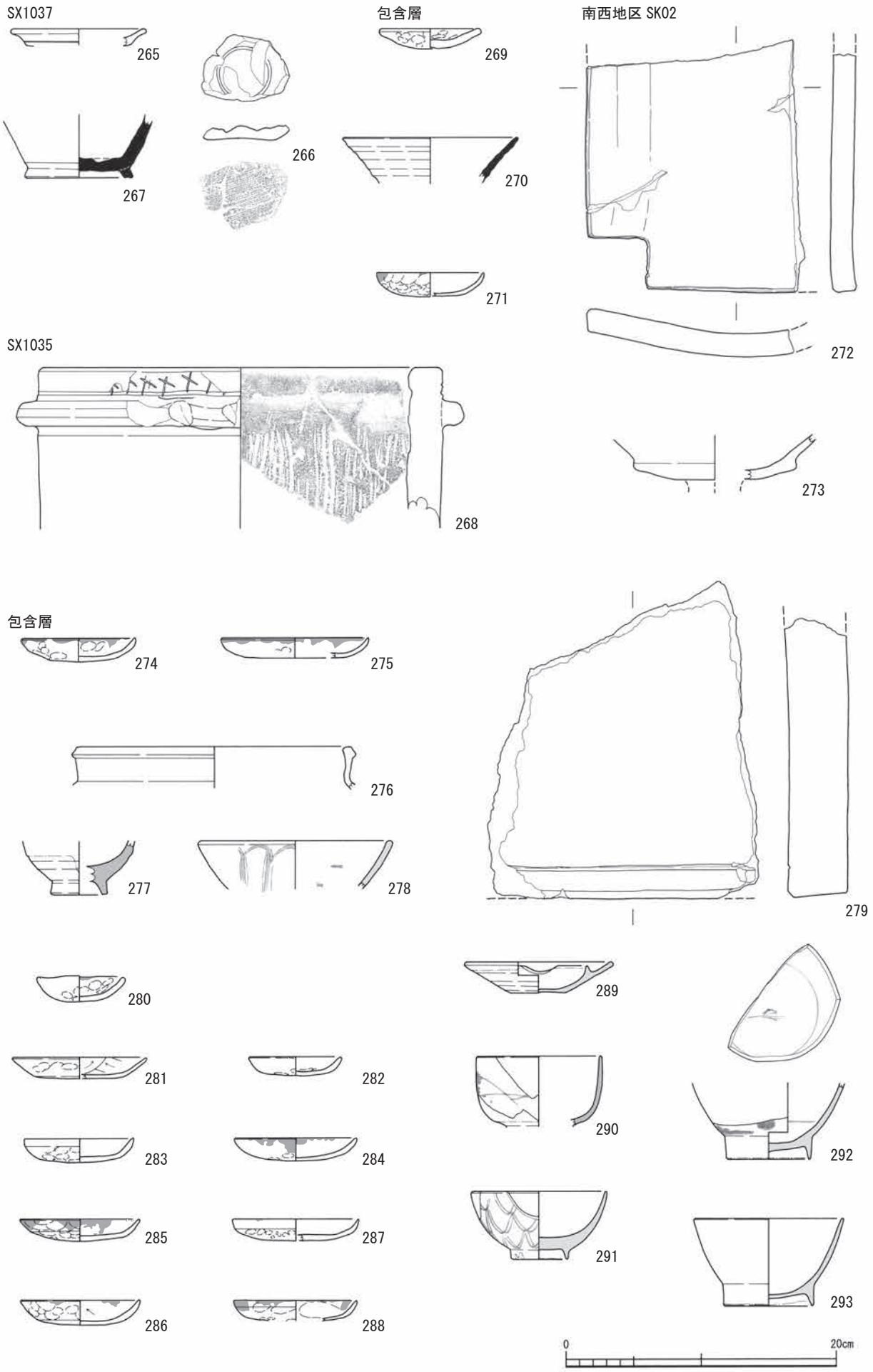
上段中央地区　SK78・70 他出土土器



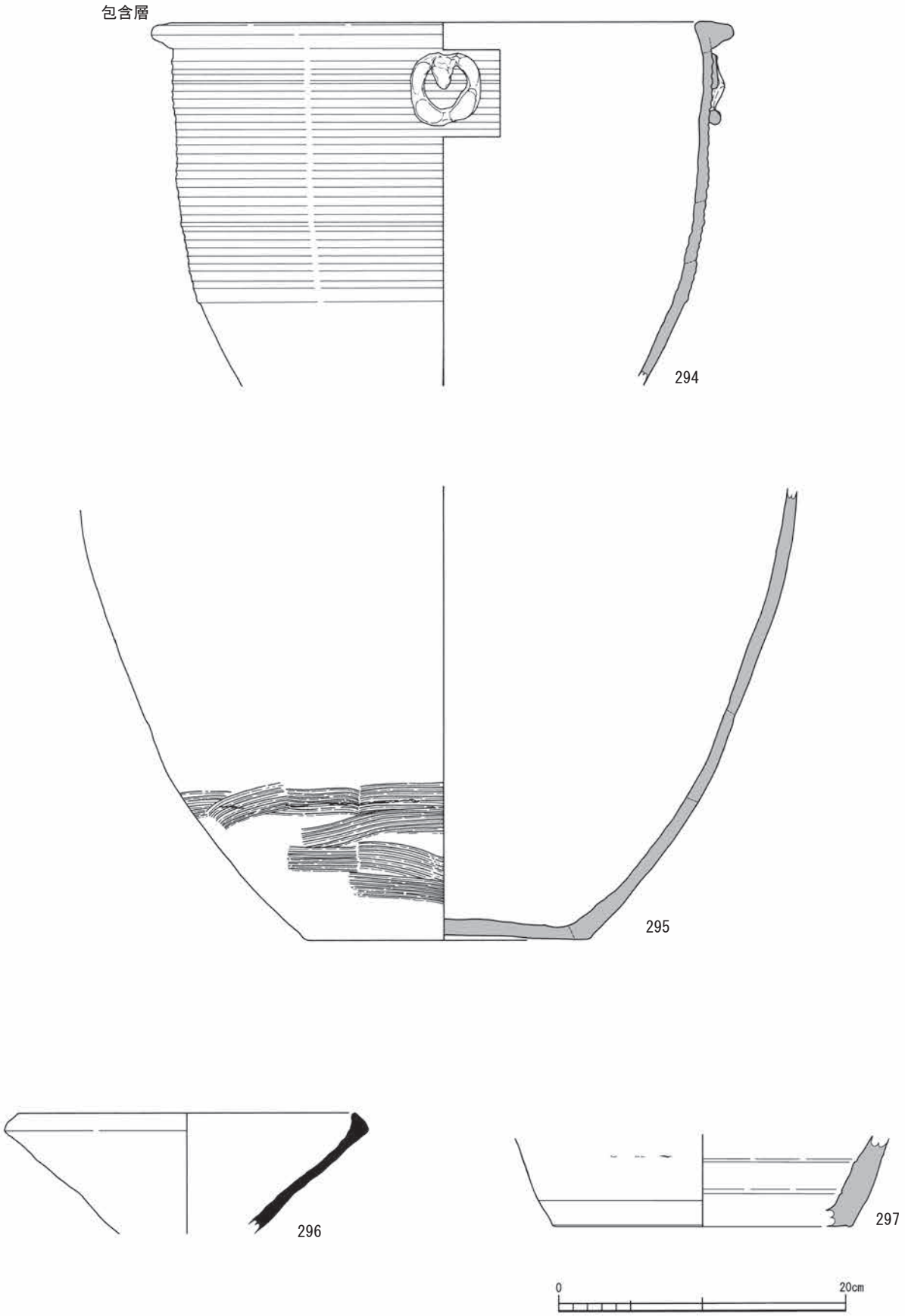
上段南地区　SX1007 出土土器



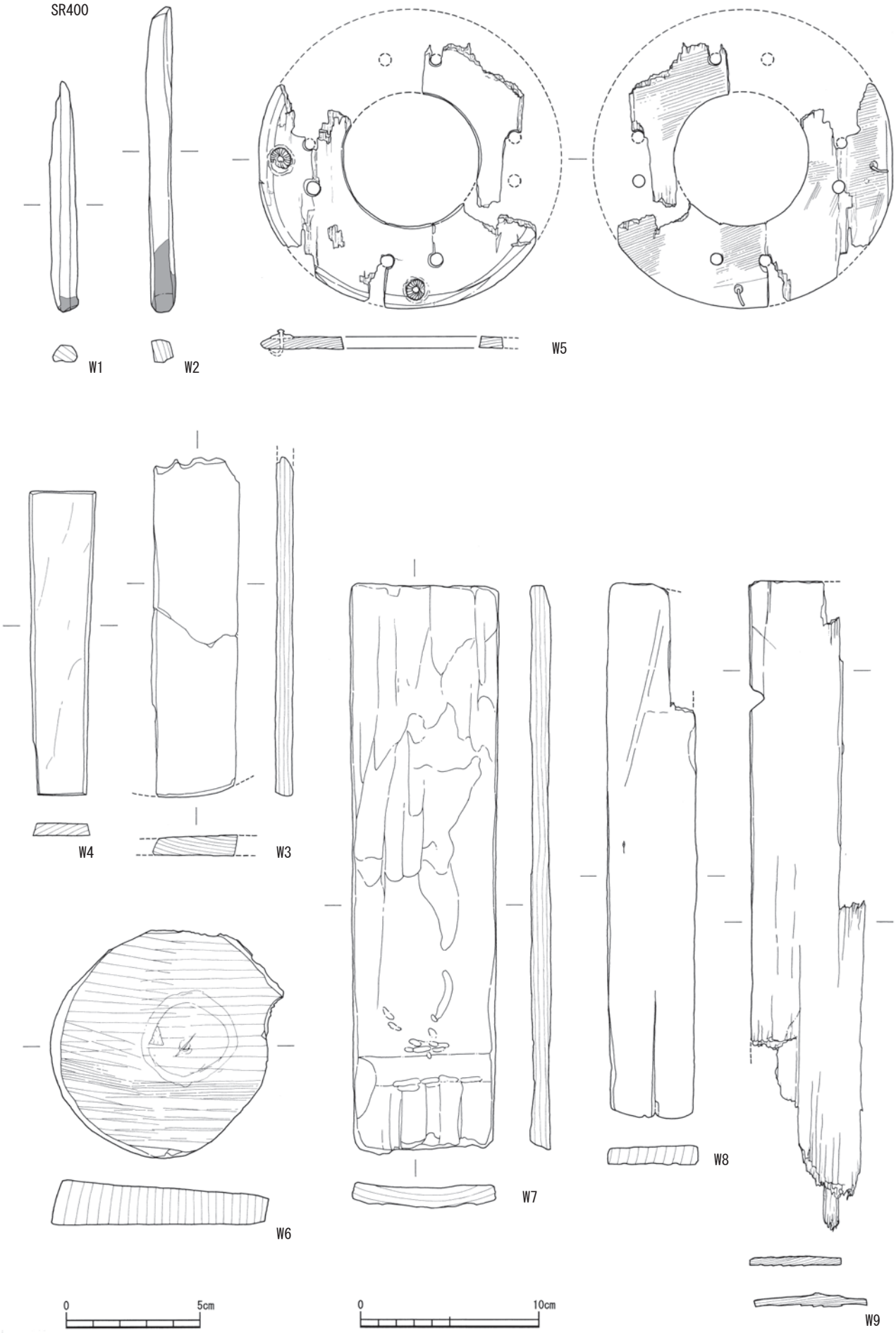
上段南地区　SX1001 他出土土器



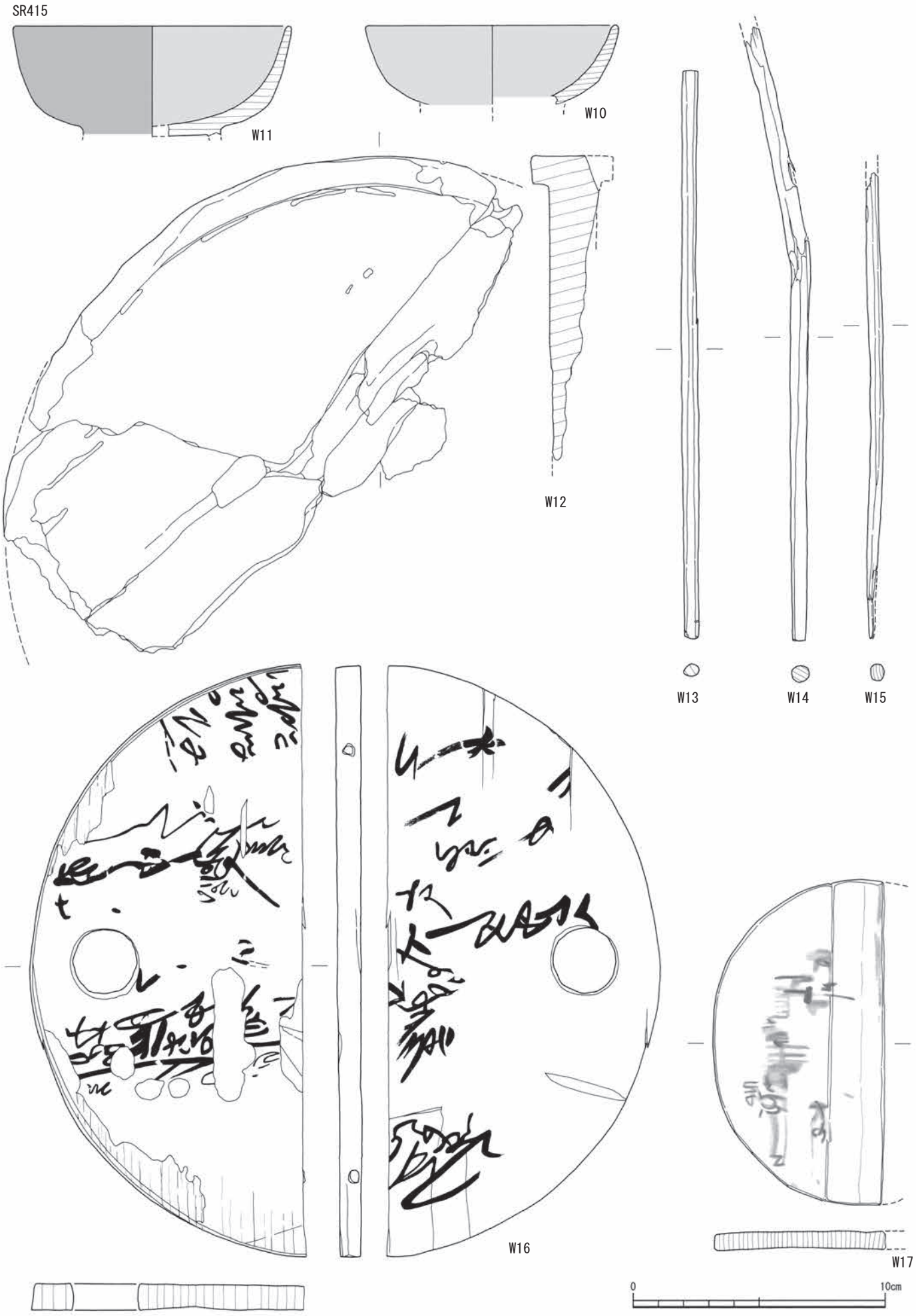
南地区　SX1037 他、南西地区出土土器



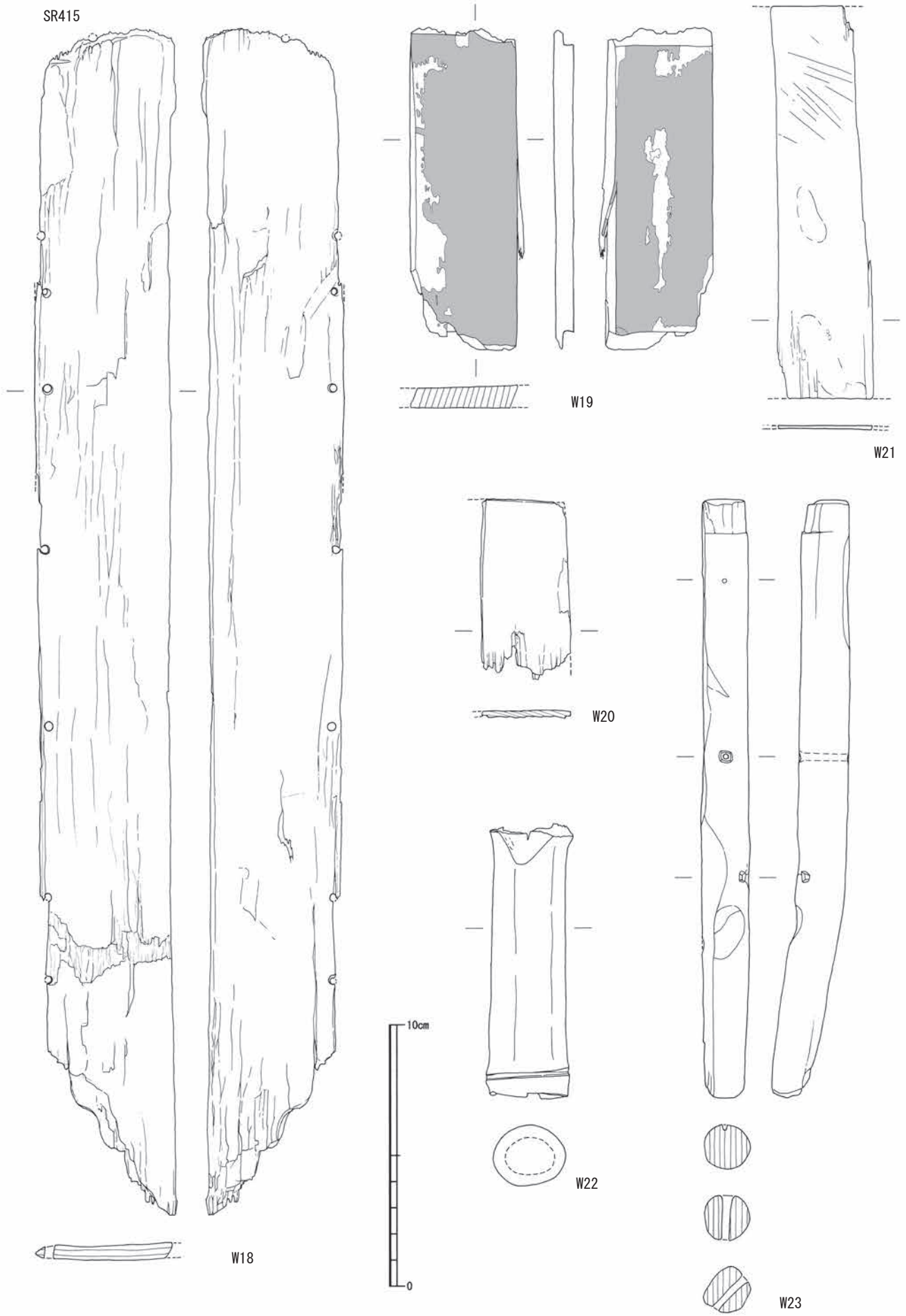
南地区　包含層他出土土器



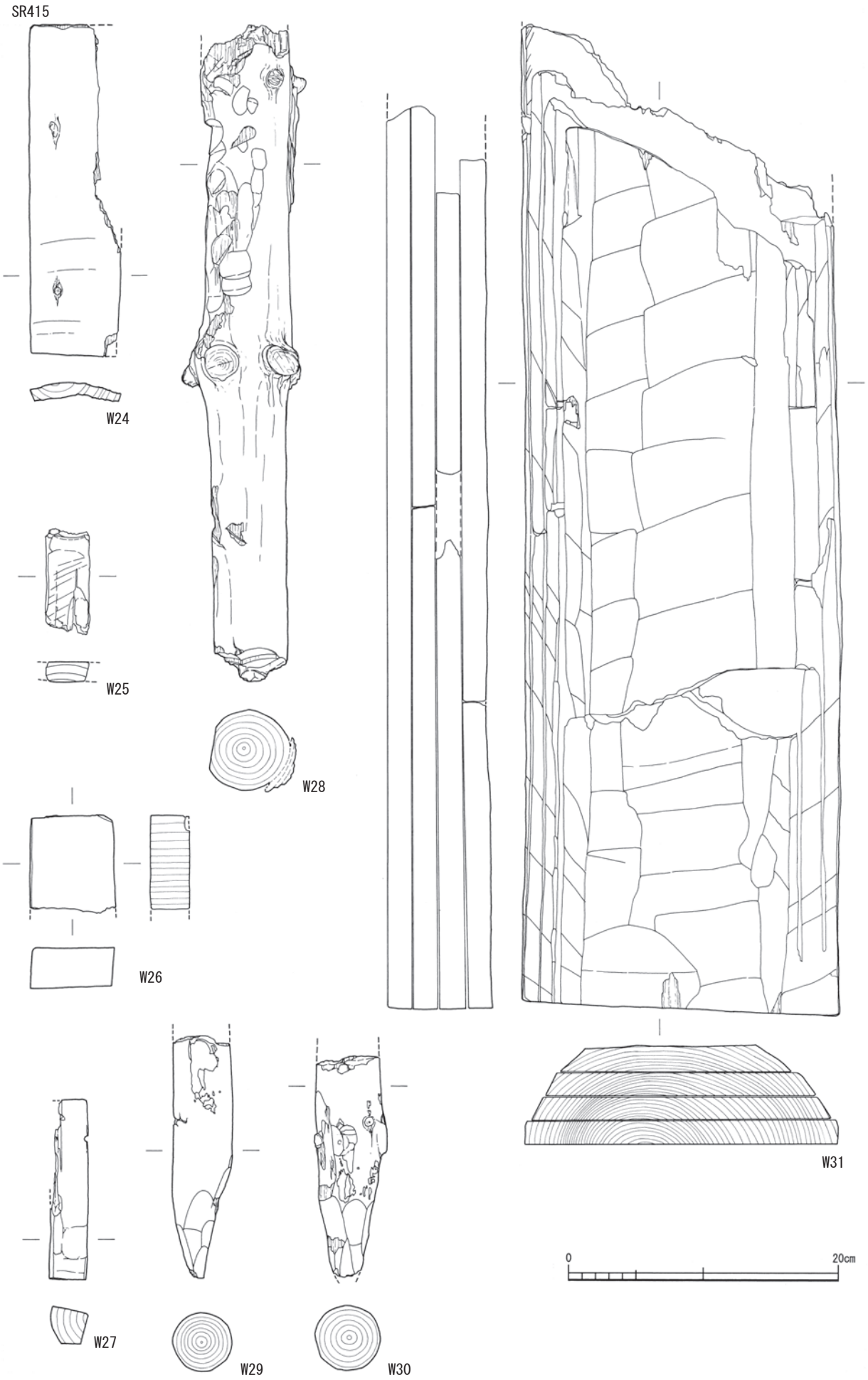
SR400 出土木製品



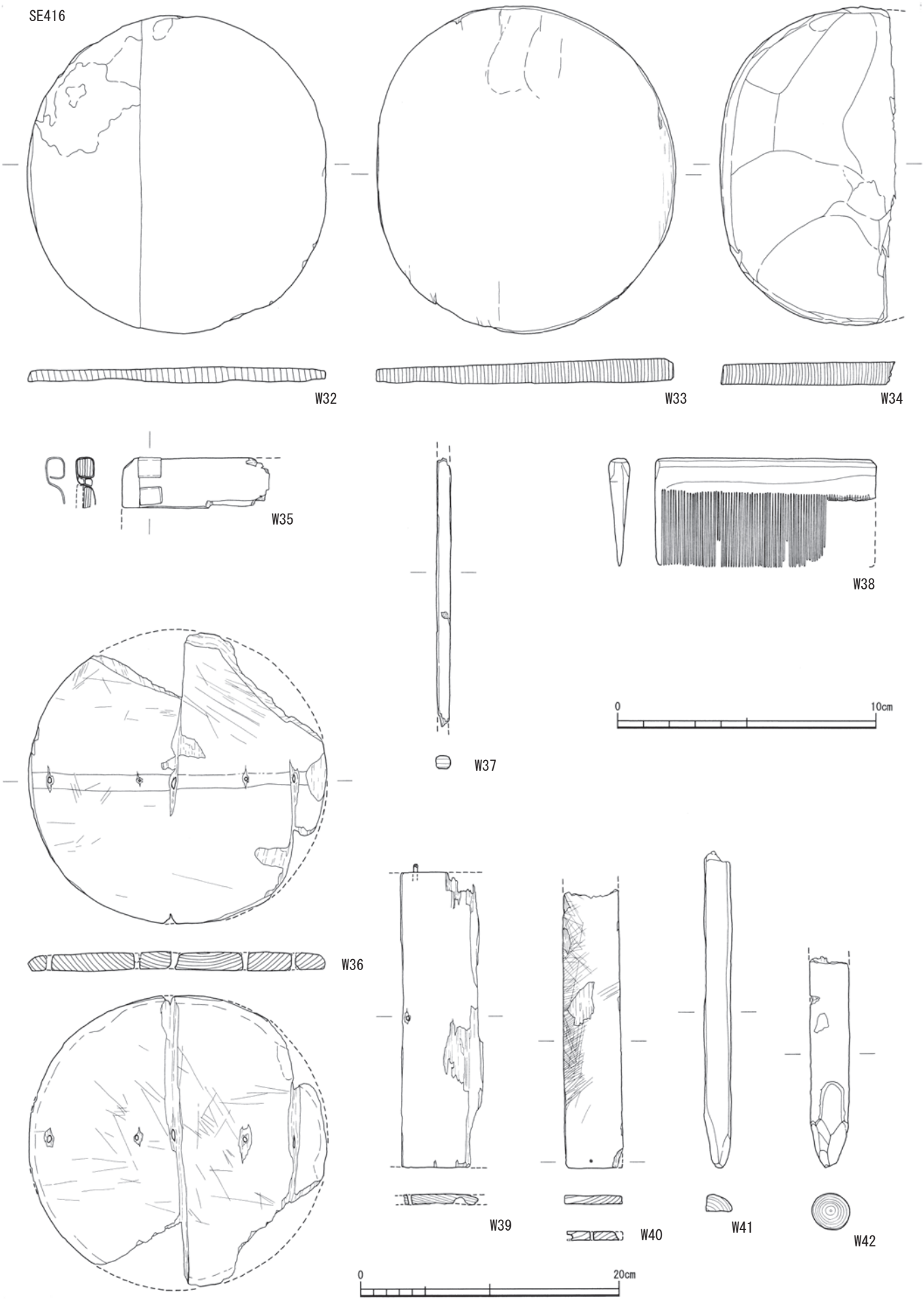
SR415 出土木製品 1



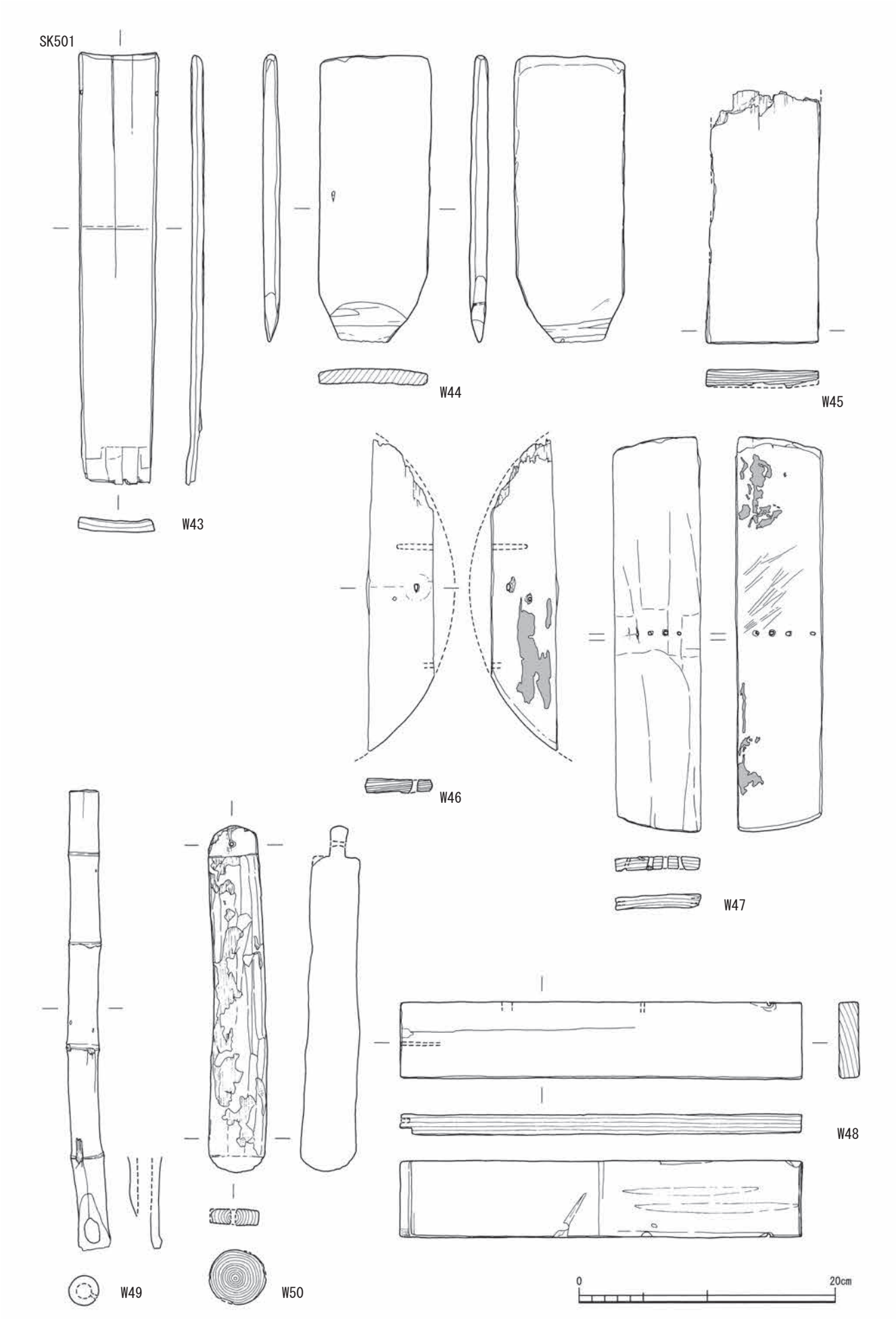
SR415 出土木製品 2



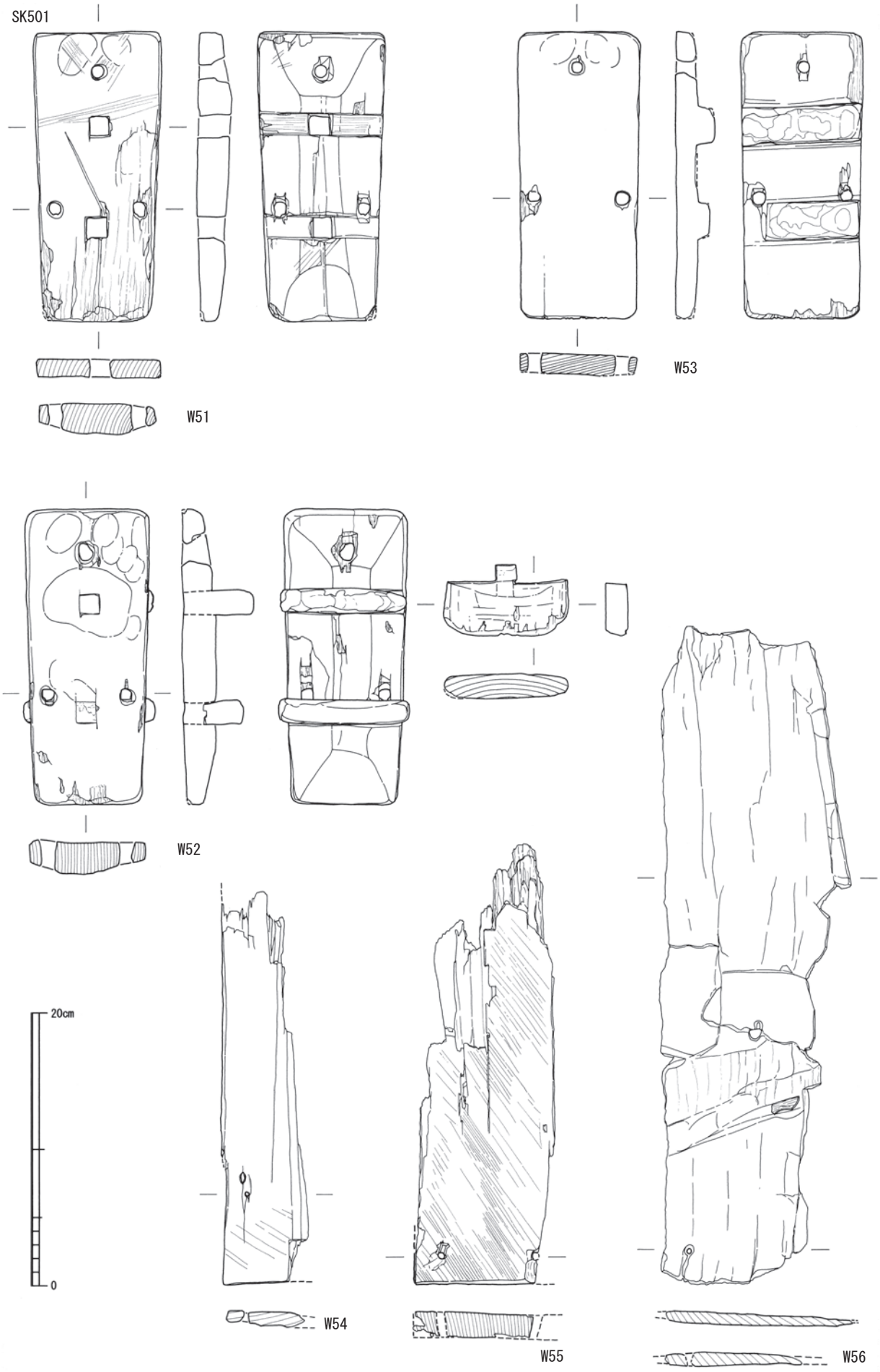
SR415 出土木製品 3



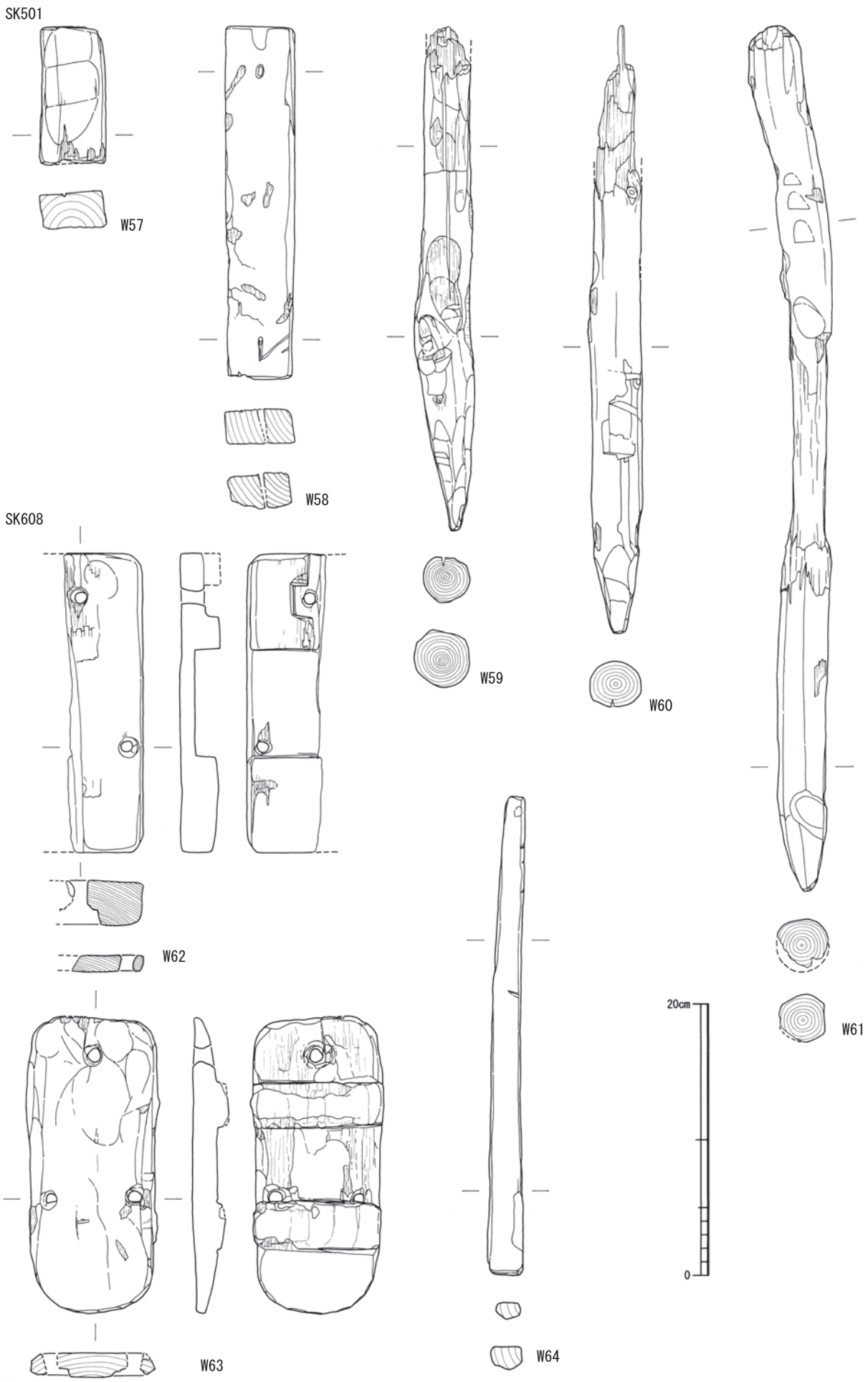
SE416 出土木製品



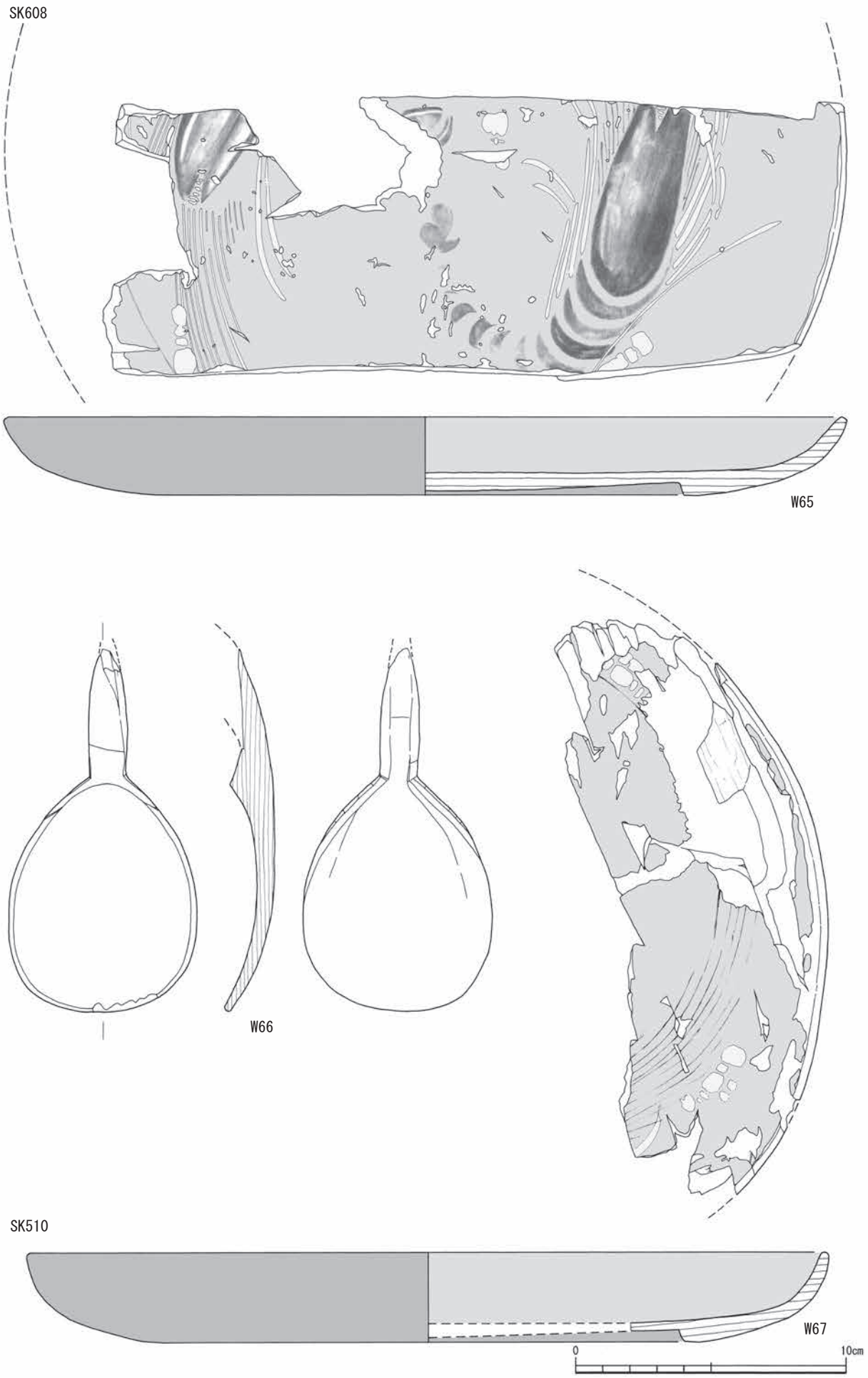
SK501 出土木製品 1



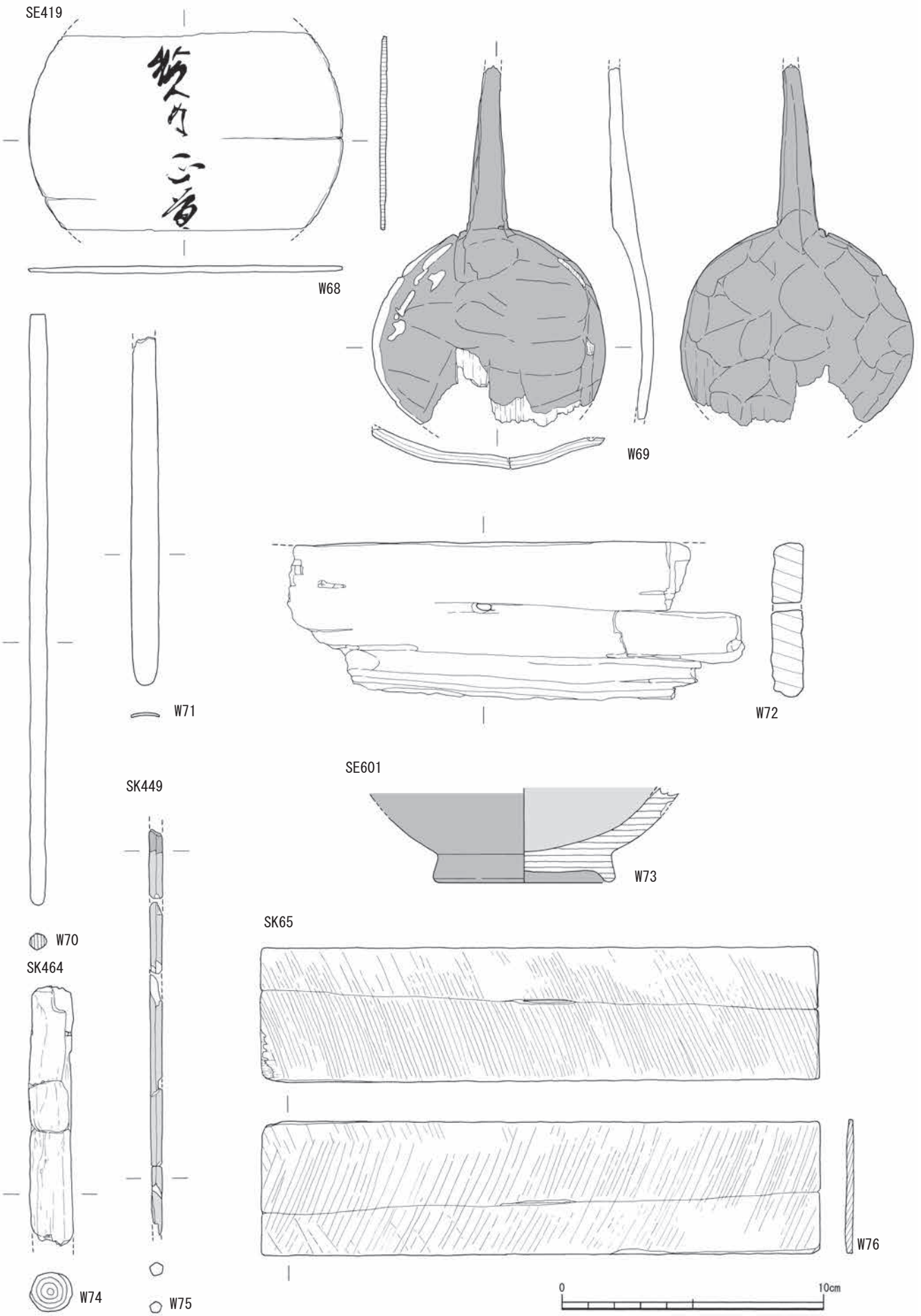
SK501 出土木製品 2



SK501 出土木製品 3

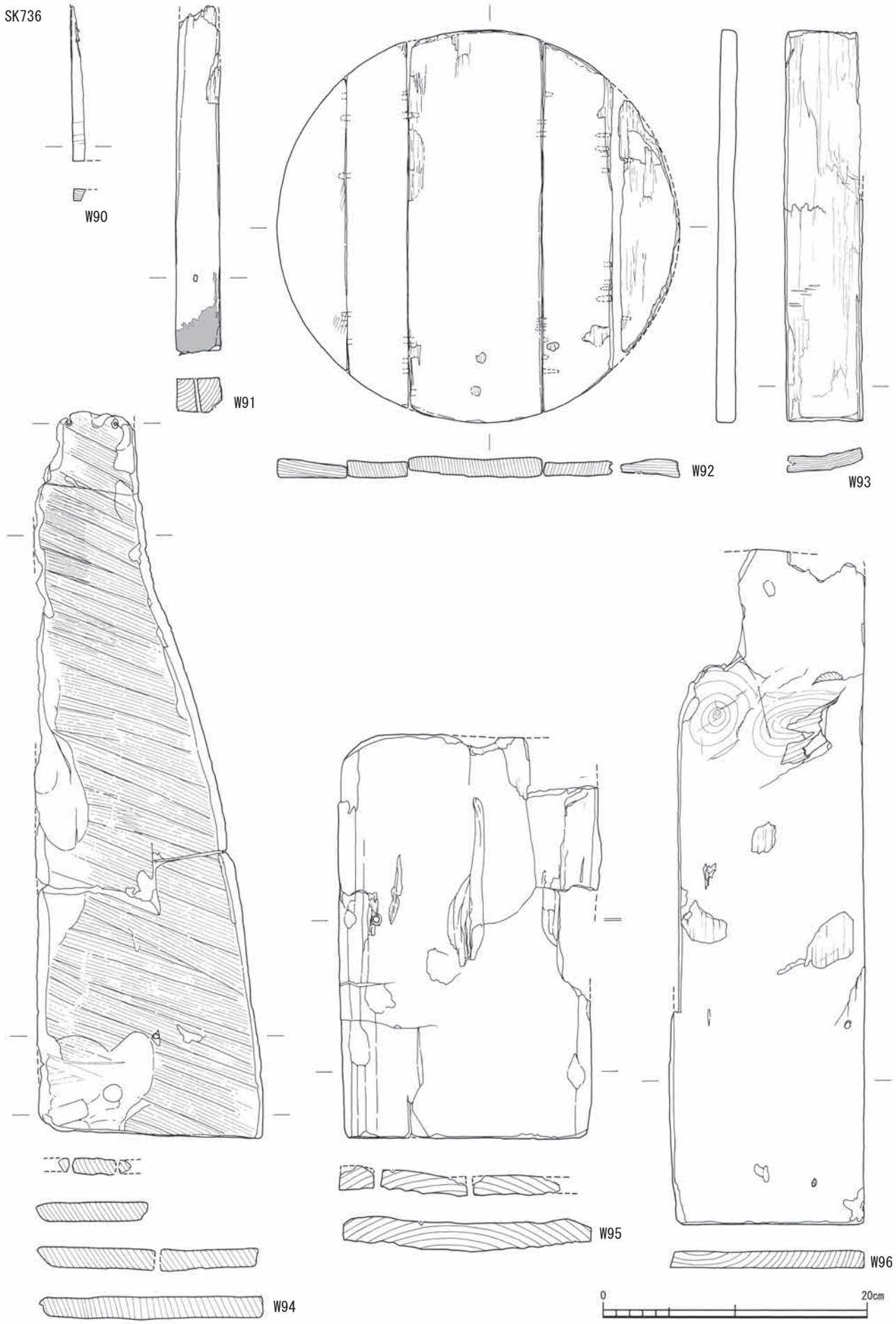


SK608・510 出土木製品

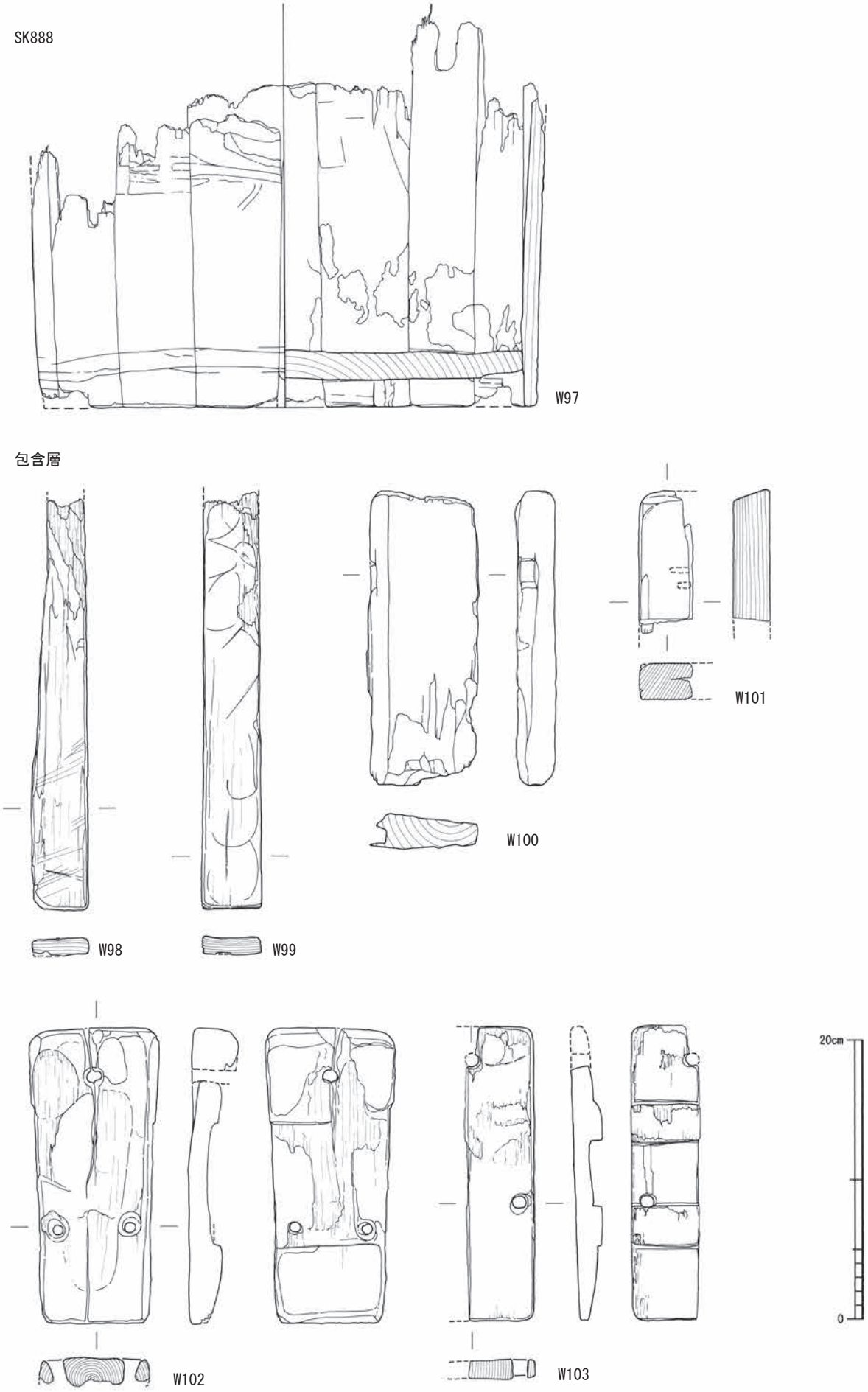


SE419・601 他出土木製品

SK575・621・736 出土木製品 1

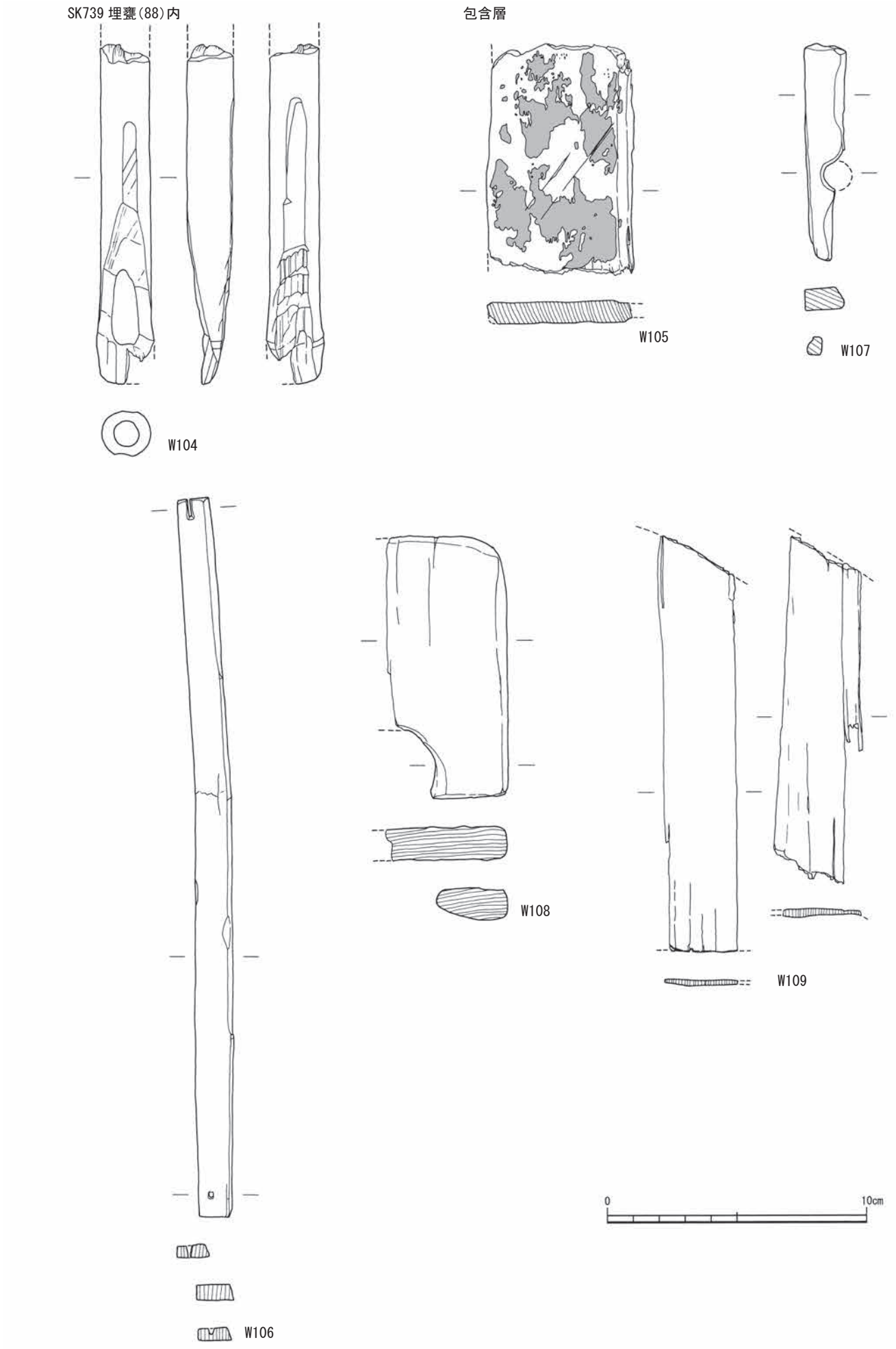


SK736 出土木製品 2



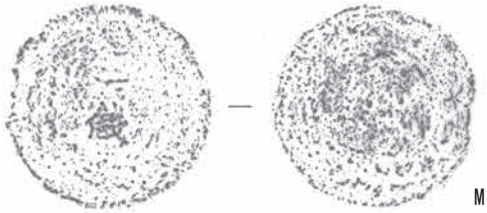
SK888・包含層出土木製品

図版 66



包含層他出土木製品

SK820



M1

SK71

M2

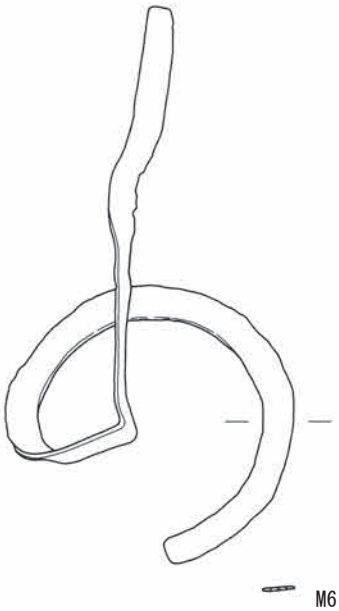
包含層

M3

包含層

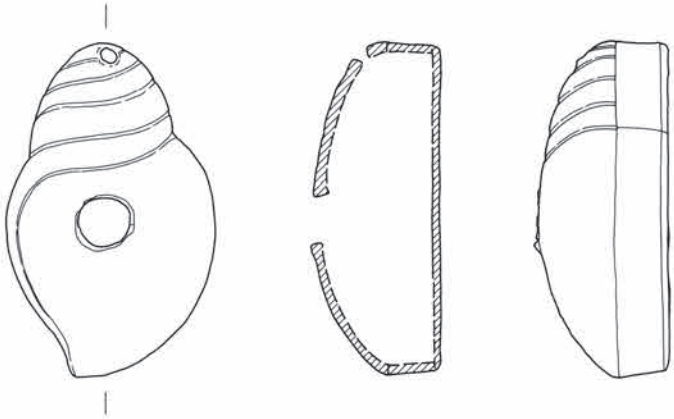
M4

包含層



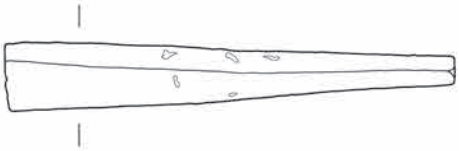
M6

SK739 埋甕(88)内



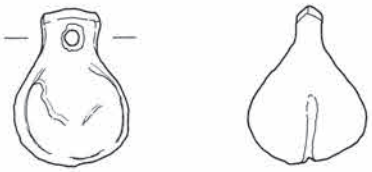
M5

SK450



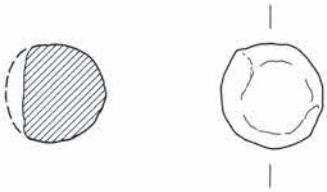
M7

SK68



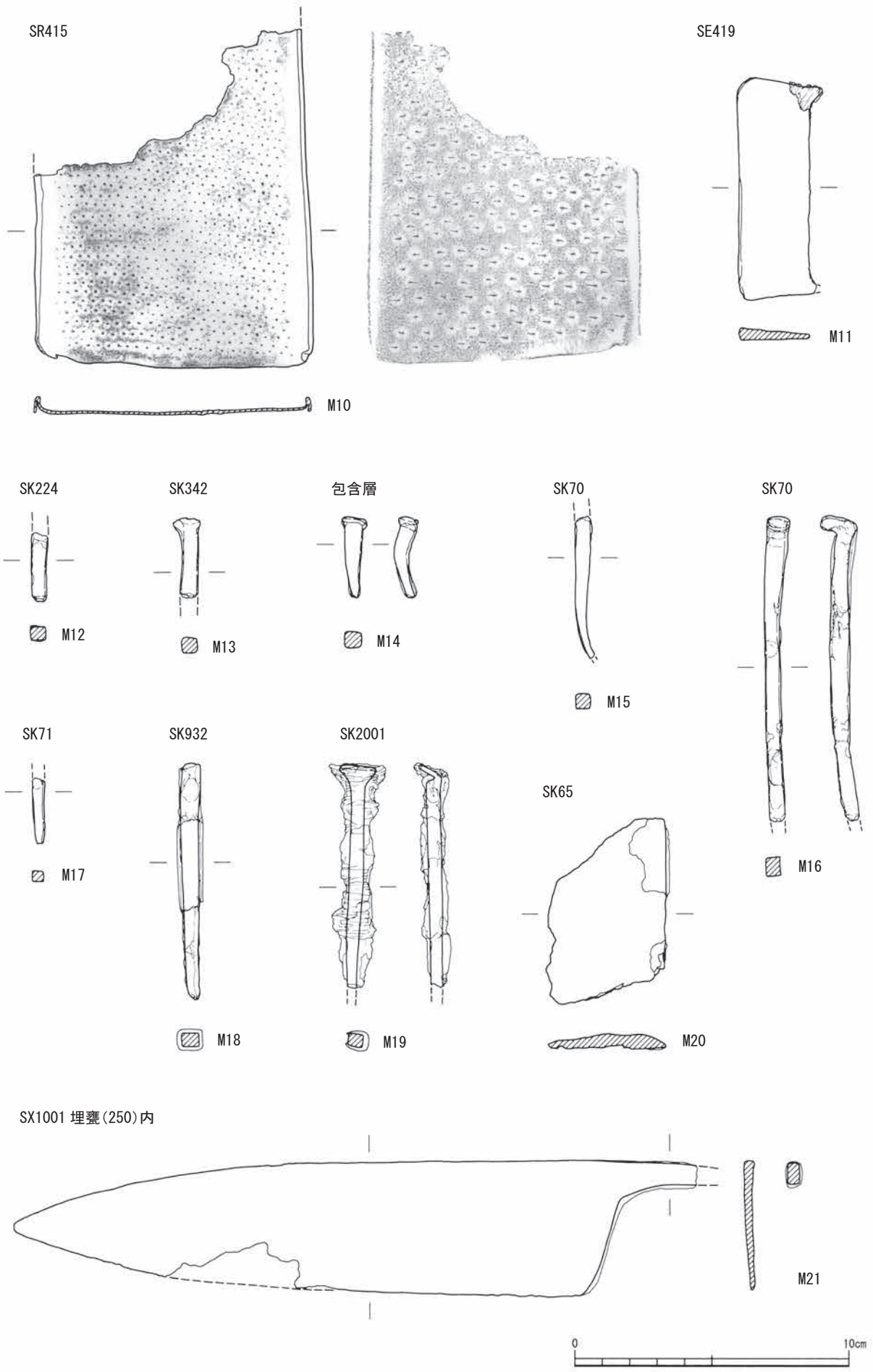
M8

包含層

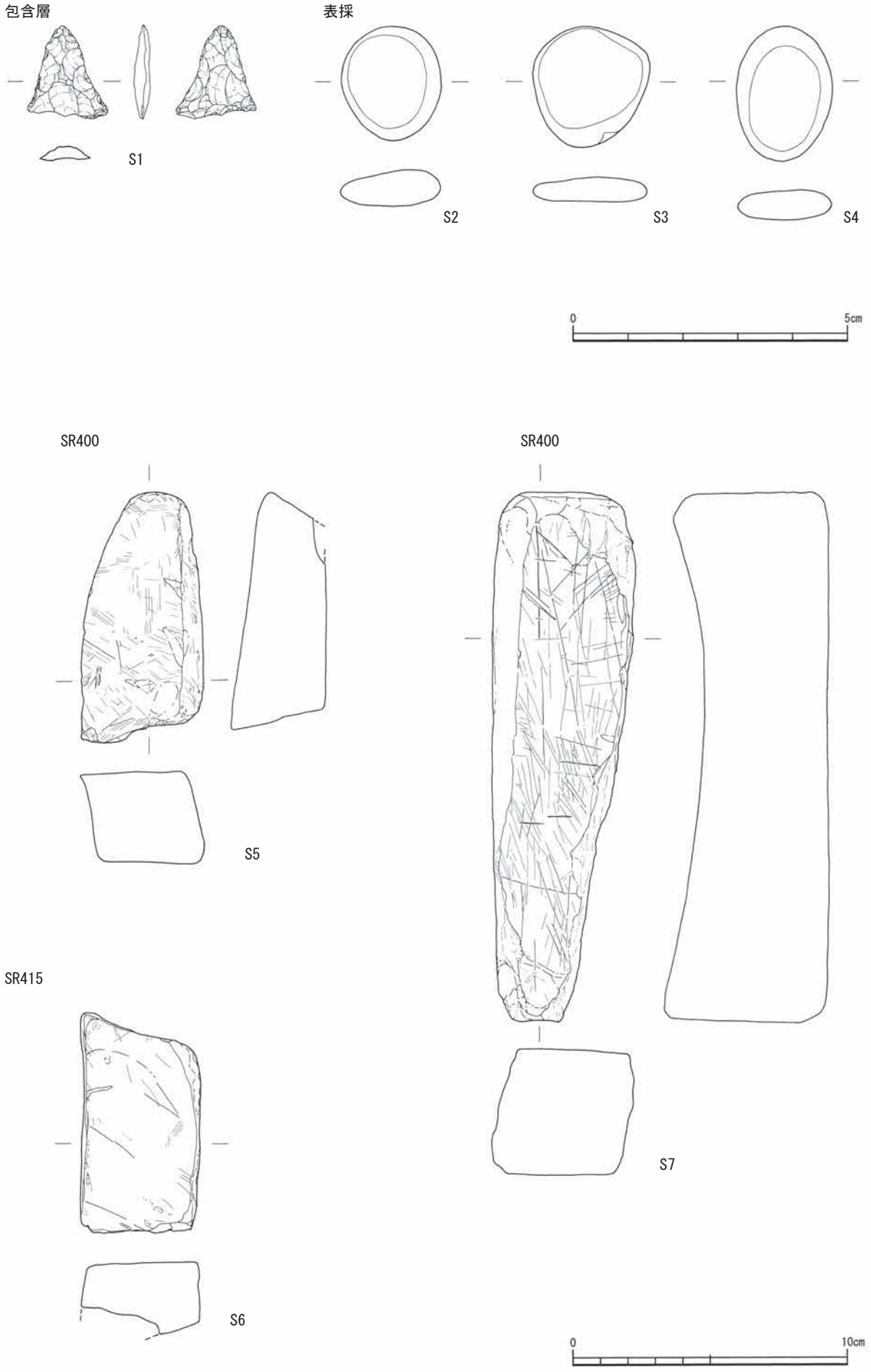


M9

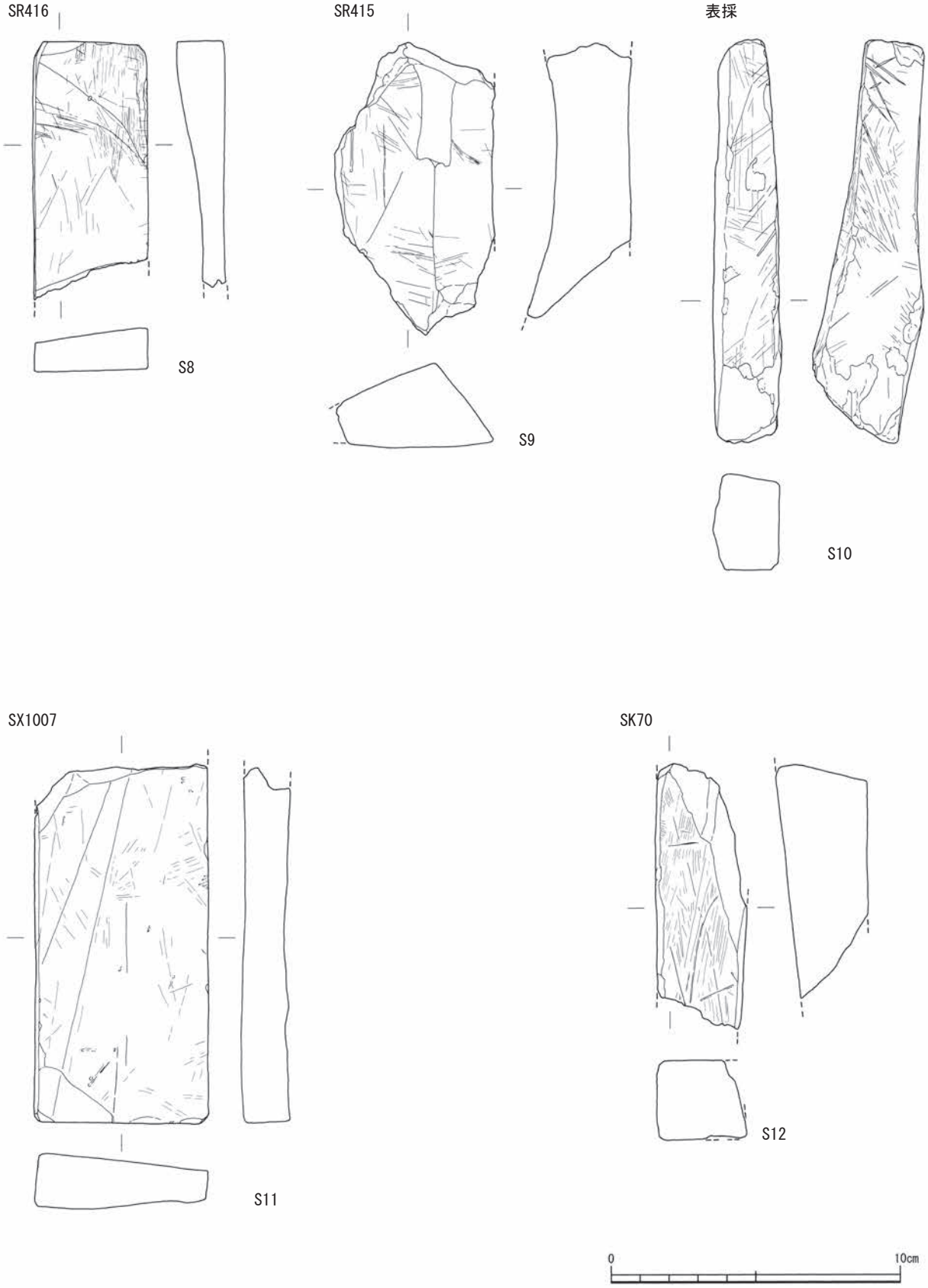
出土金属製品 1


SR415
M10
SE419
M11
SK224
M12
SK342
M13
包含層
M14
SK70
M15
SK70
M16
SK71
M17
SK932
M18
SK2001
M19
SK65
M20
SX1001 埋甕(250)内
M21
0
10cm

出土金属製品 2

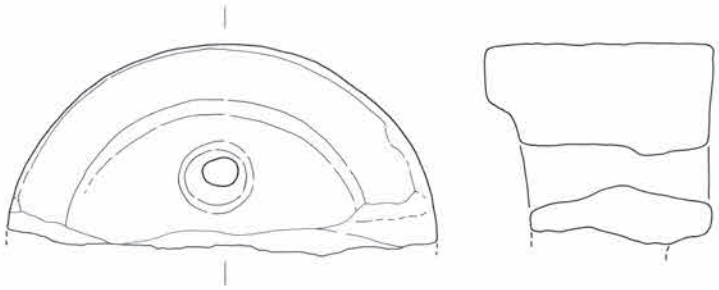


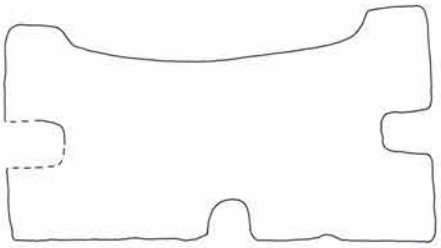
出土石製品 1



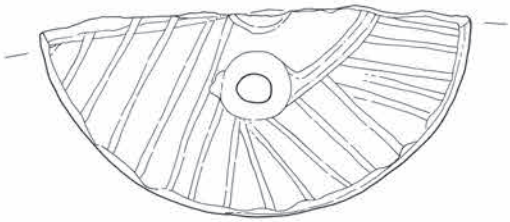
出土石製品 2

SR400

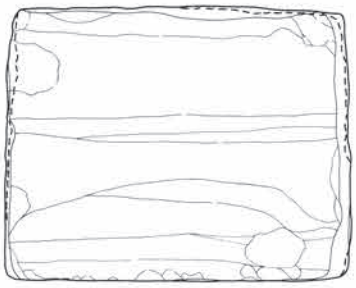




S13

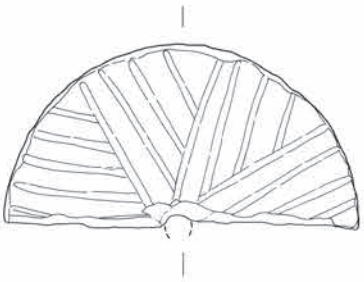


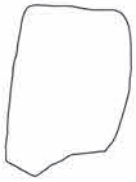
SR400



S16

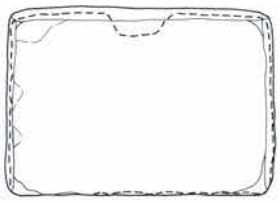
SK437





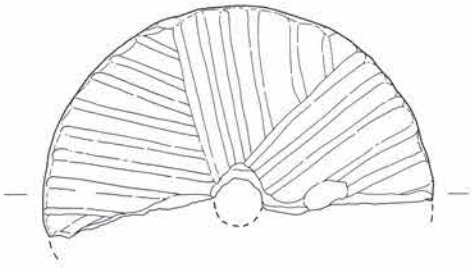
S14

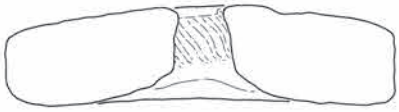
SR415



S17

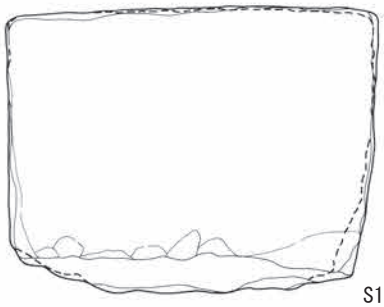
SD916





S15

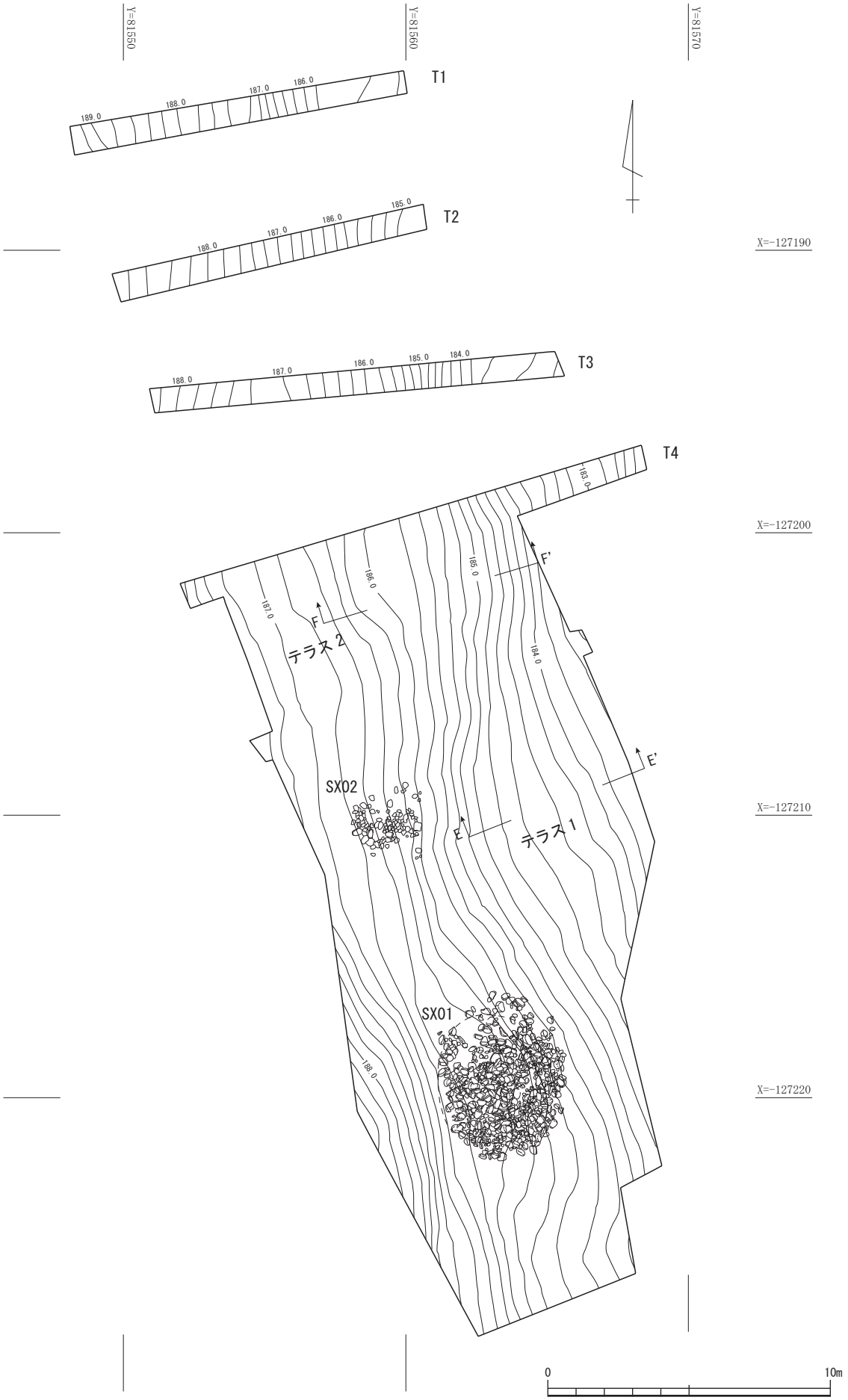
SR415



S18

0 30cm

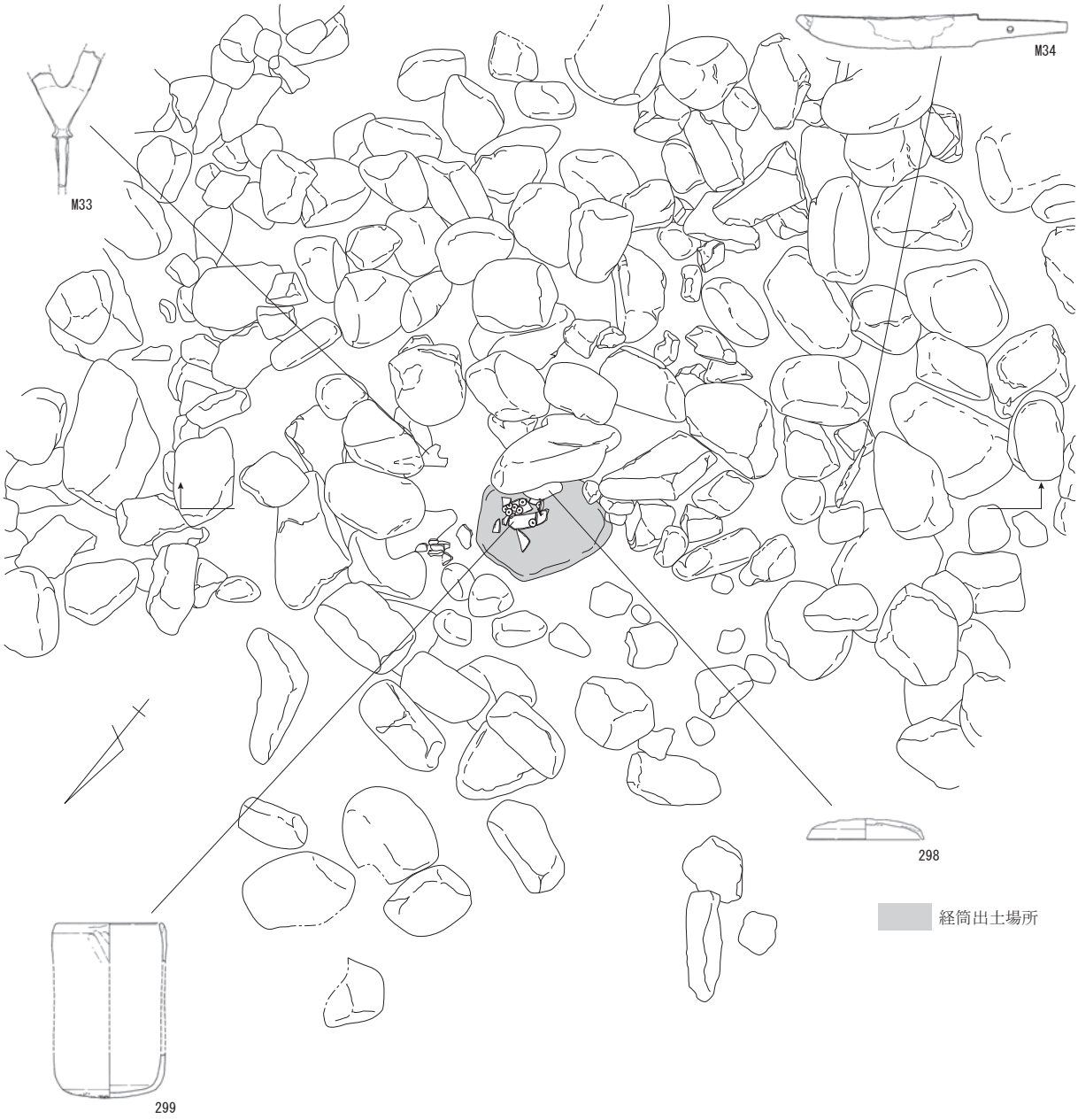
出土石製品 3

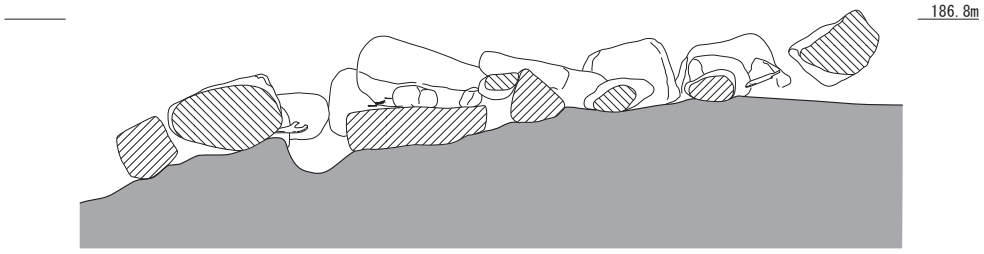

Y=81550
Y=81560
Y=81570
T1
189.0
188.0
187.0
186.0
T2
188.0
187.0
186.0
185.0
T3
188.0
187.0
186.0
185.0
184.0
T4
183.0
X=-127190
X=-127200
X=-127210
X=-127220
F
F'
E
E'
187.0
186.0
185.0
184.0
189.0
テラス 2
テラス 1
SX02
SX01
0
10m

西地区全体図

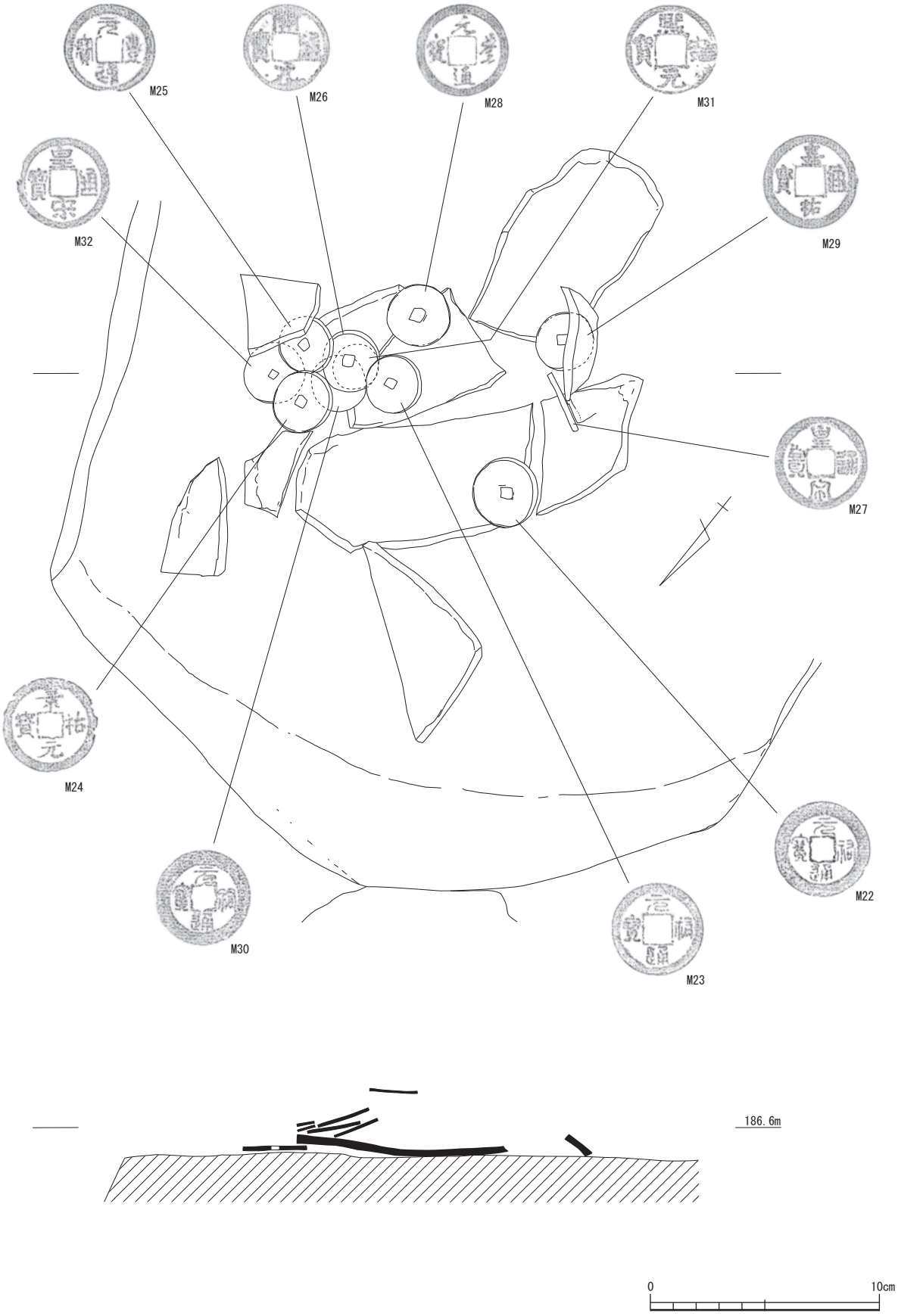
1．表土
2．10YR5/2 灰黄褐色　径 0.5 ～ 1cm 大の小礫含む
3．10YR7/3 にぶい黄橙色　径 0.1 ～ 0.3cm 大の極小礫含む
4．10YR7/4 明黄褐色　粗砂含む
5．10YR5/2 灰黄褐色
6．10YR6/4 にぶい黄橙色　径 0.1 ～ 0.5cm 大の小礫混入

西地区 SX01

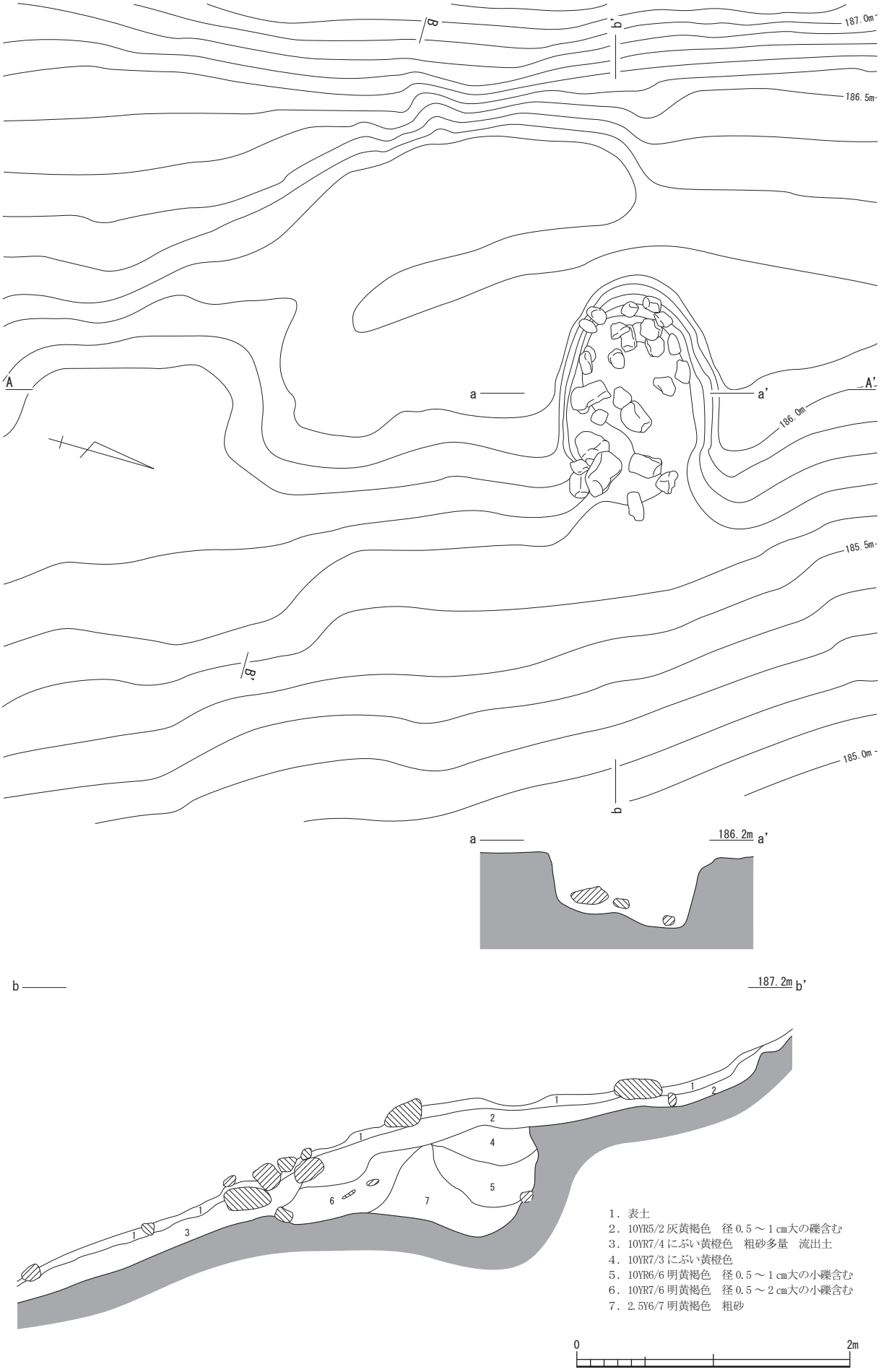




西地区 SX01 遺物出土状況

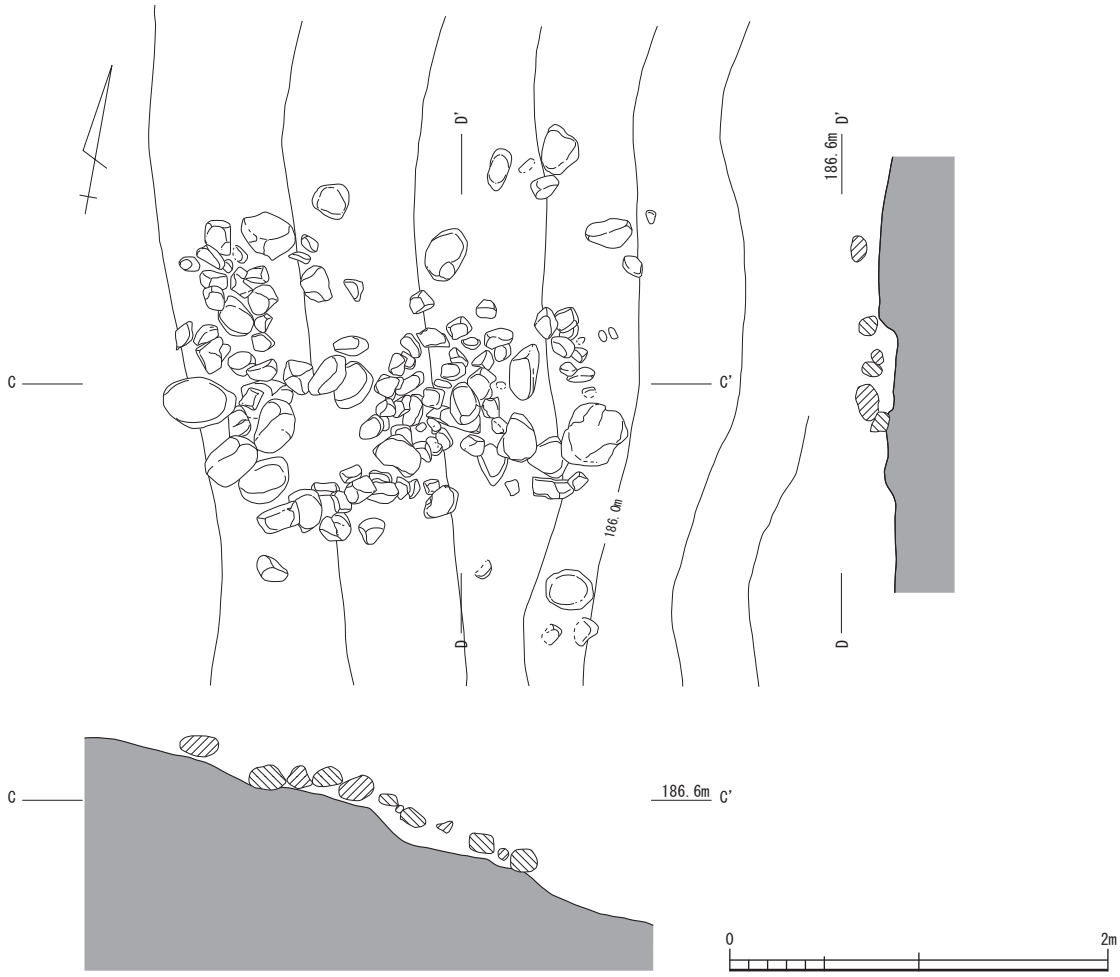


西地区 SX01 銅銭出土状況

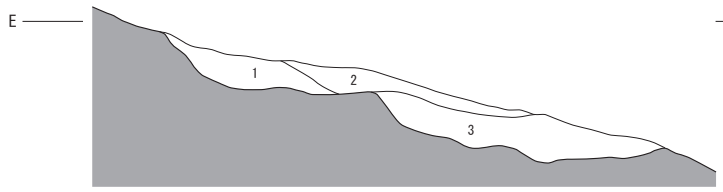

B
b'
187.0m
186.5m
A
a
a'
A'
186.0m
185.5m
B'
b
185.0m
a
186.2m a'
b
187.2m b'
1
2
3
4
5
6
7
1．表土
2．10YR5/2 灰黄褐色　径 0.5 ～ 1 ㎝大の礫含む
3．10YR7/4 にぶい黄橙色　粗砂多量　流出土
4．10YR7/3 にぶい黄橙色
5．10YR6/6 明黄褐色　径 0.5 ～ 1 ㎝大の小礫含む
6．10YR7/6 明黄褐色　径 0.5 ～ 2 ㎝大の小礫含む
7．2.5Y6/7 明黄褐色　粗砂
0
2m

西地区 SX01 下層

SX02

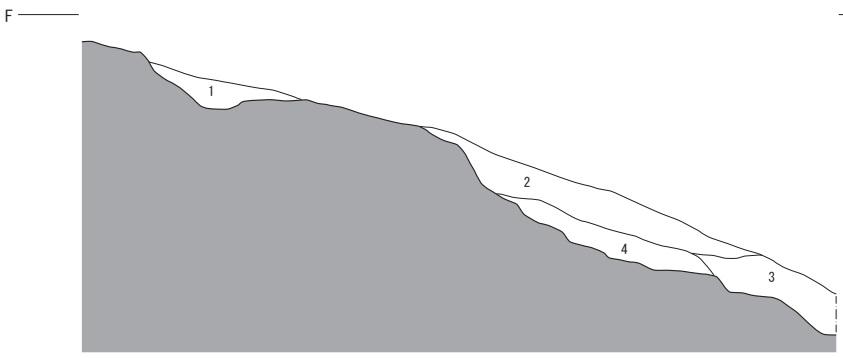


テラス１



1．10YR7/4 にぶい黄橙色　径 0.5 ～ 1 ㎝大の礫含む（整地土）
2．10YR6/4 にぶい黄橙色　径 1 ～ 2 ㎝大の亜角礫含む
3．10YR6/6 明黄褐色　径 0.5 ～ 1 ㎝大の角礫含む　盛土

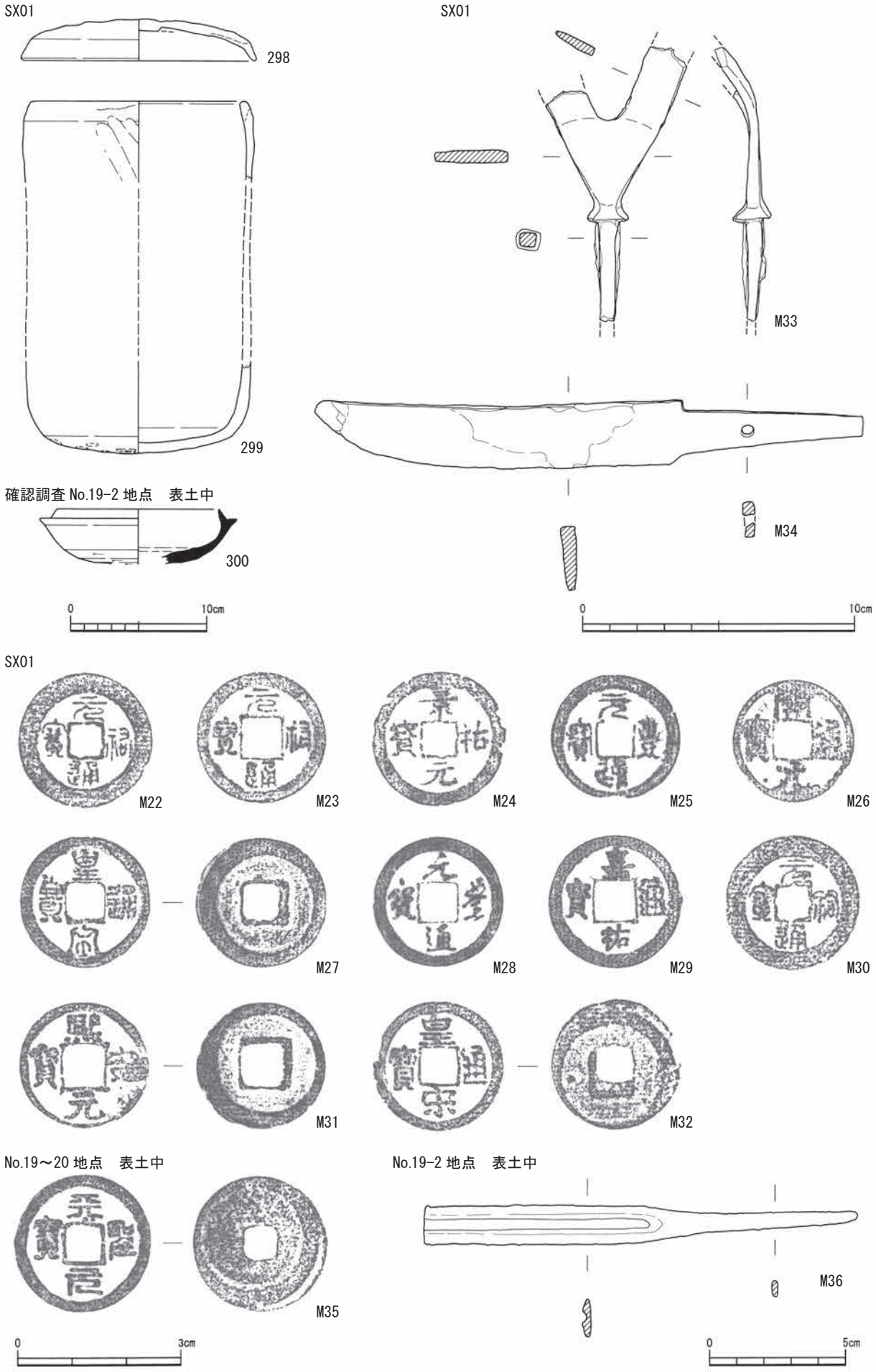
テラス２



1．10YR6/3 にぶい黄橙色
　径 5 ～ 15 ㎝大の亜角礫含む　溝埋土？
2．10YR7/6 明黄褐色
　径 1 ～ 3 ㎝大の円礫を含む
3．10YR7/6 明黄褐色
　径 0.3 ～ 0.5 ㎝大の小礫含む
4．10YR7/6 明黄褐色
　径 10 ～ 15 ㎝大の円礫を含む

0　2m

西地区 SX02・テラス１・２


SX01
298
299
SX01
M33
M34
確認調査 No.19-2 地点　表土中
300
0
10cm
0
10cm
SX01
M22
M23
M24
M25
M26
M27
M28
M29
M30
M31
M32
No.19～20 地点　表土中
M35
No.19-2 地点　表土中
M36
0
3cm
0
5cm

西地区出土遺物